

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（26）

高柳川中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書

沖田岩戸遺跡

2000年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

高柳川中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書

沖田岩戸遺跡



沖田岩戸遺跡遠景

2000年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、高柳川中小河川改修工事に伴って、昭和48年に出水市教育委員会及び石器文化研究会が調査主体となり実施した沖田岩戸遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

出水市の沖田岩戸遺跡は、鹿児島県土木部河川課（出水土木事務所）が出水市教育委員会及び石器文化研究会に調査を委託・依頼し、昭和48年10月1日から昭和49年3月31日まで実施した。

その間に、幾たびか報告書作成の機会を得たものの諸般の事情により機を失ってしまった。しかし、発掘調査より二十数年の歳月を経て、今回の報告書作成事業の一環として、発刊の機会を得ることとなった。

本報告書は、長い歳月が条件を満たさない中での刊行となったが、この報告書が、文化財保護と学術研究のために広く活用されることを願っております。

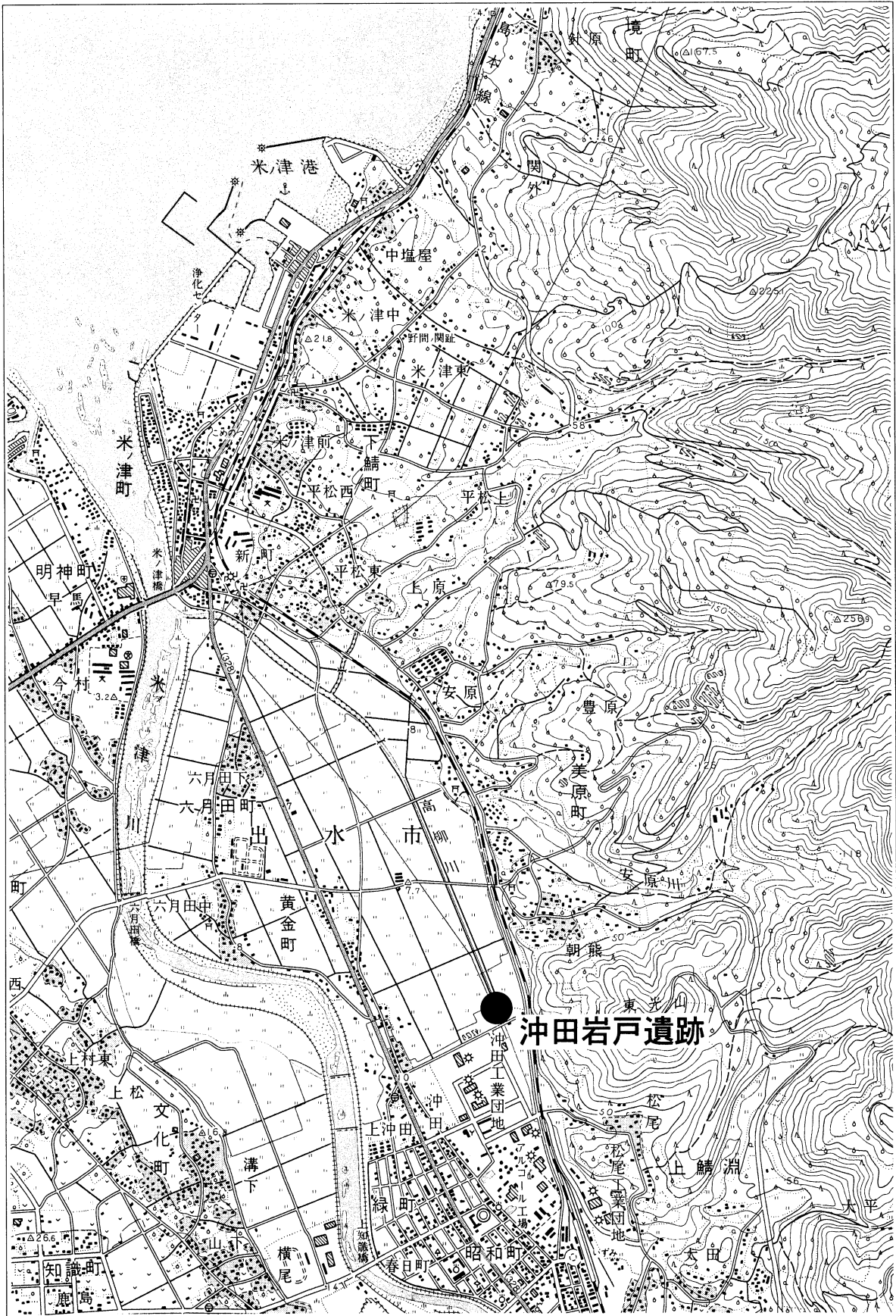
最後に、発刊にあたり御協力をいただきました関係各位の皆様をはじめ、発掘調査に参加された地元の皆様に対して感謝の意を表します。

平成12年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 吉 永 和 人

報告書抄録

ふりがな	おきたいわと いせき							
書名	沖田岩戸遺跡							
副書名	高柳川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	26							
編著者名	立神 次郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 始良郡始良町平松6 2 5 2 番地 TEL0995-65-8787							
発行年月日	西暦2000年, 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇 〇 〃	東経 〇 〇 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
おきたいわと 沖田岩戸	かごしまけん 鹿児島県 いずみししもさわ 出水市下鯖 ふちまち 湊町	46208		30度 05分 50秒	130度 21分 20秒	19731001 ∩ 19740331	945	高柳川河川 改修工事に 伴う埋蔵文 化財発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
おきたいわと 沖田岩戸	散布地	縄文中期 縄文後期 縄文晩期 古墳時代 古代		並木式 阿高式・南福式土器 出水式・西平式・松山式土器 黒川式・入佐式等、深鉢形(平行沈線文 ・山形沈線文・波状沈線文)浅鉢(黒色 黒色研磨)、管玉・小玉・磨製石斧・打 製石斧・石鏃・石錐・石匙・磨石 成川式土器・須恵器 土師器・石鍋				



沖田岩戸遺跡の位置

例 言

1. 本報告書は、高柳川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和48年10月1日から昭和49年3月31日までの間、鹿児島県土木部河川課（出土木事務所）からの委託を受けて、出水市教委員会および石器文化研究会が調査主体となって実施した。
3. 本報告書は、平成11年度報告書作成事業の一環として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 遺物番号は、すべて通し番号であり、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
5. 挿図の縮尺は、各図ごとに示している。
6. 出土遺物の整理作業は、鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員（森岡幸子・伊集院香代子）の協力で、遺物の実測・トレース・写真撮影は整理作業員の協力を得て立神が主に実施し、彌榮久志主任文化財主事、牛ノ濱修主任文化財主事、鶴田静彦文化財主事、中原一成文化財研究員、宇都俊一文化財研究員、黒川忠広文化財研究員、桑波田武志文化財研究員、横手浩二郎文化財研究員、西園勝彦文化財研究員の協力を得た。
7. 石器実測の一部を（株）エーティック西日本支店に委託した。
8. 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画である。

本文目次

序文	
報告書抄録	
例言	
第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第II章 遺跡の位置と環境	6
第1節 遺跡の位置及び立地	6
第2節 遺跡の周辺環境	8
第III章 調査の概要	13
第1節 調査の概要	13
第2節 遺跡の層位	19
第IV章 出土遺物	20
第1節 縄文時代の遺物	20
(1) 出土土器	20
(2) 出土石器	60
第2節 弥生時代以降の遺物	129
第V章 まとめ	132

挿図目次

第1図 沖田岩戸遺跡の位置及び周辺の表層地質図	7
第2図 沖田岩戸遺跡の位置及び周辺遺跡	9
第3図 沖田岩戸遺跡の発掘調査区と周辺地形	14
第4図 沖田岩戸遺跡調査区遺物出土状況及び土層模式図	15
第5図 沖田岩戸遺跡土層断面実測図(1)	16
第6図 沖田岩戸遺跡土層断面実測図(2)	17
第7図 沖田岩戸遺跡土層断面実測図(3)	18
第8図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(1)	25
第9図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(2)	26
第10図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(3)	27

第11図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(4)	28
第12図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(5)	29
第13図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(6)	30
第14図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(7)	31
第15図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(8)	32
第16図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(9)	33
第17図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(10)	34
第18図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(11)	35
第19図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(12)	36
第20図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(13)	37
第21図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(14)	38
第22図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(15)	39
第23図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(16)	40
第24図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(17)	41
第25図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(18)	42
第26図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(19)	43
第27図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(20)	44
第28図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(21)	45
第29図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(22)	46
第30図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(23)	47
第31図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(24)	48
第32図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(25)	49
第33図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(26)	50
第34図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(27)	51
第35図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(28)	52
第36図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(29)	65
第37図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(30)	66
第38図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(31)	67
第39図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(32)	68
第40図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(33)	69
第41図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(34)	70
第42図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(35)	71
第43図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(36)	72
第44図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(37)	73
第45図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(38)	74
第46図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(39)	75
第47図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(40)	76
第48図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(41)	77
第49図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(42)	78
第50図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(43)	79

第51図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(44)	80
第52図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(45)	81
第53図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(46)	82
第54図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(47)	83
第55図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(48)	84
第56図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(49)	85
第57図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(50)	95
第58図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(51)	96
第59図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(52)	97
第60図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(53)	98
第61図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(54)	99
第62図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(55)	100
第63図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(56)	101
第64図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(57)	102
第65図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(58)	103
第66図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(59)	104
第67図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(60)	105
第68図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(61)	106
第69図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(62)	107
第70図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(63)	108
第71図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(64)	109
第72図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(65)	110
第73図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(66)	111
第74図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(67)	112
第75図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(68)	113
第76図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(69)	114
第77図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(70)	115
第78図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(71)	116
第79図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(72)	130
第80図	沖田岩戸遺跡遺物実測図(73)	131

表 目 次

付 表	報告書抄録	
第 1 表	周辺遺跡地名表(1)	10
第 2 表	周辺遺跡地名表(2)	11
第 3 表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(1)	53
第 4 表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(2)	54
第 5 表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(3)	55

第6表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(4)	56
第7表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(5)	57
第8表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(6)	58
第9表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(7)	59
第10表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(8)	59
第11表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(9)	117
第12表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(10)	118
第13表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(11)	119
第14表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(12)	120
第15表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(13)	120
第16表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(14)	121
第17表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(15)	122
第18表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(16)	123
第19表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(17)	124
第20表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(18)	125
第21表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(19)	126
第22表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(20)	127
第23表	沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(21)	128

図 版 目 次

図版 1	沖田岩戸遺跡の遠景・調査区・調査風景	139
図版 2	沖田岩戸遺跡の遺物出土状況	140
図版 3	沖田岩戸遺跡の遺物出土状況	141
図版 4	沖田岩戸遺跡の遺物出土状況および調査関係者(池水主任ほか)	142
図版 5	沖田岩戸遺跡出土遺物(1)	143
図版 6	沖田岩戸遺跡出土遺物(2)	144
図版 7	沖田岩戸遺跡出土遺物(3)	145
図版 8	沖田岩戸遺跡出土遺物(4)	146
図版 9	沖田岩戸遺跡出土遺物(5)	147
図版10	沖田岩戸遺跡出土遺物(6)	148
図版11	沖田岩戸遺跡出土遺物(7)	149
図版12	沖田岩戸遺跡出土遺物(8)	150
図版13	沖田岩戸遺跡出土遺物(9)	151
図版14	沖田岩戸遺跡出土遺物(10)	152
図版15	沖田岩戸遺跡出土遺物(11)	153
図版16	沖田岩戸遺跡出土遺物(12)	154

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部（出土木事務所）は、昭和 48 年度事業として鹿児島県出水市下鯖淵の高柳川河川改修工事を発注し施工したが、河川改修工事の掘削中、高校生により遺物が発見された。採集された遺物は、出水市教育委員会及び池水寛治氏（当時、出水高校教諭，県文化財専門員）にもたらされ、縄文晩期の遺物であることが確認された。

そこで、鹿児島県教育委員会文化課は、その取り扱いについて池水寛治氏に遺跡の価値と保存対策を諮問し、その答申に従い、県土木部河川課をはじめ出土木事務所、出水市教育委員会と協議を重ねた結果、記録保存を計画し、出水市にその事業を委託した。

出水市は、鹿児島県教育委員会との契約に基づき、さっそく調査体制の整備に取りかかり、池水寛治氏を調査主任に、戸崎勝洋，立神次郎，長野眞一を調査員，そのほか調査補助員を置くこととして調査団を編成し，調査を実施する運びとなった。

調査は、昭和 48 年 10 月 1 日から調査を開始し、昭和 49 年 1 月 31 日，その委託期間までに調査を終了した。

しかし、調査期間中に新たに調査を必要とする箇所が判明したために、鹿児島県教育委員会文化課は、出水市教育委員会をはじめ県土木部，出土木事務所などの関係機関と協議を重ねた。その結果、出水市教育委員会は、諸般の事情により委託ができないとの結論に達した。

そこで、鹿児島県教育委員会文化課は、石器文化研究会（所在地出水市・池水寛治氏主催）との契約に基づき、池水寛治氏を調査団長とする調査団を再編成して、引き続き調査再開となった。

調査は、昭和 49 年 2 月 1 日から昭和 49 年 3 月 31 日で、その委託期間までにすべての調査を終了した。調査面積は河川敷地内の工事部分の 945 m²である。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	出水市教育委員会		
調査責任者	出水市教育委員会	教育長	西 武臣
		社会教育課長	谷口 博人
		社会教育係長	松本 忠夫
		社会教育課主事	住田 勲
調査担当者	出水高等学校	教諭（県文化財専門委員）	池水 寛治
	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員	戸崎 勝洋
		文化財調査員	立神 次郎
	出水市教育委員会	文化財調査員	長野 眞一
		調査補助員	下野 龍博
		調査補助員	池崎 讓二

第 3 節 調査の経過

沖田岩戸遺跡は、出水市下鯖淵字沖田小字岩戸に所在し、米ノ津川によって形成された出水平野

の東部をほぼ南北に流れる高柳川中流付近の両岸一帯に位置している。

調査は、遺跡を高柳川によって区分された東岸部をA地点、西岸部をB地点とし、岩戸橋を基準としたグリッド掘りとした。

A地点の発掘調査区は、全長135m、幅7mであるが、これを3m×3mを1区とし、16区～28区をI班、29区～43区をII班、44区～60区をIII班として、I班を長野、II班を立神、III班を戸崎がそれぞれ担当し、池水調査主任が総括して調査を進めた。

発掘調査は、河川改修工事当時の砂利等の排除、ふきさらしの北風、予想を上回る土壌の堅さ、作業員不足等の悪条件に終始悩まされた内容であった。

調査期間は、昭和48年10月1日から昭和49年3月31日までに、調査面積945㎡で、すべての調査を終えた。

以下、経過については、日誌抄で略述する。

昭和48年

・10月1日(月)～10月6日(土)

発掘作業を開始する。用具準備点検。関係機関へのあいさつまわりと打合せ。作業員2日より雇用。作業上の説明及び諸注意。除草及び河川改修当時の砂利等及び盛土の除去。重機により土砂除去を完了する。B地点の各調査区III層より掘り下げ。畦や配石による旧水路等を検出。この付近に少量であるが遺物出土。混在を確認。III層最下部の掘り下げと平行して、グリッド設定作業（B地点及びA地点）。遺跡全体の地形及びグリッドの平板測量開始。

川文化課長・大迫主幹が来訪し、各関係機関へのあいさつまわり。

・10月8日(月)～10月13日(土)

上部攪乱層最下部掘り下げ終了。調査地区によっては、表土よりIII層面（一部）で削平及び圃場整備等による客土を確認。B地点の各調査区より掘り下げ。場所により粘質層・砂層・粘質層との互層となる。調査区によってはIV層より掘り下げ。粘質土のため乾燥し非常に堅い。遺物包含層が川側へ傾斜し、一部は攪乱を受け遺物の混在を認める。

・10月15日(月)～10月20日(土)

B地点の各調査区ともにIII層最下部やIV層上面掘り下げ。各区ともにb・c区に遺物が集中する傾向がある。調査区によっては、古代・古墳時代・縄文晩期の土器片や磨打製石斧などが出土。遺物が混在して出土。III層面は、遺物出土量は僅かであり、土師器・須恵器・成川式土器・縄文晩期などの土器が混在して出土。遺物出土状況平板実測及び配石を使用した旧水路付近については、平面実測を実施。

・10月22日(月)～10月27日(土)

稲刈り等が始まり仮設道路設定作業。B地点の調査とA地点のIII層最下部及びIV層上面の掘り下げ。作業員が少なく確保が困難。出水高校生支援。c区に縄文晩期の若干大きい土器破片を確認。磨製石斧、石鏃、磨石などや土師器・須恵器片などが混在し出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測・遺物取り上げ。

・10月29日(月)～11月3日(土)

A地点の各調査区ともにIV層面掘り下げ。場所により須恵器完形品や土師器小片も出土。縄文晩期入佐期該当深鉢の大小破片や石鏃、磨製石斧、打製石斧などの石器も出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測・遺物取り上げ。

・11月5日(月)～11月10日(土)

各調査区ともIV層面及びV層の掘り下げ。縄文晩期相当の遺物も増加し、黒川式土器片が出土。層が緩やかな傾斜を示すためか新しい時期の遺物も混在。晩期深鉢や浅鉢破片や石鏃、磨製石斧などが出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測・遺物取り上げを繰り返す。9日雨のために図面などの整理作業。

中間研志（福岡県文化課）来訪。

・11月12日(月)～11月17日(土)

各調査区ともにV層及びIV層面掘り下げ。29区から49区付近にかけては、縄文晩期の土器破片を含めて遺物量が多く出土。II班調査区に遺物が集中する。土器は剥落や磨滅を受け脆い状況を観察。調査区によっては新しい時期の遺物との混在を認める（成川式土器等）。石鏃・磨製石斧・黒曜石の剥片やチップのほか、炭化物や骨粉粒を確認。遺物出土状況平板実測・レベル実測・遺物取り上げ。

・11月19日(月)～11月24日(土)

各調査区ともにV層及びIV層の掘り下げ。先週に引き続き29区から49区付近にかけては縄文晩期の土器大小破片や黒曜石の薄片石器・チップなどが他調査区より多めに出土。a区側に新しい時期（弥生式土器・成川式土器・須恵器・土師器）の遺物を見る。土器破片は剥落や磨滅を受け、炭化物粒や骨粉も多く分布。

・11月26日(月)～12月1日(土)

各調査区ともにV層及びIV層面の掘り下げ。調査区全体の遺物包含層掘り下げ調整を実施。a区側に新しい時期の遺物が、他区は縄文晩期入佐期該当の深鉢破片や石鏃・磨製石斧などが出土。遺物出土状況平板実測。レベル実測。

・12月3日(月)～12月8日(土)

各調査区ともにV層及びIV層の掘り下げ。調査区全体の遺物包含層の掘り下げ調整を実施。縄文晩期の包含層はa区側へ傾斜し、新しい時期の遺物が出土。a区側を中心に掘り下げ。晩期入佐期該当期大小破片及び石器が多く出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測。

・12月10日(月)～12月15日(土)

各調査区ともにV層及びIV層（a区側）の掘り下げ。c区側より晩期深鉢（平行沈線文）の2個体の完形品や磨製石斧、礫石器、黒曜石製の石核、打製石斧、磨製石斧、剥片石器・チップなどが他調査区より多めに出土。遺物平面実測。遺物取り上げ。

・12月17日(月)～12月22日(土)

I班及びIII班ともにII班調査区へ投入し、IV層（a区側）の掘り下げ。a区側への傾斜によりIV層とV層を明確にするため（c区側の掘り下げ中断）の掘り下げ。縄文晩期包含層に達し遺物に変化を見る。IV層下部より管玉や黒曜石製の各種剥片が出土（混在を認めた上での攪乱か、石器製作上における縦長剥片の伝統的保持か）。遺物出土状況平面実測。レベル実測・遺物取り上げ。

・12月24日(月)～12月28日(金)

I班及びIV班ともにII班調査区へ投入し、29区から41区までV層（a区側）の掘り下げ。完全にV層面に達する。a区側からc区側への進捗調整のため、かなりの出水高校生を投入。晩期大小破片の深鉢や浅鉢（粗製や精製土器）とともに黒曜石製の剥片石器・石鏃などが多く出土。その間に雪や雨のため旧土木事務所で遺物整理作業を実施。昭和48年の調査は28日で終了。

昭和49年

・1月5日(土)～1月7日(日)

調査開始。各調査区ともにV層の掘り下げ。場所により小礫混じりの土質で晩期土器（底部破片）などや楠の樹根を検出。その周辺に黒川期該当の黒色研磨土器が出土。精製土器より粗製土器の小破片が量的に多い。また、黒曜石製剥片もかなりの範囲で確認。遺物出土状況平板実測及び土器群の平面実測。レベル実測・遺物取り上げ。

牛ノ濱修（立正大）西田茂（広島大）池崎譲二（明治大）桐野克則（出水高〇B）来訪

・1月9日(火)～1月13日(土)

各調査区ともにV層の掘り下げ継続。晩期土器群や黒曜石剥片・チップ等が出土。I班調査区の排土作業へII・III班全員を投入し実施。遺物出土状況平面実測及び土器群の平面実測。レベル実測。

犀川文化課長・本蔵文化財研究員・松元市教委係長・住田市教委主事来訪

・1月14日(月)～1月19日(土)

各調査区ともにV層の掘り下げ。晩期の小破片が多いが、深鉢（条痕文施文）・黒色研磨土器・マリなどの特徴的な破片や磨製石斧・石鎌・黒曜石剥片・チップなどが出土。各セクションベルトの掘り下げ。調査区によっては下層確認調査実施。遺物出土状況平板実測及び土器群の平面実測。レベル実測。中間報告のために整理作業及び事業報告書作成。

・1月21日(月)～1月26日(土)

各調査区ともにV層及び各セクションベルトの掘り下げ。一部下層確認調査実施。晩期大小破片とともに深鉢（複数の沈線文を施文）、底部破片をはじめ土掘り具としての扁平な礫石器が出土。遺物出土状況平板及び平面実測。レベル実測。

・1月28日(月)～1月31日(休)

各調査区ともに今月で市教育委員会との委託期間が終了するため、これまでの出土したすべての遺物出土状況の記録保存に努める。一部の調査区ではV層の掘り下げを継続。遺物出土状況及び平面実測。遺物取り上げ。整理作業。1月31日で委託期間中の調査は終焉となる。

遺跡の今後の取り扱いは、調査期間中であり調査を必要とするために、鹿児島県教育委員会文化課は、出水市教育委員会をはじめ県土木部、出水土木事務所などの関係機関と協議を重ねた。その結果、出水市教育委員会は、諸般の事情により委託ができないとの結論に達した。

そこで、鹿児島県教育委員会文化課は、石器文化研究会（所在地出水市・池水寛治氏主催）と契約に基づき、池水寛治氏を調査団長とする調査団を再編成して、引き続き調査再開となった。

調査の組織については、調査団組織をつくり、調査主体者が鹿児島県教育委員会で、調査責任者は、池水寛治氏（石器文化研究会）が調査団長となり、調査担当者は、戸崎勝洋（文化課文化財研究員）、立神次郎（文化課文化財調査員）、長野眞一（石器文化研究会文化財調査員）が、それぞれIII班調査区・II班調査区・I班調査区を引き続き調査再開となった。

調査は、昭和49年2月1日から昭和49年3月31日、その委託期間までにすべての調査を終了した。

・2月1日(金)～2月2日(土)

各調査区とも調査を再開。作業内容は先週の継続。I班調査区及び一部のIII班調査区は下層確認調査を開始。II班の調査区と一部III班の調査区はV層下部の掘り下げ。晩期土器破片をはじめ石器

(黒川期該当の黒色研磨土器や大型の土掘り具) などが出土。

・2月4日(月)～2月9日(土)

I 班調査区及び一部のⅢ班調査区は下層確認調査継続。下層での遺物確認されず。雨天のため整理作業。Ⅱ班調査区はV層下部の掘り下げ継続。遺物集中を確認。晩期精製土器や粗製土器の深鉢や浅鉢を中心に石器(小型磨製石斧・管玉・小玉・石鏃・剥片石器) などが多い。降雪のなかでの掘り下げ。遺物出土状況平板実測及び土器群の平面実測。レベル実測。遺物取り上げ。

・2月11日(月)～2月16日(土)

I 班調査区及び一部のⅢ班調査区は下層確認調査継続。下層での遺物は確認されず。Ⅱ班調査区はV層下部の掘り下げ継続。出土遺物の集中を確認。晩期の精製や粗製の土器(深鉢や浅鉢) を中心に石器(磨製石斧・打製石斧・石匙・スクレイパー・剥片石器・チップ) などが出土。遺物出土状況平板実測及び土器群の平面実測。レベル実測。遺物取り上げ。

・2月18日(月)～2月23日(土)

I 班調査区及び一部のⅢ班調査区確認調査。Ⅱ班調査区は、V層下部の掘り下げ継続。出土遺物の集中を確認。晩期の精製や粗製の土器(深鉢や浅鉢) や石器(打製石斧・石匙・礫石器・剥片石器・チップ) などが出土。出土が希薄な状態で出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測。遺物取り上げ。

・2月25日(月)～3月2日(土)

I 班調査区及び一部のⅢ班調査区確認調査終了。Ⅱ班調査区へ合流。V層下部からVI層にかけて掘り下げ。V層下部から粗製の土器(深鉢や浅鉢) や石器(扁平な打製石斧・管玉・小玉・石鏃・剥片石器) などが希薄な状態で出土。VI層より僅かな量の西平式土器や松山式土器などの破片が出土。遺物出土状況平板実測及び平面実測。レベル実測。

・3月4日(月)～3月9日(土)

Ⅱ班調査区へ合流。VI層の掘り下げ。遺物の確認できなかった調査区については、トレンチによる下層確認調査を精力的に実施。VII層並木式土器破片出土。土層断面実測。整理作業(遺物や図面等)。撤収のための諸準備を実施。現地での調査は、昭和49年3月9日にすべて終了。

3月11日より旧土木事務所跡地において、昭和49年3月31日まで室内整理作業を実施。遺物台帳・写真台帳等の整理。特殊遺物の一部については、現地事務所で水洗及び注記済みのため実測作業を実施。調査事業報告書作成。遺物運搬作業後撤収。すべての調査は、昭和39年3月31日に終了。

第Ⅱ章 調査の位置と環境

第1節 調査の位置及び立地

沖田岩戸遺跡は、鹿児島県出水市下鯖洲字沖田小字岩戸に所在し、米ノ津川によって形成された南九州で典型的な扇状地地形を成す出水平野の東部をほぼ南北に流れる高柳川の中流一帯に位置している。

出水市は、県の北西部に位置し、北部は熊本県水俣市に、東部は大口市に、南部は薩摩郡の宮之城町及び鶴田町に、西部は出水郡高尾野町に、北西部は八代海を隔てて出水郡東町にそれぞれ相接している。

この出水市は、市制が施行されるまでを概観すれば、明治2年には上出水村・中出水村・下出水村の三村に分かれていたが、明治24年には上出水村から大川内村が分村した。大正6年に上出水村が出水町に、大正12年には中出水村が米ノ津町となり、町制がしかれ、昭和29年に米ノ津町と出水町とが合併し、同年に大川内村が編入し、市制が導入された。この地は、大口市とともに本県本土最北部を占め、ツルの渡来地で世界的に有名な田園都市である。

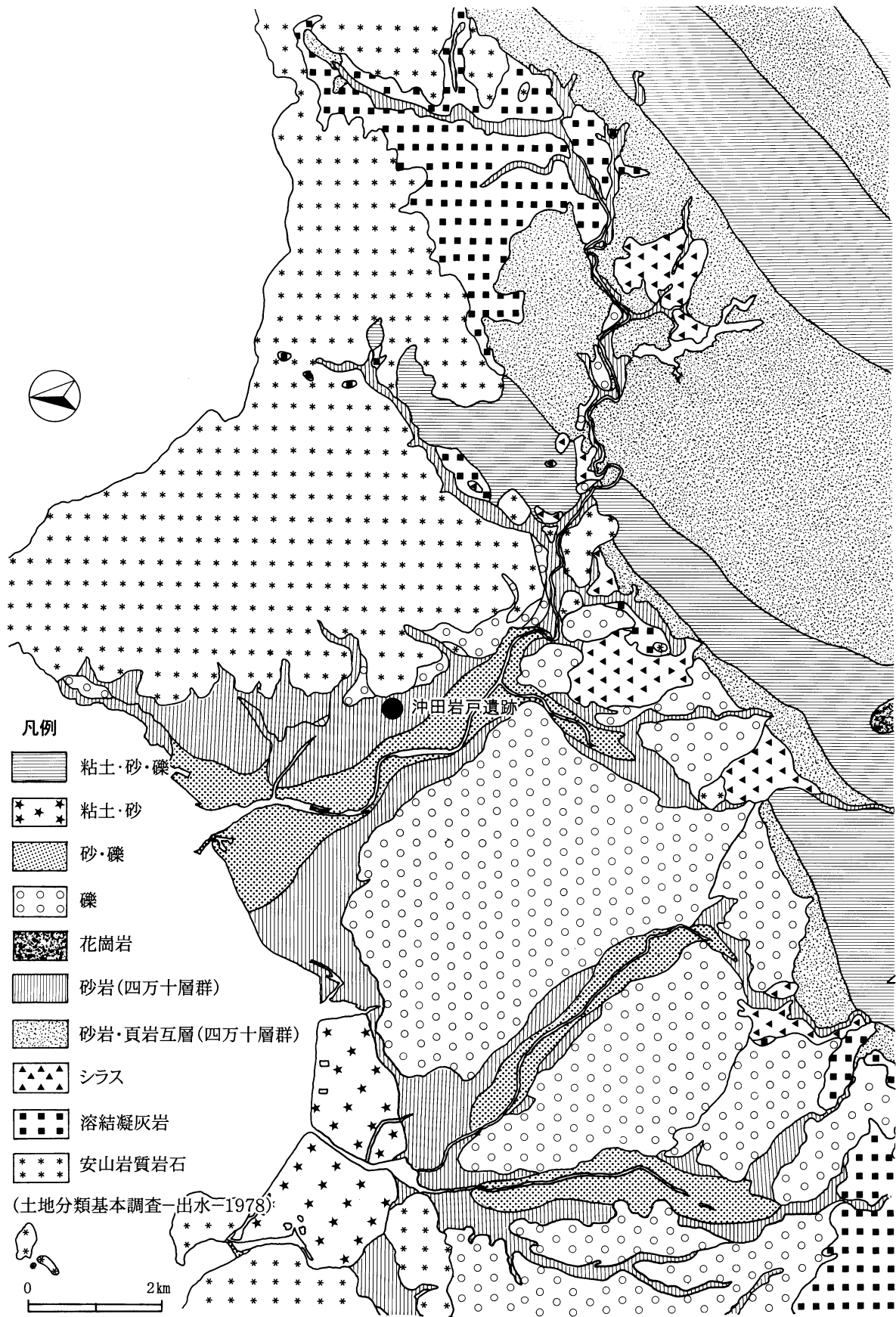
出水市の地形を概観すれば、山地、シラス台地と高位段丘面、扇状地、低位段丘面（河岸段丘）沖積低地、干拓地との六つに地形区分され、これらのなかでも出水平野の大部分を占める扇状地と沖積地及び干拓地である。（第1図参照）

山地は、北東部に古い安山岩類より成る肥薩山地が連なり、県境に矢筈岳（687m）が、南部には紫尾山（1,067m）を最高峯とする四万十層群と一部花崗閃緑岩より成る紫尾山地があり、出水平野との境には南西から北東に走る断層が知られている。その断層崖下にはシラス台地と高位段丘面があり、それに続く扇状地がある。

この扇状地は、出水市松山、高尾野町野添を扇頂とする複合の扇状地で扇状地特有の砂礫層を呈し、礫は砂岩、粘板岩を主体とした花崗閃緑岩、安山岩、溶結凝灰岩などで構成され、この面に約60センチメートルほどのローム層が乗り表層面を形成している。

市の中央部には、全長19キロメートルの米ノ津川が北西に流れ、途中に鍋野川、軸屋川、平良川、高川、坂元川、平良川等の数本の支流が合流し、八代海へ流入している。また、地下水の状況について見れば、地下水面は扇頂付近で10メートル、扇中部で約5メートル、扇端部に多くの湧水を見ることができる。この湧水利用による水田利用がみられ、扇中部では乏水性のために開発が遅れ、大部分が明治以降の開発である。

戦後は苗木栽培の特産地として発達し、高川ダムの建設、調整池、幹線導水路などの国営事業の導入により畑地が灌漑された。一方、八代海（不知火海）に面する干拓地は、江戸時代の元禄年間に藩営に基づく新田開発として、一部の沖積低地の開田とともに進められた。県内では国分干拓や大浦干拓とともに知られる規模の開発であったといわれている。



第1図 沖田岩戸遺跡の位置及び周辺の表層地質図

第2節 調査の周辺環境

出水市の歴史環境を遺跡について見れば、第2図に示したとおりである。この地方には、大正9年に京都帝国大学によって調査が実施され、本県ではじめての貝塚の調査で知られている出水貝塚があり、古くから考古学の研究対象として重要な地域でもある。

これらの遺跡は、大口市と水俣市とに接する標高約500mほどの上場高原一帯をはじめ、出水平野も扇状地の扇頂部から縁辺部にかけて遺跡が発見され、本県でも有数の遺跡密集地である。

この出水地方には、旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡も多く、発掘調査が行われている遺跡も知られている。以下、遺跡の周辺地域を含めて時代順に概観してみたい。

旧石器時代

この時代は、池水寛治氏（当時出水高等学校勤務）によって上場遺跡が発見されるまで鹿児島県においては、当時2か所が川内地方で知られているのみであった。

上場遺跡は、昭和40年10月に上場高原のローム層の切通しで1片の細石刃を採集し、翌11月に遺跡を発見した。その後の昭和41年には、出水市郷土誌編纂の一環として第1次調査以来5次にわたって発掘調査が行われた。その結果、この遺跡は、ナイフ型文化より細石刃文化にかけて6つの文化層が確認され、それぞれ二つ以上の石器の包含層が上下の層位的関係を保って発見され、相対的年代を把握するうえで貴重となった。また、竪穴住居跡を検出したことで、わが国最初の旧石器時代の発見となり、同時代の標準遺跡として学術価値がきわめて高い。

この遺跡の発見以来、周辺において上場狸山遺跡・郷田遺跡が、隣接する大口市五女木遺跡・同じく水俣市石飛遺跡など上場高原一帯で次々と旧石器時代の遺跡が発見され、南九州を代表する遺跡群と周知されている。

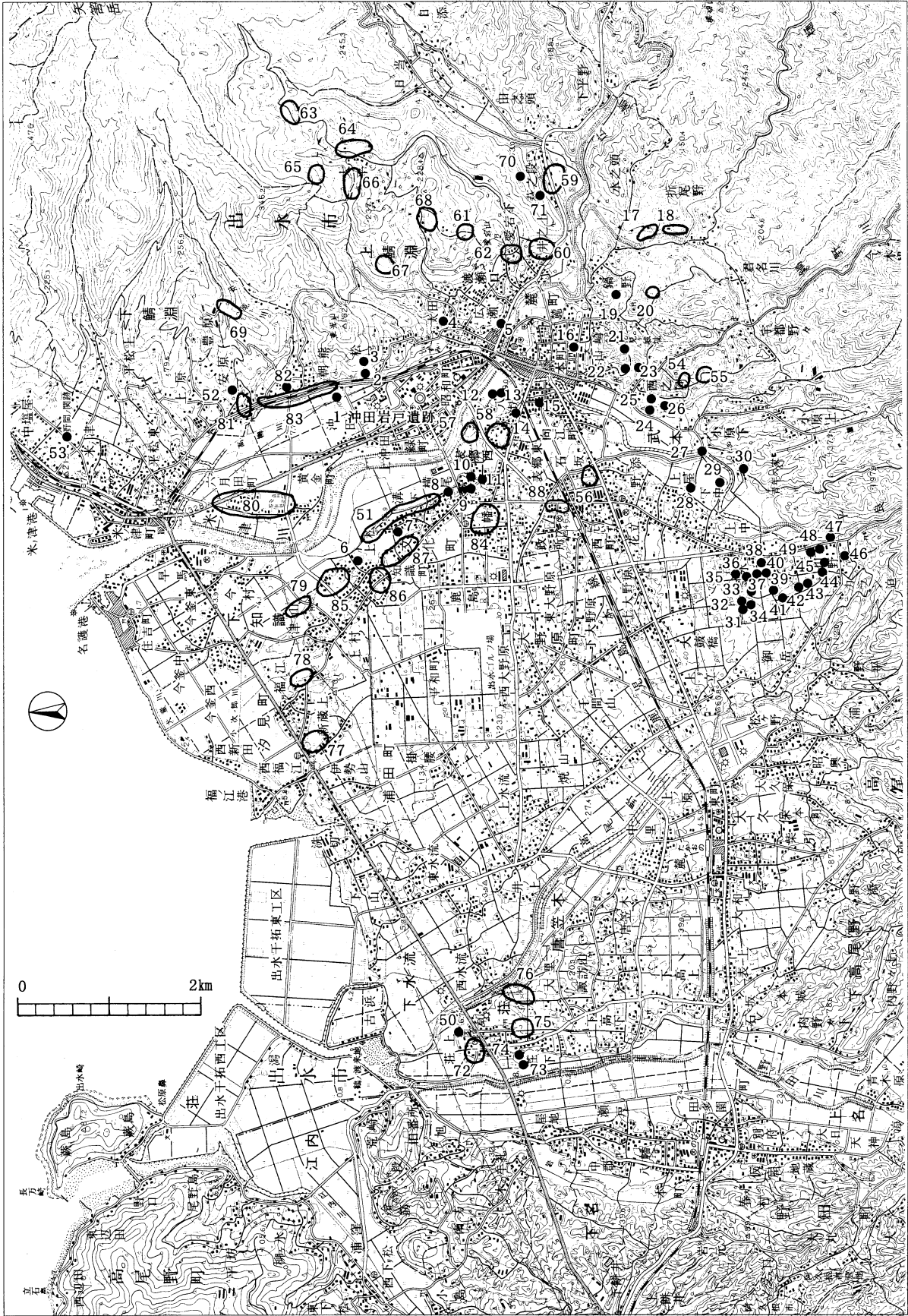
縄文時代

この時代は、上場高原一帯・尾崎遺跡・出水貝塚・江内貝塚・下ヶ原遺跡・市来遺跡・荘貝塚・外園遺跡・二本松遺跡・通山遺跡・猿打遺跡・大平遺跡・安原ノ上遺跡・荘下遺跡・田淵遺跡・榎木田遺跡・見入来遺跡等の遺跡が周知されている。以下、主な遺跡について概観する。

出水貝塚は、平良川などにより形成された洪積扇状地で、その北縁部の舌状張り出し部に位置し、大正9年に長谷部言人氏や京都帝国大学考古学教室が、昭和29年に山之内清男・河口貞徳氏により発掘調査が実施されている。また、平成8年から10年にかけては、出水市が国庫補助を受けて重要遺跡確認調査を実施している。遺跡は、縄文早期より後期に至る複合遺跡で、下層から押型文土器・中層から並木式土器・阿高式土器・南福寺式土器・上層の貝層から出水式土器・市来式土器などをはじめ石器・骨角器・貝製品、人骨数体など多大の成果をあげた。

尾崎遺跡は、出水市街地より北西約1.5キロメートルの出水市中央町及び文化町に所在し、米ノ津川中流の河岸段丘左岸先端部に位置している。調査は、平成8年に出水市が実施し、遺構として尾崎B遺跡より縄文晩期の埋葬施設1基を検出している。遺物としては、縄文早期の押型文土器をはじめ縄文後期の磨消縄文土器・北久根山式土器・市来式土器、縄文晩期の黒川式土器等の土器、石鏃・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石などの石器が発見された

市来遺跡は、出水市市街地より南東約3キロメートルの出水市武本市来に所在し、紫尾山から西に延びた丘陵の裾部で、平良川によって形成された出水平野最奥部で扇状地端部の沖積地にあたり河岸段丘台地先端部に位置している。調査は、平成7年に出水市が確認調査を実施し、縄文時代晩



第2図 中津岩戸遺跡の位置及び周辺遺跡

第1表 周辺遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	沖田岩戸	下鯖淵岩戸	平地	縄文晩期	縄文土器・石鏃・石斧・磨石 弥生式土器等	S.48, 49掘掘
2	宮ノ脇	上鯖淵宮ノ脇	平地	弥生	石器	
3	松尾城	上鯖淵松尾	山地	中世		
4	大田城跡	上鯖淵大田	山地	中世		
5	出水の大楠	上鯖淵渡瀬口	平地			市指定記念物
6	谷城跡	下知識上村	平地	中世		
7	溝下古墳群	下知識溝下	平地	古墳	地下式板石積石室	S45発掘
8	尾崎 B	文化町横尾	平地	縄文～江戸	縄文土器・土師器・須恵器等	
9	尾崎 A	中央町表郷西	平地	縄文～江戸	縄文土器・土師器・須恵器等	
10	出水貝塚	中央町大崎	平地	縄文 (早・中・後)	押型文・並木・阿高・出水・ 市来・南福寺・鐘ヶ崎式土器 片・貝輪・玉製品・人骨	京大報告6 県文化財報告5
11	尾崎城跡	中央町表郷西	平地	中世		
12	田中	中央町八坊	平地	弥生	弥生式土器片散布・須恵器	
13	内城跡	中央町八坊	平地	中世		
14	城願寺跡 城願寺跡	上知識成願寺	平地	弥生・古墳 江戸	弥生式土器・箱式石棺 須恵器・寺跡	出水風土記
15	専修寺跡	向江町平良馬場	平地	戦国	寺跡	出水風土記
16	出水麓	麓町	台地	近世	薩摩焼・館跡	H5～6発掘
17	下ヶ原	武本下ヶ原	段丘	縄文・奈良	土器・黒曜石	
18	大曲	武本大曲	段丘	奈良平安	土師器	
19	松ヶ迫	武本松ヶ迫	台地		黒曜石	
20	小松	武本小松	台地		黒曜石	
21	出水城跡	武本花見ヶ城1325	山地	中世		市指定史跡
22	見性庵跡	上豎馬場	畑・墓地	近世	薩州家(墓・位牌)	
23	大通寺跡	上豎馬場	山麓			
24	山田昌巖の墓	武本2893	墓地	江戸	墓石	市指定史跡
25	薩州島津家墓塔	武本2893	墓地		墓石	市指定史跡
26	竜光寺跡	上豎馬場	丘陵地	近世		
27	五万石溝底水道	武本小原下	川	江戸	用水路	市指定史跡
28	老神	武本老神	平地	縄文～平安	平安時代住居跡・土師器	H4発掘
29	市来	武本市来	平地	縄文～平安	平安時代住居跡・土師器	H4発掘
30	平山城跡	武本上中	山地	中世		
31	出水地下Ⅱ	武本出水地下	台地		遺物散布地	
32	牟田原	武本牟田原	台地		遺物散布地	
33	花園Ⅰ	武本花園	台地		遺物散布地	
34	出水地下Ⅰ	武本出水地下	台地		遺物散布地	
35	花園Ⅱ	武本花園	台地		遺物散布地	
36	楠元西	武本楠元	台地		遺物散布地	
37	楠元Ⅱ	武本楠元	台地		遺物散布地	
38	上宮上	武本上宮寺	台地		遺物散布地	
39	楠元Ⅰ	武本楠元	台地		遺物散布地	
40	楠元上	武本楠元上	台地		遺物散布地	
41	出水池南	武本出水池南	台地		遺物散布地	
42	池ノ尾下	武本池ノ尾下	台地		遺物散布地	
43	池ノ尾	武本池ノ尾	台地		遺物散布地	

第2表 周辺遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
44	池ノ東	武本池ノ尾	台地		遺物散布地	
45	上池ノ尾	武本池ノ尾	台地		遺物散布地	
46	西小野	武本西小野	台地		遺物散布地	
47	下小野	武本下小野	台地		遺物散布地	
48	中尾Ⅰ	武本中尾	台地		遺物散布地	
49	中尾Ⅱ	武本中尾	台地		遺物散布地	
50	荘貝塚	荘下	平地	縄文	縄式土器・石器	48・53・61・63年度調査
51	下郡山	文化町溝下	段丘	縄文～古墳	縄文土器・土師器	北薩分布調査
52	安原城跡	美原町安原	丘陵	弥生	土師器	
53	野間ノ関跡	下鯖淵堀之内	台地	安土桃山	古井戸	
54	前ノ迫	武本西ノ口	丘陵	古代	散布地	
55	笹原	武本西ノ口	丘陵	古代	散布地	
56	石坂・上堀之内	五万石町	段丘	古代	土師器	
57	外園	中央町八坊	平地	縄文～江戸	縄文土器・土師器	
58	天神原	中央町表郷東	平地	古代	土師器	
59	二本松	上鯖淵萩の段	台地	縄文	散布地	
60	井之上城跡	上鯖淵大城	山地	中世	中世山城跡	
61	通山口	上鯖淵香月	山地	縄文	散布地	
62	通山	上鯖淵大平	山地	旧石器・縄文	散布地	
63	猿打A	上鯖淵大平	山地	旧石器・縄文	散布地	
64	猿打B	上鯖淵大平	山地	旧石器・縄文	散布地	
65	猿打C	上鯖淵大平	山地	旧石器・縄文	散布地	
66	猿打D	上鯖淵大平	山地	旧石器・縄文	散布地	
67	乙五郎	上鯖淵大田	山地	旧石器・縄文	散布地	
68	大平	上鯖淵大平	丘陵	縄文	土器・石鏃	
69	安原ノ上	美原町豊原	山地	縄文	散布地	
70	小城跡	上鯖淵井ノ上	山地	中世	中世山城跡	
71	大城跡	上鯖淵井ノ上	山地	中世	中世山城跡	
72	荘下	荘下	平地	縄文	縄式土器・石器	
73	田淵	荘上	平地	古墳・中世	土師器	北薩分布調査
74	田淵貝塚	荘上	平地	縄文	縄文土器	北薩分布調査
75	荘上	荘上	平地	中世	土師器	
76	荘上Ⅱ	荘上	平地	縄文～中世	土器・土師器	
77	新蔵	福ノ江町新蔵	平地	古代	土師器	北薩分布調査
78	長松寺	福ノ江町福ノ江	平地	古代	土師器	北薩分布調査
79	西宮ノ脇	知識町津山	平地	古代	土師器	北薩分布調査
80	六月田	六月田町六月田	平地	古代	土師器・須恵器	
81	安原・鎧	美原町安原	丘陵	弥生	土師器	
82	朝隈城跡	美原町朝隈	丘陵	中世	土師器	
83	榎木田	黄金町沖田	平地	縄文	土器	
84	八幡	知識町八幡	平地	古代	土師器	
85	御堂	知識町上村西	平地	古代	土師器	北薩分布調査
86	庵木園	知識町上村東	平地	古代	土師器	北薩分布調査
87	上松	知識町上松	平地	古代	土師器	北薩分布調査
88	塚込	中央町表郷東	平地	古代	土師器	北薩分布調査

期の粗製鉢形土器少量が確認された。

弥生時代

この時代は、木牟礼遺跡・牟田尻遺跡・宮野脇遺跡・田中遺跡・市来遺跡・老神遺跡等をはじめ城願寺跡・安原城跡等から土器破片等の出土や表採品がある。今後、新たな資料の増える可能性のある時代でもあるが、この時期の調査例はこれまで希薄である。ただし、隣接町の高尾野町では、弥生時代後期から古墳時代へかけての漸移形態と考えられる埋葬地が発見された例があり、当地において発見される可能性も考えられる。

牟田尻遺跡は、昭和51年に畑地灌漑事業として県教育委員会が調査を実施した。その結果、土坑内から5点の磨製石鏃と弥生式土器などが出土した。

市来遺跡・老神遺跡の調査は、平成7年に出水市の確認調査により縄文式土器、弥生時代中期土器破片が確認された。

古墳時代

この時代は、溝下古墳群・城願寺跡・下郡山遺跡・田淵遺跡・市来遺跡・老神遺跡等の遺跡が知られ、中でも溝下古墳群は特筆できる古墳である。

溝下古墳群は、出水市上知識道場園に所在し、広瀬川の沖積低地西南端の洪積台地縁辺に位置する。この古墳は、昭和8年の土取り中に数基の円形及び方形の石室が発見され、鉄鏃・鉄刀・短甲等の副葬品が出土した。

この古墳群は、昭和33年に再度工事が行われ、地下式板石積石室とともに鉄剣や鉄刀そして鉄鏃等の遺構・遺物が発見された。そこで、残存の5基について寺師見国氏により調査が実施された。その結果、5基の石室は、約6mの間隔で点在し、直径約1.5m～1.8m前後のほぼ円形に近い形状の地下式板石積石室であることが判明している。その形状には、方形や楕円形のものも確認され、鉄刀・鉄剣・鉄短剣・鉄鏃などの報告がある。

その後、昭和45年に池水寛治氏により2基が確認され調査が行われた。その結果、1号古墳は2.4m～1.9mの規模の円形状の石室で副葬品は認められなかったという。

《文 献》

- ① 池水寛治「先史時代」『出水郷土誌』1968
- ② 出水市教育委員会『出水郷土誌』出水市文化財報告書(3)1989
- ③ 鹿児島県教育委員会『牟田尻・カラン迫遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)1975
- ④ 池水寛治「溝下古墳群」鹿児島考古51966
- ⑤ 河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財調査報告書第5集1958
- ⑥ 京都大学考古学教室『薩摩国出水貝塚発掘報告』京都大学考古学報告書6 1922
- ⑦ 寺師見國「鹿児島県下の地下式板石積石室」鹿児島県文化財調査報告書第5集1958
- ⑧ 出水市教育委員会『市来遺跡・老神遺跡』出水市文化財報告書(4)1995
- ⑨ 出水市教育委員会『尾崎A・B遺跡』出水市文化財報告書(6)1996

第三章 調査の概要

第1節 調査の概要

調査は、遺跡を高柳川によって区分された東岸部をA地点、西岸部をB地点とし、岩戸橋を基準としたグリッド掘りとした。

本遺跡は、縄文晩期の遺跡として、その沖積低地という立地とともに、縄文農耕の存在の有無を知る手がかりを与えてくれるものと期待しての調査であった。

発掘調査は、当初に河川改修工事当時の砂利等の排除や表土の除去作業からはじめ、ふきさらしの北風を受けながら予想を上回る土壌の堅さとともに、作業員不足等の悪条件に終始悩まされた調査内容であった。

遺跡は、B地点は遺物包含層が一部に認められたものの希薄な出土状況であった。そのために調査の主体はA地点に集中した。I・II層は無遺物層であったが、I班においては旧用水路が南西より横断しているためにI層からも遺物の出土がみられる。

A地点の中でも、本遺跡の主体をなす遺物包含層(III層・IV層・V層)が明確に捉えられるのはII班及びIII班の調査区であった。これらの遺物包含層は、西側へ緩やかに傾斜を呈しているために円弧状の層堆積がみられる。したがって遺物も、これによって多く出土した。

出土遺物は、沖積低地特有の粘土質土壌と幾多の氾濫を受けたのか概観すれば、剥落や磨滅を受けた土器破片が多く非常に脆いものが大半であり、概ね層位毎に出土したものの前記の条件より礫などとともに混在した状態の箇所も観察され、磨滅や剥落した土器破片がほとんどであった。

土器としては、縄文中期の並木式土器、縄文後期では、阿高式土器・南福寺式土器が、出水式土器・松山式土器も極僅かにみられた。

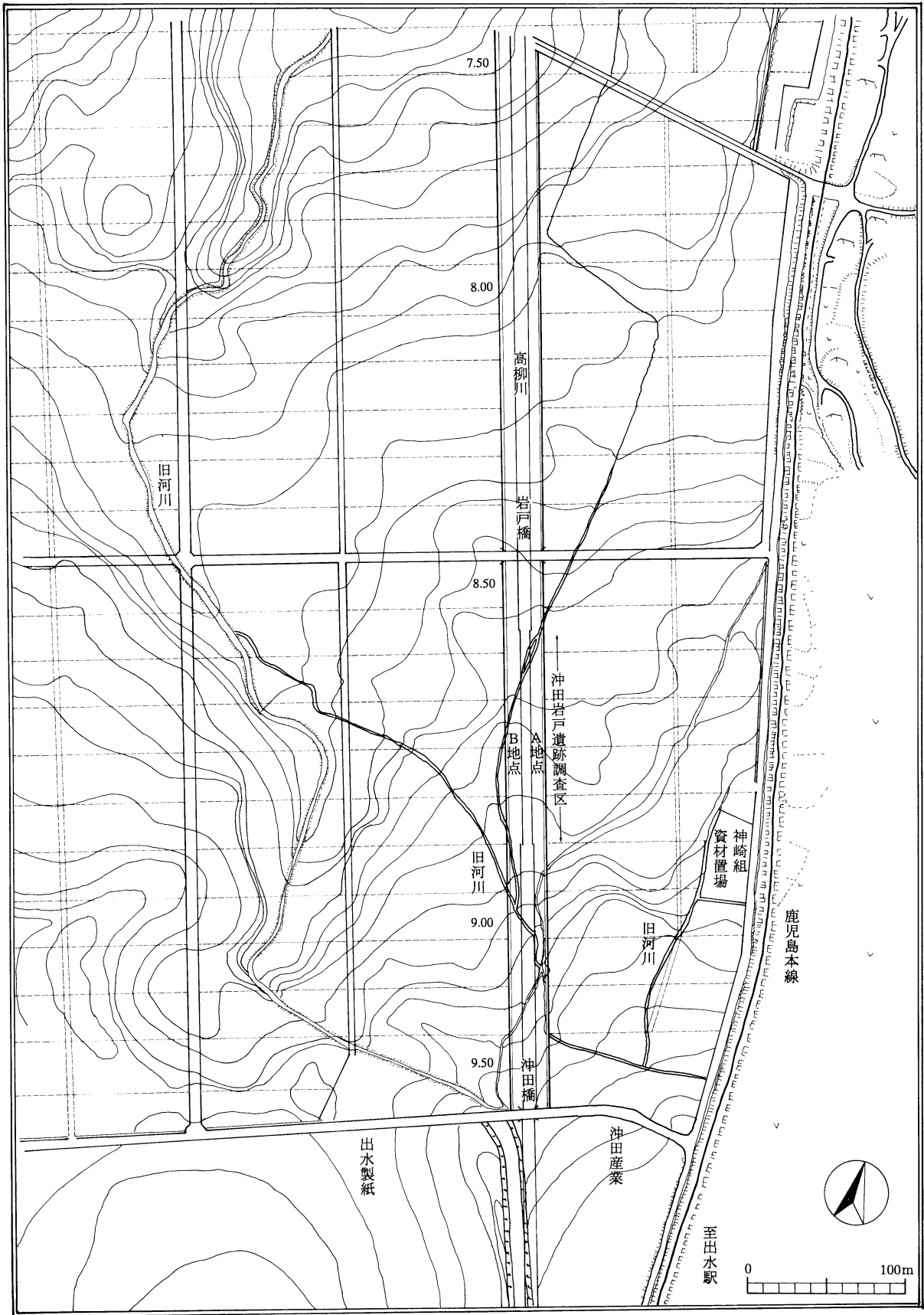
縄文晩期は、本遺跡の主体をなす時期の遺物が大半で、黒川式土器や入佐式土器を中心に出土した。鉢形土器は、その形態から大型土器、中型土器に分類され、大型土器では口縁部に平行沈線文を施すものが主体であるが、他に山形沈線文、波状沈線文、貝殻条痕を施すものも多数出土した。これらのなかには粗製土器や精製土器もみられた。

浅鉢土器も深鉢土器同様に黒川式該当のほか、入佐式該当の土器を中心に、把手を付着したものが出土した。いずれも黒色研磨土器が主体をなした。そのほか、器面に波状沈線文を施したマリ等が出土し、バラエティーに富んだセット関係は注目された。

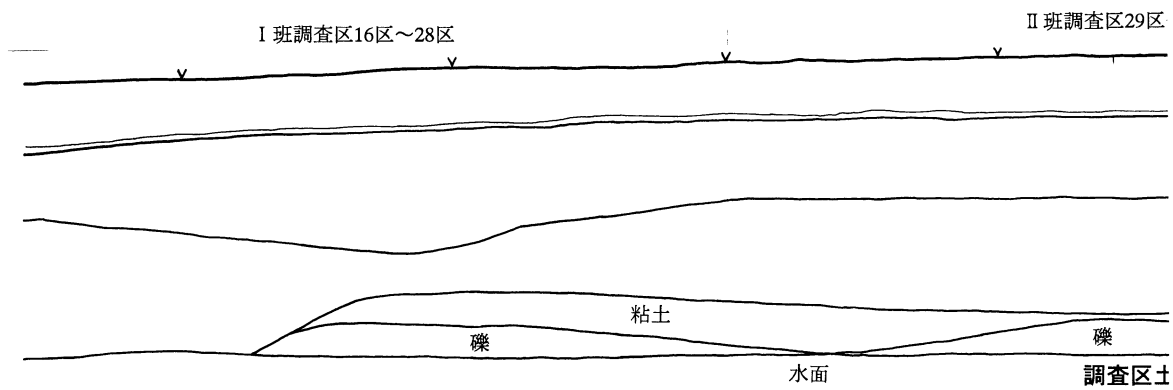
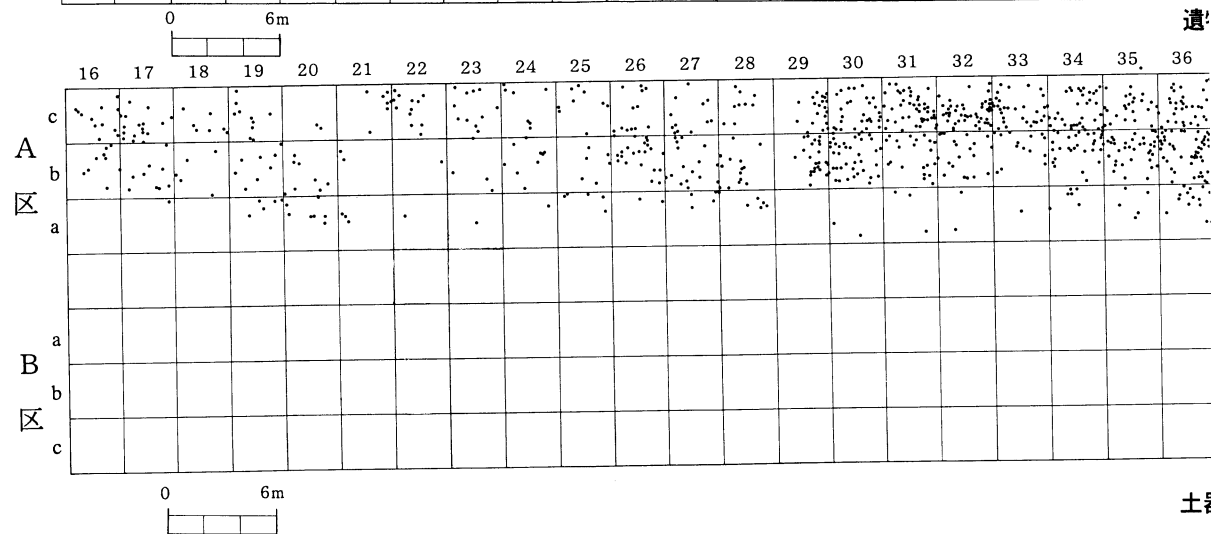
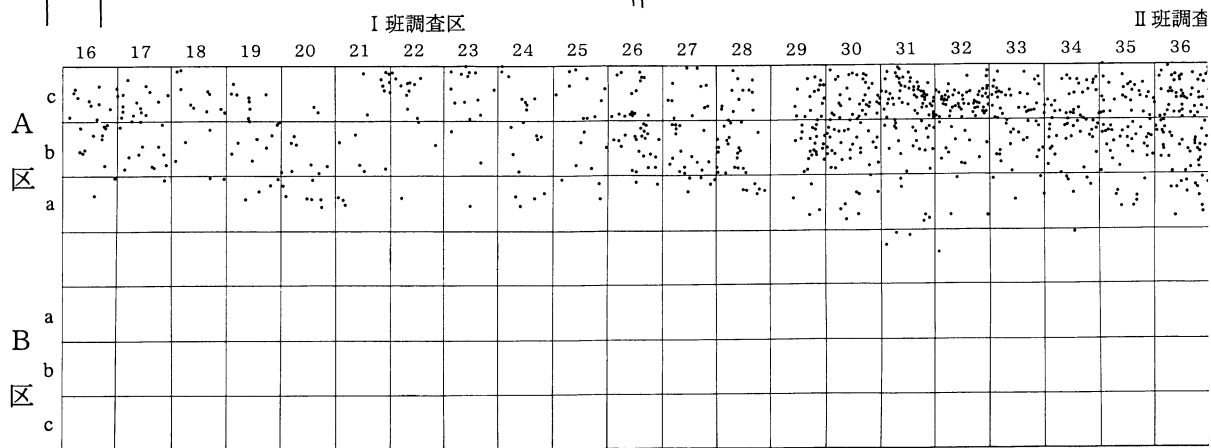
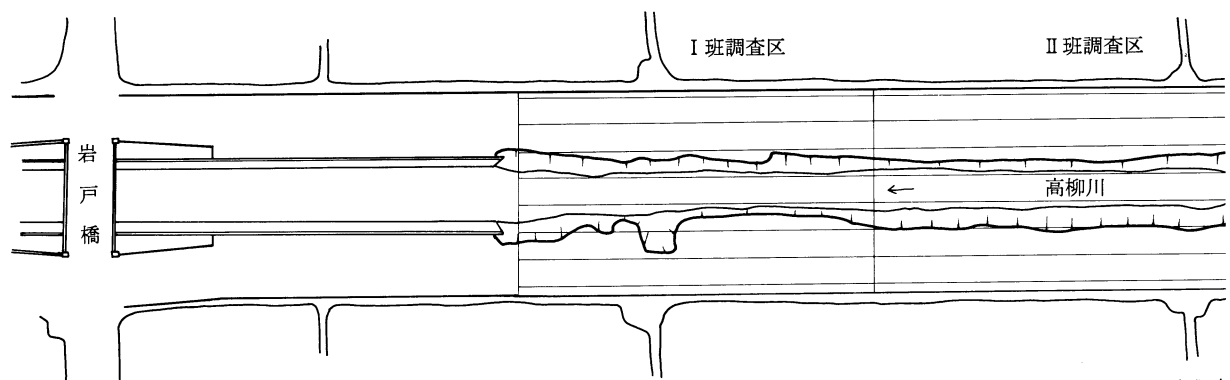
その他の土器としては、成川式土器の高坏や甕形土器の底部破片、須恵器の椀の完形品、土師器の破片、石鍋片など少量が出土したのみであった。

その他の遺物としては、管玉・小玉、その原石をはじめ、磨製石斧、打製石斧、打製石器、打製石鏃、異形石器、礫石器、石錘、磨石、凹石、敲石、石皿、ドリル、石核、剥片石器など多くの石器が出土し、骨粉のほか炭化物もみられた。

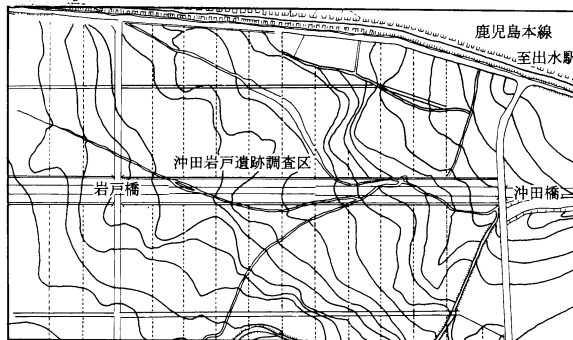
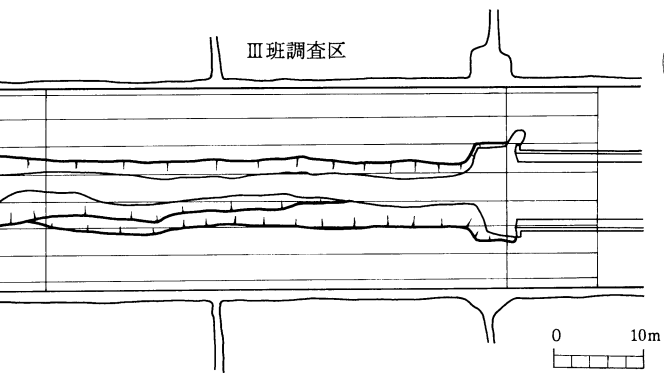
本遺跡の調査は、調査主体が出水市教育委員会をはじめ石器文化研究会と調査体制の再編を実施しながらの調査であった。調査期間は、昭和48年10月1日から昭和49年3月31日までにすべての調査を終え、発掘調査面積は、945㎡であった。



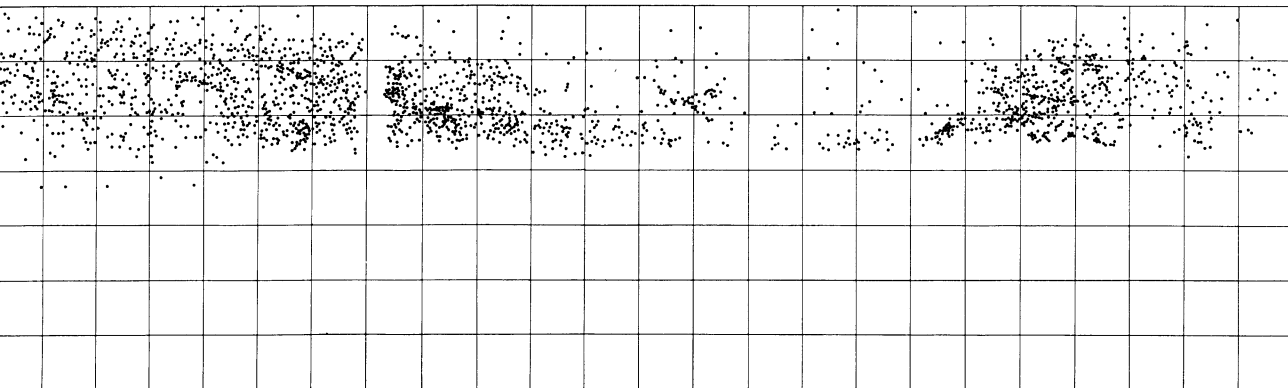
第3図 沖田岩戸遺跡の発掘調査区と周辺地形



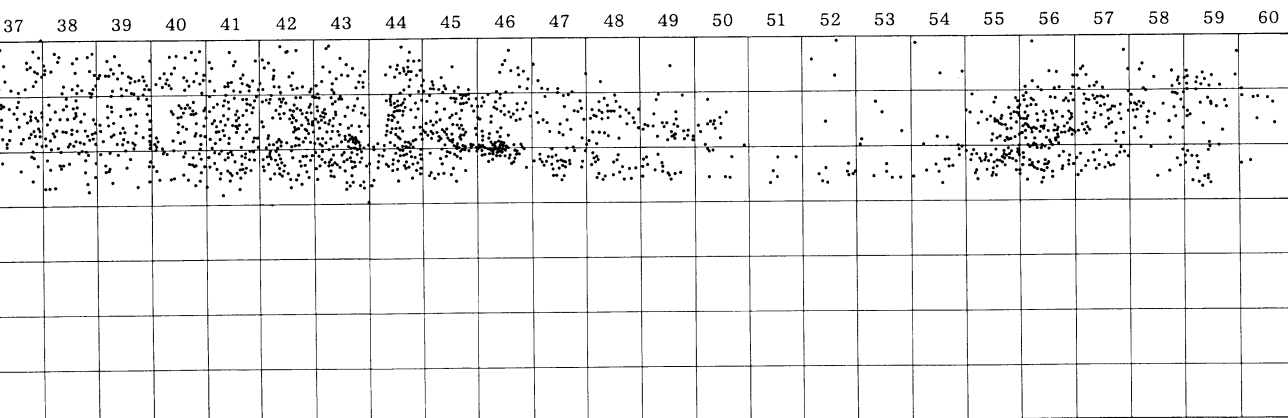
第4図 沖田岩戸遺跡調査



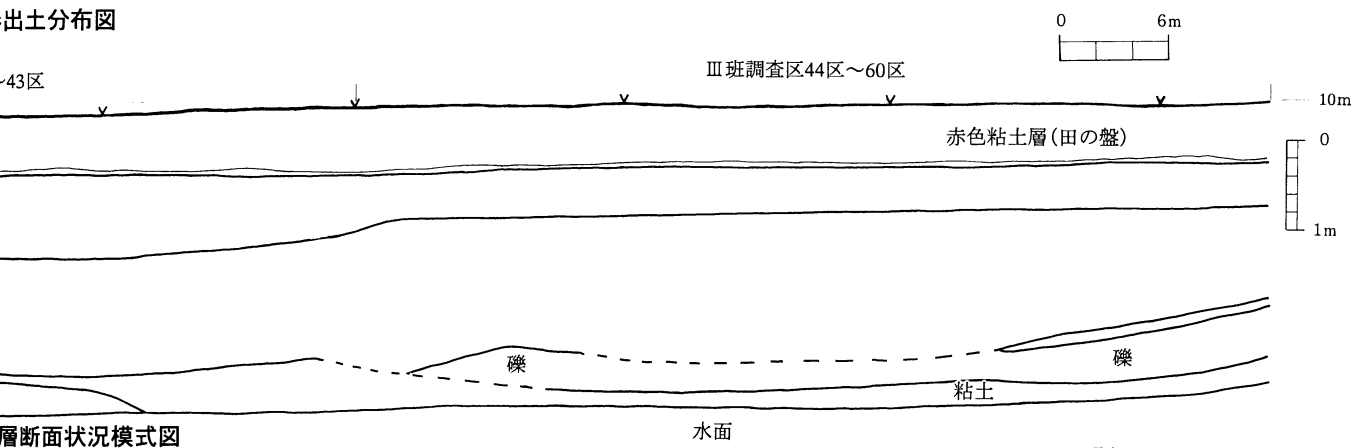
III班調査区



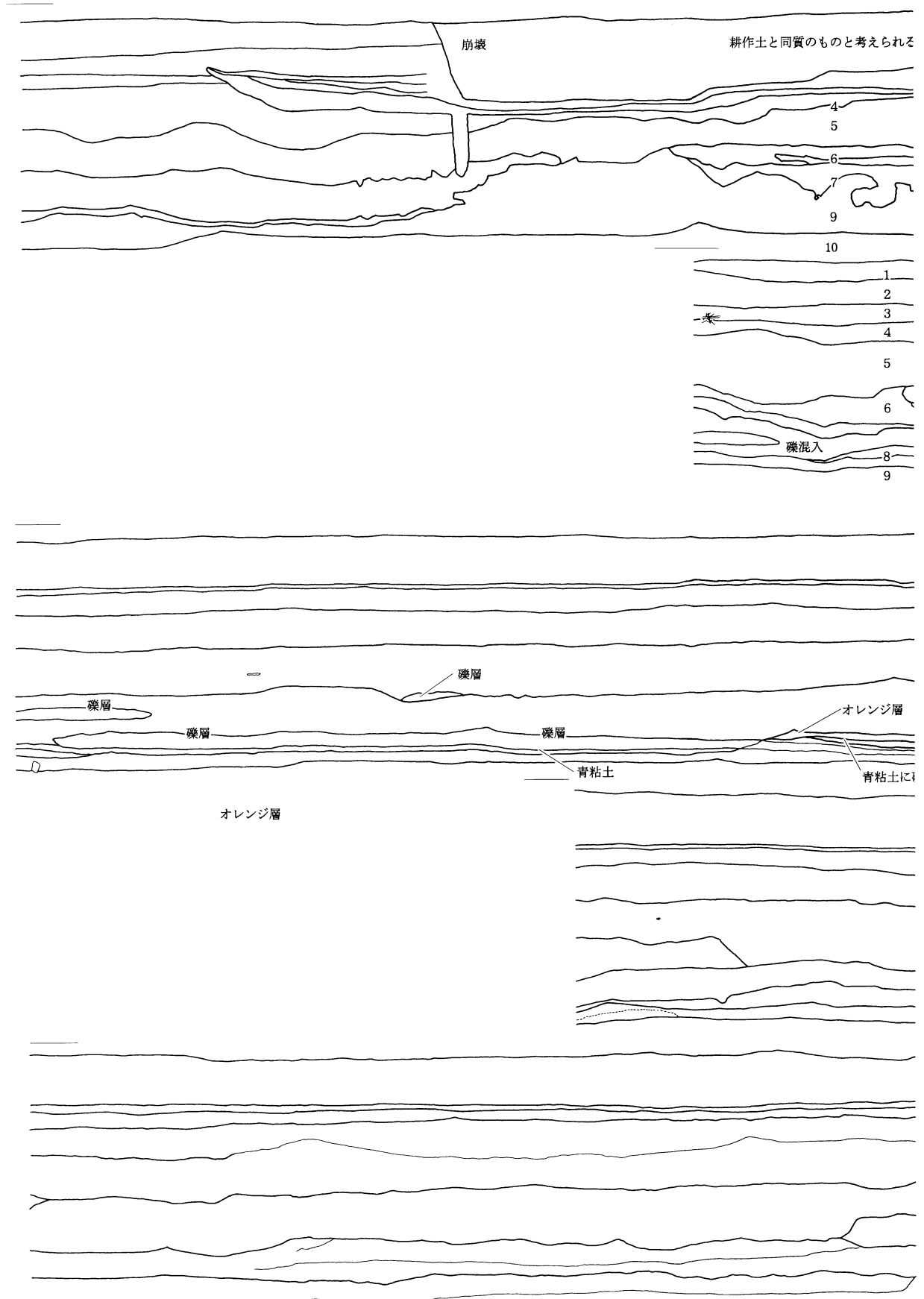
出土分布図



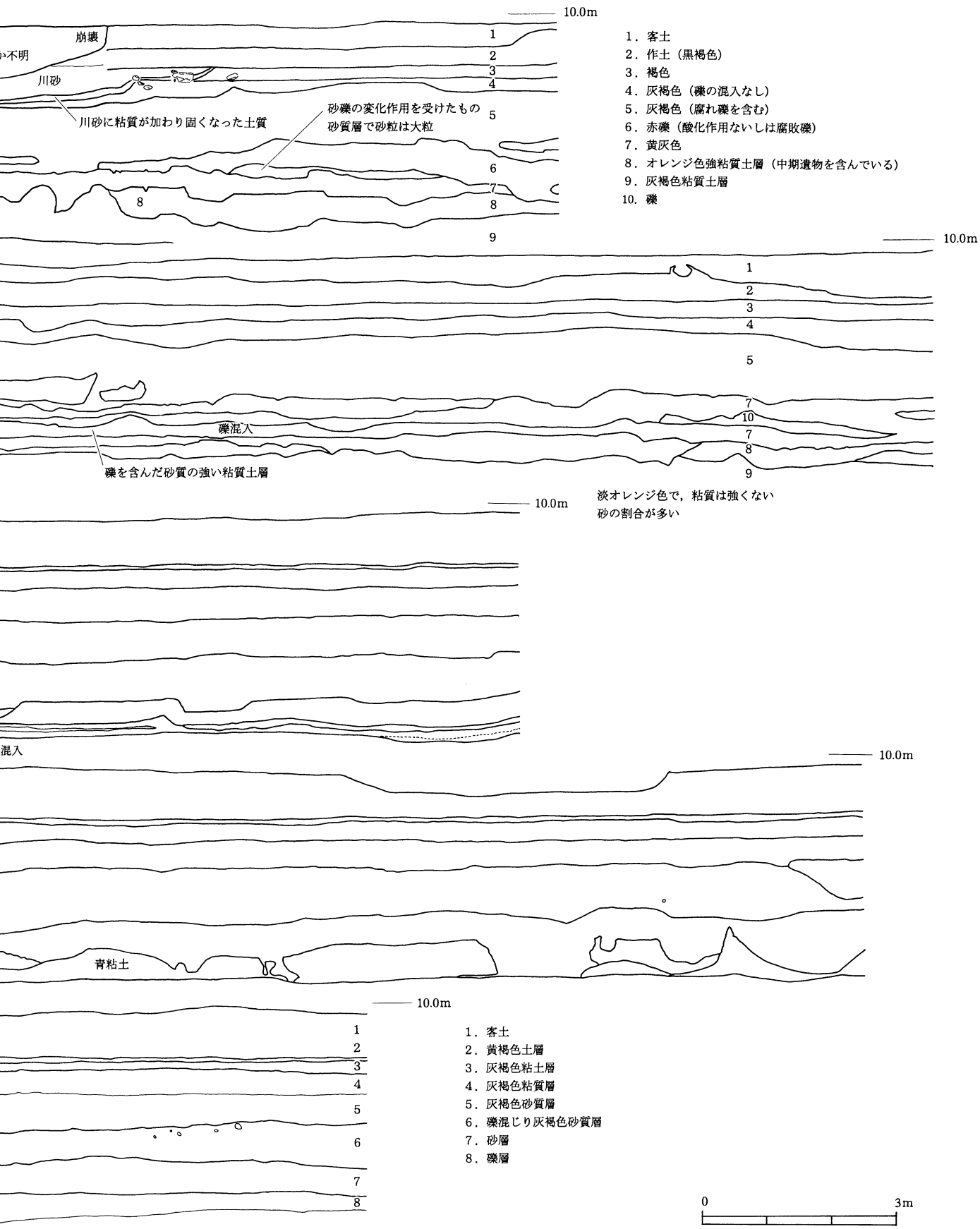
出土分布図



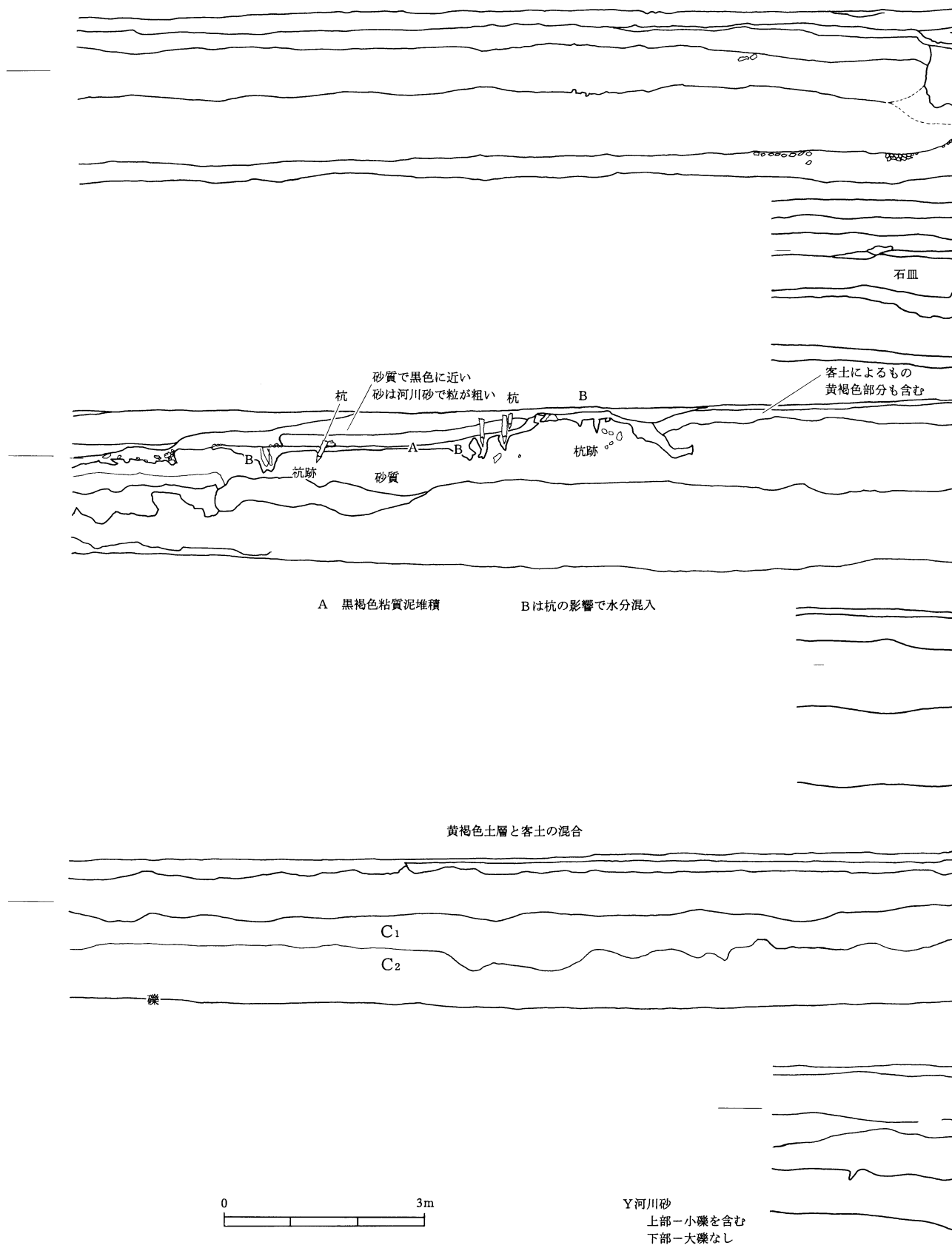
III班調査区遺物出土状況及び土層模式図



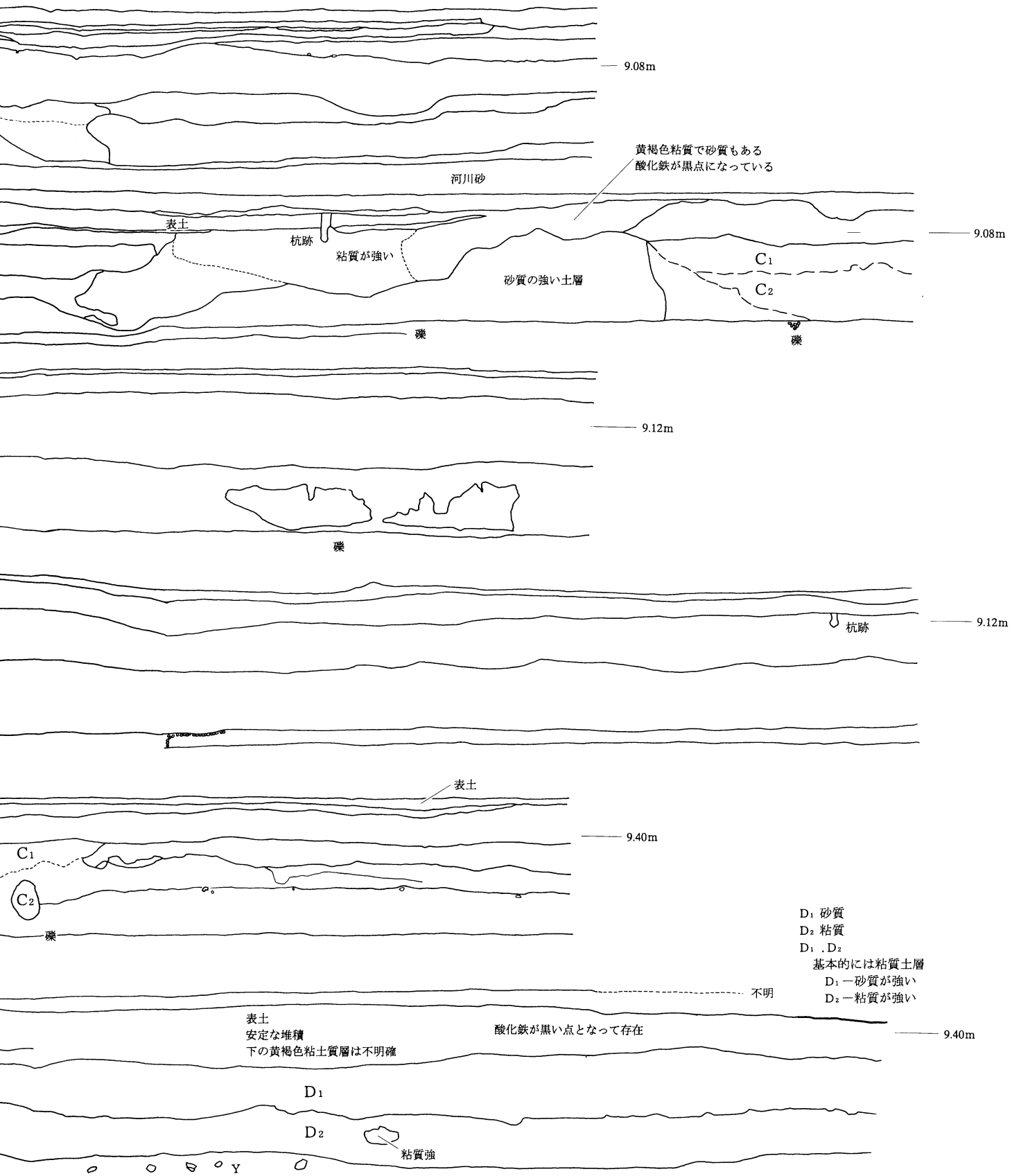
第5図 沖田岩戸



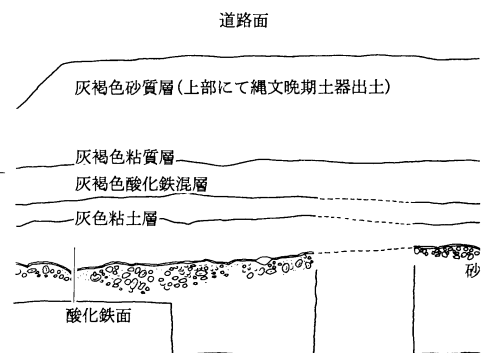
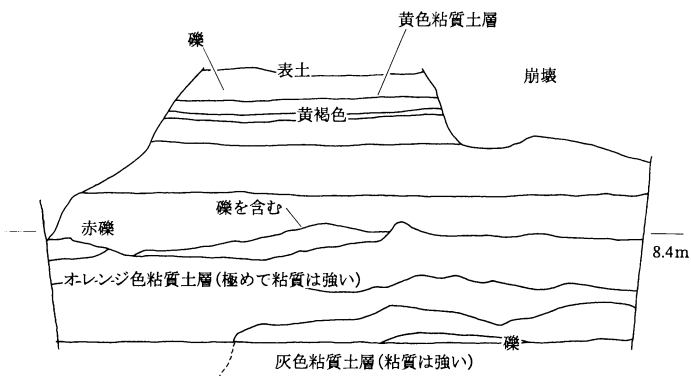
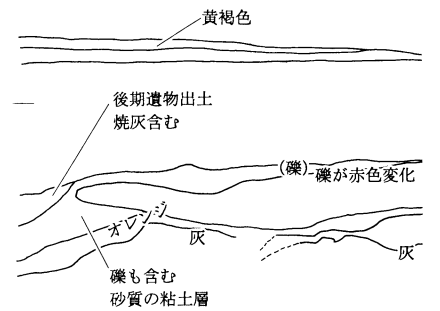
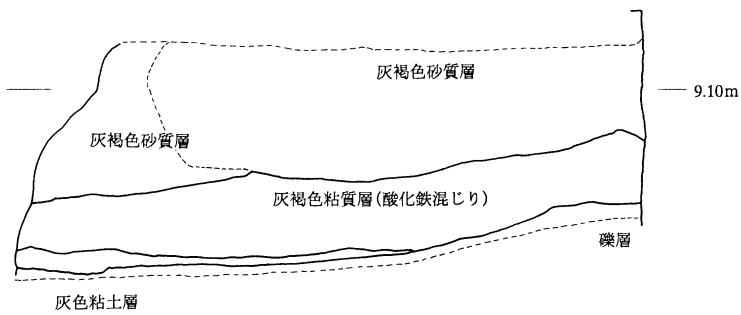
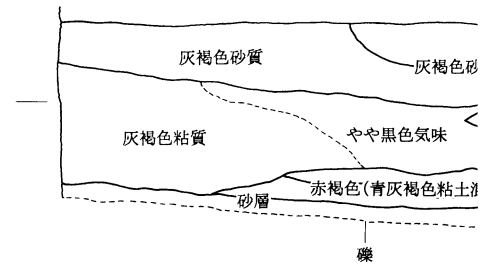
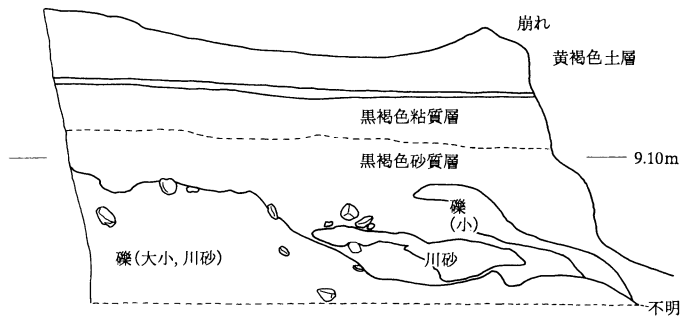
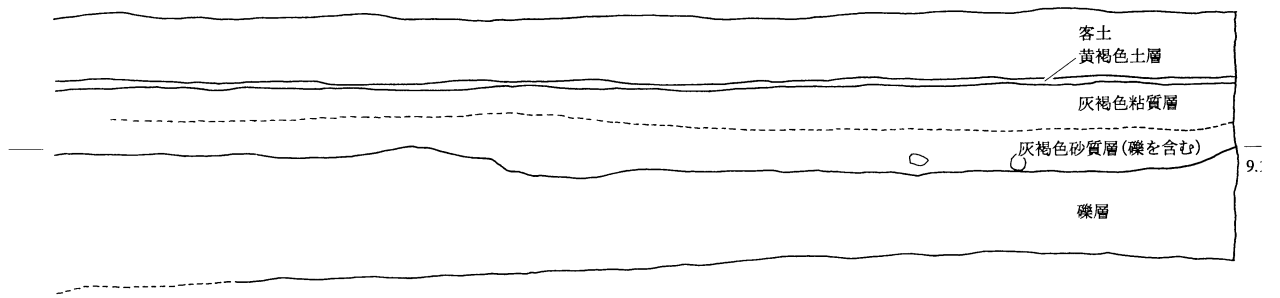
遺跡土層断面実測図 (1)



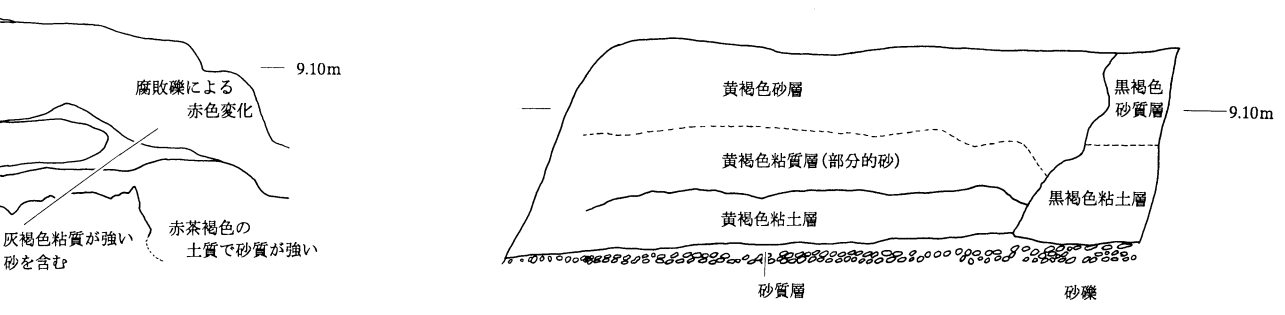
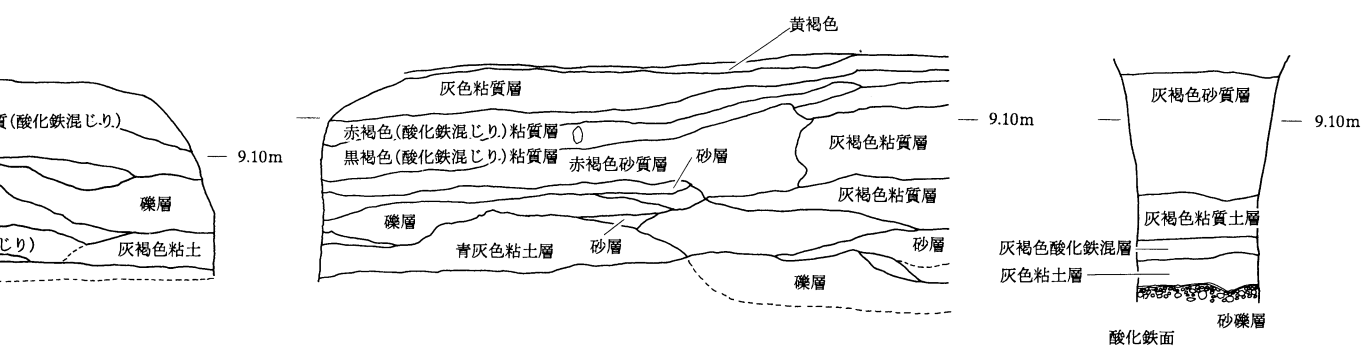
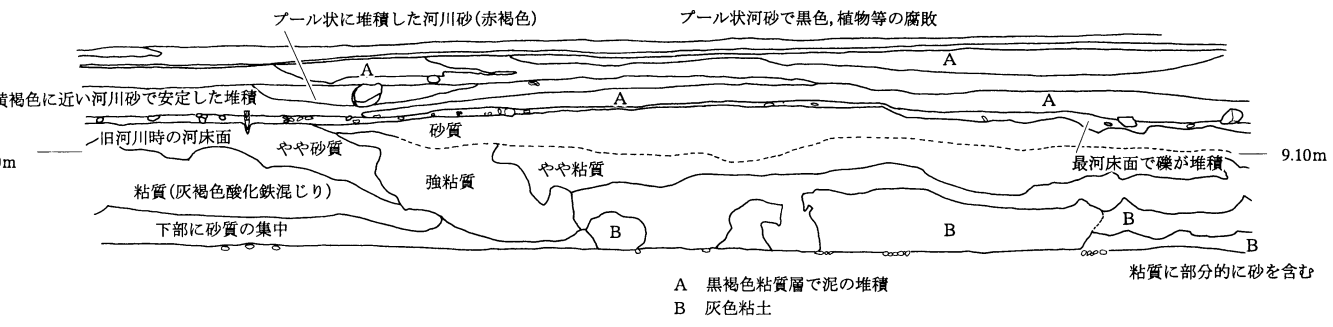
第6図 沖田岩戸



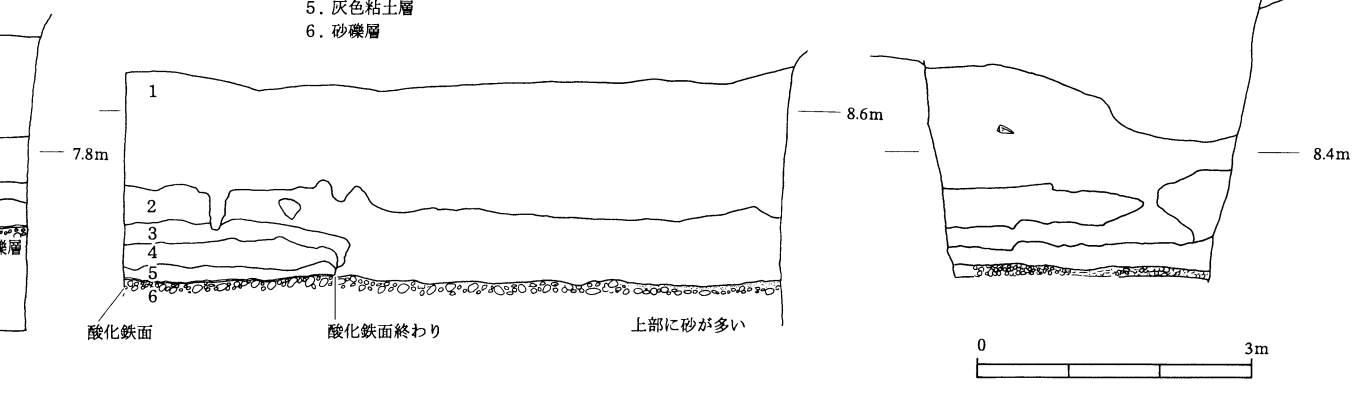
遺跡土層断面実測図 (2)



第7図 沖田岩戸



1. 灰褐色砂質層
2. 灰褐色粘質層
3. 灰褐色酸化鉄混層(粘質)
4. 灰褐色粘質層(酸化鉄が強く, やや変質)
5. 灰色粘土層
6. 砂礫層



遺跡土層断面実測図 (3)

第2節 遺跡の層位

本遺跡の層位は、中小河川高柳川の蛇行による流路や幾多の洪水等による堆積等の繰り返しや高柳川両岸における圃場整備事業や河川改修事業により遺跡本体部分に大幅な客土等が覆っており、各地点において堆積状況に大きい違いが認められる。基本的には沖積低地が形成される段階において遺跡が立地しているためか、さらに周辺の状況より砂礫層と粘土層、砂質土層との互層が確認される部分も確認された。基本的にはA地点のⅠ層からⅨ層までの層位を標準として記述する。

- Ⅰ層 黒褐色粘質土層。 田圃の耕作面であるが、地点によっては、大幅の客土を確認すが、基本的には無遺物層である。ただし、Ⅰ班においては、旧用水路が横断しているために、この層からも各時代の遺物が混在して認められた。
- Ⅱ層 赤褐色粘質土層。 田圃の基盤で基本的には無遺物層である。
- Ⅲ層 灰褐色粘土層。 南側へ向かって緩やかに傾斜をなしている。明確に捉えられるのは29区から60区の間であり、主に弥生式土器や成川式土器とともに、須恵器や土師器などの遺物が出土する。場所によっては、下位層よりの遺物の混入を認める。
- Ⅳ層 黄褐色粘土層。 この層は酸化鉄混じりの層で、Ⅴ層とともに本遺跡の主体をなす縄文晩期の遺物包含層である。29区から60区の間では、西側へ緩やかな傾斜を呈し、円弧状に層堆積がみられ、したがって遺物も、これによって多く出土する。
- Ⅴ層 灰褐色粘質土層。 この層は酸化鉄混じりの層で、Ⅳ層とともに本遺跡の主体をなす文晩期の遺物包含層である。29区から60区の堆積状況及び遺物の出土状況は、Ⅳ層と同様である。
- Ⅵ層 灰褐色砂質土層。 縄文後期の阿高式・南福寺式・出水式・西平式・松山式土器など少量が出土した。明確な包含層であるか不明である。
- Ⅶ層 黄灰褐色粘質土層。 縄文中期の並木式土器が出土した。明確な包含層であるか不明である。
- Ⅷ層 青灰色粘質土層。 この層は無遺物層である。
- Ⅸ層 礫石層。 この層は無遺物層である。

本遺跡のB地点でのⅠ層は、耕作土、Ⅱ層は田圃の基盤で無遺物層であるが、Ⅲ班を斜めに入る旧用水路が、Ⅱ班を抜けⅠ班に至るため、この区域は少量の遺物が認められた。Ⅲ層はⅡ班に僅かに残る弥生式土器、成川式土器、土師器、須恵器などの包含層であった。

Ⅳ層・Ⅴ層は、本遺跡の主体をなす縄文晩期の遺物包含層である。A地点の調査で西側へ緩やかな傾斜を呈し、円弧状に遺物の出土をみたが、遺物や層位ともその延長上にあることが確認された。B地点のⅣ層・Ⅴ層以下の層位については、A地点での調査と同様にⅥ層・Ⅶ層・Ⅷ層・Ⅸ層ともに変化はなく同様の環境であった。

第Ⅳ章 出土遺物

第1節 縄文時代の遺物

沖田岩戸遺跡出土の土器は、縄文中期として並木式土器の口縁部破片1点がみられ、後期では、縄文中期と同様にの南福寺式土器、出水式土器、西平式土器、松山式土器などの破片がみられる。

本遺跡の主体を占める出土遺物は、縄文晩期の遺物が大半で、上加世田式土器、御領式土器なども少量出土した。

縄文晩期の土器には、深鉢形土器・浅鉢形土器・ボール状土器（器形が炊飯等の使用道具類似）マリなどのほか、数多い石器等が出土した。石器には、調査当時注目された管玉、小玉、小粒であるがその原石などをはじめ、磨製石斧・打製石斧・打製石鏃・異形石器、礫石器類・石錘・磨石類・敲石類・石皿・ドリル・石核・剥片石器などともに、骨粒のほか炭化物などもみられた。

その他の土器では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての底部破片をはじめ、成川式土器、土師器、須恵器、石鍋などの遺物が出土したが、凶化できるものは多くなかった。

(1) 出土土器

この項で扱う土器は、第Ⅰ類土器から第Ⅶ類土器に分類した。

第Ⅰ類土器（1）

1は、二股に加工された貝殻刺状の工具と考えられる施文具で、凹線のまわりを連続的に刺突文を施している。その施文は、貝殻刺突文が口唇部と口縁部外側の部分に文様がみられる口縁部破片で、胎土中には滑石の粉末を混入し、器壁の内外面にまで確認される。

第Ⅱ類土器（2～7）は、沈線文の太さと文様が上位に施文する一群である。2は、凹線文を円形や曲線に組み合わせた文様を施した小破片で、全体的な器形は不明である。3は、鋭利な篋状の施文で沈線文が施された小破片である。4は、口縁部が外反し、口唇部の断面は丸味をもった小破片で、口唇部と口縁部外側に鋭利な施文具で沈線文を施している。5は、口唇部の上端部には棒状施文具によりU字状の連続した刻みを施し、僅かに外反する口縁部破片である。6は、外反する山形口縁部で、磨消縄文と沈線文を施している。7は、大きく外反し、口唇部で肥厚する口縁部破片で、頂部に大きい凹線状の刻みを中心に、その両側には細い沈線文や2条の沈線文を横位に施文している。

第Ⅲ類土器（8～10）は、底部などの破片であり、8・9は、粘土の帯を巻きあげた上げ底の形態で、10は、小型の筒形土器に低い突帯を巻き、透かしのように抉りを入れ、研磨の痕跡がみられる小破片である。

第Ⅳ類土器（11）は、概ね口縁部が内反する器形の形状を呈している土器で、僅かに1個体のみが出土した。11は、口縁部が内側に傾き、頸部は緩やかに内湾し、肩部から胴部にかけて「く」の字状に折れ、その径が口縁部より大きい形状を呈している。口唇部は平坦に調整し、口縁部外側に篋状の工具により直線的な2条の沈線文を施し、底部付近は欠損している。

第Ⅴ類土器（12～139）は、深鉢土器であり、概ね口縁部が外反するタイプで、完形品や復元完形品が少なく、そのほとんどが磨滅や剥落を受け、脆く注記等の記入ができないほどの状態の資料が多かった。これらの土器群で口縁部に調整痕をもつものは、断面図の右側にその状況を模式で凶化を加えた。これらの土器は、16のグループに分類した。

第V類一A土器(12~21)は、多くの土器破片があったが、図化に耐えるものは極少量となり、その中から精選して10点を図化した。12に代表される土器で、器形が口縁部でやや厚みがあり大きく外反し、頸部が鋭角に「く」の字状に曲がり肩部へ直線的に延びるタイプで、口縁部の外側には篋状工具により直線的に3条の沈線文を施している。13~21は、肩部で伸びる部分はみられないが、口縁部の形態によりこの類のタイプに含めた。13は、口縁部外側に篋状の工具により2条の沈線文を施し、14・15・17・18・20は、直線的に3条のを沈線文を、19・21は、4条の沈線文が施され、16は剥落や磨滅のために鮮明さに欠けるが無文である。

第V類一B土器(22~25)は、22に代表されるような土器の一群である。この類の器形としては、括りが小さいもので口縁部外側の下部が若干厚みをもつタイプである。23~26は頸部以下が短い、この範疇に入れた。これらの土器の口縁部外側の沈線文は、磨滅や剥落を受けたためか僅かに浅い沈線文の痕跡が確認できる程度である。22・25・26は3条が現存で確認され、23・25は無文である。

第V類一C土器(26~38)は、口縁部が外反し、頸部以下と同じような厚みで、すなわち内側が抉られているような形状を呈し、頸部で「く」の字状に折れているようなものであるが丸みのある一群である。26~29・31は、その土器の一群の範疇にそぐわない一面もあるが、部分的に抉られているために、これらの土器は大きい意味で、この範疇に入れた。この第V類一C土器は、35~37が代表的なタイプで、35は頸部及び肩部が鋭く折れ、その間隔は長い器形である。36は、頸部屈折がより鋭い器形で、37・38は頸部の屈折が若干鈍い器形で、口縁部の外側には、篋状工具による沈線文がほぼ直線的に施されているが、26は剥落や磨滅のためか部位によっては3~4条を、28~30・30・33・36は4条、33は5条、27・31は7条の沈線文が、35・37・38は無文である。

第V類一D土器(39~57)は、外反する口縁部が蒲鉾型に肥厚し、頸部及び肩部で鋭く「く」の字状に折れるタイプである。39~51・54は、口唇部が丸みを持ち、口縁部外側に沈線文をもつものである。52・53は、口唇部は平坦に調整され、53は、頸部から肩部までが長く頸部は鋭く折れているような形状である。57か・58は、口唇部を尖らす形状に調整している。これらの土器の口縁部外側には、沈線文を施しているが、なかには剥落や磨滅によって僅かに痕跡を残しているものもあり、49・54は、部位によっては3~4条を、42・43・45・46は4条、40・47・55は5条、39・41・44・51は6条、48・50は7条、57は8条が施され、52・53・56は無文である。

第V類一E土器(58~64)は、口縁部や頸部および肩部が直線的に「く」の字状に折れるような形状である。58には補修孔と考えられる円形の孔が施されている。これらの口縁部外側には、沈線文を施しているが、61は3条、64は剥落や磨滅によって僅かに3~4条の沈線文の痕跡を残している。59・63は4条を、58・60・62は5条の沈線文が施されている。

第V類一F土器(65~75)は、口縁部や頸部および肩部が「く」の字状に折れるが、口縁部がやや湾曲するタイプである。これらの口縁部外側には、沈線文を施しているものもあるが、剥落や磨滅によって僅かに痕跡を残しているものもある。現存している痕跡で見れば、66・67・69は5条、72・73は6条、65・68・70・71・74・75は無文である。

第V類一G土器(76~84・93~107)は、口縁部から肩部まで緩やかにカーブを持つタイプで、口縁部外側に沈線文を施しているものもあるが、剥落や磨滅によって僅かに痕跡を残し、判明し得ないものもある。80・82・84は3条、77・83は4条、78は5条、76は6条の沈線文が施され、79・81は無文である。93~107は、全体的に丸味をもつ口縁部で、器形が判断できるものは95である。

93・96・98・103・105～107, 沈線文による調整があるもので, 他のものは沈線文の調整がみられない。

第V類一H土器(85～93)は, 口縁部から肩部まで直線的に折れるタイプで, 86に代表される器形である。ただし, 85は口縁部が山形を呈している器形で, 他の土器は小破片のために詳細は不明で, 口縁部外側に沈線文を施しているが, 剥落や磨滅によって僅かな痕跡で, 図化に耐えないものもある。87・88は3条, 86・89～92は4条の沈線文が確認される。特に, 92は篋条工具による沈線文の3条が施文の始まりと終わりの状況が認められ, 若干山形状となり, その下位には1条の沈線文が施されている。一方, 93は, 92の状況に口唇部に1条の沈線文が施され, 2条の沈線に挟まれたような格好となり5条の沈線文で構成されている。

第V類一I土器(109～117)は, 口縁部から肩部まで直線的「く」の字状に折れる, 口縁部が長めのタイプである。特に, 114をはじめとする多くの土器片は, 小破片のために詳細は不明であるが, 117の器形に代表されるようなタイプである。115は4条, 116は5～6条, 109・113は6条, 110・110は7条, 112は8条の沈線文を残し, 114・117は無文である。

第V類一J土器(118～121)は, 口縁部から肩部まで直線的「く」の字状に折れ, 口縁部の器厚が均等に整形されるタイプである。口縁部外側に沈線文を施しているものもあり, 剥落や磨滅によって僅かな痕跡を溜めている程度で, 図化に耐えないものもある。118は3条, 119は4条の沈線文が確認される。120・121は無文である。

第V類一K土器(122～123)は, 口縁部が帯状に肥厚し, 全体的に口縁部の口径が大きく開口したような器形で, 122に代表されるようなタイプで, 口縁部に無文の帯状の肥厚帯がめぐり, 頸部にはリボン状の形状を呈した突起を貼り付けている。頸部から胴部そして底部にかけては「逆」の字状に折れた形状で, 底部は張り出しを形成しない平底を呈している。123は, 口縁部から肩部にかけての器形で, 口縁部が三角形の断面形状を呈している。

第V類一L土器(124～134)は, 口縁部が短く「く」の字状に折れる器形のタイプで, 第V類一O土器と類似するが, 口唇部が厚く丸味をもつ器形である。126をはじめとする大方の土器片は, 小破片のために詳細は不明であるが, 124～127は口縁部の器形が内反するもので, 128～131は直向ないし外反するものと大別でる。

第V類一M土器(133～140)は, そのほとんどが小破片のために詳細は不明であるが, 土器の内面が研磨された器形で, その形状からボールに比定されるタイプである。131は口縁部から肩部にかけて外反し, 口唇部は平坦に調整された器形で, 134・135は内湾した器形で, 口縁部が肥厚している。136は, 若干外反した器形で, 口縁部は肥厚している。138・139は, 若干内反した器形で, 口縁部の外側下部に突帯を持っている。140は, 若干外反した器形で, 口縁部は若干肥厚している。

第V類一N土器(141～144)は, 143の器形のように肩部から口縁部までやや内側に傾くタイプで, そのほとんどが小破片のために詳細は不明である。144の土器片は, 小破片につき傾き不明としたいが, 図化によれば他の土器片と違って外側へ若干開くような器形となっている。

第V類一O土器(130～132)は, 口縁部が短く「く」の字状に折れる器形のタイプで, 第V類一L土器(124～132)と類似するタイプであるが, 口唇部が鋭く尖っているような口縁部に仕上げている土器である。145は, 口縁部の内側が削られるような器形に整形され, 146は口縁部が短く, 若干胴部が張り, 平底を呈する器形で, 147は, 外反する器形で, 口縁部が長い土器である。

第Ⅴ類一P土器（148～154・155～166）は、口縁部が外反し、頸部や肩部でそれぞれ「く」の字状に折れ、その間隔が短い器形のタイプで、148・149は口縁部がやや丸味を持ちながら外反する。150・151は、口縁部がやや丸味を持ちながら内反する器形で、底部がやや張り気味の平底である。152は、山形を呈する口縁部で、頸部に把手状の橋状突起を貼り付けている。153・154は、部位が不明な形状であるが、橋状突起の貼り付いた部分である。163以外の土器は確実でないが、口縁部の傾きからみて、155～166は、この類の範疇に設定した。155～160は、口縁部がやや外湾し、158・159が口縁部が内湾しているが、他は口縁部が直線的な器形である。

第Ⅳ類土器および第Ⅴ類土器（167～232）の浅鉢土器は、小破片を含めて数多くを図化した。深鉢土器と同様の状況であった。特に、浅鉢は、精製土器が多かったが、剥落や磨滅を受けているためかごく薄い器壁で、資料もそのほとんどにクラックの入った状態であり、調整痕の状況の図化が厳しかった。以下、浅鉢土器（167～251）を8類に分類し、図化に努めた。

第Ⅳ類土器（167～174）は、口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて立ち上がったような器形の土器一群である。この土器群は、頸部で締まり肩部で「く」の字状に折れる器形を呈するものである。167・169は、頸部が若干短い。他の土器は長い器形である。170は、ほぼ復元できる土器である。

第Ⅴ類一1土器（175～181）は、口縁部の口唇部が玉縁状の器形を呈し、肩部からの立ち上がりが第Ⅳ類土器より寝ているような器形の土器の一群である。この土器群は、頸部での締まりが少なく肩部で「く」の字状に折れる器形を呈するもので、175・176は、ほぼ完形に復元できる土器である。第Ⅴ類一2土器（182～188）は、口縁部の口唇部が低い玉縁状になり、肩部からの立ち上がりが第Ⅳ類土器より寝ているような器形の土器の一群である。この土器群は、頸部での締まりが少ないが「く」の字状におれる器形を呈し、182・183は、ほぼ復元できる土器の一群である。第Ⅴ類一3土器（189～202）は、口唇部が低く玉縁が断面三角状を呈する形状になり、肩部からの立ち上がりが第Ⅳ類土器より寝ているような器形の土器の一群である。この土器群は、頸部での締まりが少ないが「く」の字状におれる器形を呈している。189～193は、ほぼ復元できる土器の一群で、193・201・202は、若干肩部からの立ち上がりが直立気味の目立つ土器である。

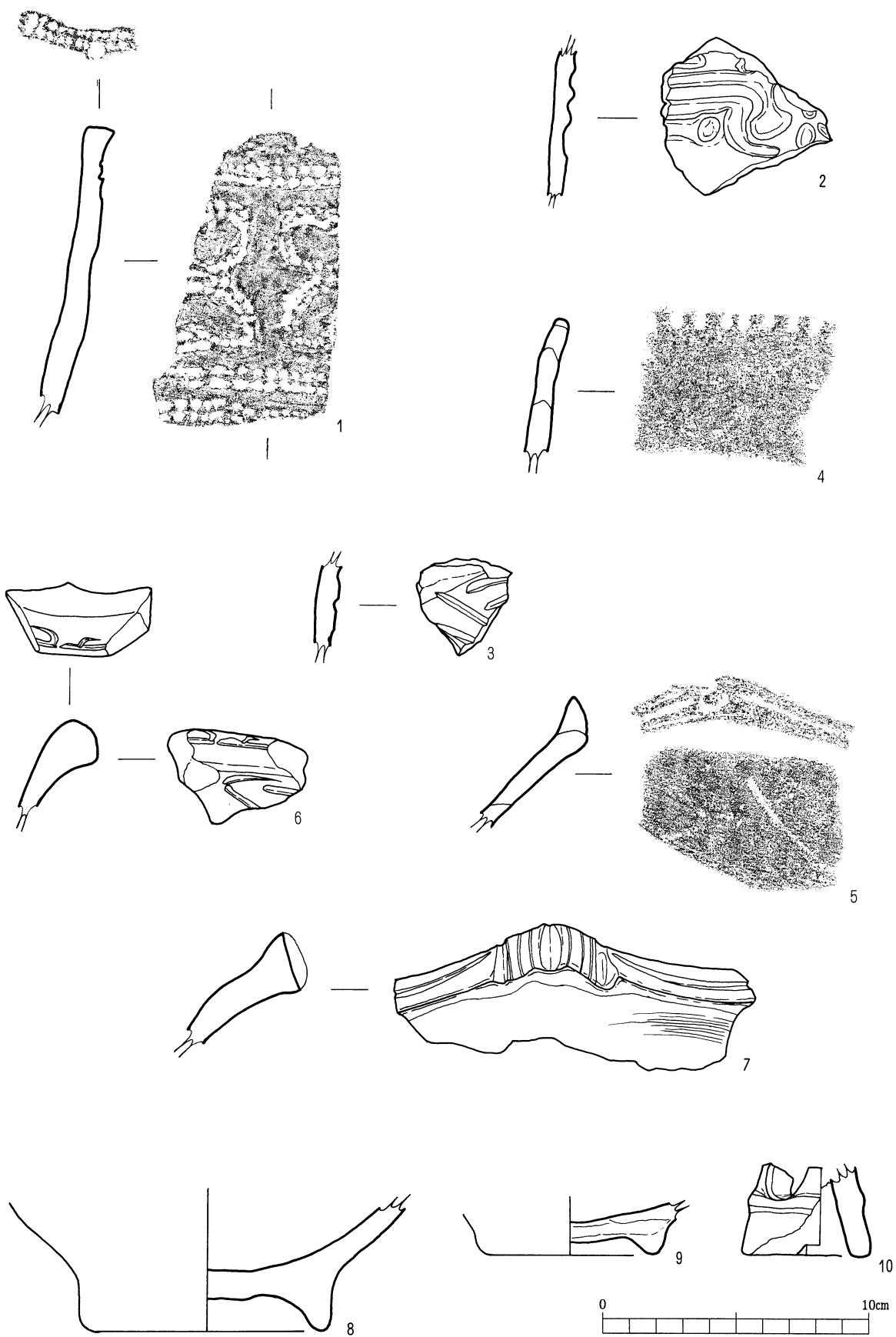
第Ⅴ類一4土器（203～213）は、口縁部の口唇部と肩部の間隔が狭い器形の土器の一群である。203は、肩部で「く」の字状に折れ、胴部は丸味を持つ器形で、204は203と同様であるが、205は若干その間隔が狭い器形である。210～213は小型の土器で、その形状はマリンに類似しているが、口縁部の径と胴部との径に開きがあるので浅鉢土器の範疇で取り扱った。第Ⅴ類一5土器（214～223）は、口縁部の口唇部に玉縁があり、頸部で大きく「く」の字状に折れ、肩部から胴部にかけて半球形状に曲がる形状の土器の一群である。214～217は、図化したその器形よりその形態がわかるが、218・219は口縁部の傾きの形状によりこの範疇で取り扱った。第Ⅴ類一6土器（224～230）は、口縁部の口唇部に玉縁がなく、肩部で「く」の字状に折れる形状の土器の一群である。224は、口縁部が丸味を持ちながら外反し、225～228は直向ないし内湾する形状の器形である。229・230は、山形の口縁部をもつ形状の土器の一群である。第Ⅴ類一7土器（231～232）は、大形で深みのある肩部で「く」の字状に折れる形状の土器の一群で、ともに頸部に稜線がみられる。口縁部の口唇部は、尖り気味の形状の器形である。

その他の土器としてボール・マリとに分類した。ボール（233～246）は、半球形の器形タイプで厚手であるために、この第Ⅴ類一7土器のボールに分類した。233・238・240・241は、中型土

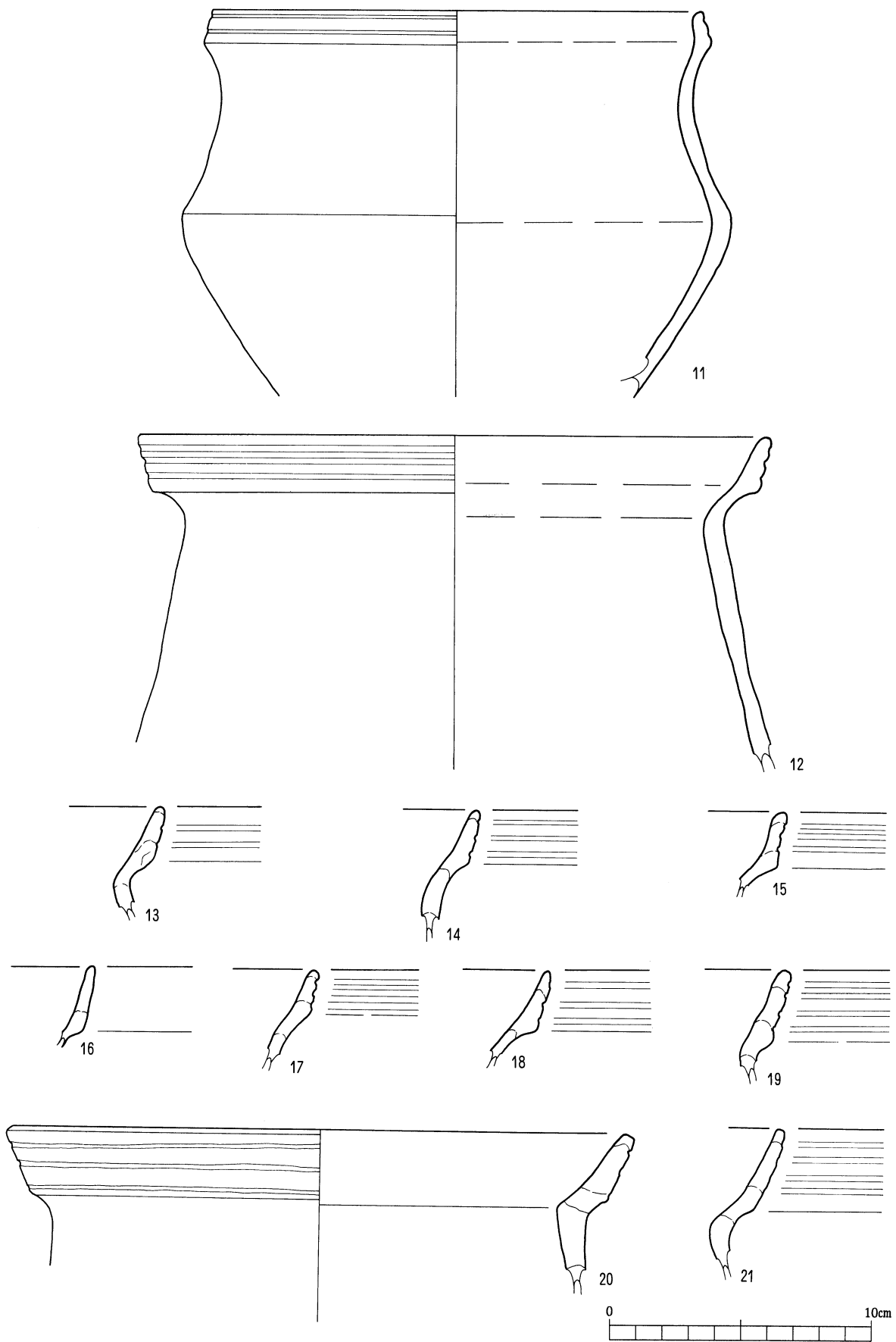
器に、242・243は、小型土器の範疇で、244は底部破片である。マリ（247～251）は、半球形の器形タイプで薄手であり、胴部が深い器形の土器の一群のために、マリに分類した。このほか、第IV類土器（245・246）のマリがあり、245は、口縁部の径が胴部より小さく薄手であり、文様は沈線文の上下端は水平に施し、なかには沈線文を波状に施文している。246は、口縁部と胴部は同じ径でありやや浅く、文様は波状の沈線文が施され、ともに底部は丸に近い平底である。第V類土器（247～345）のマリは、口縁部に玉縁が付き、胴部の径が口縁部より大きい土器の一群である。247・249は、小型であるが、248は中型である。広口壺状を呈した土器（252・253）があり、252は、口縁部が外反し、頸部が縮まり、肩部は丸味をもっている土器であり、形態が不明のために、この一群として取り上げた。253は、口縁部が反り捲り頸部が縮まり、肩部は丸味をもっている土器であり、弥生時代の壺形土器を彷彿するような土器である。

第V類土器は底部（254～372）は、大きく254～328までの厚手と329～372までの薄手に分類した。しかし、第V類土器の深鉢形土器の底部か、浅鉢形土器の底部かについては、かなりの資料を得たに関わらず資料を特定するまでには踏み込まなかった。

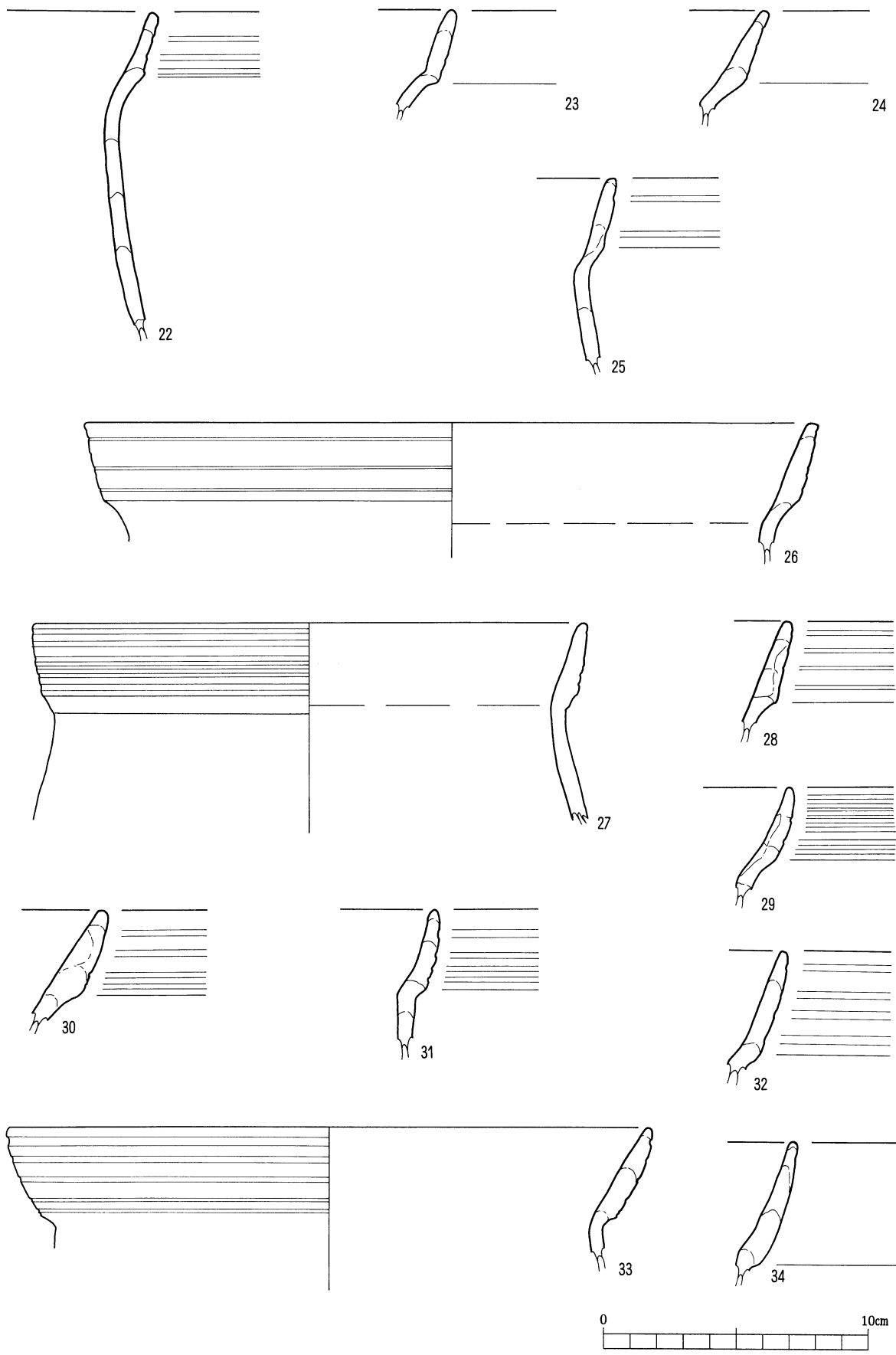
厚手ー1（254～257）のタイプは、底部の底面の中央部が若干上がり気味の器形で、上底気味の平底を呈する。これらの資料は、少々は見られたが図化に耐えるもののみのため少量である。厚手ー2（258～272）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦を呈する平底で、張り出しがみられた底部の一群である。厚手ー3（274～298）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦な平底を呈する器形で、張り出しが若干みられた底部の一群である。厚手ー4（299～307）は、底部の底面の中央部が平坦を呈する平底の器形で、強い張り出しがみられた底部の一群である。厚手ー5（308～328）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦を呈する平底の器形で、厚みを増した張りの強い底部破片の一群である。薄手ー1（329～351）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦を呈する平底での器形で、張り出しがなく厚みのない底部の一群である。薄手ー2（352～360）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦を呈する平底で、張り出しがなく、厚味がみられた底部破片の一群である。薄手ー3（362～372）のタイプは、底部の底面の中央部が平坦な平底を呈する器形で、張り出しがあり、厚味もみられた底部の一群である。



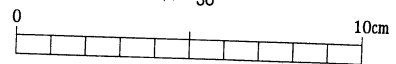
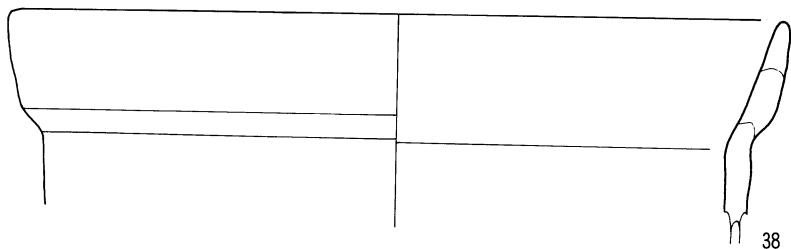
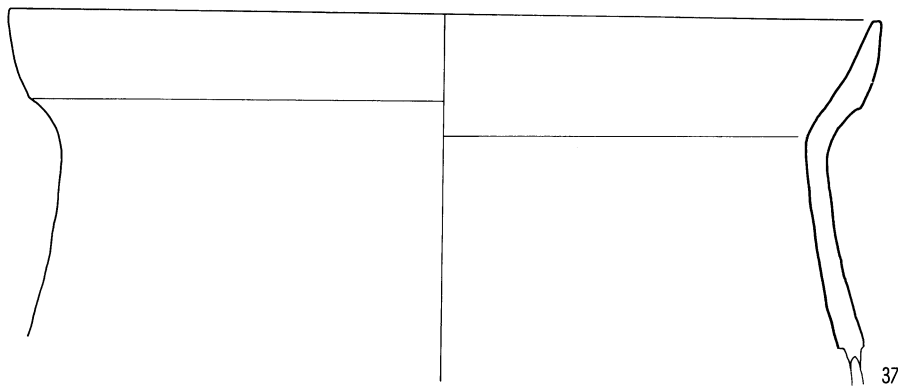
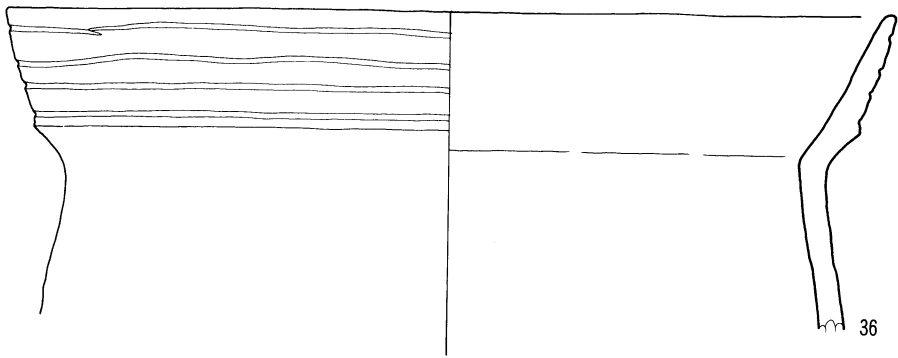
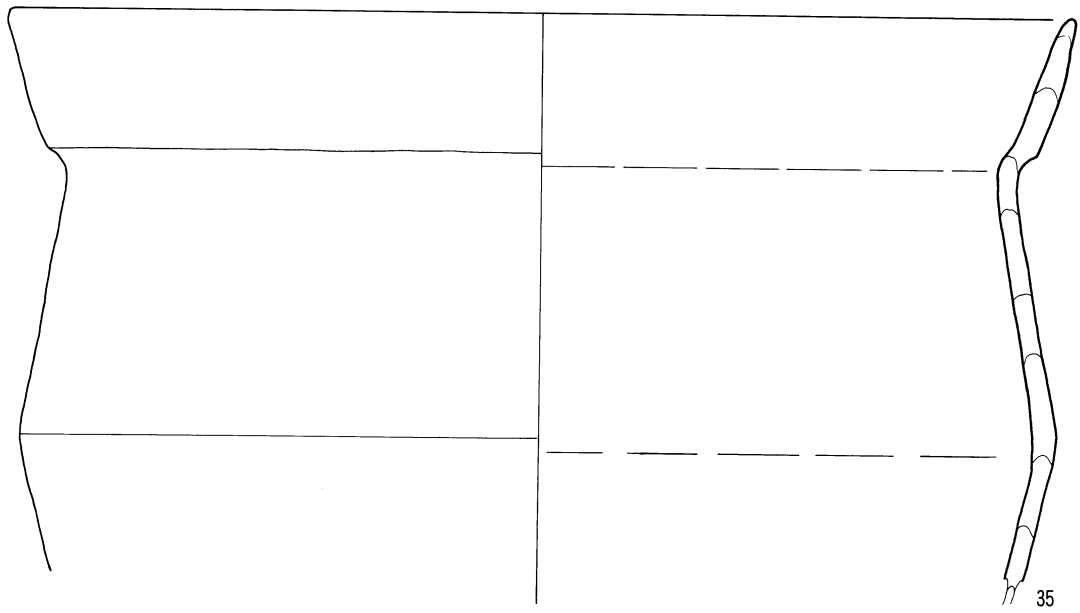
第8图 冲田岩戸遺跡遺物実測図(1)



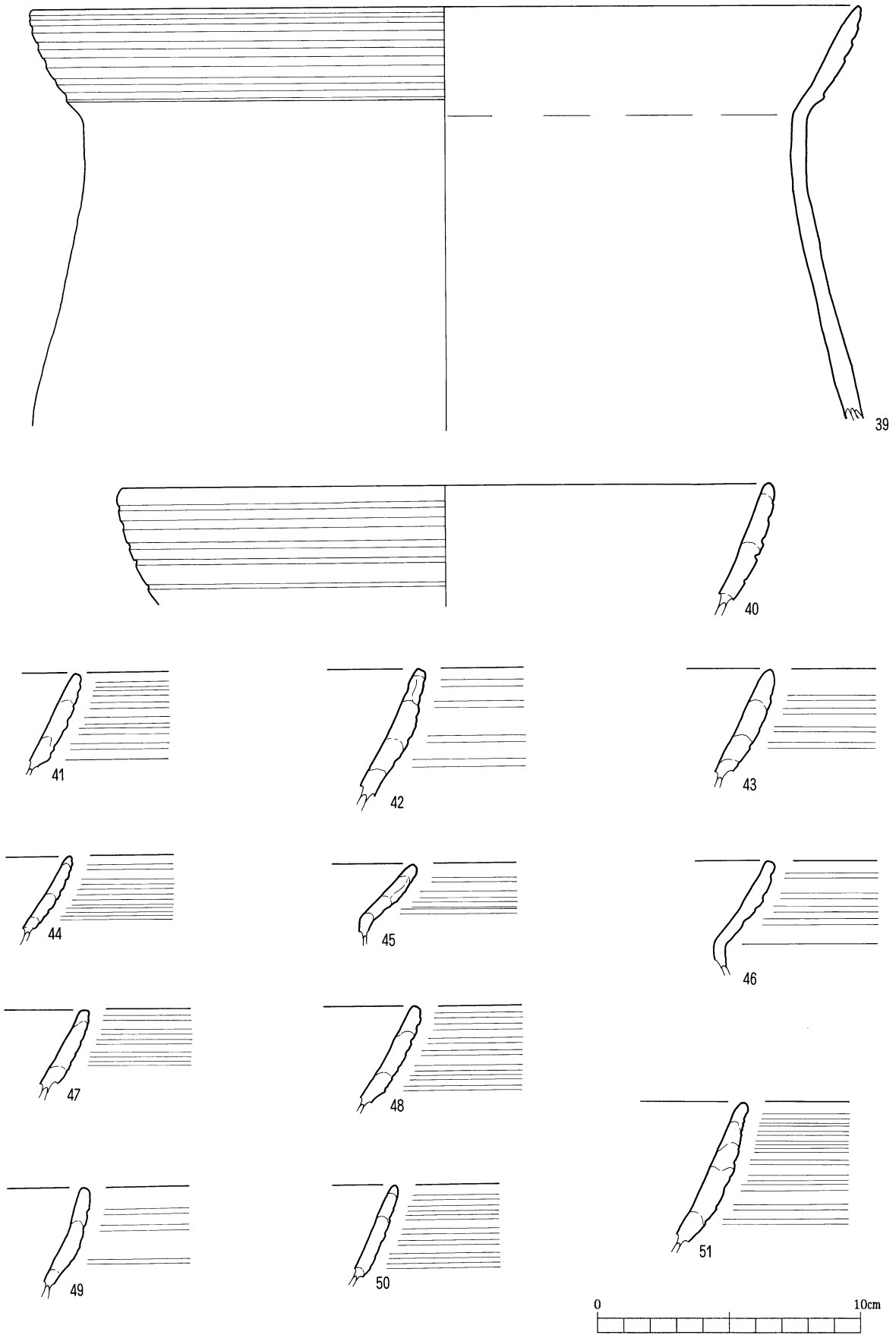
第9图 冲田岩戸遺跡遺物実測図(2)



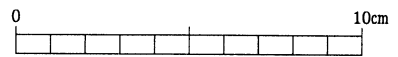
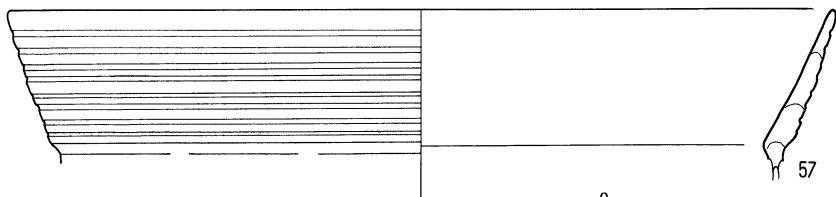
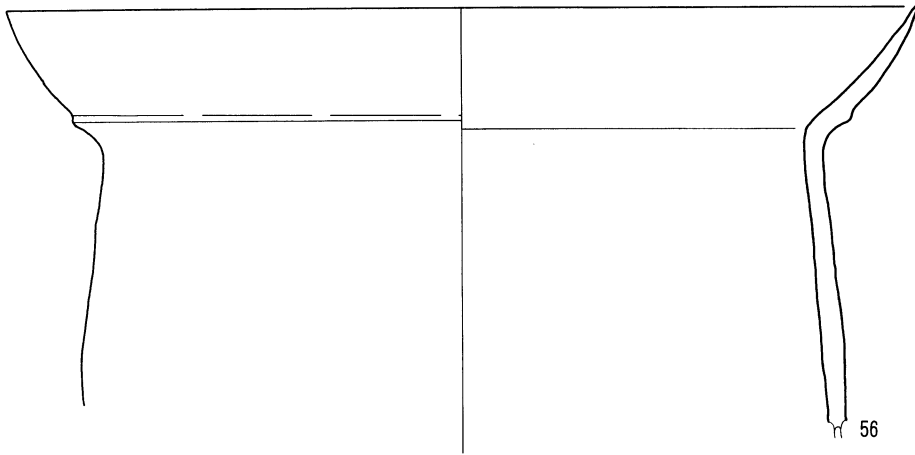
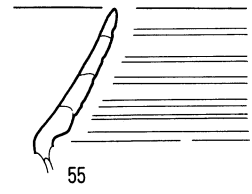
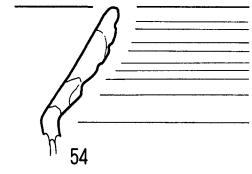
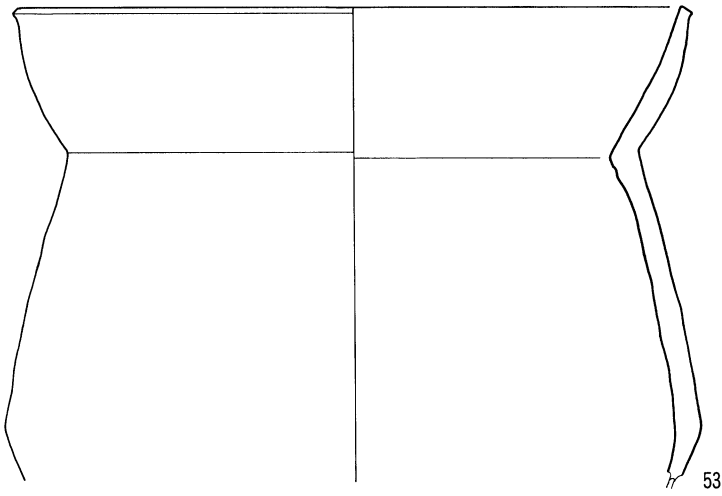
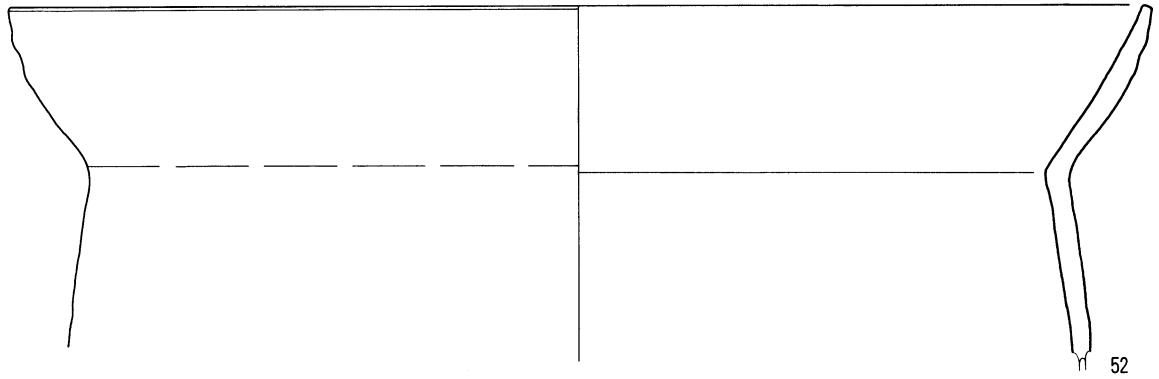
第10図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(3)



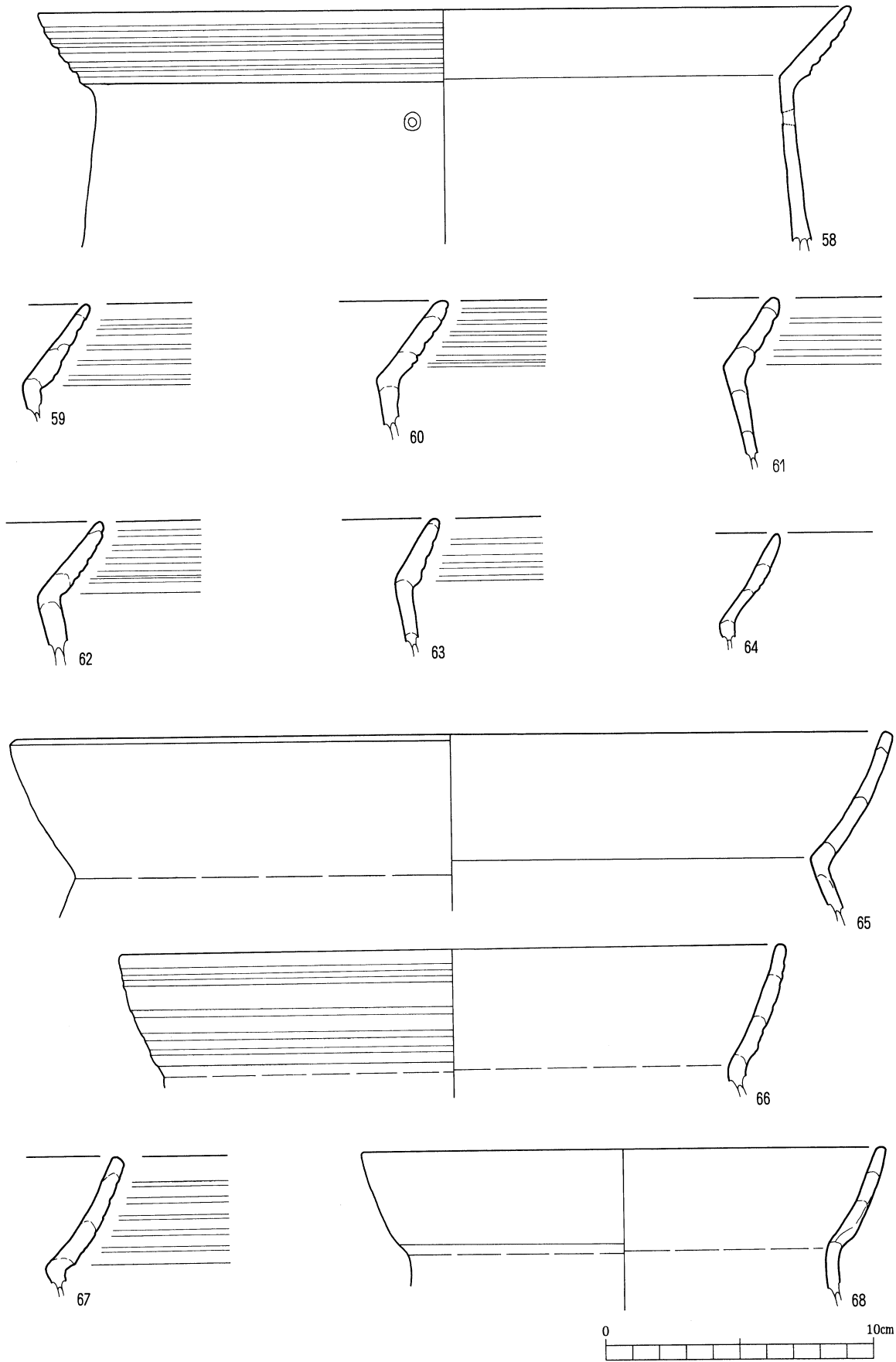
第11図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(4)



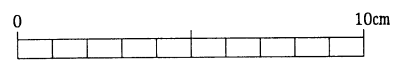
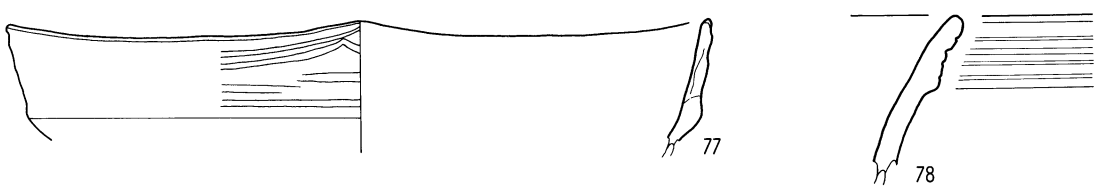
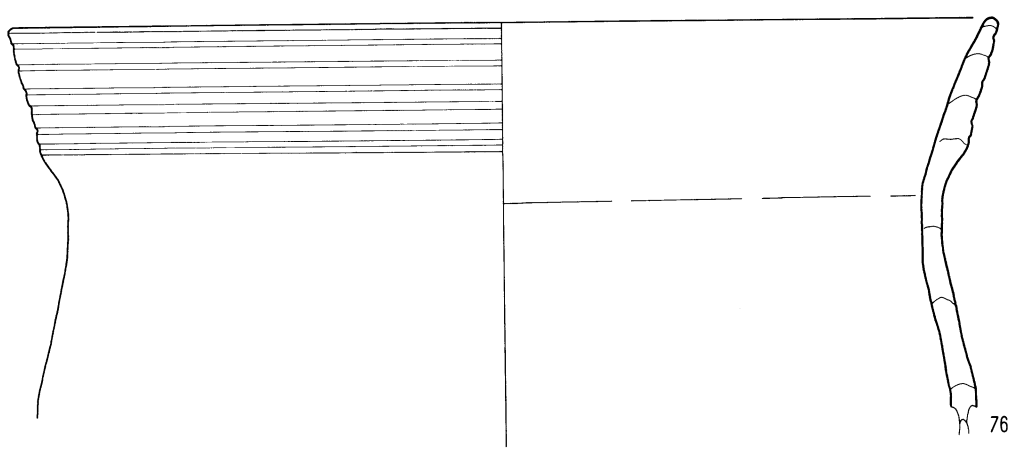
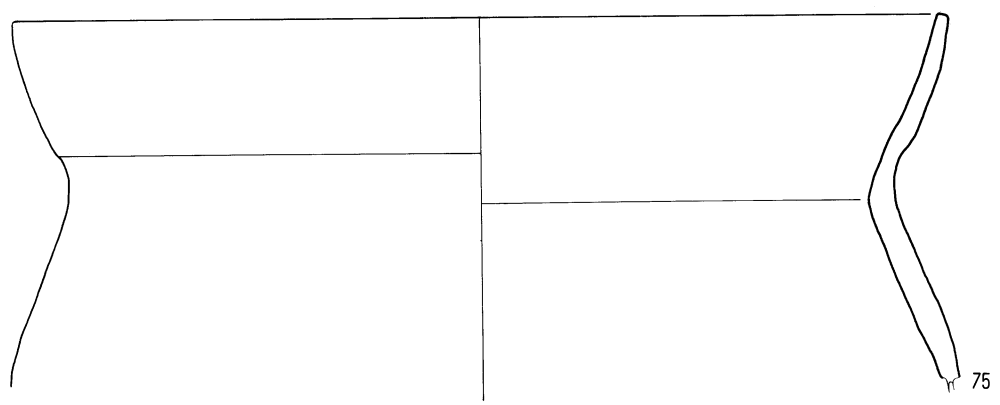
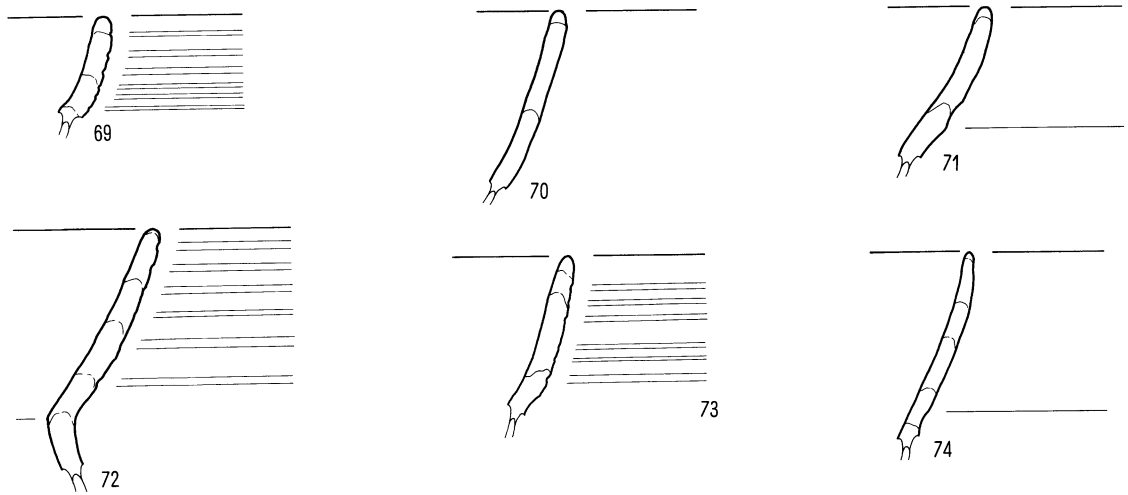
第12図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(5)



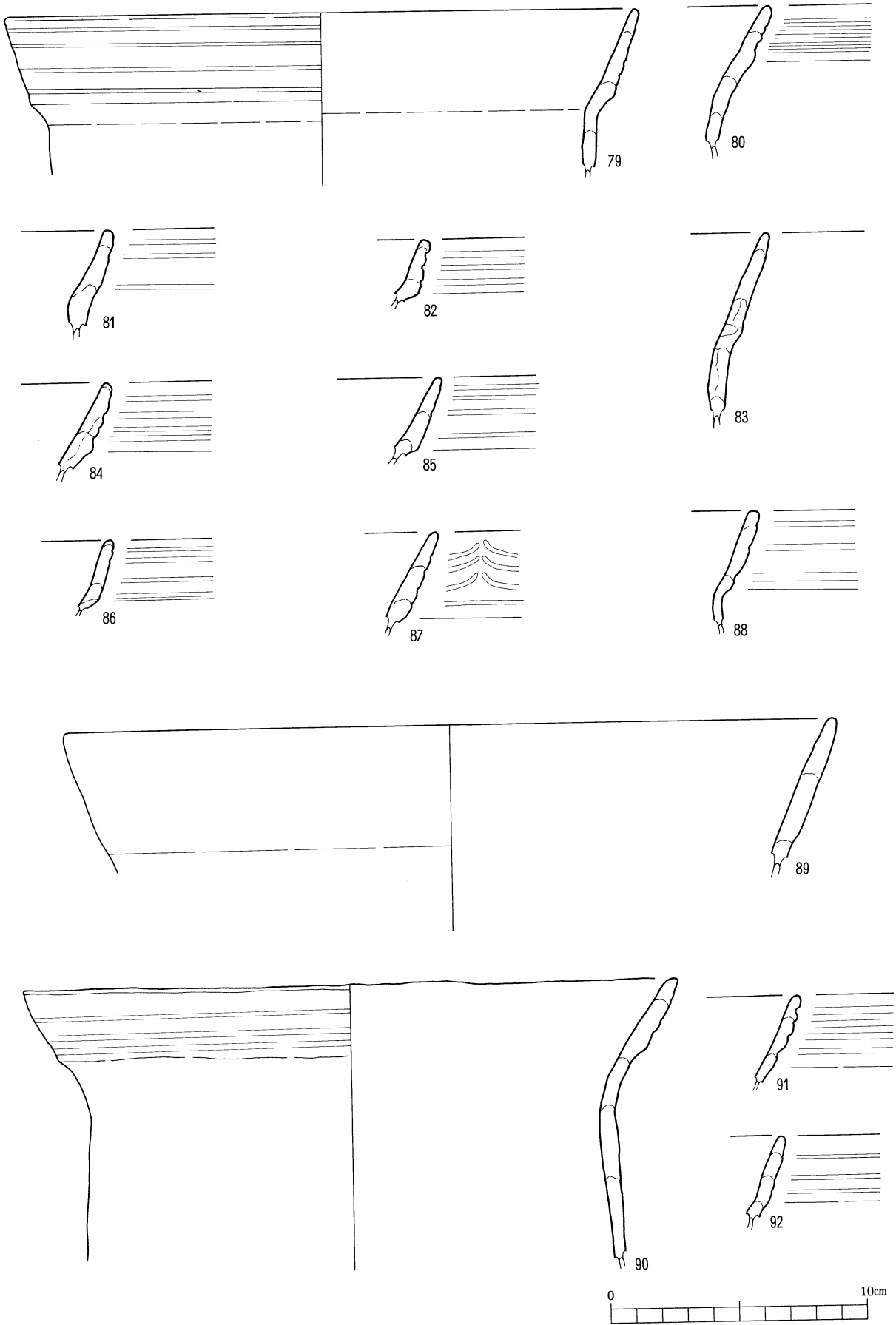
第13図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(6)



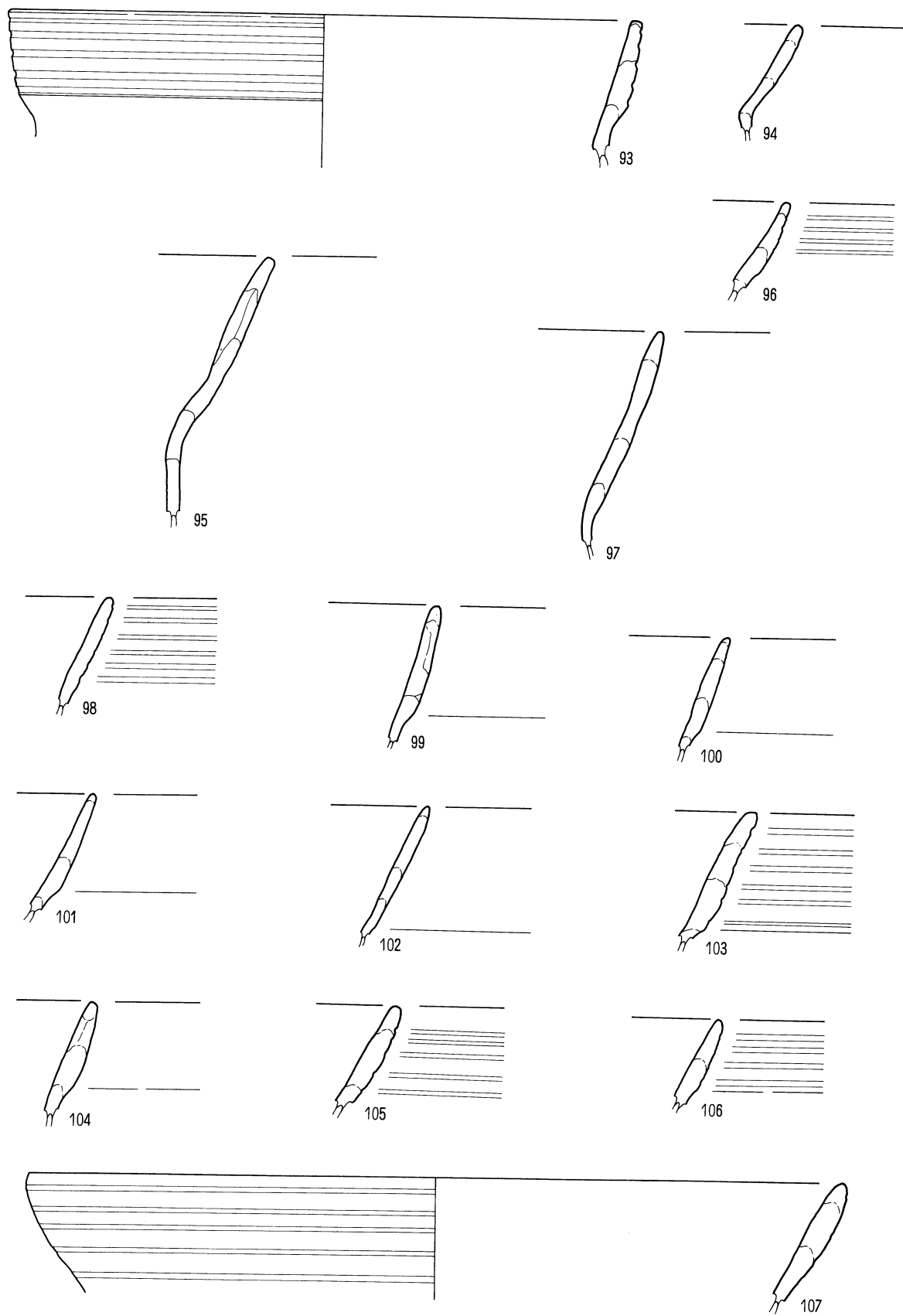
第14図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(7)



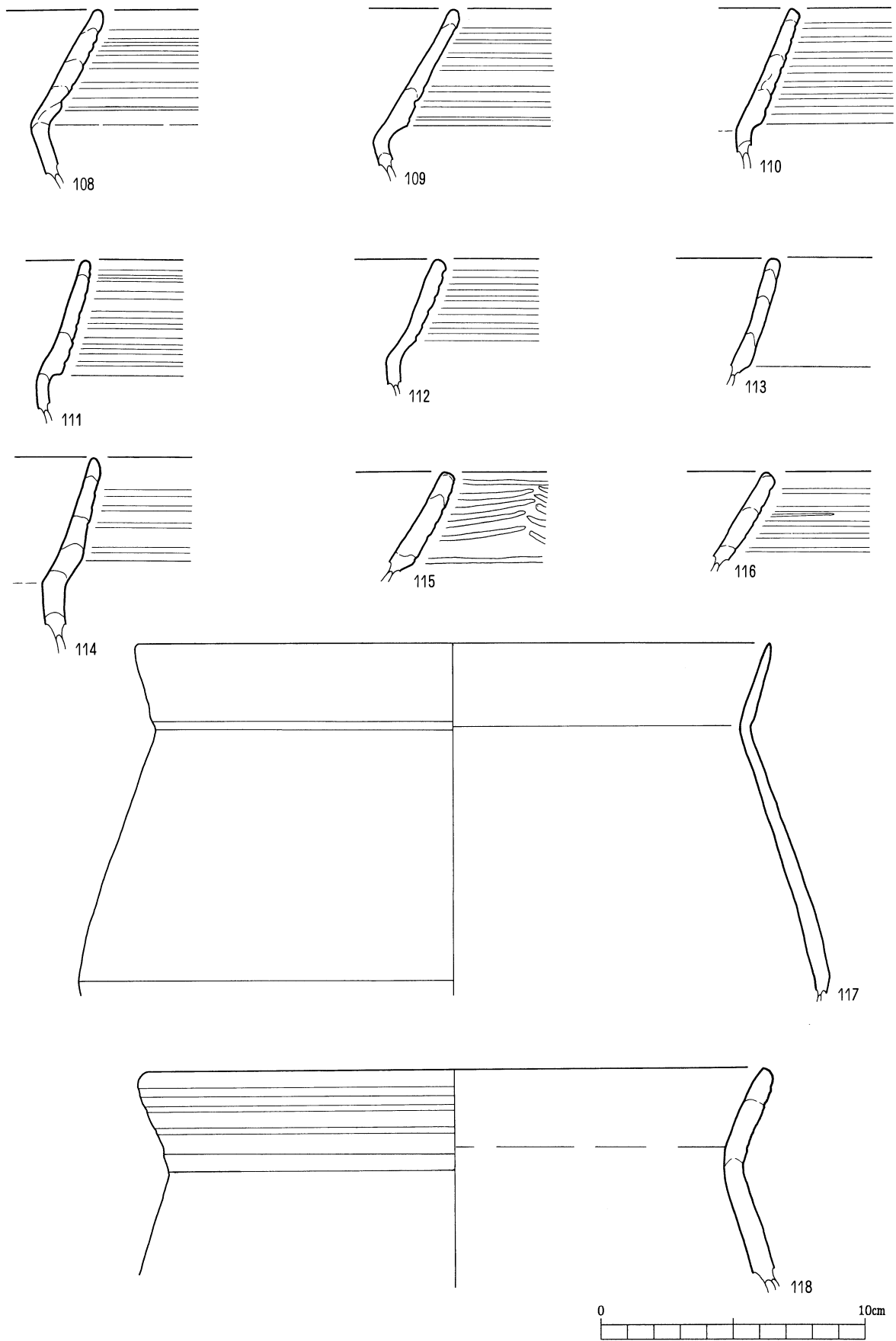
第15図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(8)



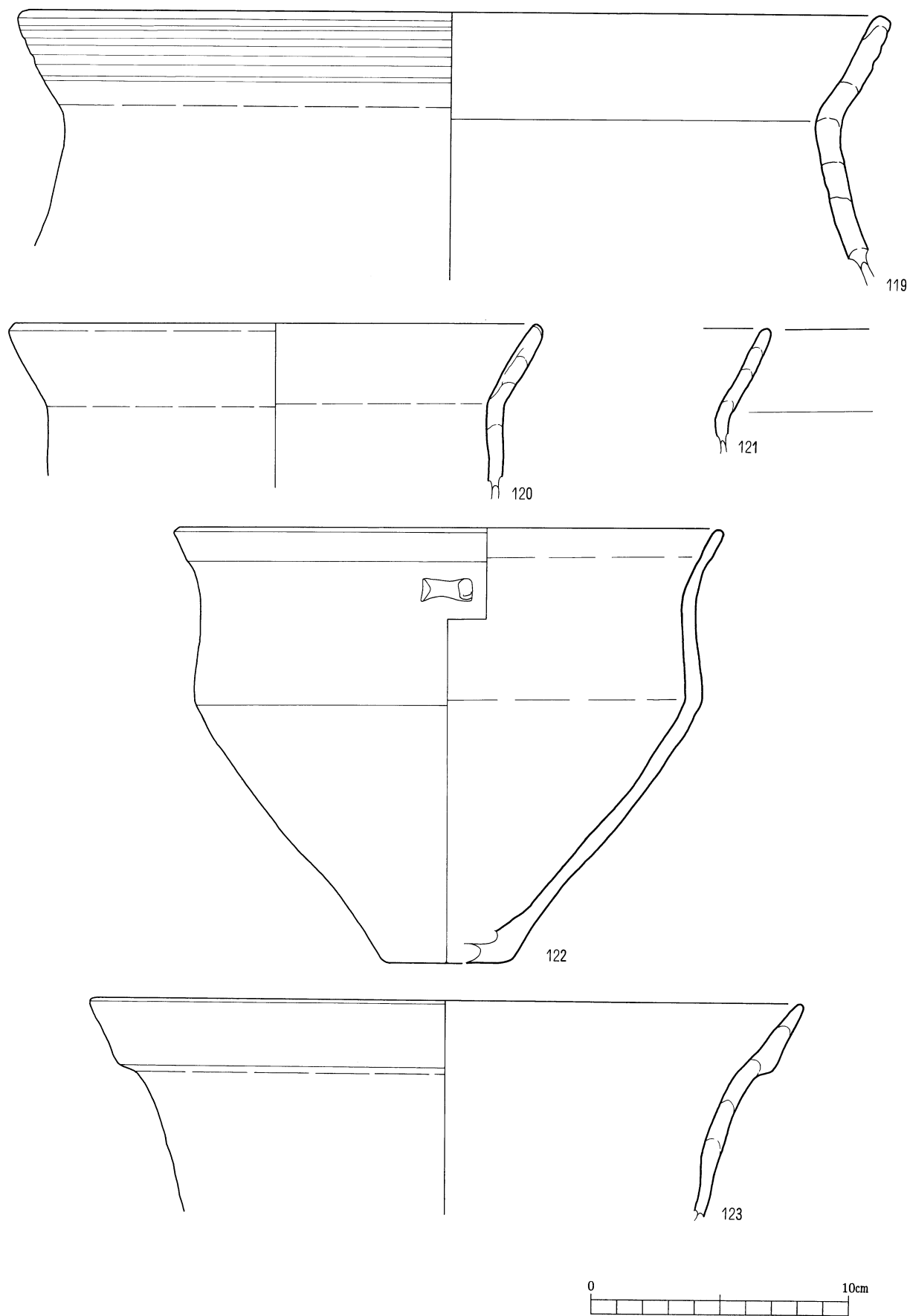
第16図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(9)



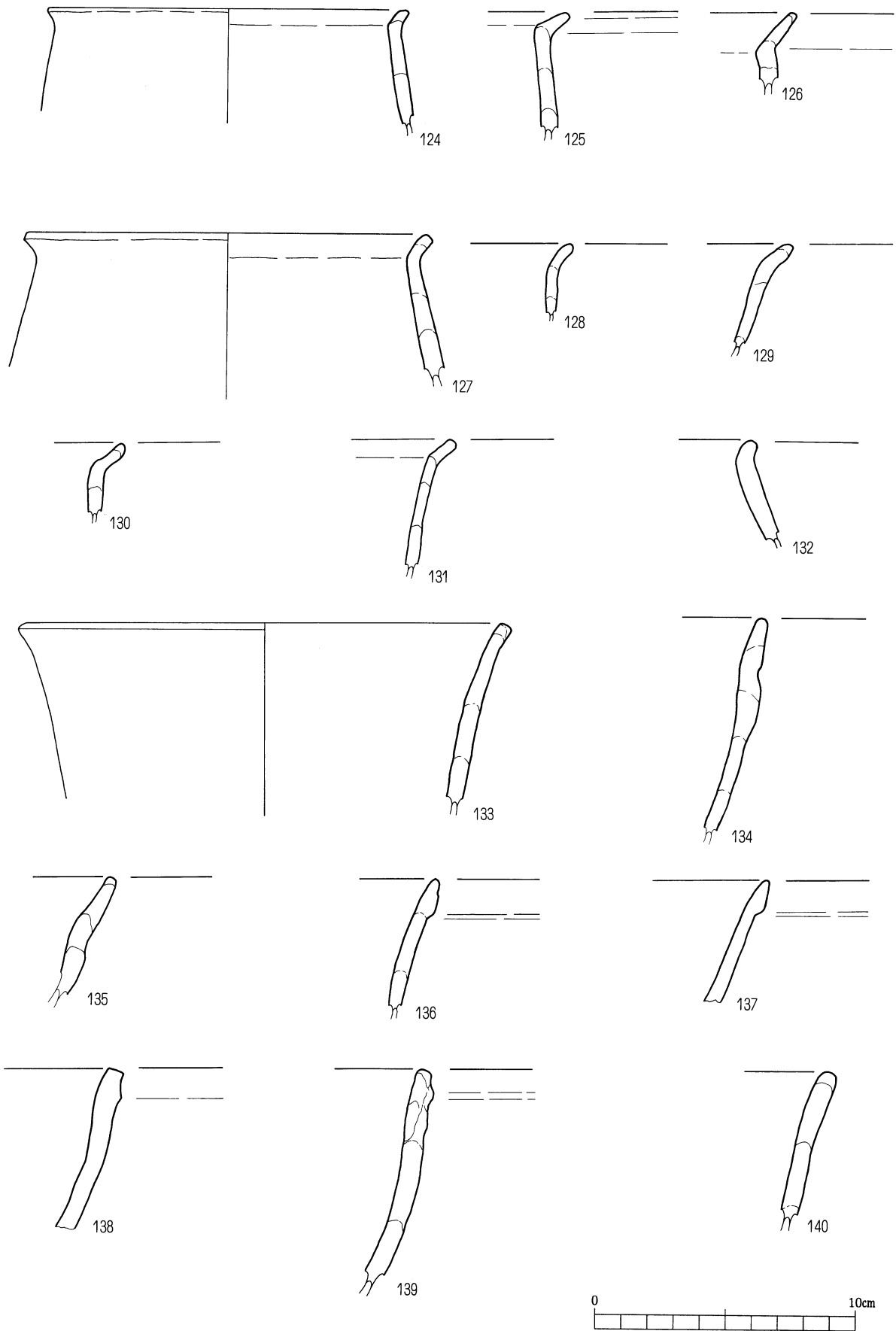
第17図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(10)



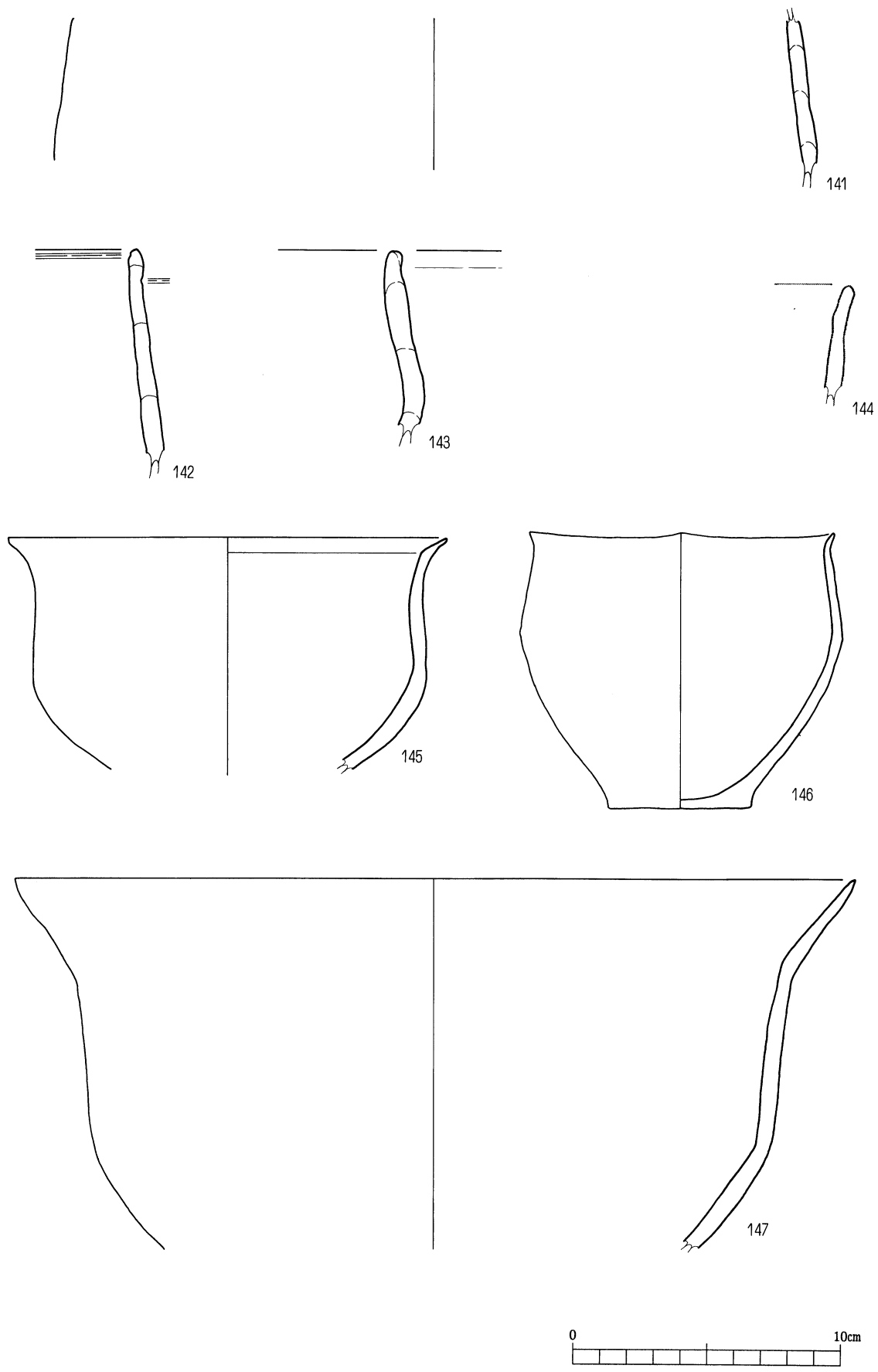
第18図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(11)



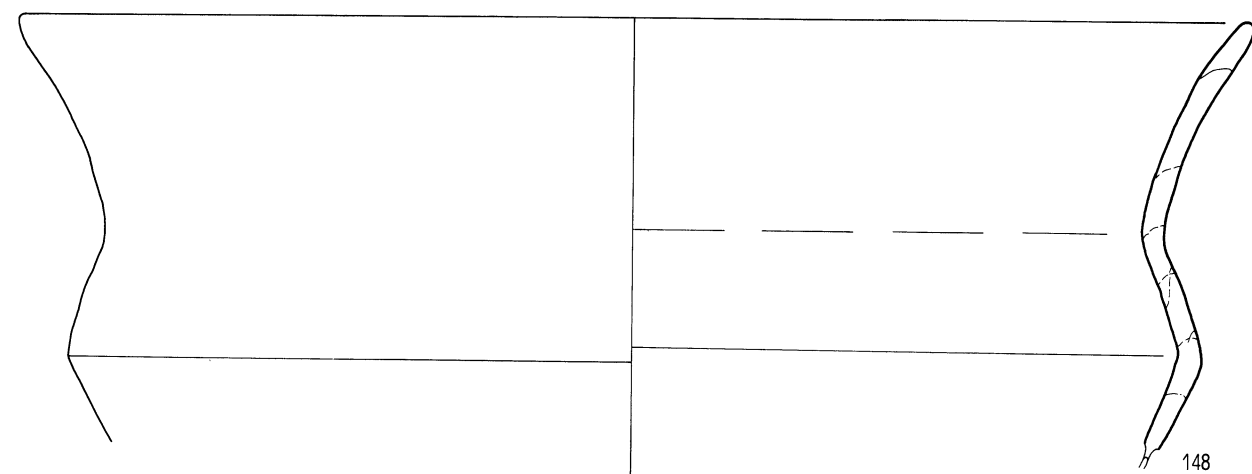
第19図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(12)



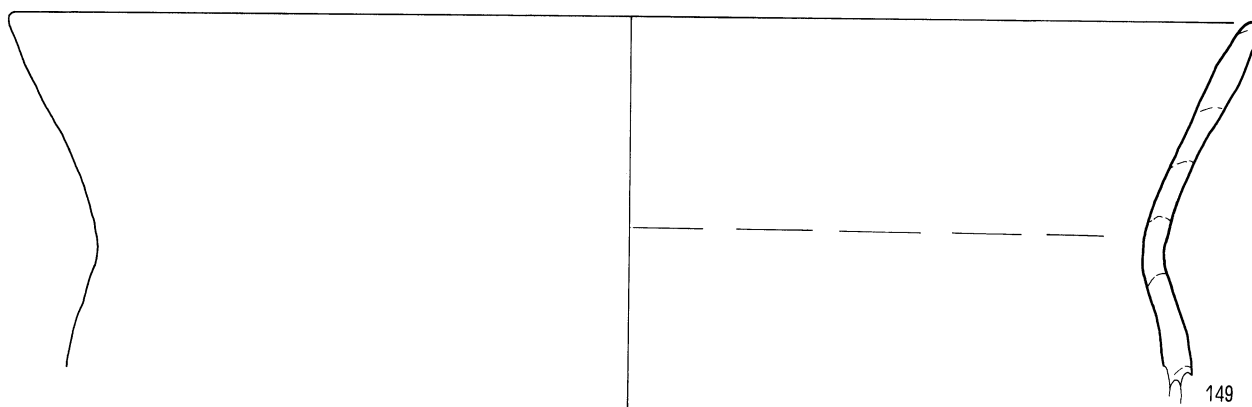
第20図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(13)



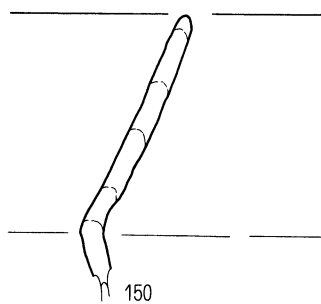
第21図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(14)



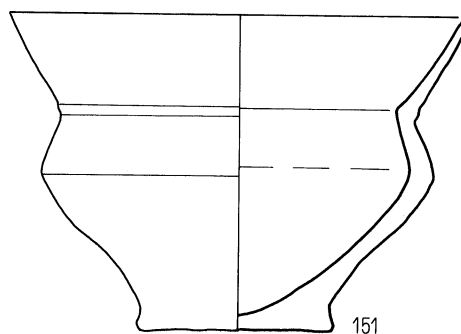
148



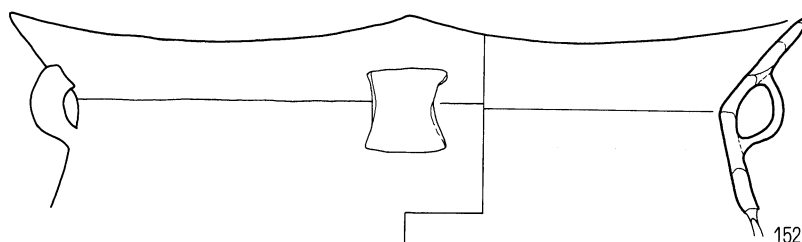
149



150



151



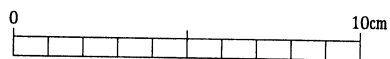
152



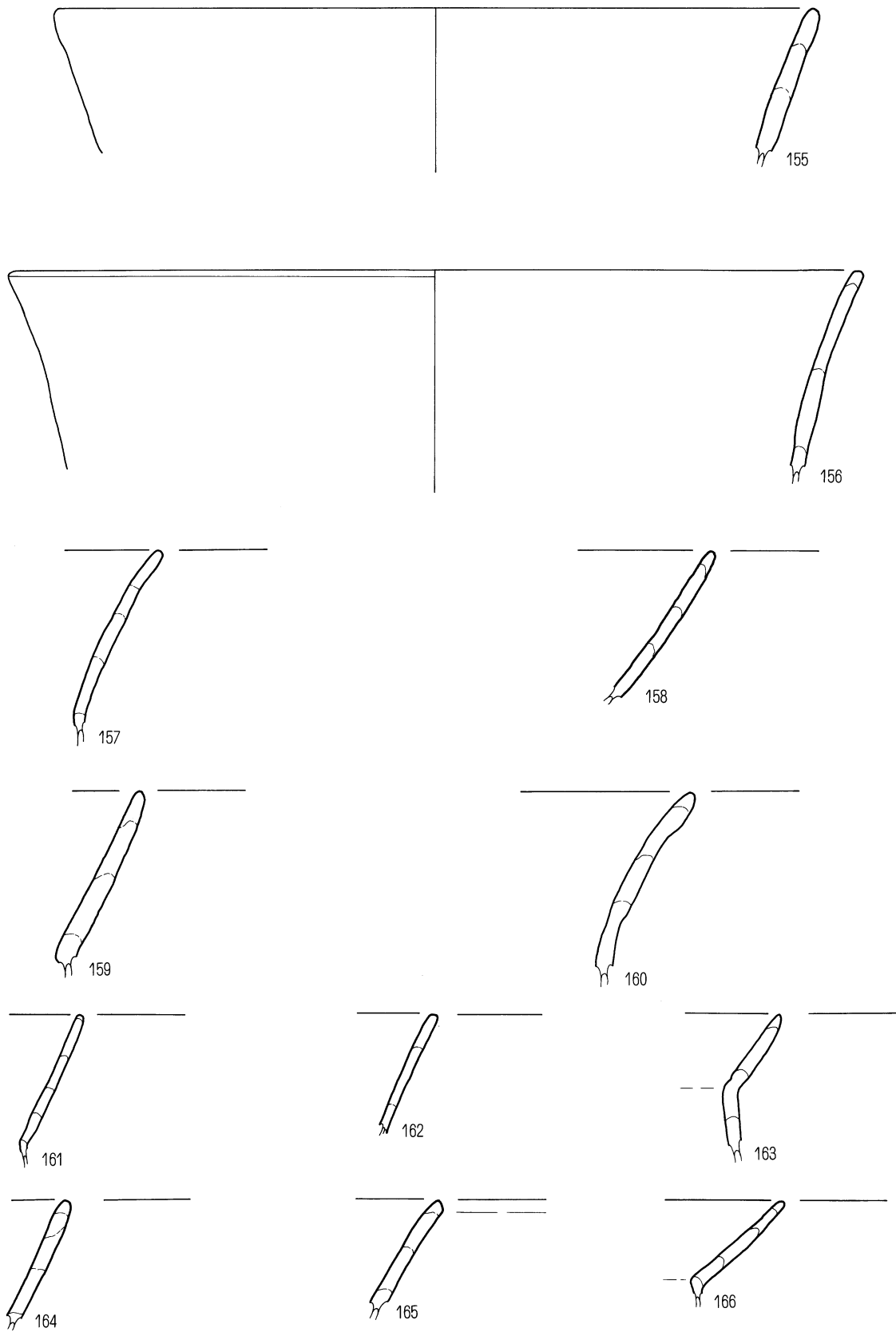
153



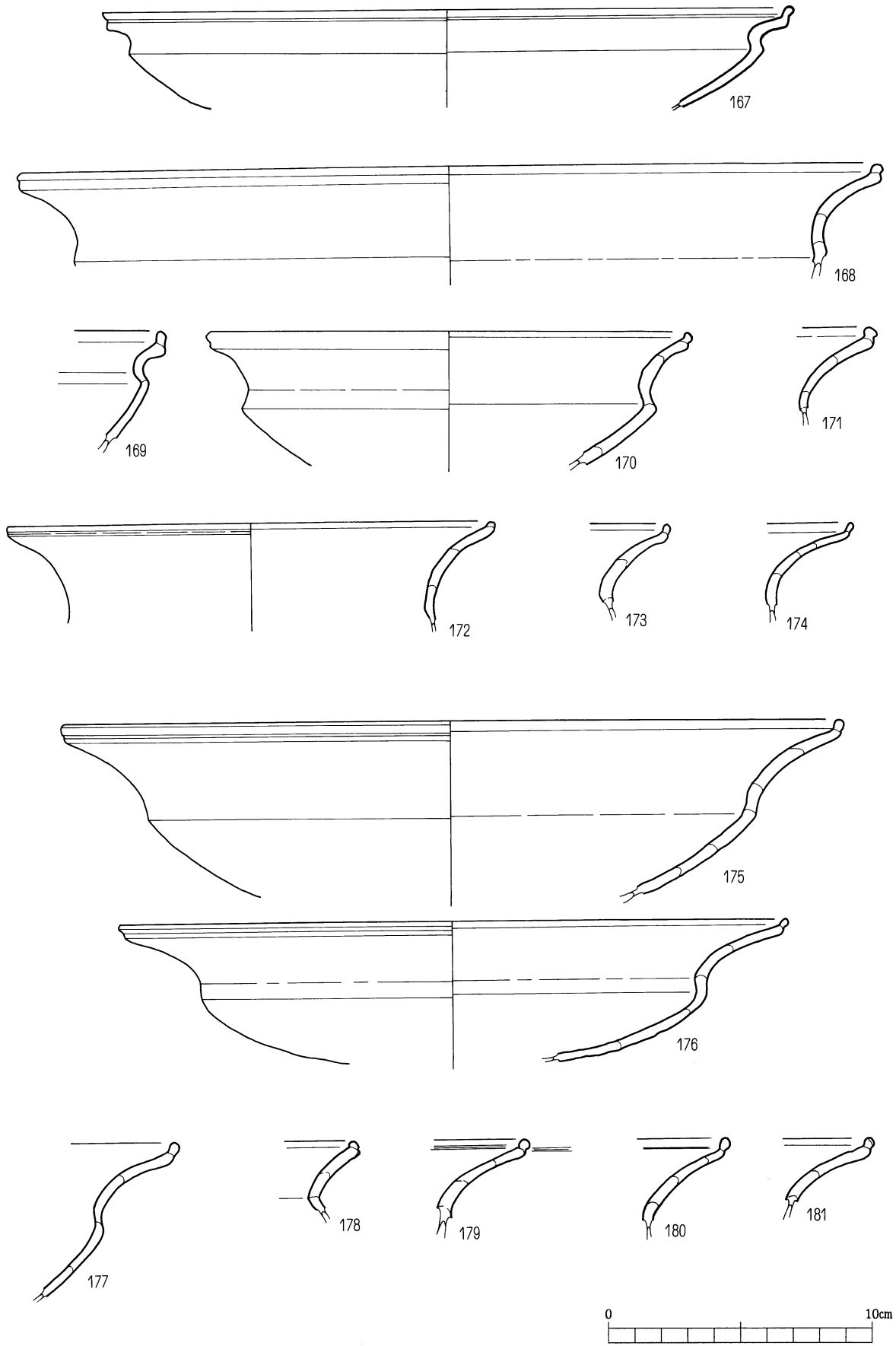
154



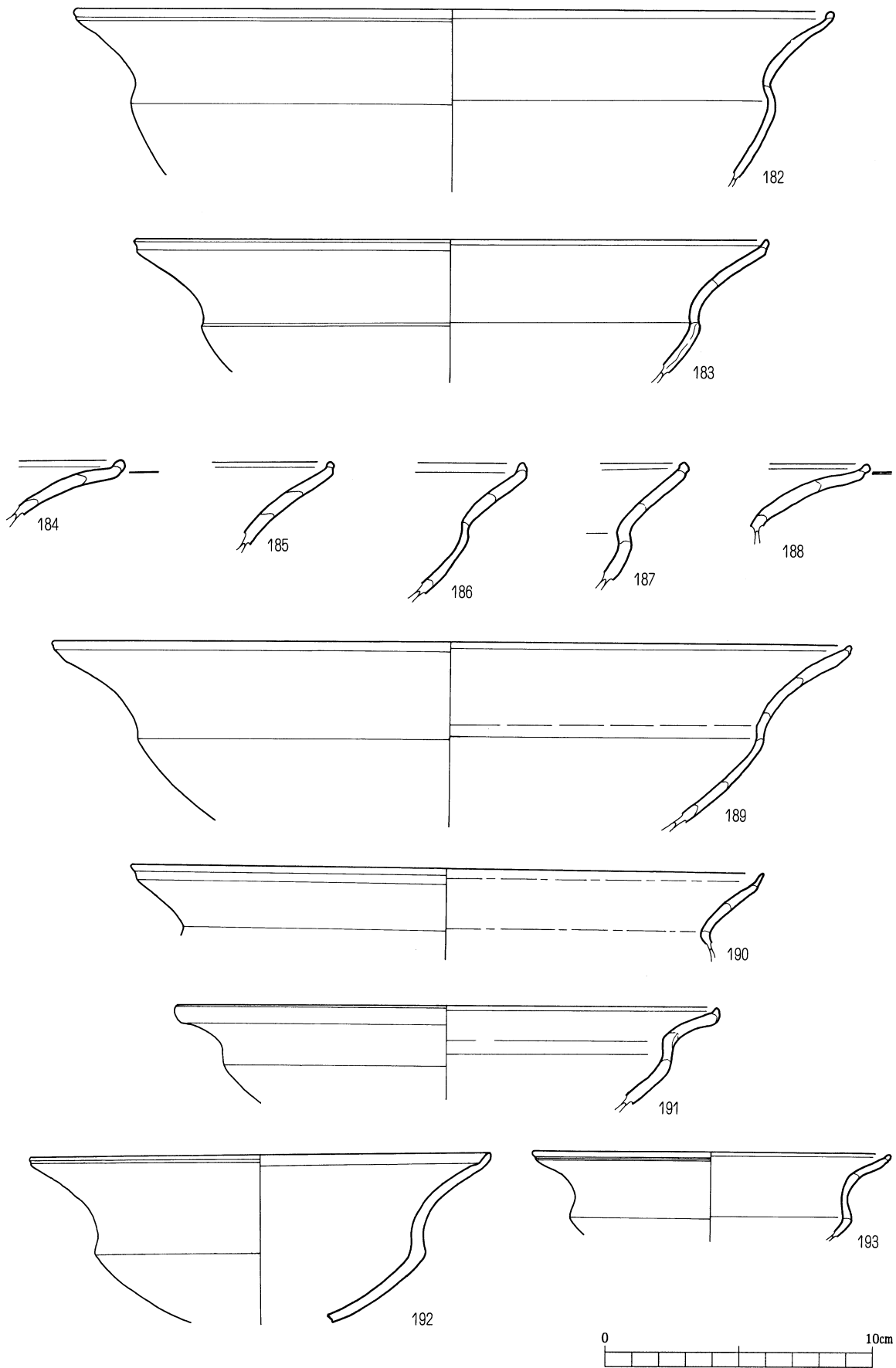
第22図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(15)



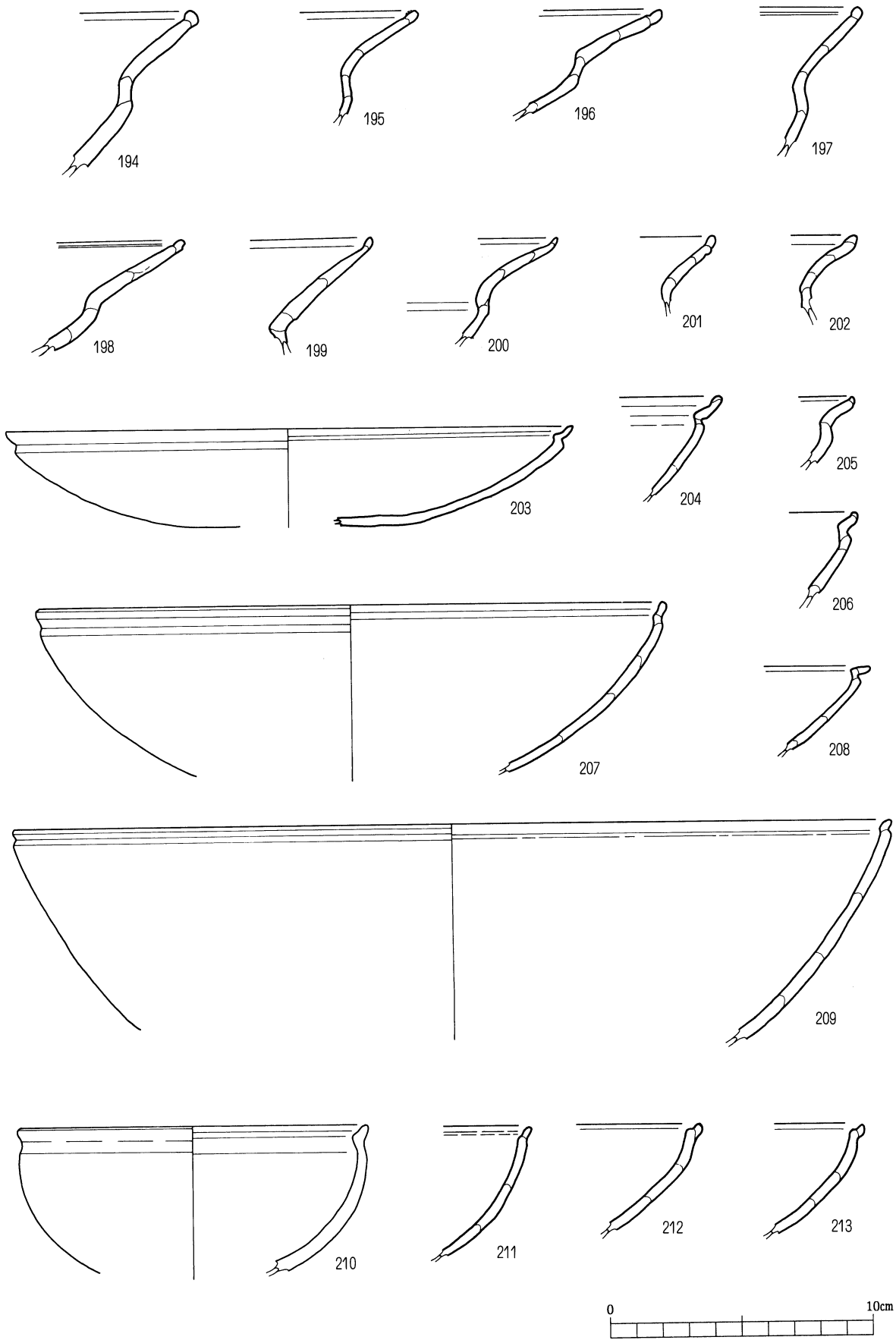
第23図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(16)



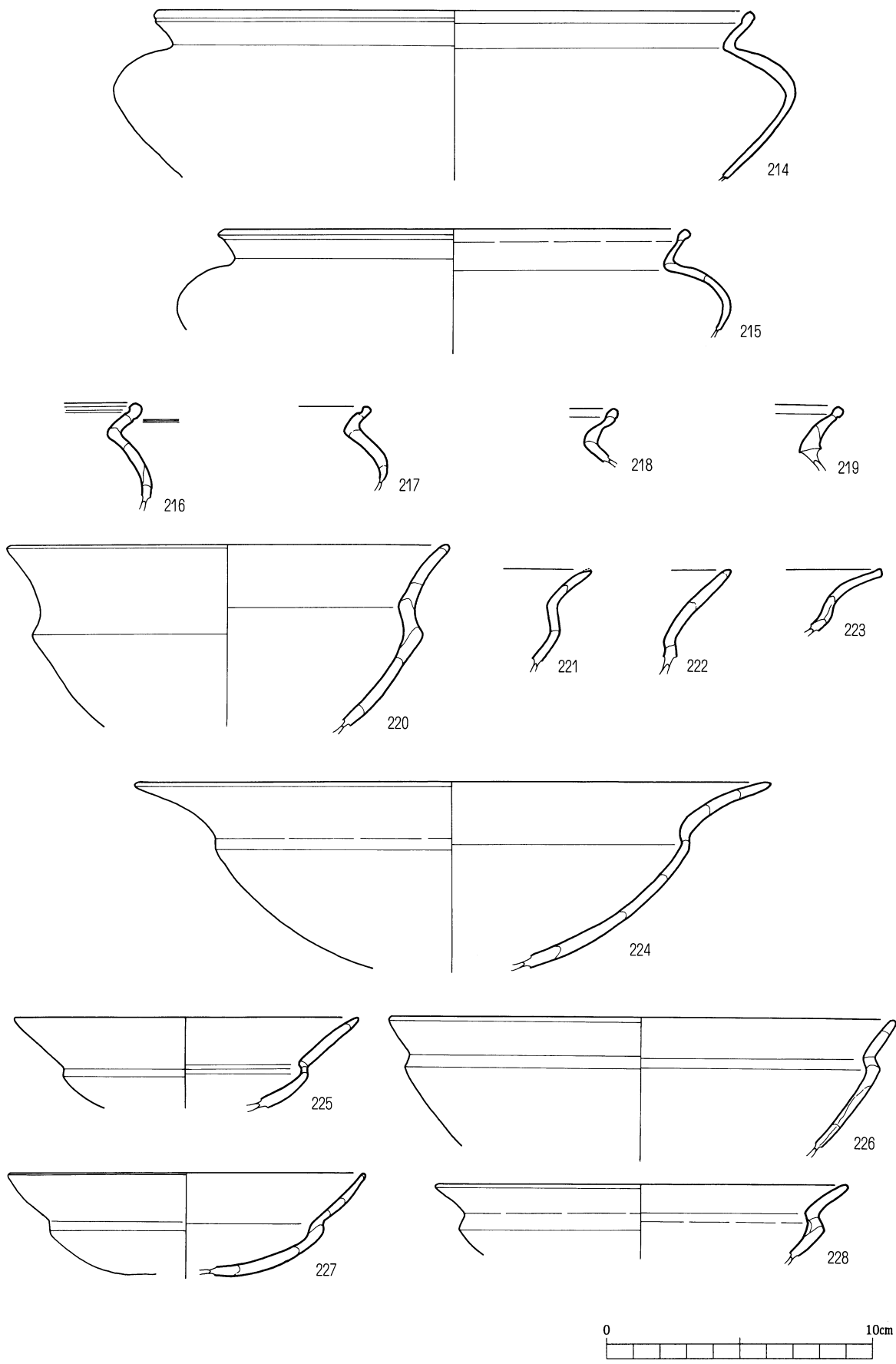
第24図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(17)



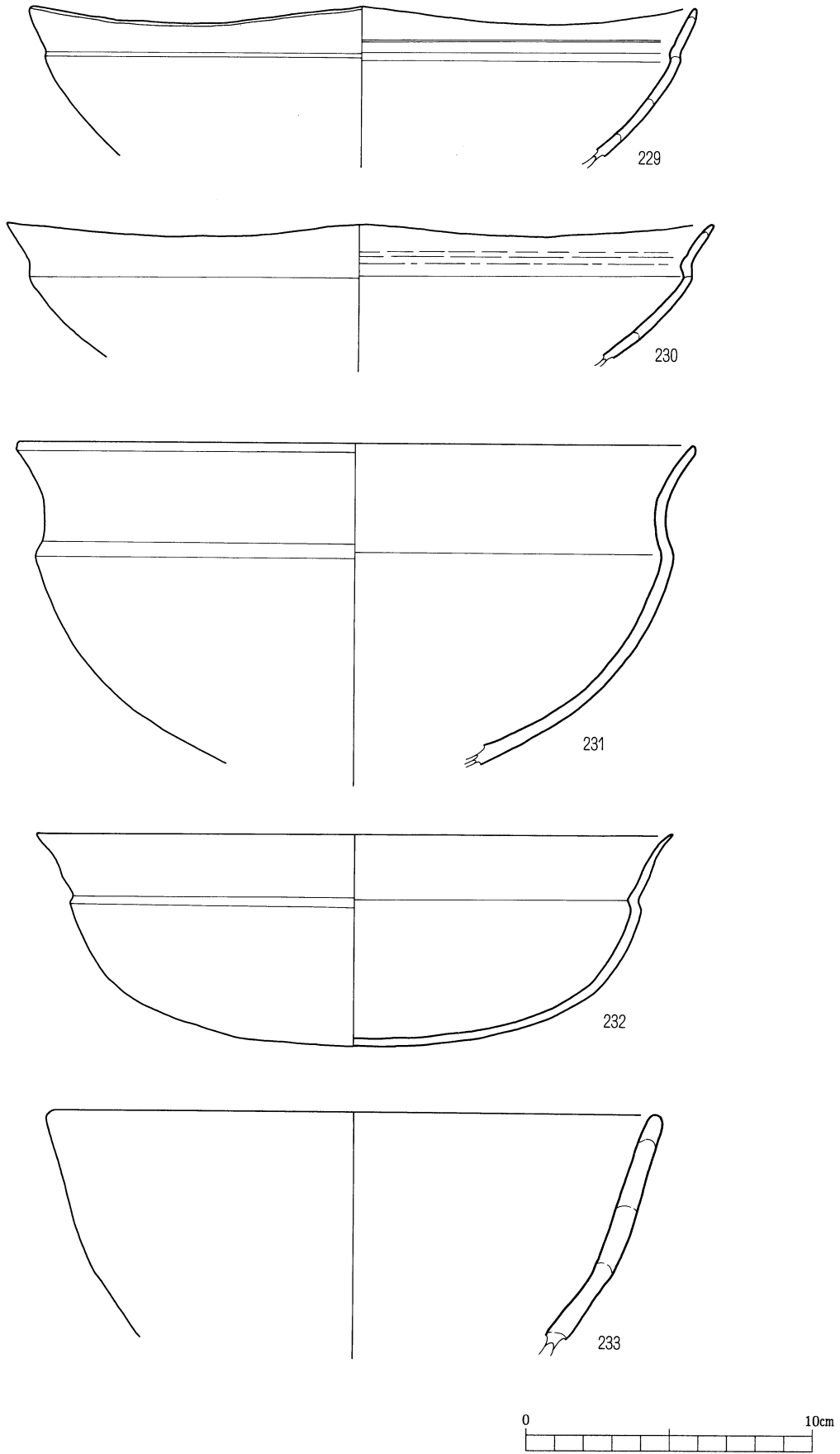
第25図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(18)



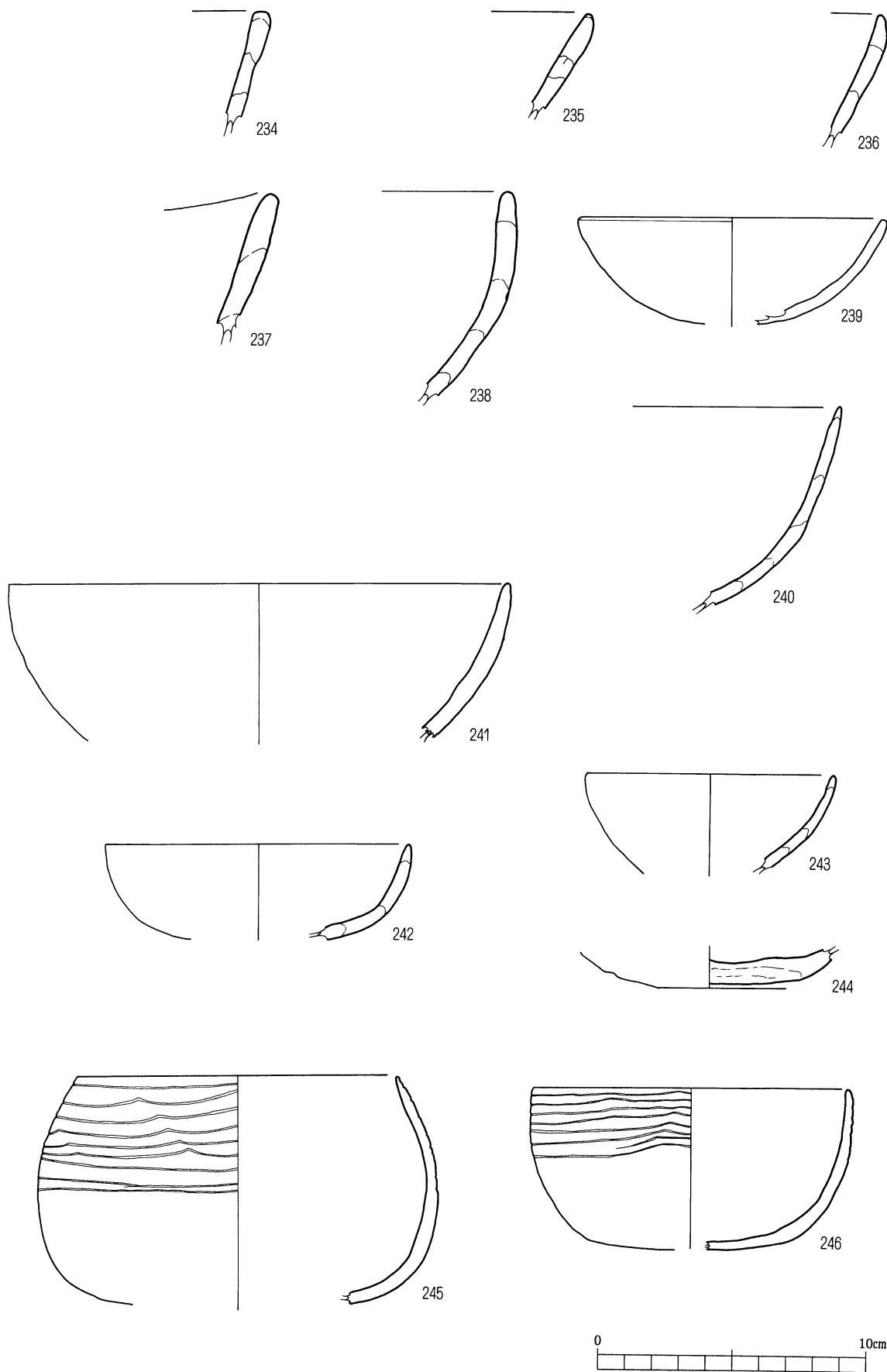
第26図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(19)



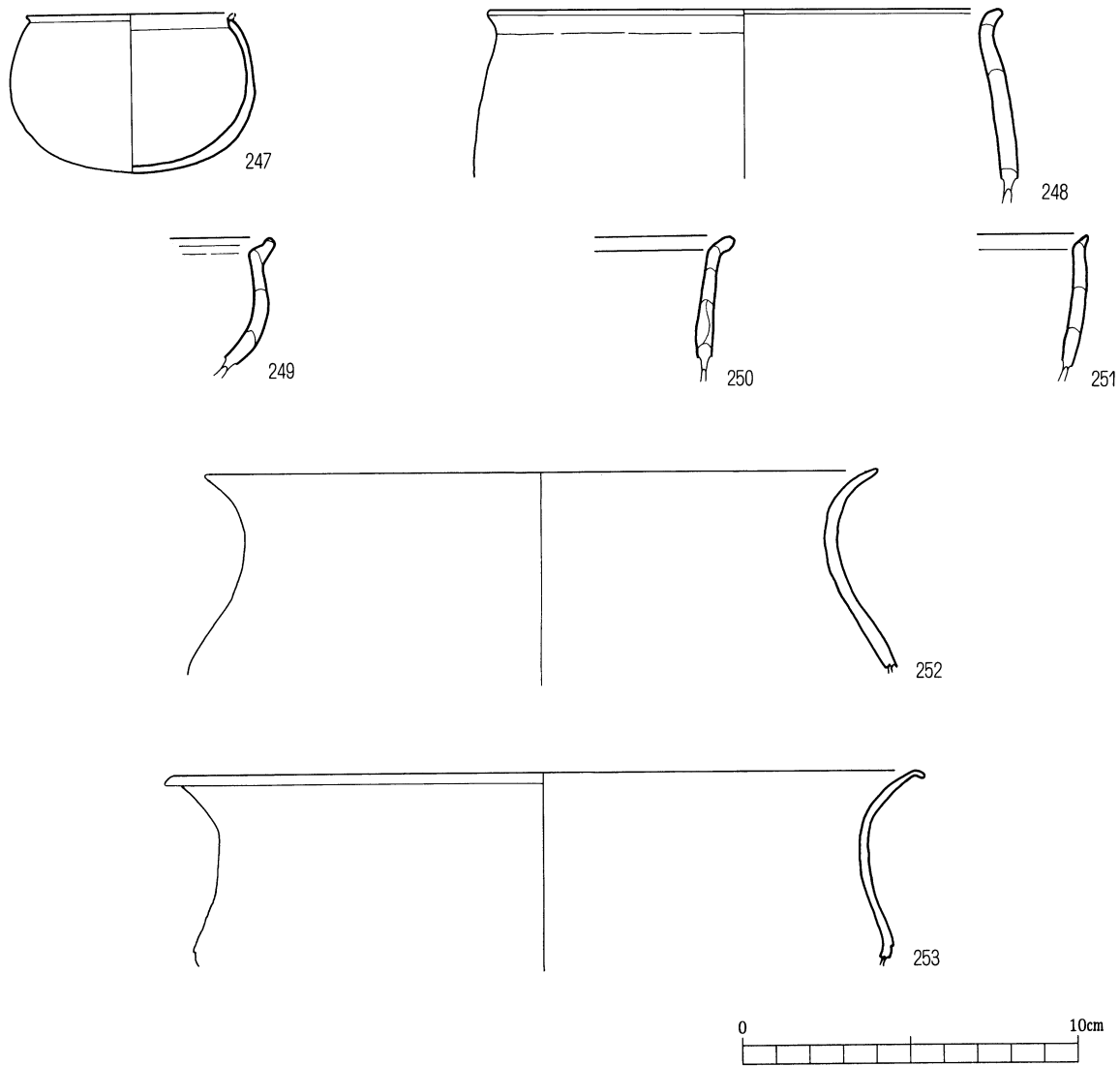
第27図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(20)



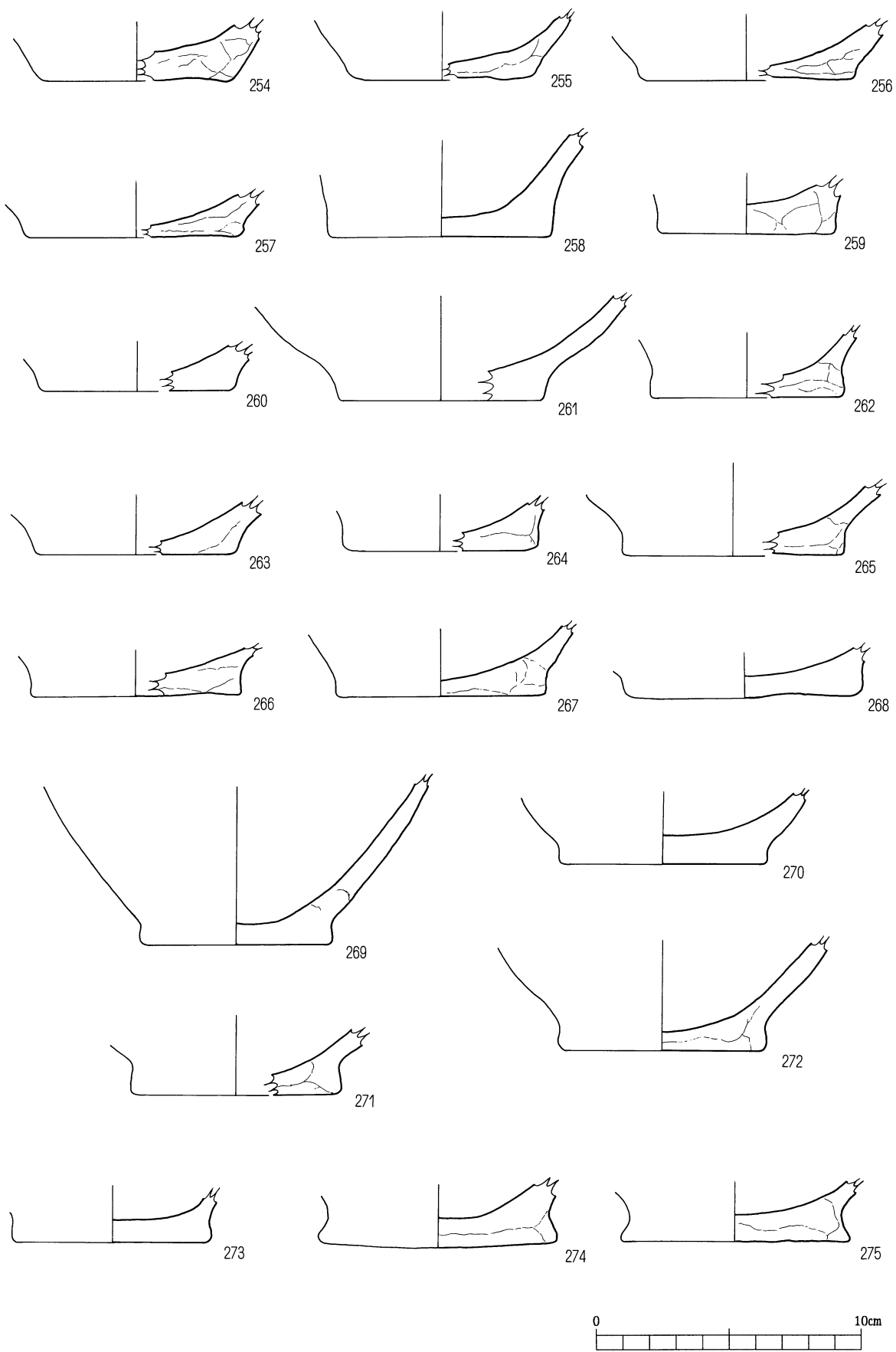
第28図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(21)



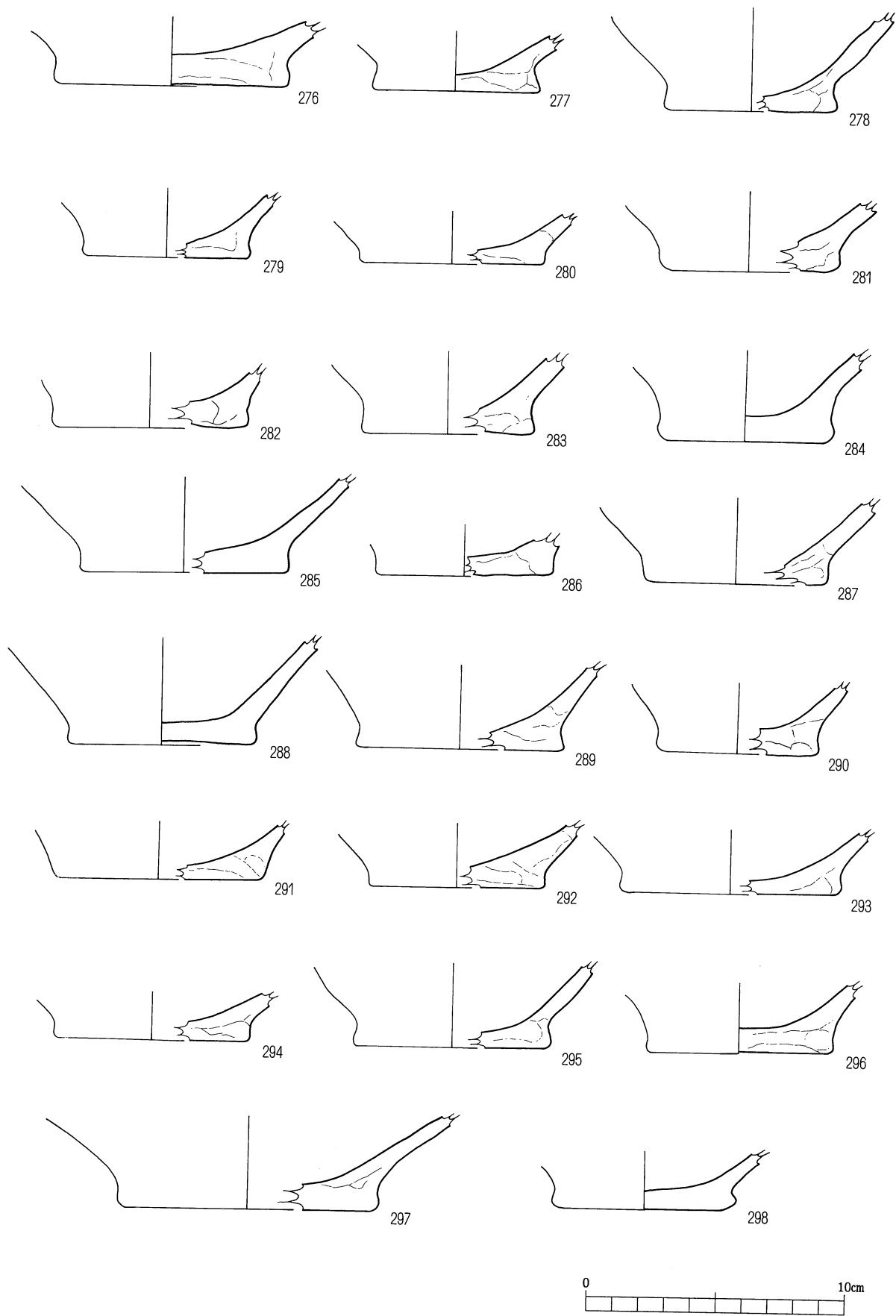
第29図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(22)



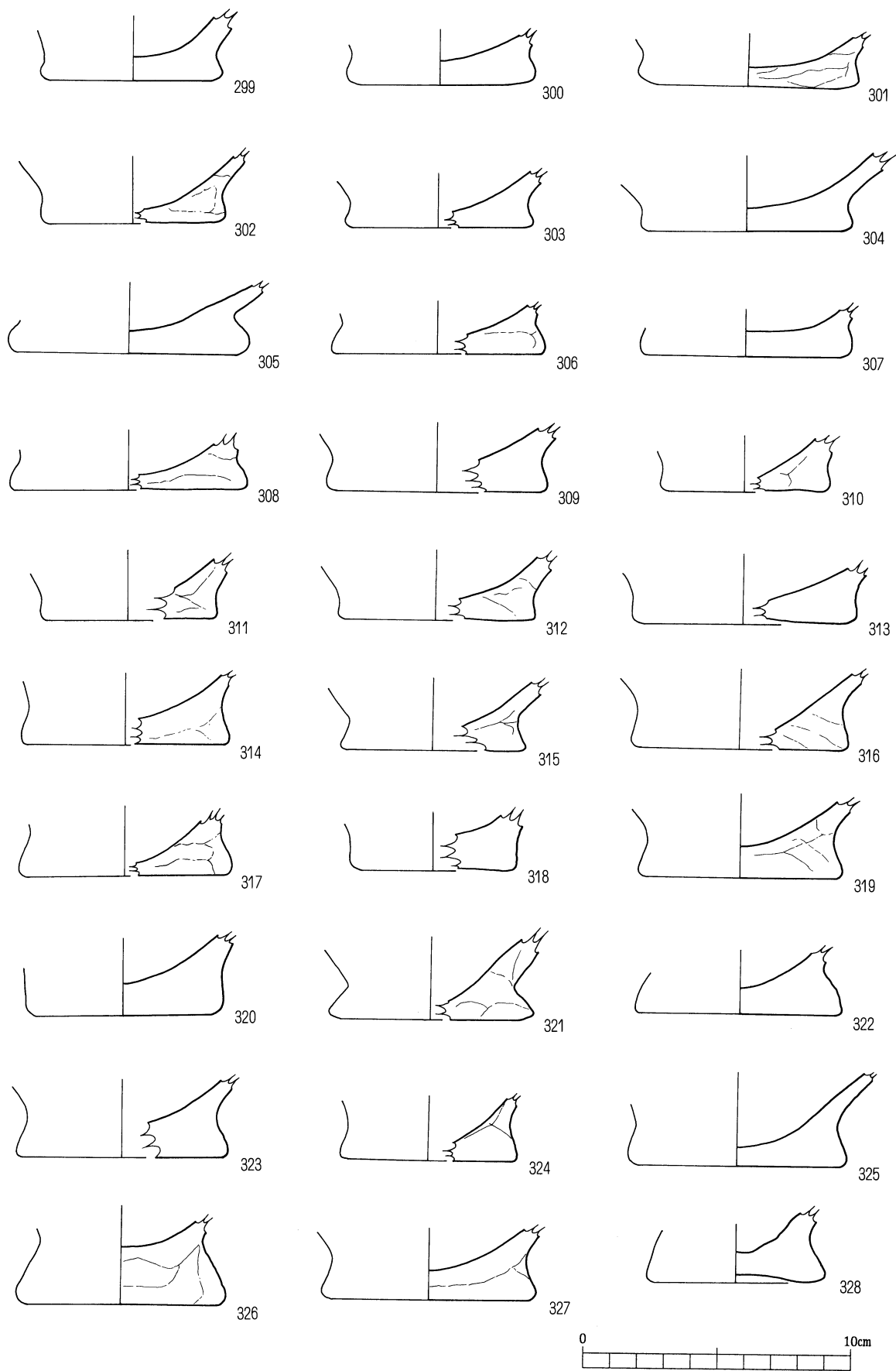
第30図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(23)



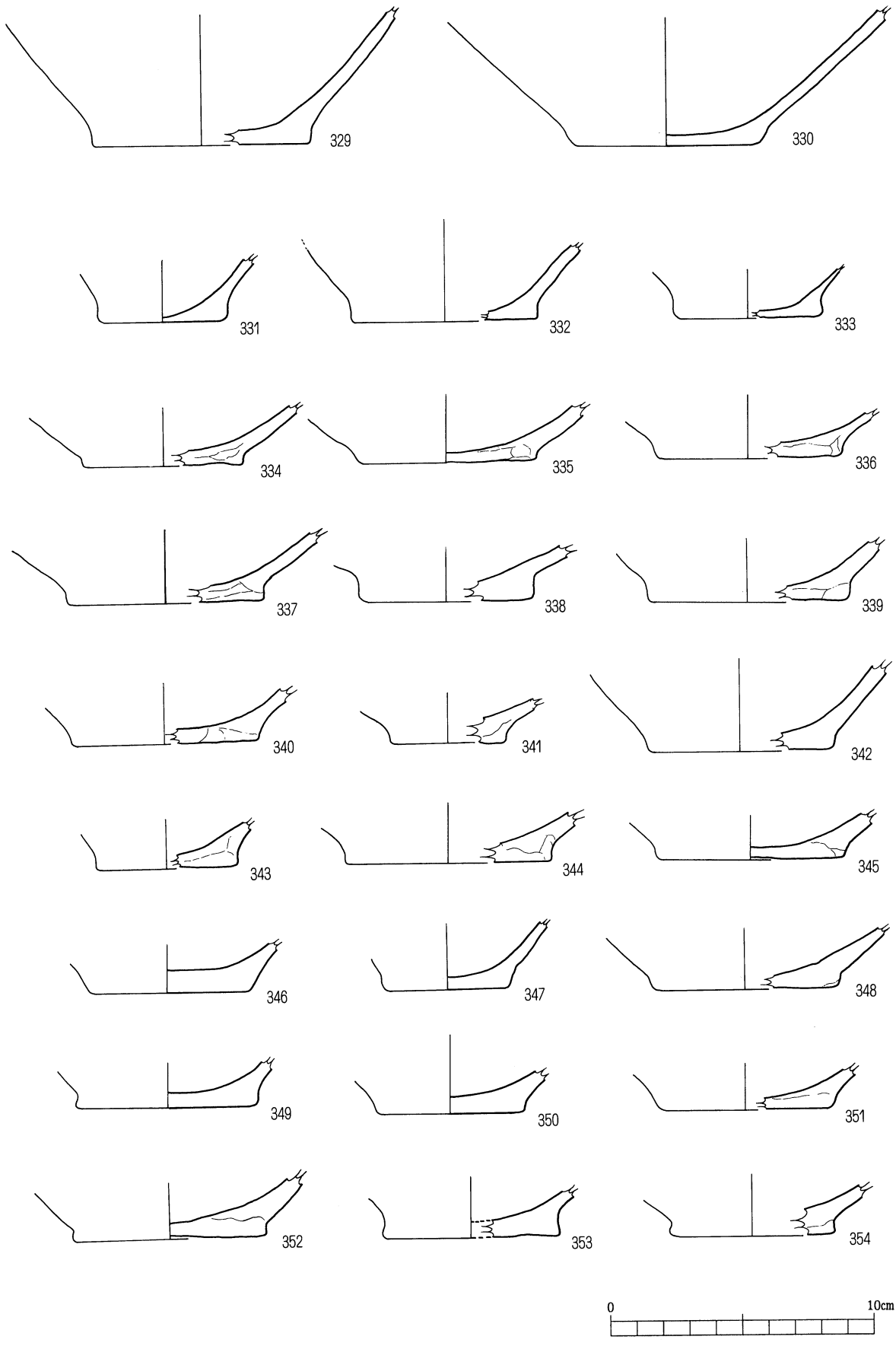
第31図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(24)



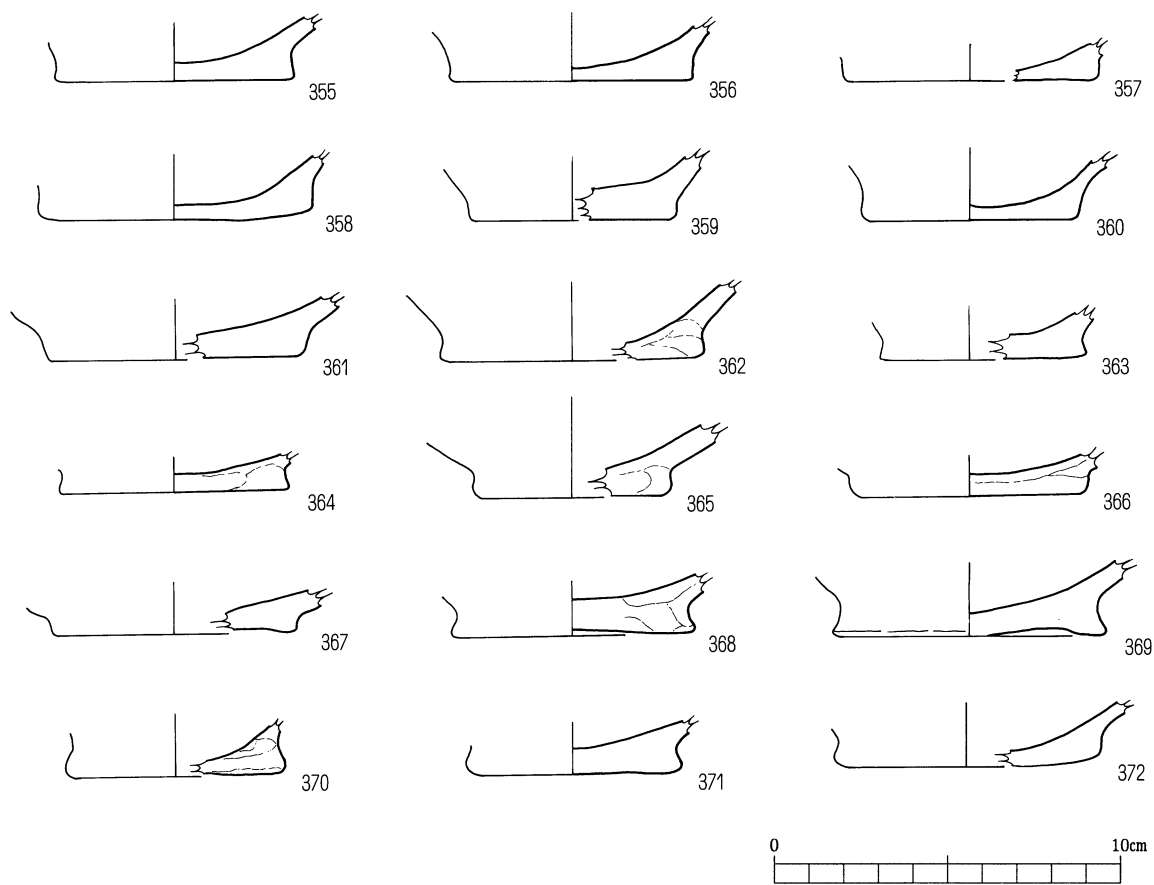
第32図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(25)



第33図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(26)



第34図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(27)



第35図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(28)

第3表 沖田若戸遺跡出土遺物観察表(1)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類	
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面		内 器 面
第 8 図	1	Ⅶ	○	○	◎	×	○	○	明茶褐色	暗褐色			二股状の貝殻状の工具により連続的に刺突文・滑石の粉末混在	滑石の粉末混在・指頭によるナデ	I
	2	Ⅵ	○	○	○	×	○	○	赤茶褐色	赤茶褐色			凹線文を円形や曲線状に組合せた施文を施す・一部ナデ	小破片で、その大部分は剥落しているが、一部ナデ	II
	3	II	○	○	○	×	○	○	暗茶褐色	暗茶褐色			鋭利な筧状の施文工具で沈線文を施す・一部ナデ	小破片で、その大部分は777のため詳細は不明・一部ナデ	
	4		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	暗茶褐色			棒状の施文工具によりU字状に刻目を施す・剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明・鮮明さに欠けるが、指頭によるナデか	
	5	III	○	○	○	×	○	○	暗褐色	黒褐色			磨消縄文と沈線文とを組合せによる施文を施す・磨滅が著しい・不明	・指頭によるナデ	
	6		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明褐色			口唇部と口縁部の外側に沈線文を施す・一部ナデ	一部ナデ	
	7		○	○	○	×	○	○	赤茶褐色	茶褐色			凹線状の施文と細い沈線文とを施文を施す・剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅を受ける・不明	
	8	V	○	○	○	×	○	○	明灰褐色	明灰褐色			剥落や磨滅を受ける・不明	剥落や磨滅を受けている・不明	III
	9		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明灰褐色			剥落や磨滅を受ける・不明	剥落や磨滅を受ける・不明	
	10		○	○	×	○	○	○	明灰褐色	明灰褐色			低い突帯、透かし、磨滅を受けているが、研磨の痕跡	一部に磨滅を受ける・不明	
第 9 図	11	V	○	○	○	○	△	明灰茶褐色	明灰茶褐色			剥落・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明	IVA	
	12	V	○	○	○	×	○	○	明褐色	明灰褐色			剥落・磨滅・不明	剥落・磨滅・不明・一部に筧磨きを認める	VA
	13		○	○	○	○	△	明茶褐色	灰黒褐色			剥落・磨滅・不明・一部に沈線文を施す	剥落・磨滅・不明		
	14		○	○	○	×	○	○	明褐色	明灰褐色			剥落・磨滅・不明・3条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明	
	15		○	○	○	×	×	暗茶褐色	暗茶褐色			一部が剥落・磨滅・不明・筧状工具によるナデ・3条の沈線文を施す	剥落及び磨滅を受ける		
	16		○	○	◎	×	×	明黄茶褐色	明灰褐色			剥落・磨滅・不明・筧磨き・僅かに沈線の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明・ナデの痕跡を認める		
	17		○	○	○	×	○	○	灰黒褐色	明灰褐色			3条の沈線文・一部に筧状工具によるナデを認める	磨滅・一部に筧状工具によるナデを認める	
	18		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明灰褐色			剥落・磨滅・3条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明	
	19		○	○	○	○	○	○	明褐色	明灰褐色			剥落・磨滅・沈線文を認める	剥落・磨滅・不明	
	20		○	○	×	○	○	○	茶褐色	明黄茶褐色			剥落・磨滅・沈線文を施す・ナデの痕跡を認める	剥落・磨滅・ナデの痕跡を認める	
	21		○	○	○	○	△	明茶褐色	灰黒褐色			剥落・磨滅・不明・僅かに沈線の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明		
第 10 図	22	V	○	○	○	○	○	灰黒茶褐色	明茶褐色			剥落・磨滅・一部に筧磨き確認3条の沈線文を施す	剥落・磨滅・随所に筧磨きを認める	VB	
	23		○	○	○	×	△	暗茶褐色	明茶褐色			剥落・磨滅・不明・僅かに沈線の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明		
	24		○	○	×	○	△	暗茶褐色	暗茶褐色			剥落・磨滅・一部にナデ・3条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明		
	25		○	○	×	○	×	暗茶褐色	茶褐色			剥落・磨滅・不明・僅かに沈線の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明		
	26	V	○	○	○	○	○	灰茶褐色	灰黒茶褐色			剥落や研磨を受ける・不明	剥落・磨滅・不明	VC	
	27		○	○	×	○	○	○	茶褐色	茶褐色			部分的に剥落・磨滅・筧状工具によるナデ・6条の沈線文を施す	剥落や研磨が著しい・不明	
	28		○	○	×	○	△	暗茶褐色	暗茶褐色			剥落・磨滅・不明・一部に筧磨きを残す	剥落・磨滅・不明・一部に筧磨きを残す		
	29		○	○	×	○	○	○	赤茶褐色	暗茶褐色			磨滅・筧状工具によるナデ・5条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部にナデ	
	30		○	○	○	○	△	黄茶褐色	明褐色			剥落・磨滅・不明・筧状工具による沈線文を施す	剥落・磨滅・不明		
	31		○	○	○	○	△	暗茶褐色	明灰茶褐色			剥落・磨滅・不明・一部に筧磨き・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部に筧磨きを残す		
	32		○	○	×	○	×	○	赤茶褐色	暗茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・僅かに4条の沈線文を残す	一部が剥落・磨滅・不明・筧磨きか	
	33		○	○	×	○	○	○	茶褐色	明茶褐色			部分的に剥落・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明	
	34		○	○	×	○	×	○	黒茶褐色	黒褐色			剥落や研磨を受けている・不明	剥落・磨滅・不明・部分的に筧磨き	
	第 11 図	35	V	○	○	×	○	◎	○	暗茶褐色	暗茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・一部に筧磨きか	剥落が著しい・磨滅・不明
36			○	○	◎	○	×	○	茶褐色	茶褐色			剥落・磨滅・不明・4条の沈線文を残す・一部に筧磨きか	剥落や磨滅が著しい・不明	
37			○	○	×	×	○	○	灰褐色	暗灰褐色			剥落や磨滅が著しい・不明・波状の沈線文を巡らす鮮明さに欠く	剥落や磨滅が著しい・不明	
38			○	○	×	○	×	○	暗茶褐色	暗茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・筧磨きの痕跡を一部に認める	剥落が著しい・磨滅・不明・筧磨きか	
第 12 図	39	V	○	○	◎	○	△	暗灰褐色	明灰褐色			剥落や磨滅が著しい・不明・6条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明		
	40		○	○	○	○	○	○	茶褐色	明茶褐色			部分的に剥落や磨滅を認める・不明・5条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明	
	41		○	○	×	○	○	○	暗茶褐色	茶褐色			一部に剥落や磨滅・不明・6条の沈線文を施すが鮮明さに欠く	剥落や磨滅が著しい・不明	
	42		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色			剥落・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	一部が剥落・磨滅・不明・本来は丁寧なナデ	
	43		○	○	○	○	×	○	暗赤茶褐色	暗茶褐色			剥落・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・一部に筧磨き・ナ	
	44		○	○	×	◎	△	○	明赤茶褐色	明茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・6条の沈線文の痕跡を残す	剥落が著しい・磨滅・不明	
	45		○	○	×	×	×	○	茶褐色	茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・6条の沈線文の痕跡を残す	剥落が著しい・磨滅・不明	
	46		○	○	◎	×	○	○	明褐色	暗茶褐色			沈線文を施す・筧状工具によるナデ・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部ナデ	
	47		○	○	×	○	△	○	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色			剥落が著しい・磨滅・不明・5条の沈線文の痕跡を残す	剥落が著しい・磨滅・不明	
	48		○	○	×	○	○	○	暗灰褐色	茶褐色			沈線文を施す・筧状工具によるナデ・7条の沈線文を施す	一部が磨滅・筧状工具によるナデか	
	49		○	○	×	○	○	○	灰黒褐色	暗褐色			剥落を受け・磨滅・不明・沈線文を施す・3条の沈線文を施す	一部が剥落・不明・筧状工具によるナデか	
	50		○	○	○	○	×	○	暗茶褐色	明茶褐色			剥落を受け・本来は筧状工具によるナデか・5条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明	
	51		○	○	◎	○	×	○	暗茶褐色	黒茶褐色			剥落・磨滅・不明・6条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部は筧磨きか	
第 13 図	52	V	○	○	○	○	×	○	暗茶褐色	明茶褐色			剥落を受け・本来は筧状工具によるナデか・沈線文の痕跡を僅かに施す	剥落・磨滅・不明	VD
	53		○	○	○	○	△	○	灰褐色	明灰褐色			剥落や磨滅が著しい・不明・口縁部に筧磨きが僅かに残る	剥落が著しい・磨滅・不明	
	54		○	○	○	×	○	○	暗茶褐色	灰茶褐色			剥落・磨滅・不明・筧状工具によるナデ・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部残存は筧磨きか	
	55		○	○	◎	×	○	○	黒茶褐色	灰黒褐色			剥落・磨滅・不明・筧状工具によるナデ・5条の沈線文を残す	剥落・磨滅・不明・筧磨きか	
	56		○	○	○	◎	○	○	明黄茶褐色	明茶褐色			部分的に剥落や磨滅を認める・不明	剥落が著しい・磨滅・不明	
57		○	○	○	×	△	○	暗茶褐色	暗茶褐色			部分的に剥落・磨滅・不明・8条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・一部は筧磨きか		
58	V	○	○	○	○	△	○	暗茶褐色	暗茶褐色			一部に剥落や磨滅を受け・筧状工具によるナデ・5条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明・一部は筧磨きか	VE	

第4表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(2)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面		
第 14 図	59	V	○	○	×	○	△	明黄褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明		VE	
	60		○	○	○	○	×	暗茶褐色	茶褐色	一部に剥落や磨滅を認める・不明・沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明			
	61		○	○	○	○	×	明茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・3条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか			
	62		○	○	○	×	△	明灰茶褐色	明灰茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明			
	63		○	○	○	○	△	暗茶褐色	灰黒茶褐色	剥落・磨滅・不明・4条の沈線文の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明・一部に篋磨きの痕跡を残す			
	64	V	○	○	○	○	△	暗茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・3条の沈線文を僅かに残す	剥落や磨滅を受ける・不明			
	65		○	○	○	○	△	茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・一部に篋磨きか			
	66		○	○	○	○	○	暗茶褐色	明茶褐色	一部に剥落や磨滅を認める・不明・5条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明			
67		○	○	○	○	○	暗茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・5条の沈線文の痕跡を残す	一部に剥落・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか				
68		○	○	○	○	△	茶褐色	暗茶褐色	剥落・磨滅・不明・篋磨き・一部条痕状のナデ	剥落が著しい・磨滅・不明				
第 15 図	69	V	○	○	×	○	×	明黄茶褐色	明黄茶褐色	一部に剥落や磨滅を認める・不明・6条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明	VF		
	70		○	○	×	×	△	黒茶褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・不明	剥落・磨滅・不明			
	71		○	○	×	○	○	灰茶褐色	灰茶褐色	剥落・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか	剥落・磨滅・不明			
	72		○	○	×	○	△	淡褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を認める・不明・7条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明			
	73		○	○	×	○	○	明茶褐色	暗褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・6条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明			
	74		○	○	○	○	△	明茶褐色	明褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・条痕状の痕跡を認める	剥落や磨滅が著しい・不明			
	75		○	○	○	○	△	茶褐色	灰茶褐色	磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか	剥落・磨滅・不明			
	76	V	○	○	×	○	△	暗茶褐色	暗褐色	一部磨滅・不明・沈線文を施す	大半が剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか	VG		
77		○	○	○	×	△	明褐色	明灰褐色	一部に磨滅・不明・判明しない箇所もあるが沈線文を認める	剥落・磨滅・不明				
85		○	○	○	○	○	明褐色	明茶褐色	一部剥落・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデの痕跡を認める	一部に剥落・磨滅・不明・篋磨きか	VH			
第 16 図	78	V	○	○	×	○	△	明灰黒褐色	明灰黒褐色	大部分が剥落が著しい・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明	VG		
	79		○	○	×	○	×	暗灰褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明	剥落が著しい・磨滅・不明			
	80		○	○	×	○	△	灰黒茶褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・3条の沈線文を施す・一部に篋磨きの痕跡を認める	剥落・磨滅・不明			
	81		○	○	○	○	○	暗茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・部分的に篋磨きの痕跡を認める	剥落・磨滅・不明・部分的に篋磨きの痕跡を認める			
	82		○	○	×	○	△	灰黒褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・僅かに沈線文の痕跡を残す	剥落が著しい・磨滅・不明			
	83		○	○	×	○	△	暗茶褐色	明灰褐色	一部に剥落や磨滅を受ける・不明・4条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明			
	84		○	○	×	○	○	暗茶褐色	暗茶褐色	一部に剥落や磨滅を受ける・不明・4条の沈線文を施す	一部剥落・磨滅・不明・一部に篋磨きの痕跡か			
	86	V	○	○	×	○	×	明茶褐色	明灰茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・判明しない箇所もあるが沈線文を認める	剥落が著しい・磨滅・不明	VH		
87		○	○	×	○	△	灰黒褐色	黒茶褐色	剥落・磨滅・不明・沈線文の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか				
88		○	○	×	○	○	茶褐色	暗茶褐色	一部に剥落や磨滅を受ける・不明・沈線文の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか				
89		○	○	×	○	△	明灰褐色	明褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・沈線文の痕跡を認める	剥落・磨滅・不明				
90		○	○	○	○	○	灰褐色	暗褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・僅かに沈線文の痕跡を残す	剥落・磨滅・不明・篋磨きか篋状工具によるナデか				
91		○	○	×	○	○	明茶褐色	明褐色	剥落や剥落が著しい・磨滅・不明	剥落や剥落が著しい・磨滅・不明				
92		○	○	×	○	△	暗茶褐色	茶褐色	剥落・磨滅・不明・沈線文の痕跡を認める	剥落が著しい・磨滅・不明				
第 17 図	93	V	○	○	×	○	◎	明茶褐色	明褐色	大部分が剥落や磨滅を受ける・不明・5条の沈線文を施す	大部分が剥落・一部に磨滅・不明・篋状工具によるナデか	VG		
	94		○	○	×	○	△	明茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・部分的に沈線文や一部に篋磨きの痕跡を認める	剥落や磨滅が著しい・不明			
	95		○	○	×	○	△	灰黒茶褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・不明・条痕状の施文	剥落や磨滅を認める・不明・篋状工具によるナデか			
	96		○	○	×	○	△	暗茶褐色	茶褐色	剥落・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	一部に剥落・磨滅・不明			
	97		○	○	×	○	×	茶褐色	灰茶褐色	剥落・磨滅とも著しい・不明	剥落・磨滅とも著しい・不明			
	98		○	○	○	○	○	明茶褐色	暗褐色	磨滅・不明・篋状工具によるナデ	剥落・磨滅・不明			
	99		○	○	×	○	△	明褐色	明茶褐色	剥落や剥落が著しい・磨滅・不明	剥落や剥落が著しい・磨滅・不明			
	100		○	○	×	○	△	暗茶褐色	茶褐色	一部に剥落を認める・板状施文工具で貝殻条痕状の施文	剥落や磨滅が著しい・不明			
101		○	○	×	○	×	暗赤茶褐色	灰赤茶褐色	剥落・磨滅・不明	剥落・磨滅・不明				
102		○	○	×	○	○	明茶褐色	灰褐色	剥落を受け・一部に磨滅を認める・貝殻条痕状の施文	剥落や磨滅とも著しい・不明				
103		○	○	○	○	○	茶褐色	明茶褐色	一部に磨滅を認める・6条の沈線文を施す	剥落や磨滅が著しい・不明				
104		○	○	×	○	△	灰茶褐色	灰黒褐色	剥落・磨滅とも著しい・不明	剥落や磨滅とも著しい・不明				
105		○	○	×	○	○	暗茶褐色	茶褐色	大半が剥落や磨滅を受ける・5条の沈線文の痕跡をとどめている	一部に剥落や磨滅が著しい・一部に篋状工具によるナデか				
106		○	○	×	○	△	暗茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨滅の一部に認める・不明・4条の沈線文を施す	剥落や剥落が著しい・磨滅・不明				
107		○	○	×	○	△	明灰黒褐色	明黄褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	剥落や磨滅とも著しい・不明				
第 18 図	108	V	○	○	×	○	△	褐色	褐色	一部に剥落や磨滅・不明・篋状工具によるナデ・5条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか	VG		
	109	V	○	○	×	○	○	暗褐色	暗褐色	剥落・磨滅・不明・沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか	VI		
	110		○	○	×	○	○	明灰褐色	明灰褐色	一部に磨滅・不明・沈線文を施す	一部に磨滅・不明・篋状工具によるナデか			
	111		○	○	○	○	×	灰黒褐色	灰褐色	一部に剥落・磨滅・不明・5条の沈線文を施す	剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか			
	112		○	○	×	○	△	茶褐色	茶褐色	一部に剥落・磨滅・不明・篋状工具によるナデか・沈線文を施す	一部に剥落や磨滅・不明・一部に篋磨きか			
	113		○	○	×	○	△	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落が著しい・部分的に篋磨きの痕跡を認める	剥落が著しい・部分的に篋磨きの痕跡を認める			
	114		○	○	×	○	○	明茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・4条の沈線文を施す	剥落が著しい・磨滅・不明・一部に篋磨きの痕跡か			
	115		○	○	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に磨滅・不明・篋状工具によるナデか・波状沈線文を施す	一部に磨滅・不明・篋状工具によるナデか			
116		○	○	○	○	○	明褐色	明褐色	一部に磨滅・不明・沈線文を施す	剥落・一部に磨滅・不明・篋磨きを施す				

第5表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(3)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	焼 成	色 調		調 整		文 様		分 類
									外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	
第18 図	117	V	○	○	○	○	○	○	明茶褐色	灰明褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明		VI
	118		○	○	○	○	○	○	暗茶褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・篋状工具によるナデか・4~5条の沈線文を施す		剥落や磨滅が著しい・不明		
第19 図	119	V	○	○	×	○	◎	○	明茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・4条の沈線文を僅かに残す		剥落が著しい・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか		VI
	120		○	○	○	○	○	×	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・4条の沈線文の痕跡を認める		剥落が著しい・磨滅・不明・一部に篋状工具による磨き		
	121		○	○	○	○	○	×	灰茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明		
	62	V	○	○	◎	○	○	△	暗褐色	明茶褐色	一部に剥落・磨滅・不明・沈線文の痕跡を残す		剥落・磨滅・不明		VK
	122		○	○	○	×	◎	△	明赤茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅とともに著しい・不明		
123		○	○	○	○	○	△	暗茶褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・不明・一部に貝殻条痕状の痕跡を認める		剥落・磨滅・不明			
第20 図	124	V	○	○	○	○	△	暗茶褐色	明茶褐色	磨滅・不明・一部に篋磨き		一部磨滅・不明・条痕状の施文		VL	
	125		○	○	○	○	○	灰褐色	灰褐色	一部に剥落・磨滅・丁寧なナデ		剥落が著しい・磨滅・不明			
	126		○	○	○	○	○	明褐色	褐色	一部に剥落・磨滅・不明・一部篋磨き・ナデか		剥落や磨滅が著しい・不明			
	127		○	○	×	○	○	暗茶褐色	褐色	剥落・磨滅・不明		一部磨滅・篋状工具によるナデか			
	128		○	○	×	×	△	明茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明			
	129		○	○	×	×	○	暗灰茶褐色	黒茶褐色	剥落・磨滅・不明		剥落・磨滅・篋状工具によるナデか			
	130		○	○	×	○	×	茶褐色	赤茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明			
	131		○	○	×	○	△	灰茶褐色	明灰茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明			
	132		○	○	×	○	×	暗茶褐色	赤茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明			
	133	V	○	○	×	○	△	明茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に篋状工具によるナデか		剥落や磨滅が著しい・不明		VM	
	134		○	○	○	○	△	黒褐色	明茶褐色	剥落・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか		剥落や磨滅が著しい・不明			
	135		○	○	×	○	△	灰黒褐色	灰黒茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・一部ナデか		剥落や磨滅が著しい・不明・篋状工具によるナデか			
	136		○	○	×	×	△	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・僅かに一条の沈線文を確認		剥落が著しい・磨滅・不明			
	137		○	○	×	×	○	暗灰茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨滅を受けている・不明		剥落や磨滅を受けている・不明			
138		○	○	×	○	×	黒黒褐色	茶褐色	口縁部の外側下位に微凸帯状を呈す・剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明				
139		○	○	○	×	○	暗茶褐色	茶褐色	部分的に剥落・一部に磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか		剥落が著しい・磨滅・不明				
140		○	○	○	×	△	黒茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		部分的に剥落や磨滅を受けている・不明		VM		
第21 図	141	V	○	○	×	×	×	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明・貝殻状の施文を認める		剥落・磨滅・不明		VN	
	142		○	○	×	△	△	黒褐色	灰黒褐色	剥落・磨滅・不明・一部にナデ		剥落・磨滅・不明・一部にナデ			
	143		○	○	×	×	△	灰黒茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・磨滅・不明		剥落が著しい・磨滅・不明			
	144		○	○	×	△	△	暗茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明			
	145	V	○	○	×	○	△	茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落が著しい・一部に磨滅・不明		VO	
146		○	○	×	○	△	灰褐色	赤褐色	一部に剥落や磨滅・不明		剥落や磨滅が著しい・不明				
147		○	○	×	○	△	茶褐色	明茶褐色	一部に剥落や磨滅・不明・篋状工具によるナデか		剥落・磨滅・不明				
第22 図	148	V	○	○	×	○	○	茶褐色	灰茶褐色	剥落・磨滅・不明・条痕状の施文		剥落・磨滅・不明		VP	
	149		○	○	×	○	○	暗茶褐色	茶褐色	剥落・磨滅・不明・条痕状の施文		剥落・磨滅・不明			
	150		○	○	○	○	○	暗茶褐色	茶褐色	剥落・磨滅・不明		剥落・磨滅・不明			
	151		○	○	×	○	○	暗茶褐色	茶褐色	剥落・磨滅・不明・条痕状の施文		剥落・磨滅・不明			
	152		○	○	×	○	○	灰黒褐色	灰黒褐色	部分的に剥落や磨滅を確認・大半が不明・篋磨きか		部分的に剥落や磨滅を確認・大半が不明・篋磨きか			
	153		○	○	×	○	○	灰茶褐色	灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明			
	154		○	○	×	○	○	灰褐色	暗灰褐色	剥落や磨滅を受ける・篋磨きか		部分的に剥落や磨滅を受ける・篋磨きの痕跡を残す			
	155	V	○	○	×	○	△	明茶褐色	明茶褐色	一部に剥落・磨滅を受ける・一部に篋状工具によるナデを認める		剥落や磨滅が著しい・不明			
第23 図	156		○	○	×	×	△	黒褐色	褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明			
	157		○	○	◎	×	△	暗茶褐色	明灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
	158		○	○	×	×	△	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・部分に条痕状の施文を施す		剥落や磨滅が著しい・不明			
	159		○	○	×	○	△	茶褐色	暗茶褐色	剥落・磨滅・大半は不明・一部に篋状工具によるナデか		剥落・磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか			
	160		○	○	×	○	○	暗褐色	茶褐色	剥落や磨滅・不明・一部に篋痕状工具によるナデか		剥落・磨滅・不明			
	161		○	○	×	○	○	灰褐色	明灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・一部に篋磨きの痕跡を残す		一部に剥落や磨滅を確認・丁寧な篋磨き			
	162		○	○	×	○	○	暗茶褐色	灰茶褐色	若干の磨滅を受ける・篋痕磨きか		若干の磨滅を受ける・篋痕磨きか			
	163		○	○	×	○	○	暗褐色	暗褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・本来は篋磨きか		一部に剥落や磨滅を確認・篋磨き調整痕が残る			
	164		○	○	○	×	○	赤茶褐色	明褐色	一部に磨滅・不明・一部に条痕状のナデか・煤が付着		剥落や磨滅を認める・不明			
	165		○	○	○	×	○	暗茶褐色	茶褐色	磨滅を一部に認める・篋磨きか		部分的に磨滅を確認・篋磨きか			
	166		○	○	×	○	○	灰黒褐色	灰黒褐色	部分的に剥落・若干の磨滅・丁寧な篋磨きか		一部に剥落や磨滅を確認・丁寧な篋磨き			
第24 図	167	V	○	○	×	○	△	黒褐色	灰黒褐色	一部に磨滅を確認・篋磨きを施す		一部に磨滅を確認・篋磨き施す		残VI	
	168		○	○	◎	×	△	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅が著しい・一部に篋磨きを施す		剥落や磨滅が著しい・不明・篋磨きを施す			
	169		○	○	×	○	△	暗茶褐色	灰褐色	一部に磨滅を確認・篋磨きを施す		一部に磨滅を確認・篋磨きを施す			
	170		○	○	×	○	△	灰黒褐色	灰黒褐色	部分的に剥落や磨滅を受ける・不明・一部に丁寧な篋磨きを施す		剥落が著しい・不明・部分的に篋磨きの痕跡を残す			
	171		○	○	○	×	△	明灰褐色	灰褐色	大部分が剥落や磨滅・篋磨きの痕跡を残す		剥落や磨滅が著しい・不明			
	172		○	○	◎	○	×	灰茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に篋磨きの痕跡を残す		剥落や磨滅が著しい・不明・一部に篋磨きの痕跡を残す			
	173		○	○	○	×	△	明灰茶褐色	明灰茶褐色	部分的に剥落や磨滅を受けるが、残存部に篋磨きを認める		大部分的に剥落や磨滅を受ける・僅かに篋磨きを施す			

第6表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(4)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面	
第 24 図	174		○	○	×	×	○	△	明茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受け、下位の剥落は著しい・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅を受けるが、筥磨きの痕跡を残す	V1	
	175	V	○	○	×	×	○	△	明茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受け、下位の剥落は著しい・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅を受けるが、筥磨きの痕跡を残す		
	176		○	○	○	○	△	灰黒褐色	灰暗茶褐色	剥落が著しい・一部に筥磨きを確認・1条の沈線文の痕跡を認める	一部に剥落や磨滅・不明・1条の沈線文の痕跡を認める			
	177		○	○	○	○	△	暗褐色	暗褐色	剥落や磨滅を受けているが、丁寧な筥磨きを施す	剥落や磨滅を受けているが、丁寧な筥磨きを施す			
	178		○	○	◎	×	◎	△	灰黒褐色	黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明		
	180		○	○	○	○	○	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受け、一部に筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きを確認			
	181		○	○	○	×	△	灰褐色	灰褐色	一部に剥落や磨滅を受け、本来は筥磨きを施す	剥落や磨滅が著しい・不明・僅かに筥磨きの痕跡を残す			
第 25 図	182	V	○	○	×	×	○	△	灰褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅が著しい・不明	V2	
	183		○	○	×	×	○	明灰茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・僅かに筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅が著しい・不明			
	184		○	○	×	○	△	明茶褐色	明灰褐色	一部に磨滅・筥磨きを施す	一部に磨滅・筥磨きを施す			
	185		○	○	×	○	○	黒褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を確認・一部に筥磨きを施す	剥落や磨滅を確認・筥磨きを施す			
	186		○	○	×	×	△	灰黒茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を受け、部分的に筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・不明			
	187		○	○	×	○	○	明灰茶褐色	灰褐色	剥落・磨滅・筥磨きの痕跡・口縁外側に1条の沈線文の痕跡を認める	一部が磨滅・丁寧な筥磨きを施す・鉄分の付着			
	188		○	○	×	○	○	灰黒褐色	明黒褐色	部分的に剥落や磨滅・部分的に丁寧な筥磨きを施す	大部分が剥落や磨滅・一部に丁寧な筥磨きを施す			
第 26 図	189	V	○	○	◎	×	△	灰茶褐色	明灰茶褐色	部分的に剥落や磨滅・一部に丁寧な筥磨きを施す	大部分が剥落や磨滅・部分的に丁寧な筥磨きを施す	V3		
	190		○	○	○	×	○	灰黒褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅を受ける・全体的に筥磨きを施す			
	191		○	○	○	○	△	明灰褐色	灰茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・僅かに筥磨きの痕跡を認める	剥落や磨滅が著しい・不明			
	192		○	○	○	×	△	茶褐色	暗黒灰褐色	一部に磨滅・筥磨きを施す	一部に磨滅・筥磨きを施す			
	193		○	○	◎	○	×	灰茶褐色	明茶褐色	剥落が著しい・不明・一部に筥磨きの痕跡・1条の沈線文を認める	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に筥磨きの痕跡を残す			
	194	V	○	○	×	×	○	暗褐色	暗茶褐色	大部分が剥落や磨滅を確認・一部に丁寧な筥磨きを施す	大部分が剥落や磨滅を確認・一部に丁寧な筥磨きを施す			
	195		○	○	○	○	△	明灰褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に筥磨きを認める			
第 27 図	196		○	○	×	○	○	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅を受ける・筥磨きを施す			
	197		○	○	×	○	△	明褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・一部残部に筥磨きの痕跡が残る	一部に剥落や磨滅・不明			
	198		○	○	×	×	○	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受けるが、部分的に丁寧な筥磨きを施す	剥落や磨滅を受けるが、部分的に丁寧な筥磨きを施す			
	199		○	○	×	×	△	黒茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受けるが、部分的に丁寧な筥磨きを施す	剥落や磨滅を受けるが、部分的に丁寧な筥磨きを施す			
	200		○	○	○	×	×	灰黒茶褐色	明赤茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きの痕跡を残す			
	201		○	○	○	○	△	暗茶褐色	赤茶褐色	部分的に剥落・筥磨きを施す・一部に2条の沈線文の痕跡を認める	部分的に剥落・筥磨きを施す・一部に2条の沈線文の痕跡を認める			
	202		○	○	○	○	○	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を確認・筥磨きを施す	剥落や磨滅を確認・部分的に筥磨きを施す			
	203	V	○	○	○	○	△	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を確認・筥磨きを施す	剥落や磨滅を確認・部分的に筥磨きを施す	V4		
	204		○	○	○	○	△	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しいが、一部に筥磨きの痕跡を確認	剥落や磨滅が著しいが、一部に筥磨きの痕跡を確認			
	205		○	○	×	×	△	明灰褐色	黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落・磨滅・不明・一部に筥磨きの痕跡を確認			
206		○	○	×	×	△	黒褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受けるが、一部に丁寧な筥磨きを施す	剥落や磨滅を受けるが、一部に筥磨きを施す				
207		○	○	◎	×	○	暗灰茶褐色	灰黒茶褐色	部分的に剥落や磨滅を受けるが筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの施文により擦過を認める				
208		○	○	◎	×	×	明褐色	暗褐色	剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・不明				
209		○	○	×	○	○	灰黒茶褐色	灰黒茶褐色	部分的に剥落や磨滅を受けるが丁寧な筥磨きを施す	剥落や磨滅が著しい・不明				
第 28 図	210		○	○	×	○	△	灰褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅が著しい・不明	V5		
	211		○	○	◎	×	△	黒茶褐色	黒茶褐色	一部に剥落や磨滅を認める・筥磨きの痕跡が鮮明に残る	一部に剥落や磨滅を認める・筥磨きの痕跡を認める			
	212		○	○	○	○	△	明灰茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・部分的に筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅が著しい・不明・部分的に筥磨きの痕跡を残す			
	213		○	○	×	○	×	灰茶褐色	明黒褐色	剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・僅かに筥磨きの痕跡が残る			
	214	V	○	○	○	×	△	灰黒茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を受け、部分的に筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・不明			
	215		○	○	×	○	○	褐色	褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・筥磨きの痕跡か	剥落や磨滅を受ける・不明・筥磨きの痕跡か			
	216		○	○	×	×	○	明褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・筥磨きの痕跡か	剥落や磨滅が著しい・不明・筥磨きの痕跡か			
	217		○	○	○	○	△	明灰褐色	灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明			
	218		○	○	○	×	△	灰褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・筥磨きの痕跡か	剥落や磨滅を受ける・不明			
	219		○	○	○	×	○	明茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・1条の沈線文の痕跡を残す	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に丁寧な筥磨きを認める			
第 29 図	220		○	○	×	×	△	灰黒茶褐色	灰黒茶褐色	部分的に剥落や磨滅を受けるが丁寧な筥磨きを施す	部分的に剥落や磨滅を受けるが丁寧な筥磨きを施す	V6		
	221		○	○	×	○	×	淡明褐色	淡明褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明			
	222		○	○	×	○	○	暗褐色	明褐色	剥落や磨滅が著しい・不明	剥落や磨滅が著しい・不明			
	223		○	○	×	×	△	暗灰褐色	灰褐色	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい			
	224	V	○	○	○	×	△	暗茶褐色	明赤茶褐色	器面全体に剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きの痕跡を認める	器面全体に剥落や磨滅が著しい・一部に筥磨きの痕跡を認める			
	225		○	○	○	×	△	暗灰茶褐色	暗灰茶褐色	部分的に剥落や磨滅を受けるが筥磨きを施す	部分的に剥落や磨滅を受けるが筥磨きを施す			
	226		○	○	○	×	△	暗灰褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を認める・筥磨きを施す	剥落や磨滅を認める・丁寧な筥磨きを施す			
	227		○	○	○	×	△	暗灰褐色	灰褐色	一部に剥落や磨滅を認める・筥磨きの痕跡が残る	一部に剥落や磨滅を認める・筥磨きの痕跡を認める			
	228		○	○	○	×	△	灰茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの痕跡が残る	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの痕跡が残る			
	229	V	○	○	×	○	○	暗茶褐色	灰黒茶褐色	剥落や磨滅を受ける・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅を受ける・不明			
第 30 図	230		○	○	○	×	×	灰黒茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅が著しい・筥磨きの痕跡が残る	大半が剥落・筥磨きの痕跡を残す・1条の沈線文の痕跡を認める	V7		
	231	V	○	○	○	×	△	暗茶褐色	灰黒茶褐色	剥落や磨滅を受ける・4条の沈線文の痕跡を残す	剥落や磨滅を受ける・不明・一部に筥磨きの痕跡を認める			
	232		○	○	×	○	△	茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を受ける・筥磨きの痕跡を残す	剥落や磨滅を受ける・不明			

第7表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(5)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整 文 様		分 類	
			石	長	角	金	砂	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面		
			英	石	閃	雲	粒						
第 29 図	233	V	○	○	×	○	○	○	暗褐色	明褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	ボ ール
	234	V	○	○	×	○	△	○	暗灰褐色	灰褐色	剥落や磨減が著しい・磨磨きの痕跡が残る	剥落や磨減が著しい	ボ ール
	235		○	○	○	×	△	○	黒茶褐色	明灰褐色	剥落や磨減を受ける・条痕状の痕跡を若干残す	剥落や磨減を受ける・不明	
	236		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	灰褐色	剥落が著しい・不明	一部に磨減を確認・磨磨きの痕跡を認める	
	237		○	○	×	○	△	○	茶褐色	灰褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受けている・不明	
	138		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に磨減を受ける・丁寧な磨磨きを施す	一部に磨減を受ける・丁寧な磨磨きを施す	
	139		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に磨減を受ける・丁寧な磨磨きを施す	一部に磨減を受ける・丁寧な磨磨きを施す	
	139		○	○	○	○	○	○	灰褐色	明灰褐色	部分的に剥落や磨減を受ける・丁寧な磨磨きが残る	剥落や磨減を受ける・磨磨きの痕跡が残る	
	240		○	○	○	○	×	○	灰黒茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	
	241		○	○	○	×	×	○	灰黒褐色	暗茶褐色	部分的に剥落や磨減を認める・磨磨きの痕跡か	部分的に剥落や磨減を認める・磨磨きの痕跡か	
	242		○	○	×	×	×	○	暗茶褐色	黒茶褐色	全て剥落や磨減を受ける・不明	部分的な剥落や磨減を確認・磨磨きの痕跡を認める	
	243		○	○	×	○	×	○	黒茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨減が著しい・磨磨きの痕跡を認める	剥落や磨減が著しい・磨磨きの痕跡を認める	
	244		○	○	×	×	○	○	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落や磨減を認める・不明	剥落や磨減を認める・不明	
	第 30 図	245	V	○	○	○	○	×	○	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨減を受けている・胴部より上位に9条の沈線文を施す	剥落や磨減のために不明
246			○	○	○	×	×	○	灰黒褐色	黒褐色	剥落や磨減を受けている・胴部より上位に9条の沈線文を施す	剥落や磨減が著しい・不明	マリ IV
247		V	○	○	×	○	○	○	暗灰茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	マリ V
248			○	○	×	○	○	○	暗茶褐色	暗茶褐色	部分的に磨減を受ける・磨磨きの痕跡を認める	部分的に磨減を受ける・磨磨きの痕跡か	
249			○	○	×	×	○	○	灰黒褐色	黒褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	
250			○	○	×	○	△	○	灰黒褐色	灰黒褐色	剥落が著しい・一部に磨磨きの痕跡を残す	剥落・磨減・不明・一部に磨磨きの痕跡を残す	
251			○	○	×	○	△	○	明灰褐色	明灰黒褐色	部分的に剥落や磨減を受ける・一部に磨磨きの痕跡を認める	剥落や磨減が著しい・不明	
252		V	○	○	×	○	△	○	明灰褐色	明灰黒褐色	部分的に剥落や磨減を受ける・一部に磨磨きの痕跡を認める	剥落や磨減が著しい・不明	ツ ボ 状
253			○	○	○	×	○	○	暗褐色	明褐色	部分的に剥落や磨減を受ける・一部に磨磨きの痕跡を認める	剥落や磨減が著しい・不明	
254		V	○	○	○	×	○	○	明灰褐色	明黄茶褐色	一部に剥落や磨減・ナデ	剥落や磨減を受ける・ナデ	底 部 厚 1
255			○	○	×	×	△	○	明茶褐色	明灰褐色	若干の剥落や磨減・ナデ	剥落や磨減を受ける・不明	
256			○	○	×	○	△	○	明灰褐色	灰黒褐色	剥落や磨減・不明・一部に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減を受ける・不明	
257			○	○	×	×	△	○	茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	厚 2
第 31 図		258	V	○	○	○	○	○	○	茶褐色	灰黒褐色	一部に剥落や磨減・ナデ	剥落や磨減を受けている・不明
	259		○	○	○	×	△	○	明褐色	灰茶褐色	一部に剥落や磨減・ナデ	剥落や磨減が著しい・不明	
	260		○	○	○	○	△	○	茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨減・不明	剥落や磨減が著しい・不明	
	261		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に剥落や磨減・ナデ	磨減を受けている・一部に磨磨きの痕跡を残す	
	262		○	○	×	×	○	○	明茶褐色	茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を確認・不明	
	263		○	○	×	○	△	○	茶褐色	明赤茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減を確認・不明	
	264		○	○	×	○	△	○	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減のために不明	
	265		○	○	×	○	△	○	茶褐色	明茶褐色	一部に剥落や磨減・ナデ	剥落や磨減を受けている・不明	
	266		○	○	×	×	△	○	赤茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨減・不明・一部に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減を受ける・不明・一部に篋状工具によるナデを認める	
	267		○	○	×	○	○	○	淡茶褐色	淡褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が激しい・不明	
	268		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	淡灰黒褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が激しい・不明	
	269		○	○	○	○	△	○	明褐色	明褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が激しい・不明	
	270		○	○	×	○	△	○	赤茶褐色	明茶褐色	剥落や磨減・不明・一部に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減を受ける・不明	
	271		○	○	×	×	△	○	明茶褐色	明茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が激しい・不明	
第 32 図	272		○	○	×	○	△	○	明茶褐色	黒褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	273		○	○	×	○	○	○	明灰褐色	明灰褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	274	V	○	○	○	×	△	○	明茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨減を受けるが一部に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減が激しい・不明	厚 3
	275		○	○	○	×	×	○	茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明に篋状工具によるナデを認める	
	276	V	○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	277		○	○	×	×	△	○	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	278		○	○	×	×	△	○	赤茶褐色	明褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減が激しい・不明	
	279		○	○	×	×	△	○	赤茶褐色	明灰褐色	剥落や磨減を受けるが一部に篋状工具による横位のナデを認める	剥落や磨減が激しい・不明	
	280		○	○	×	○	△	○	明茶褐色	明灰褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	281		○	○	○	×	○	○	明灰褐色	明茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	282		○	○	○	×	△	○	茶褐色	明茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	一部に剥落や磨減を受ける・不明	
	283		○	○	○	○	○	○	暗茶褐色	茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	284		○	○	○	×	○	○	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	剥落や磨減が著しい・不明	剥落や磨減が著しい・不明	
	285		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	灰褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
第 32 図	286	V	○	○	○	×	○	○	淡茶褐色	明灰褐色	剥落や磨減を受ける・不明	一部に剥落や磨減を受ける・不明	
	287		○	○	×	○	△	○	暗茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	
	289		○	○	○	○	○	○	明黄褐色	明灰褐色	剥落や磨減・不明・部分的に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減を受ける・篋状工具によるナデを認める	
	290		○	○	○	×	△	○	茶褐色	暗茶褐色	一部に剥落や磨減を認めるが・部分的に篋状工具によるナデを認める	剥落や磨減が著しい・不明	
	291		○	○	×	○	×	○	明黄茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨減を受ける・不明	剥落や磨減を受ける・不明	

第8表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(6)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類	
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面	内 器 面	外 器 面		内 器 面
第 32 図	292		○	○	×	×	○	△	明茶褐色	灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	293		○	○	○	○	○	△	明褐色	明褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	294		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に剥落や磨滅・ナデ・胎土に軽石を含む		磨滅や磨滅を受ける・不明		
	294		○	○	×	○	○	×	暗茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅・不明・一部底面に磨き跡を認める		剥落や磨滅を確認・不明		
	295		○	○	×	○	○	△	明赤茶褐色	暗灰茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
	296		○	○	×	○	○	△	暗茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		磨滅や磨滅のために不明		
	297		○	○	○	○	○	△	明赤茶褐色	明褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		磨滅や磨滅のために不明		
	298		○	○	×	○	○	○	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデを認める		
第 33 図	299	V	○	○	×	○	○	○	明黄褐色	明褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・一部に篋状工具によるナデを認める		剥落や磨滅が激しい・不明		厚4
	300		○	○	○	○	○	○	赤茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が激しい・不明		
	301		○	○	○	○	○	△	明茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・一部に磨き跡を認める		剥落や磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデを認める		
	302		○	○	×	×	○	×	茶褐色	暗赤茶褐色	一部に剥落や磨滅・一部に篋状工具によるナデを認める		剥落や磨滅を受ける・不明		
	303		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅・一部に篋状工具によるナデか		磨滅を受ける・一部に篋状工具によるナデか		
	304		○	○	×	○	○	○	赤茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	305		○	○	×	○	×	明灰褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が激しい・不明			
	306		○	○	×	○	○	○	明褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	307		○	○	○	×	○	×	明茶褐色	黒灰褐色	一部に剥落や磨滅・一部に篋状工具によるナデを認める		剥落や磨滅を受ける・不明		
	308	V	○	○	○	×	○	○	赤茶褐色	明黄茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		厚5
	309		○	○	×	○	○	△	明茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	310		○	○	○	×	○	△	茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	311		○	○	×	×	○	○	茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が激しい・不明		
	312		○	○	×	○	○	△	茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	313		○	○	×	○	○	△	淡明褐色	明灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	314		○	○	×	×	○	×	明灰褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が激しい・不明		
	315		○	○	×	○	○	△	明茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	316		○	○	×	○	○	△	明茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
	317		○	○	×	○	○	△	赤茶褐色	灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
	318		○	○	×	×	○	△	明灰褐色	明灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
319		○	○	×	×	○	△	赤茶褐色	灰褐色	磨滅が著しい・不明		磨滅が著しい・不明			
320		○	○	○	×	○	△	明褐色	明褐色	磨滅を受ける・不明		磨滅を受ける・不明			
321		○	○	×	×	○	△	明茶褐色	淡褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
322		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明灰黒褐色	若干の磨滅を受ける・篋状工具によるナデか		若干の磨滅を受ける・篋状工具によるナデか			
323		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
324		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	磨滅を受ける・不明		磨滅を受ける・不明			
325		○	○	×	○	○	△	明褐色	明褐色	磨滅を受ける・不明		磨滅を受ける・不明			
326		◎	○	×	○	○	△	淡灰褐色	淡褐色	磨滅を受ける・不明		磨滅を受ける・不明			
327		○	○	×	×	○	○	茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
328		○	○	○	×	×	茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明				
328		○	○	○	×	○	△	赤茶褐色	明茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
第 34 図	329	V	○	○	×	×	○	×	明赤茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		薄1
	330		○	○	×	○	○	△	明灰黒褐色	明褐色	磨滅を受ける・不明		磨滅を受ける・不明		
	331		○	○	×	○	×	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅が著しい・不明			
	332		○	○	×	×	○	△	赤茶褐色	黒褐色	磨滅を受けるが一部に磨き跡を認める		磨滅を受ける・不明		
	333		○	○	×	○	○	△	明褐色	明灰黒褐色	大きく剥落を受け器壁が薄い・磨滅を受ける・不明		大きく剥落を受け器壁が薄い・磨滅を受ける・不明		
	334		○	○	×	○	○	△	明赤茶褐色	明茶褐色	剥落を受ける・篋状工具によるナデか		剥落や磨滅を受ける・不明		
	335		○	○	×	○	×	明茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
	336		○	○	○	×	○	○	明黒褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	337		○	○	×	×	○	△	暗茶褐色	灰黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明		
	338		○	○	×	×	○	×	明茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	339		○	○	×	×	○	△	赤茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	340		○	○	×	○	×	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明			
	341		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	明茶褐色	若干の磨滅を受ける・不明・篋状工具によるナデを認める		若干の磨滅を受ける・不明・篋状工具によるナデを認める		
	342		○	○	○	×	×	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨滅を認める・不明		剥落や磨滅を認める・不明			
	343		○	○	×	○	○	△	明茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・篋状工具によるナデを認める		剥落や磨滅を受ける・不明		
	344		○	○	×	×	○	△	赤茶褐色	黒褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	345		○	○	○	×	○	○	明黄茶褐色	明褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
346		○	○	×	○	○	△	明黄褐色	明灰褐色	一部に剥落や磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか		一部に剥落や磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか			
347		○	○	×	○	○	○	明茶褐色	明茶褐色	一部に磨滅・ナデ・一部に篋状工具によるナデを認める		一部に剥落や磨滅・不明・一部に篋状工具によるナデか			

第9表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(7)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類	
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面		内 器 面		
第 34 図	348		○	○	×	○	○	△	明赤茶褐色	暗赤茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		薄2
	349		○	○	×	○	○	○	明褐色	明茶褐色	一部に磨滅・ナデ・一部に篋状工具によるナデを認める		大半が磨滅・一部に篋状工具によるナデか		
	350		○	○	○	×	○	×	赤茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
	351		◎	○	×	×	○	△	明褐色	暗黒褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明		
	352	V	○	○	◎	×	○	△	明褐色	明灰茶褐色	剥落が著しい・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
	353		○	○	○	×	○	△	茶褐色	暗茶褐色	剥落が著しい・不明		剥落や磨滅を確認・不明		
第 35 図	354		○	○	○	×	○	△	明赤茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅のために不明		薄3
	355	V	○	○	○	×	○	△	明赤茶褐色	明灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	356		○	○	×	○	○	×	赤茶褐色	赤茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	357		○	○	×	○	○	△	淡茶褐色	灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明・一部に篋状工具によるナデか		一部に磨滅を受ける・不明		
	358		○	○	×	○	○	△	明黄褐色	明黄褐色	剥落を受ける・不明		磨滅を受ける・不明		
	359		○	○	○	×	○	△	黄茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	360		○	○	×	○	○	△	明赤茶褐色	明褐色	剥落を受ける・不明		磨滅を受けている・不明・一部に篋状工具によるナデを認める		
	361	V	○	○	○	×	○	△	赤茶褐色	暗灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	362		○	○	×	○	○	×	明黄茶褐色	暗灰褐色	一部に磨滅・ナデ・一部に篋状工具によるナデを認める		一部に磨滅・篋状工具によるナデか		
	363		○	○	○	○	○	○	灰赤褐色	灰褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	364		○	○	×	○	○	○	淡赤茶褐色	明褐色	磨滅を受ける・不明・篋磨きの痕跡を残す		磨滅を受ける・不明		
365		○	○	×	○	○	△	茶褐色	灰褐色	剥落や磨滅・一部に篋状工具によるナデを認める		剥落を受ける・不明			
366		○	○	○	×	○	△	灰褐色	暗灰褐色	一部に剥落を受ける・不明・一部に篋磨きの痕跡を認める		一部に磨滅を確認・篋磨きの痕跡を認める			
367		○	○	○	×	○	○	明茶褐色	灰褐色	剥落が著しい・不明		一部に磨滅や剥落を確認・篋磨きの痕跡を認める			
368		○	○	○	×	○	○	灰褐色	黒褐色	全体的に磨滅を受ける・篋磨きの痕跡を顕著に残す		磨滅を受けている・本来は篋磨きか			
369		○	○	○	×	○	△	赤茶褐色	明褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅のために不明			
370		○	○	×	×	○	○	茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明・一部に篋状工具によるナデを認める			
371		◎	◎	×	○	○	△	赤茶褐色	灰褐色	剥落や磨滅が著しい・不明		剥落や磨滅が著しい・不明			
372		○	○	×	×	○	△	明赤茶褐色	明灰茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅のために不明			

第10表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(8)

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出 土 層 位	胎 土 焼					色 調		調 整		文 様		分 類	
			石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	砂 粒	成	外 器 面	内 器 面	外 器 面		内 器 面		
第 79 図	926	II	○	○	○	○	○	○	明茶褐色	明赤茶褐色	剥落や磨滅を大きく受ける・不明・一部に刷毛目の調整痕を僅かに残す		剥落や磨滅を受ける・不明・部分的に刷毛目の調整痕を僅かに残す		VII
	927	・	○	○	×	○	○	○	茶褐色	茶褐色	剥落や磨滅が著しい・不明・刷毛目の調整痕を部分的に残す		磨滅や一部に剥落を受ける・不明・一部に刷毛目調整を確認		
	928	III	○	○	×	○	○	○	赤茶褐色	明黄褐色	一部に磨滅を受ける・不明・刷毛目の調整の痕跡をとどめる		一部に磨滅を受ける・不明・刷毛目の調整を確認する		
	929		○	○	×	○	○	△	明茶褐色	黒茶褐色	剥落や磨滅を受ける・不明		剥落や磨滅を受ける・不明		
	930		○	○	×	○	○	○	淡赤褐色	淡赤褐色	磨滅を受ける・鮮明さに欠けるがナデ・赤色顔料塗付		磨滅を受けている・不明・一部に刷毛によるナデを認める		
	931		○	○	○	×	○	○	赤褐色	淡褐色	磨滅を受ける・鮮明さに欠けるがナデ・一部に赤色顔料塗付		磨滅を受けている・不明・一部に刷毛によるナデか		
	932		○	○	×	○	○	×	明黄褐色	明黄褐色	磨滅が著しい・不明・刷毛目状の工具による斜位のナデ		磨滅・不明・篋削りの痕跡を鮮明に残す		
	933		○	○	○	○	○	○	明黄褐色	明黄褐色	磨滅が著しい・不明・刷毛目状の工具による斜位のナデ		磨滅・不明・篋削りの痕跡を鮮明に残す		
	934		○	○	×	○	○	○	淡赤茶褐色	明褐色	剥落や磨滅を著しく受ける・不明・一部にナデの痕跡		剥落や磨滅を著しく受ける・不明・一部に篋削りの痕跡か		
	935		○	○	○	×	○	○	茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を著しく受ける・不明		剥落や磨滅を著しく受ける・不明		
	936		○	○	○	×	○	△	赤茶褐色	暗茶褐色	剥落や磨滅を著しく受ける・不明・一部にナデの痕跡か		剥落や磨滅を著しく受ける・不明・不鮮明であるが篋削りの痕跡か		
937		○	○	○	×	○	○	明赤桃色	灰黒褐色	剥落が著しい・不明・篋削りの痕跡を随所に残す		磨滅や剥落が著しい・不明			
第 80 図	943	II	×	×	×	×	×	○	明灰白色	暗灰白色	丁寧なロクロ調整		磨滅を受けている・鮮明さに欠けるが、本来はロクロ調整か		VIII
	944	・	×	×	×	×	×	○	灰白色	明灰色	丁寧なロクロ調整を施す		磨滅のために不明		
	945	III	×	×	×	×	×	○	明灰白色	灰白色	丁寧なロクロ調整を施す		丁寧なロクロ調整を施す		
	946		×	×	×	×	×	○	明灰白色	暗灰白色	丁寧なロクロ調整を施す		ロクロ調整を施す		
	947		×	×	×	×	×	○	灰白色	灰白色	丁寧なロクロ調整を施す		丁寧なロクロ調整を施す		
	948		×	×	×	×	×	○	明灰白色	暗灰色	縛状の突帯を持つが剥がれている・丁寧なロクロ調整を施す		ロクロ調整を施す		
	949		×	×	×	×	×	○	明灰色	灰色	丁寧なロクロ調整		鮮明さに欠けるが、本来はロクロ調整か		
	950		×	×	×	×	×	○	灰赤茶色	青灰色	丁寧なロクロ調整を施す		丁寧なロクロ調整を施す		
	951		×	×	×	×	×	○	明灰白色	暗灰色	格子状の叩き		指頭による調整		
	952		×	×	×	×	×	○	明赤茶褐色	明灰茶褐色	篋状工具による研磨を施す		板目状の叩きによる調整を施す		

(2) 出土石器

沖田岩戸遺跡出土の石器は、IV層及びV層の縄文晩期の遺物包含層を中心に、そのほとんどが縄文晩期の黒川期や入佐期該当の土器などと共に出土した。石器には、磨製石斧・打製石斧・打製石器・礫器・削器・石核・石槌・敲石・磨石・凹石・大型棒状石器・石皿・打製石鏃・尖頭状石器・石匙・石錘・スクレイパー・楔形石器・異形石器・研磨痕のある礫・両面加工石器・使用痕剥片・剥片・石核など多種多様なものが出土した。

1. 磨製石斧 (第36図～第38図)

磨製石斧は、破損品を含めて多く出土したが、特徴的な19点を図示した。石材は、安山岩・砂岩・蛇紋岩・頁岩などを素材とし、器種には乳棒状石斧・定角状石斧・局部磨製石斧・ノミ状石斧がみられた。

373は敲打により整形し、入念な研磨で刃部は蛤刃に、基部は乳棒状に仕上げている。側辺部には敲打痕がみられる。**374**は砂岩を素材に用い、敲打により整形を施し、基部を乳棒状に刃部は入念な研磨で片刃にし、刃縁には使用による剥離痕がみられる。側辺部には敲打痕が残る。

375は基部を欠損しているが、入念な研磨を全体に施し、両側縁は縦方向の研磨によって整形されている。刃部は蛤刃の定角式石斧である。**376**は蛇紋岩を素材にし、片側縁部を交互剥離により短冊状に施し、入念な研磨で仕上げている。刃部は蛤刃である。**377**は安山岩を素材に、側縁部を交互剥離により短冊状に整えたもので、刃部は片刃で使用痕が認められる。**378**は蛇紋岩の自然礫を利用した小型の磨製石斧である。基部は欠損しているが、側縁部を交互剥離により定角状に整形したもので、裏面は一部剥脱がみられるが、刃部は片刃で表裏面とも入念な研磨が施されている。

379は安山岩を素材にした小型の定角状石斧である。両側縁および頭部が研磨されたもので、石斧主面とのあいだに稜を作り、断面は隅丸長方形となる。刃部は蛤刃である。**380**は安山岩の剥片を素材とし、交互剥離・研磨によって定角状にしたもので、突出部は敲打により整形している。片面のみ横方向の研磨をおこない片刃状に刃部を形成している。**381**は基部を欠損しているが、安山岩の剥片を素材にした短冊状のものである。研磨によりやや片刃の刃部を持つ扁平石斧である。

382は基部・片側縁部を欠損しているが、蛇紋岩を素材にした短冊状のものである。研磨によりややあまい刃部を形成している扁平石斧である。**383**は基部が欠損しているが、安山岩の剥片を素材にした短冊状のものである。両側縁部を研磨により定角状に整形している。刃部は片刃である。**384**は青灰色を呈する蛇紋岩を素材にした小型の磨製石斧である。両側縁部を研磨により定角状に整形している。刃部はやや片刃で刃縁には使用痕と思われる剥離痕がみられる。**385**は安山岩の剥片を素材にした扁平石斧である。片側縁部には研磨による稜がみられ、刃部は片刃である。**386**は粘板岩を素材にし、両側縁部・刃部を入念な研磨により定角状に整形している。刃部はやや片刃である。**387**は扁平な安山岩礫を素材にし、両側縁部・刃部を交互剥離により整形を施している。刃部には使用痕が認められる。表裏面とも研磨による整形がおこなわれている。**388**は刃部を欠損した灰褐色を呈する蛇紋岩を素材に、研磨により短冊状に整形したものである。頭部および両側縁部の研磨が顕著である。**389**は蛇紋岩を素材とした定角状石斧である。入念な研磨により側縁部には稜を残したもので、刃部はやや片刃である。

390は刃部と基部が一部欠損しているが、頁岩を素材にしたノミ形石斧である。基部調整は施さず自然面を残している。湾曲した背面を利用し片刃の刃部を形成している。全体的に入念な研磨が認められる。

打製石斧（第38図～第41図）

破損品も含めて多くの打製石斧が出土したが、特徴的な46点を図示した。石材は、安山岩・粘板岩・珪質頁岩・頁岩が素材となり、器種には短冊状石斧・有肩石斧がみられた。

391～403は短冊形を呈した打製石斧である。

391は刃部を欠損しているが、安山岩剥片を素材に基部・側縁部を調整剥離により整形している。表裏面とも磨耗による光沢がみられる。392は粘板岩を素材にし、交互剥離を施し短冊状に整形している。側縁部には調整のための敲打痕が部分的にみられる。刃部は両刃で刃縁には使用による磨滅がみられる。393・394は一部基部が欠損しているが、安山岩を素材に側縁部を交互剥離で整形している。刃部は片刃である。395は頁岩の剥片を素材にしたやや内面に湾曲した側縁部をもつ短冊状石斧である。刃部には使用による磨滅がみられる。396の側縁部は交互剥離による調整を施し、刃部は使用により斜刃になつている。397は珪質頁岩を素材にし、自然面をうまく利用して基部・刃部を整形している。側縁部は交互剥離による調整を施している。円刃で片刃の刃部であり、一部に研磨痕がみられる。398は基部が欠損しているが、頁岩の剥片を素材に自然面を利用した側縁部である。刃部は片刃で使用痕がみられる。399は基部・刃部の欠損した側縁部であるが、剥離および敲打によって整形している。石材は頁岩を利用している。400は安山岩の剥片を素材にしている。全体的に風化によると思われる磨滅がみられ、刃縁には使用痕がみられる。401は珪質頁岩を素材に用い、両側縁部は調整剥離で整え、基部は敲打により整形している。刃部は片刃で使用による剥離が著しい。402は目の粗い輝石安山岩を素材にした基部と刃部の欠損した短冊状石斧である。側縁部は交互剥離によって調整が施されている。403は基部の欠損した交互剥離により側縁部を整えた短冊状のものである。刃部は両刃で使用による磨滅がみられる。

404～416は基部下位に抉りを施した分銅形石斧とか有肩石斧と呼ばれるものである。

404は全面打製による調整を施し、下位3分の2位から屈曲した靴形石斧と呼ばれるものである。刃部は直刃で磨滅し、片刃である。405は刃部を欠損しているが、基部は自然面を利用し、側縁部は剥離調整したものである。406は安山岩剥片を素材にしたもので、基部が幅広く、抉入部より下位は短冊状にしたものである。刃部は片刃の円刃で磨滅がみられる。407は卓球のラケット状を呈しているもので、刃縁は使用によって円刃から斜刃に磨滅したものであると思われる。408は靴形石斧で刃部は欠損している。409は刃部が欠損しているが、安山岩の剥片を素材にした片面に自然面を多く残したものである。410は基部・刃部が一部欠損しているが、靴形石斧である。側縁部は交互剥離によって調整を施している。

413～416は抉りのみられる刃部が欠損している基部である。

417は基部を欠損した安山岩素材の短冊状石斧で、側縁は交互剥離で調整を施している。刃部は円刃で使用による磨滅がみられる。

418は基部を欠損しているが、側縁部は交互剥離によって調整を施した靴形石斧である。刃部は片刃である。419は頁岩の薄手の剥片を素材にしたもので、ラケット状を呈し側縁部は交互剥離により調整している。420も基部・刃部が欠損しているがラケット状を呈していると思われる。側縁部は剥離調整と敲打により整形している。421も安山岩の剥片を素材にしたラケット状のものである。刃部には使用による磨滅がみられる。422・423は表面に原礫面を残し、全体的に斧身が薄い。刃部は片刃で使用痕がみられる。426は基部・刃部が欠損しているが、基部下位に抉りを施した有肩石斧である。427は小型の扁平石斧である。あらいタッチで全周を整形し、刃部は片刃である。

428は基部を欠損しているが、片刃の打製石斧である。430は基部・側縁部を一部欠損しているが、側縁部を剥離調整した片刃の打製石斧である。431は基部を欠損した安山岩礫を素材にしたもので、刃部は斜刃を呈す。432は粘板岩を素材にした扁平石斧で円刃をなす。基部は欠損している。433は安山岩礫を素材にした大型の撥状を呈する打製石斧である。表裏面に原礫面を残し、基部・側縁部とも調整剥離を施している。刃部も交互剥離で整形し、使用により円刃に成っている。

434は打製石斧の基部であるが、剥離面は磨耗により不鮮明である。435も磨耗が激しいが、刃部は使用により円刃をなしている。

打製石器

423・429は長辺部から側縁部にかけて交互剥離による整形を施した横刃型石器と呼ばれるものである。436も同様のもので、刃部には使用によると思われる潰れがみられる。425は安山岩礫を素材にした円盤状を呈した打製石器である。一部欠損しているが、刃部に敲打痕がみられることや形態から楔形石器の可能性もある。437は円盤状を呈した石器で、425同様刃部に潰れ痕があり楔形石器と考えられる。438も楕円形を呈しているが楔形石器と考えられる。439は粘板岩の剥片を素材にした円盤状を呈した石器である。440は安山岩の扁平礫を素材にしたもので、一部欠損しているが、長軸方向に剥離痕があり、これも楔形石器と思われる。

礫器

442～447・452は安山岩の大型扁平礫の一部に打撃を加え、簡単な加工を加えた礫器である。442・443は板状礫の一側縁部に剥離調整を直刃に施している。444はやや小型であるが同様の剥離痕がみられる。445は扁平礫を折断し、両側縁部に内湾した刃部を施している。446は一部欠損しているが、両側縁部に加工を施し整形している。447は片面からの剥離により刃部を形成している。450は砂岩で楕円形の大型扁平礫の下端に打撃を加え、簡単な加工を加えた礫器である。使用による刃潰れがみられる。451も同様の礫器で頁岩を素材にしている。452は断面形が楔形を呈し、基部に敲打痕がみられることから楔形石器の可能性もある。刃部には刃潰し痕がみられる。

削器

440・448はハリ質安山岩の横剥ぎ剥片を素材にしたもので、両側縁部に片面からの調整剥離を施した削器である。449はハリ質安山岩の剥片である。

石核

453・454は頁岩の石核である。454は表面に研磨痕がみられ、磨石の再利用と思われる。

石槌

455～459は磨製石斧の基部の再生を想定させる形態であるが、本遺跡から出土した中に同様の石斧が見つからないことから、再生でなく石槌の目的で整形されたものと考えられる。石材には硅質頁岩・砂岩・花崗岩・ホルンフェルスがみられる。

455は底面の平坦部を欠損しているが、両側縁部を敲打により整形し、入念な研磨を加えたものである。基部平坦部には敲打痕がみられ、また研磨痕もみられる。456も同様のものである。457も同様のものであるが両側縁部にも敲打痕がみられ、表裏面には浅い敲打による凹みがみられる。459は上下面とも敲打したのち、斜方向に磨面をもつものである。これは、石皿のうえでの上下の垂直運動および前後の水平運動をしたものと考えられる。側縁部は片面のみ敲打痕がみられる。

敲石・磨石・凹石

敲石・磨石・凹石は分類すべきであろうが、形態の類似性や痕跡の複合性によって分類が難しく同一の項で取り扱いたい。

棒状敲石

460～463は縦長の棒状円礫を素材にしたもので、ものの叩き割り、搗き碎きに用いたと思われる敲石である。460は安山岩の自然礫を素材に、上下端に敲打面がみられ使用によって平坦部をなして、全面に研磨痕がみられる。461は石槌に類似するもので、花崗岩を素材に用い、上下端に敲打痕と研磨痕がみられる。片側縁部にも敲打痕がみられる。461・462は一端部が欠損しているが、砂岩の円礫を素材に用い上端部と一側縁部に敲打痕がみられるものである。

小型扁平敲石

464～473は長径6 cm内外で砂岩・安山岩の小型の扁平礫を素材にした側縁部に敲打痕のある敲石である。断面は凸レンズ状を呈していて、研磨痕がみられ、磨石と兼用したものである。

小型扁平凹石

長径6 cm内外で砂岩・安山岩の小型の扁平礫を素材にした磨石を兼ねた凹石であるが、凹部が片面あるいは両面の中央部にみられるものである。

474は砂岩を素材に両面の中央部に浅い凹部をもつ。475は安山岩を素材にした片面の中央部に浅い凹部をもつものである。476は厚みのある砂岩の円礫を素材にしたもので、片面に浅い凹部を、片面には敲打痕を残している。側縁部にも部分的に敲打痕があり、全面には研磨痕がみられる。477は砂岩の扁平礫を素材にし、片面に浅い凹部を、平坦面になっている片面にはやや深い凹部があり、側縁部にも敲打痕がみられる。

敲石

478～484, 493～495, 497～499は、砂岩・安山岩・凝灰岩の扁平礫を素材にした側縁部に敲打痕のある敲石である。側縁部全周に敲打痕のみられるもの、一部にみられるものがある。すべて研磨痕がみられ磨石との兼用をなすものである。485は安山岩の円礫を素材にしたもので、上下端および側縁部に敲打痕がみられる。486～489は長径6 cm内外であるが断面がやや厚みがあり、敲打痕が側縁部全周に施されたものである。490～492は長方形を呈する扁平礫を素材に用いるものである。496は砂岩の円礫を素材にし、下端部の敲打が著しい。

磨石

500～515, 524は砂岩・安山岩・花崗岩の大型礫を素材にした磨石である。この大型に分類した磨石には、研磨紺のみを残す単一な機能をもつものであり、用途を考える上で参考になるものである。また、全面に入念な研磨を残すタイプすべてが欠損品であることも興味深い。

凹石・台石

521は安山岩の大型円礫を素材にしたもので、片面の平坦部中央に打痕点の集中による浅い凹部をもつものである。側縁部全周に敲打痕をもち、全面的に入念な研磨がみられるものである。大型の磨石の中で凹孔・敲打痕を残す唯一のものである。523は安山岩の楕円形の自然礫を敲打・研磨により整形したものである。両面に2個の浅い凹みをもち、両側縁部にも凹部をもつ凹石である。

516・522は安山岩の円盤状の扁平な大型礫を素材にした台石である。主体面は平坦であり、片面に敲打痕があるが、痕跡的にしか残されていない。

大型棒状石器

2kgを越す大型の長方形を呈す石器が4点出土した。磨石状・凹石状・石皿状を呈するものである。500は断面三角形の安山岩大型礫を素材にし、平坦面先端部に傾斜する研磨痕がみられる。また端部横には敲打痕も残っている。518は砂岩の大型礫を素材に、両端部に敲打痕が認められ一平坦面には凹みのみられる研磨痕が認められることから石皿との兼用も考えられる。519は安山岩の長方形大型礫を素材に、両端部を敲打整形し、一平坦面に打痕点の集中により5個の浅い凹部をもつ凹石に分類されるものである。520は長方形の安山岩角礫を素材に、両平坦面に凹みのみられる石皿である。

石 錘

525は安山岩の扁平な円礫を素材にしている。側縁部の中心付近を2・3箇所打ち欠き挟り部を作り出している。漁網錘と考えられる石器である。

石 皿

石皿は、破片を含めて多く出土したが、よく整形された8点を図示した。

526・530は、河原などによくある転石を素材として利用したもので、片側面に浅い窪みのみられるもので、全て欠損品である。531は、縁を残して中央が断面で弓状に深く窪むものである。

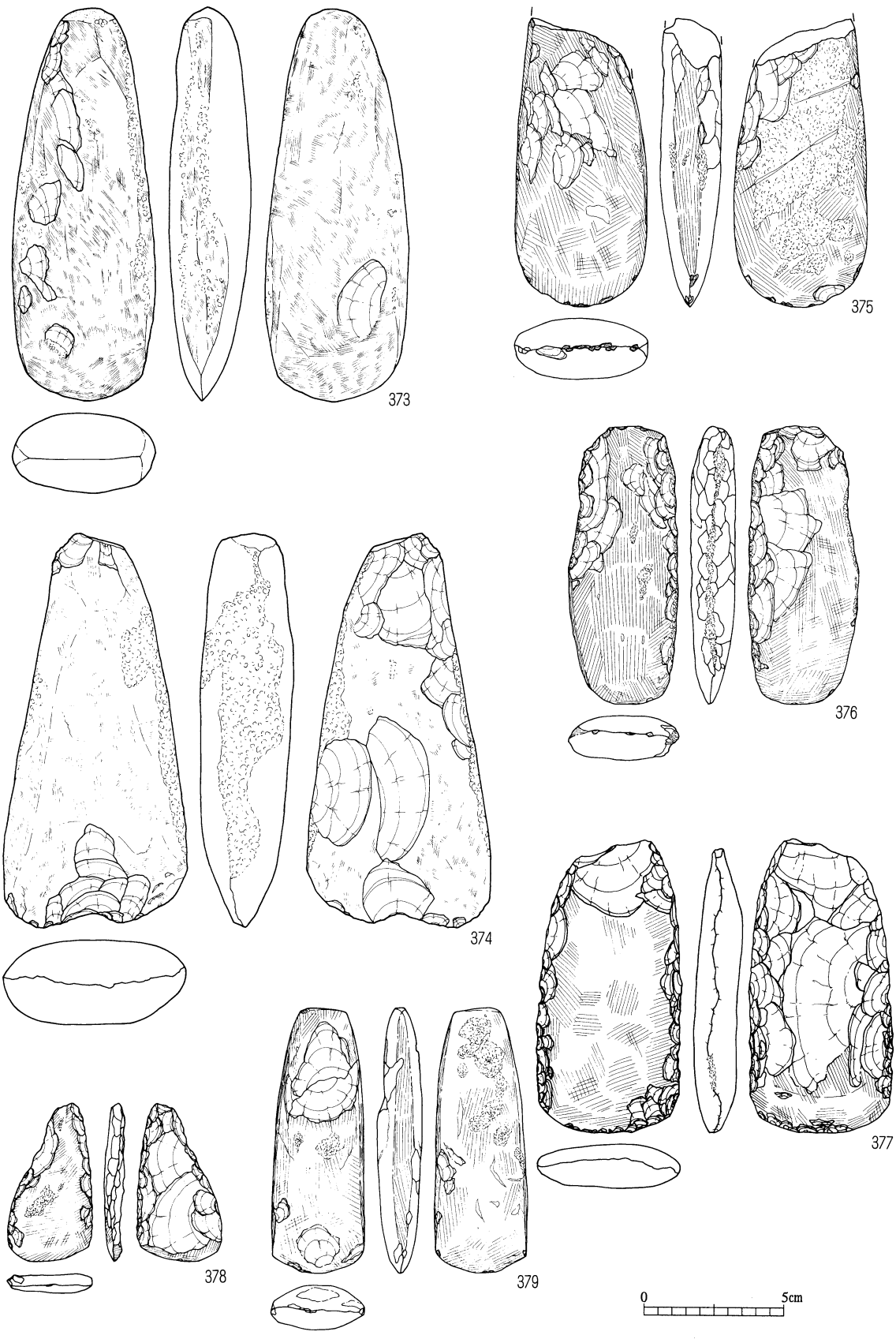
532は、板状の角礫を素材にしたもので、片側面に浅い研磨痕がみられる。唯一の完形品である。533は、砂岩の楕円形の河原石を素材に用いたもので、側縁部には敲打による整形がみられ、6箇所ほどに集中した敲打痕が残り窪みを作っている。また、深い窪みと浅い窪みを表裏にもつが、浅い窪み部には、有溝と敲打点がみられ、砥石としての兼用が考えられる石器である。

上記の石器のほか、管玉・小玉などの玉製品が出土した。レイアウト関係で、第80図に図化したのが、上記の縄文晩期の土器や石器とともに管玉2、小玉2が出土した。

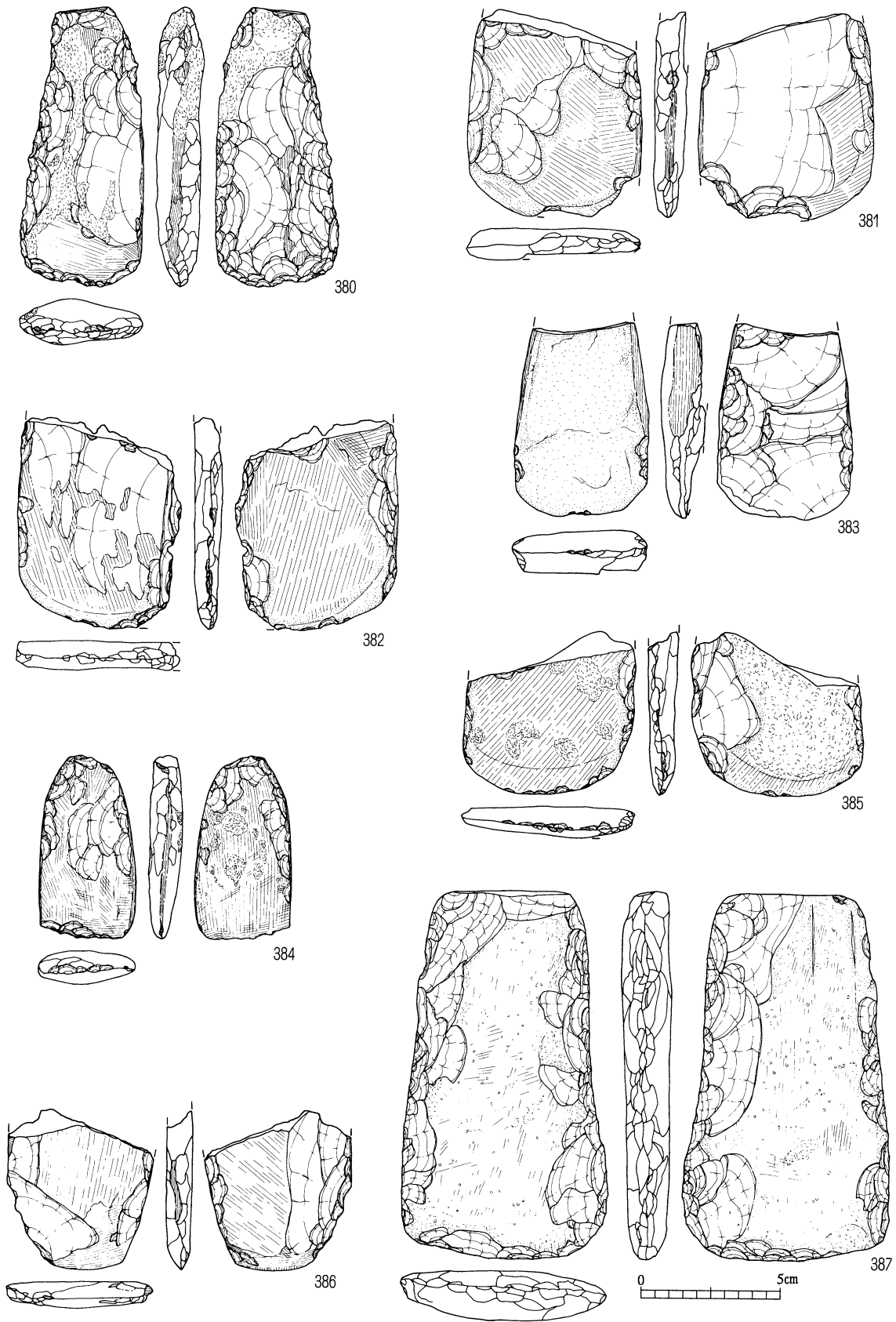
玉製品 (939～942)

939と940は、緑色を呈した管玉である。939は、長さ1.8cm、最大幅0.7cm、穿孔径0.25cmで、940は、長さ1.0cm、最大幅0.55cm、穿孔径0.25cmを測る。ともに緑泥変岩と考えられる素材を用いている。穿孔の方法は、片側からか両端から穿孔しているか判明できない。器面の調整は丁寧に研磨を施しているが、穿孔と調整とが、どちらが先行か不明である。

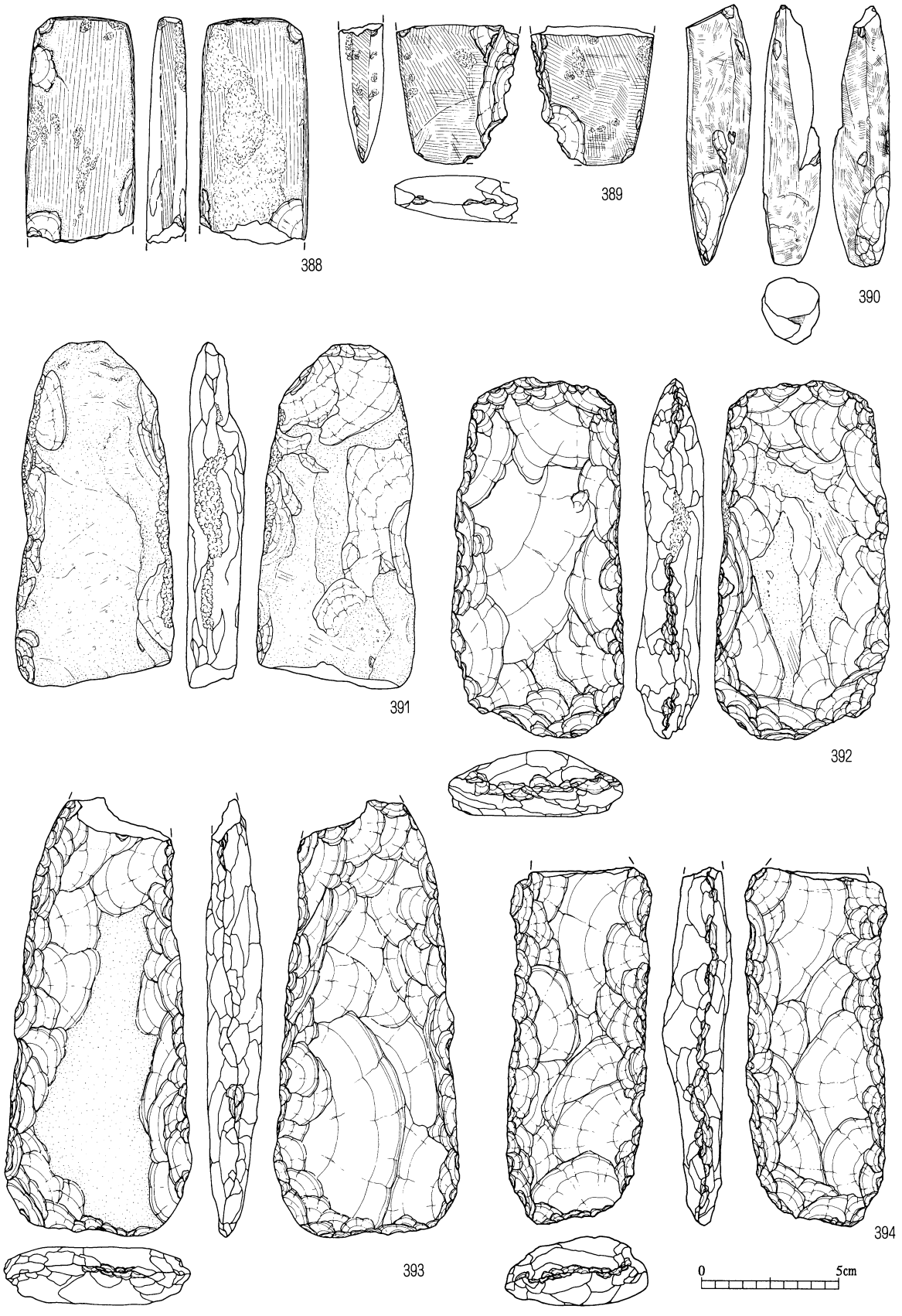
941と942は、緑色を呈した小玉である。941は、厚さ0.3cm、最大長0.7cm、穿孔径0.2cmで、942は、厚さ0.25cm、最大長0.55cm、穿孔径0.2cmを測る。ともに緑泥変岩と考えられる素材を用いている。穿孔の方法は、片側から穿孔しているが、穿孔と調整とが、どちらが先行か不明である。なお、942は、斜めに穿孔している。



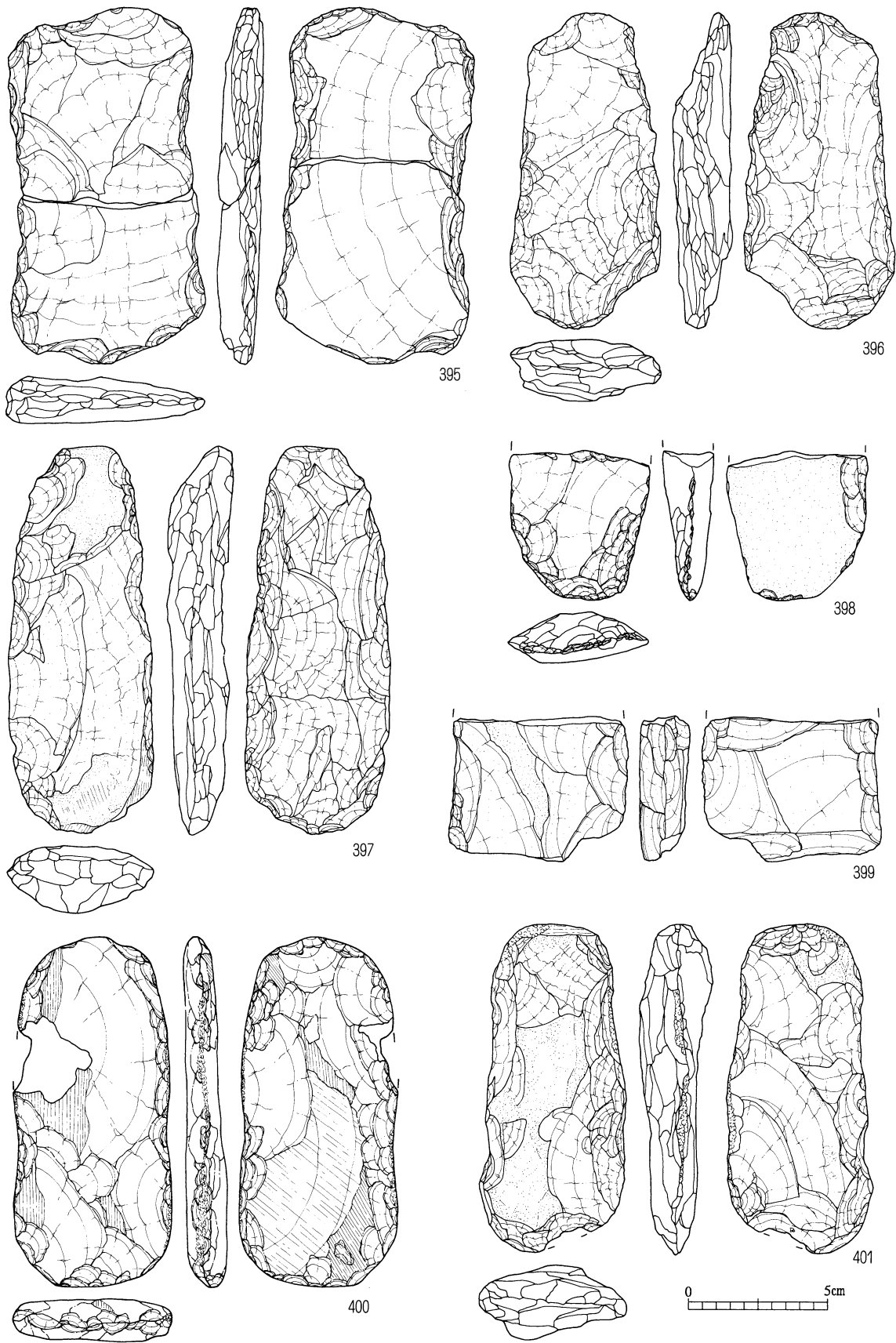
第36図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(29)



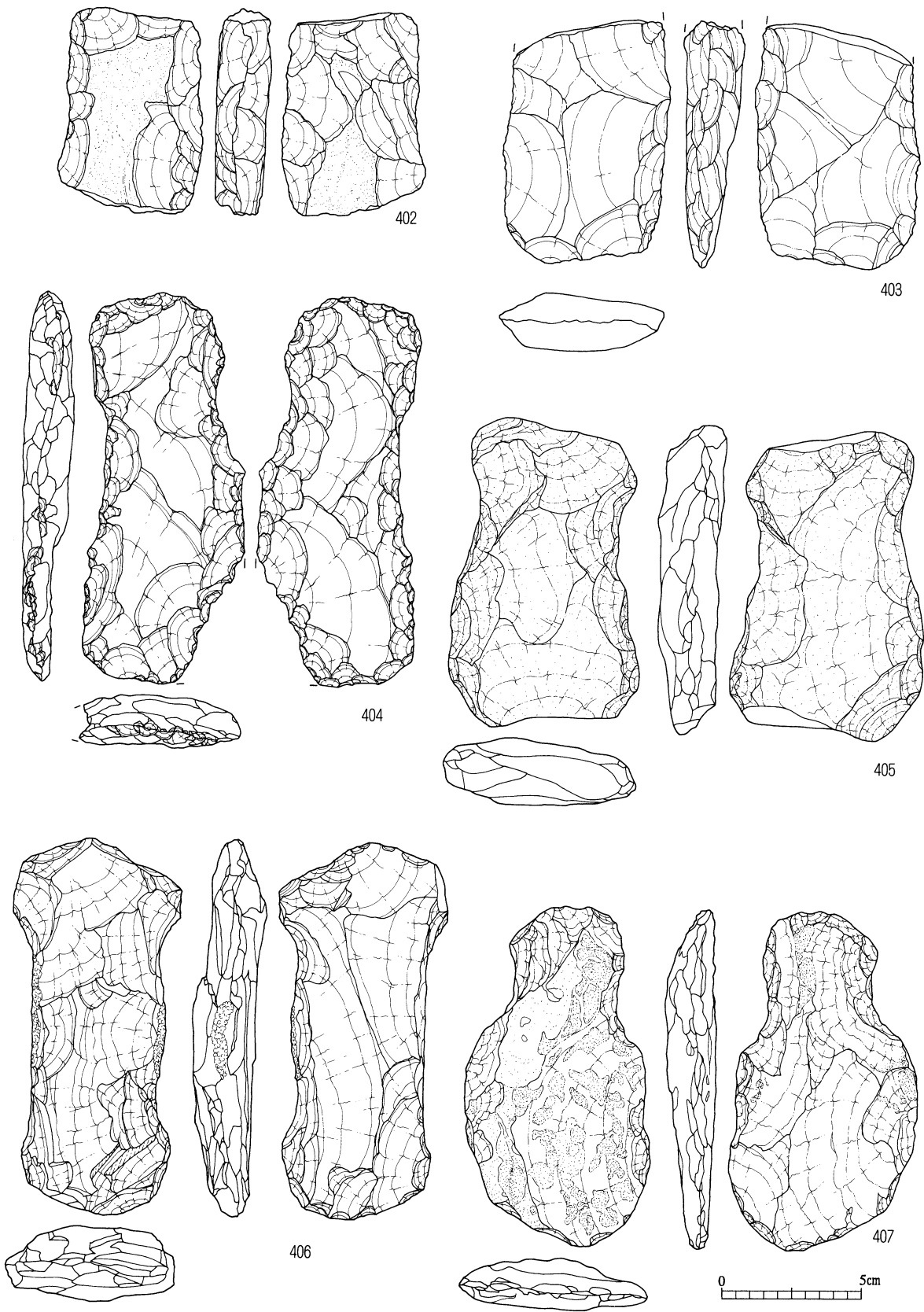
第37図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(30)



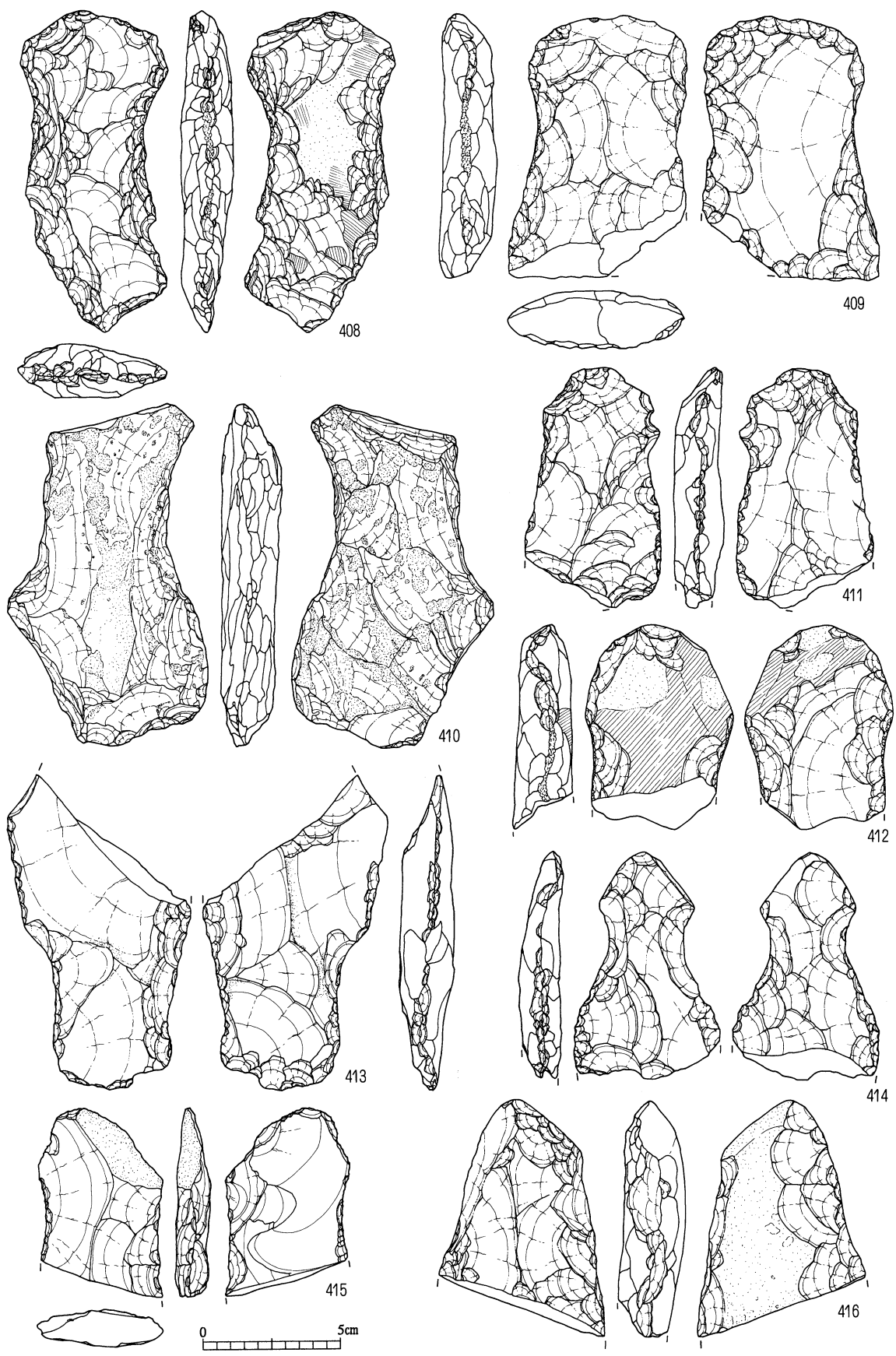
第38図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(31)



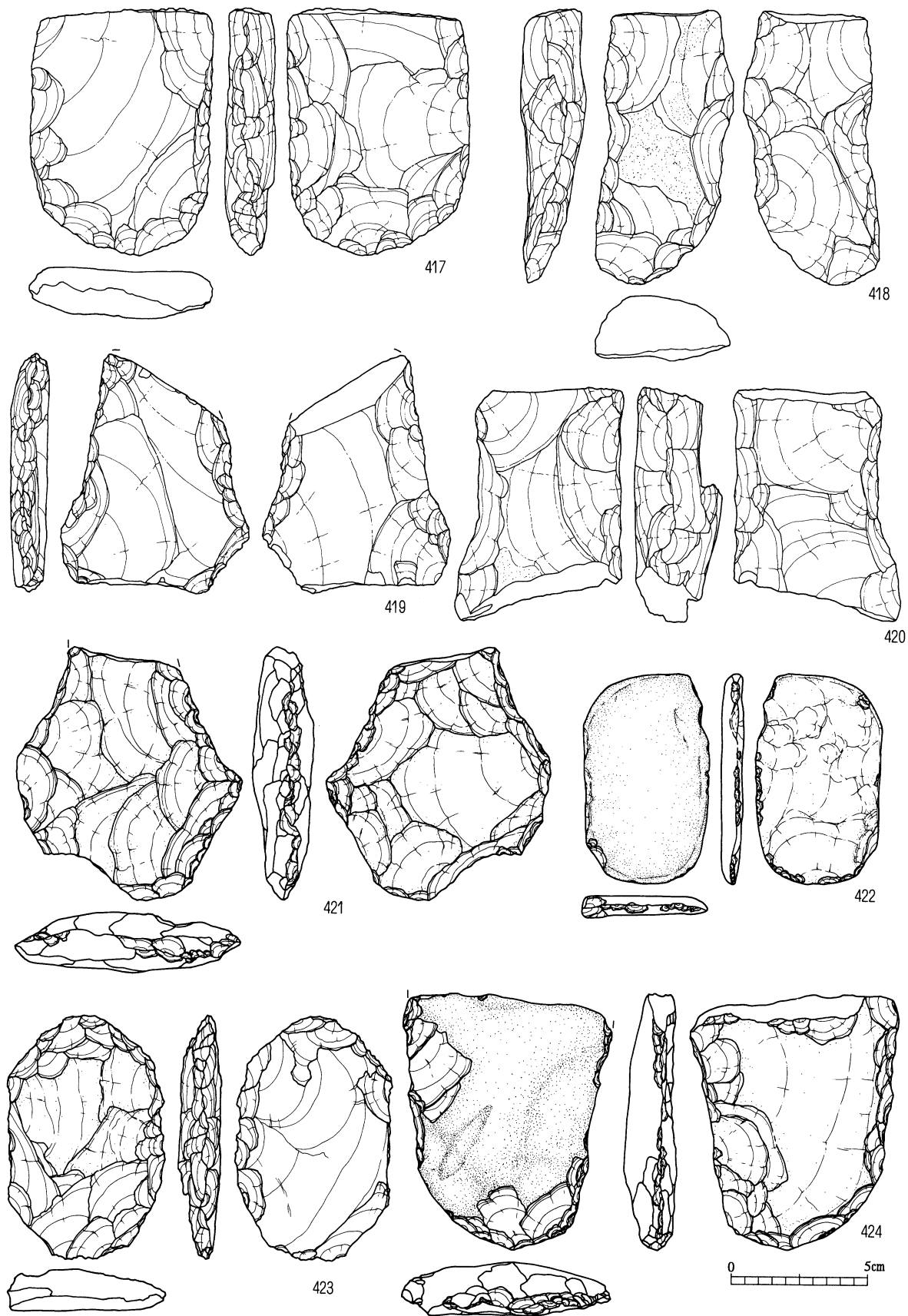
第39図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(32)



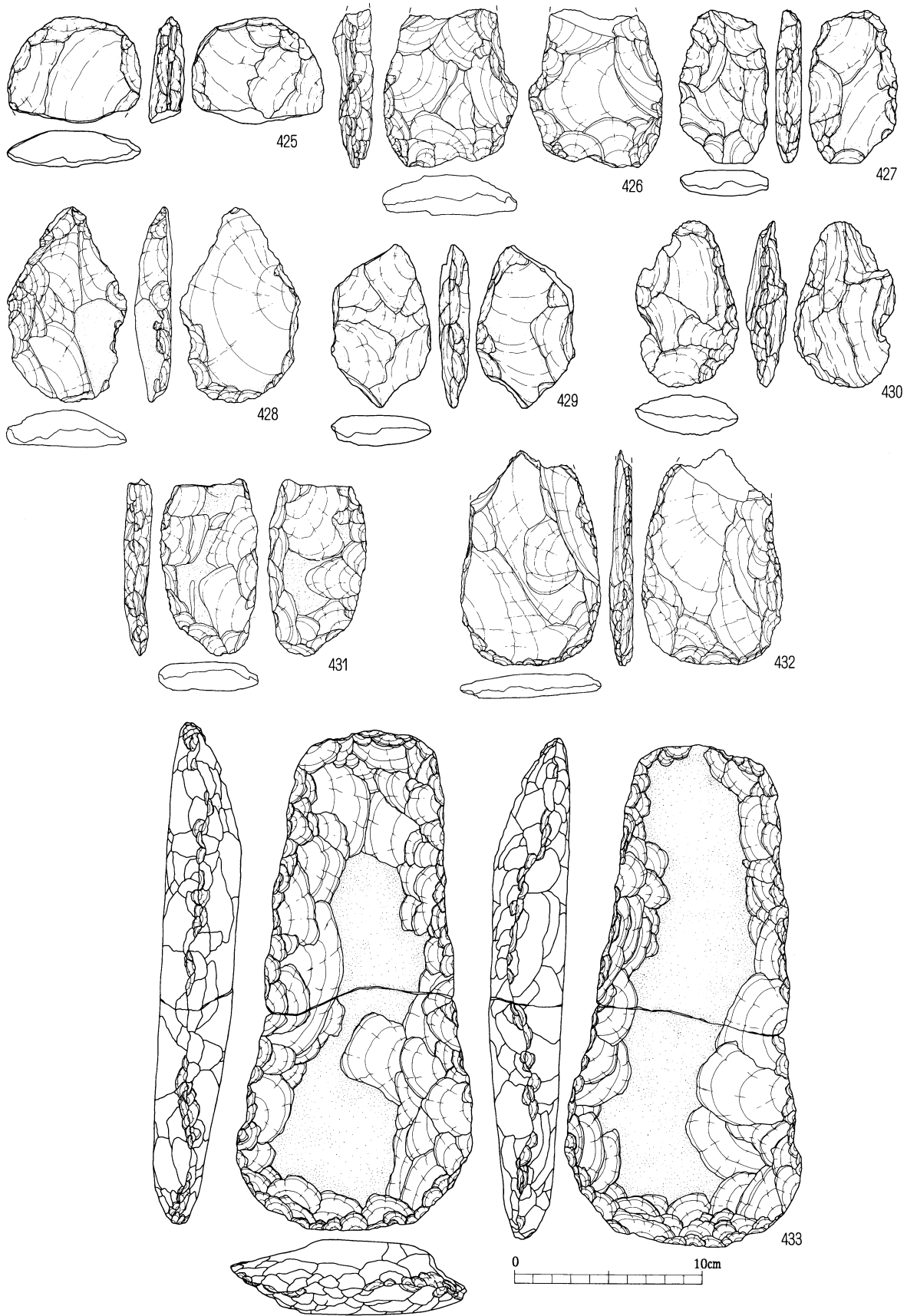
第40図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(33)



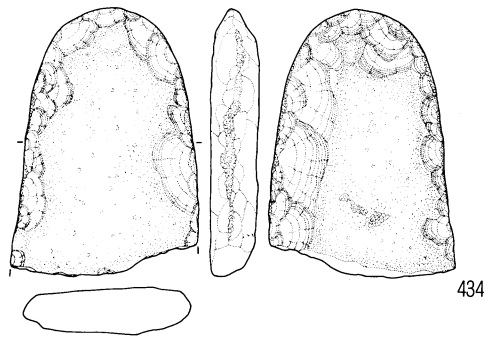
第41図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(34)



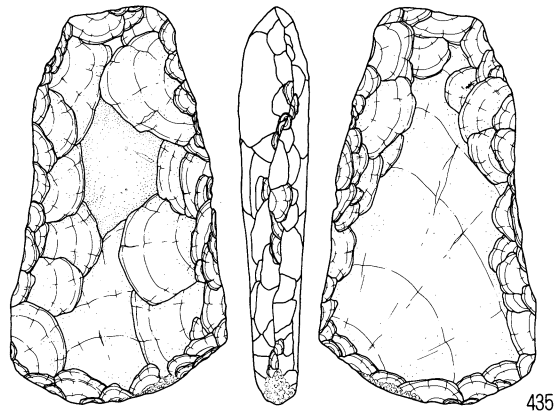
第42図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(35)



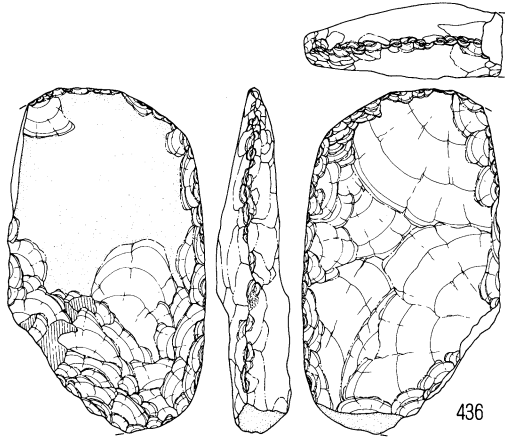
第43図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(36)



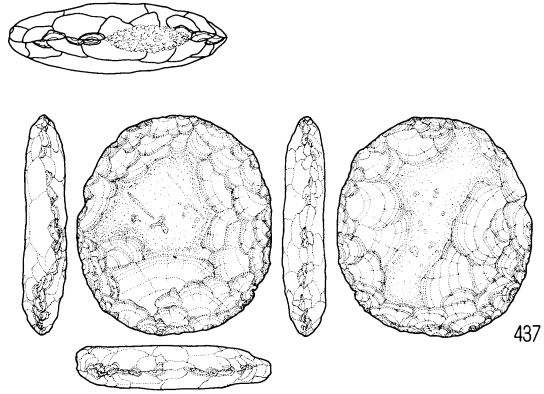
434



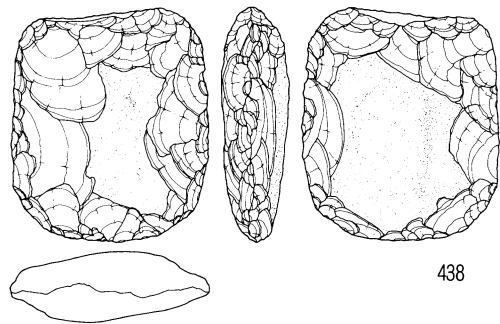
435



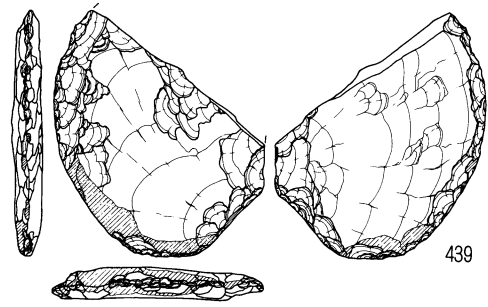
436



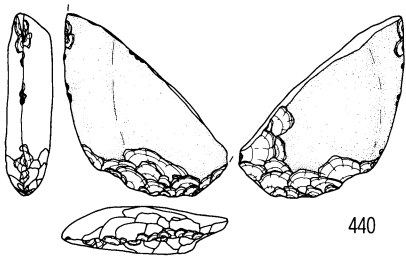
437



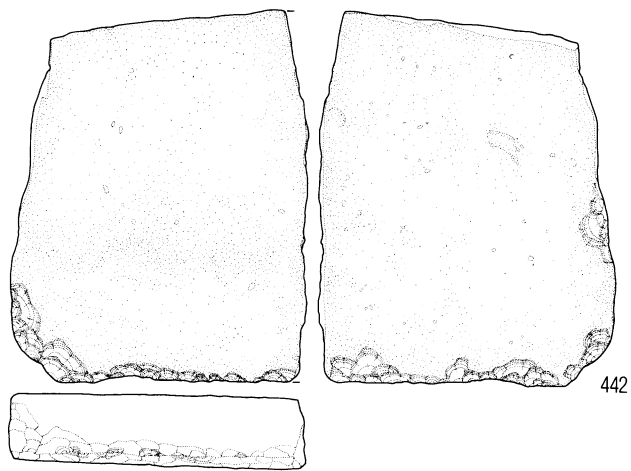
438



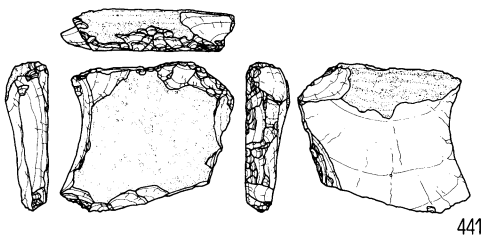
439



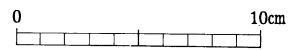
440



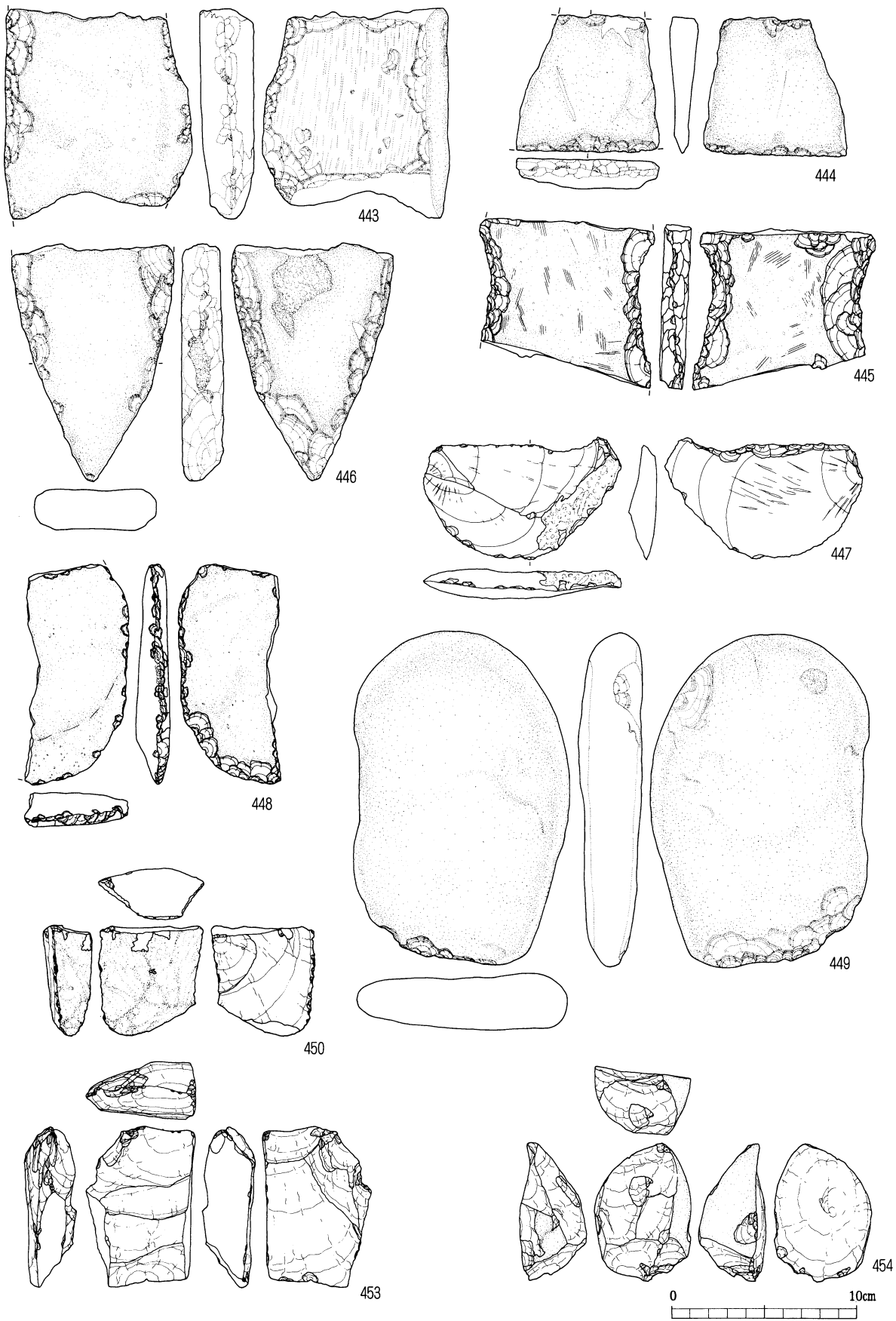
442



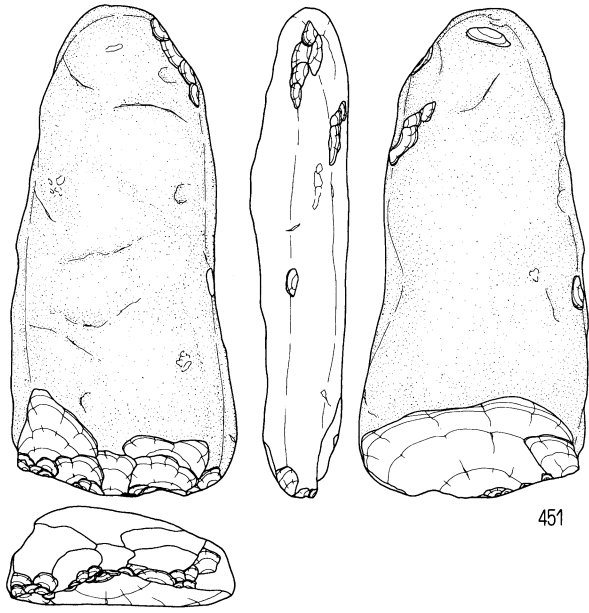
441



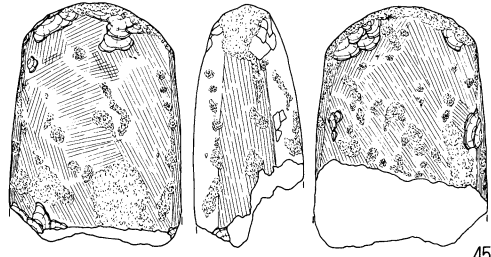
第44図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(37)



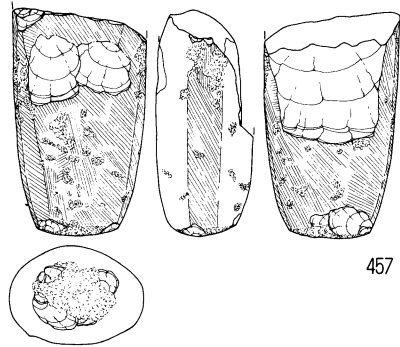
第45図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(38)



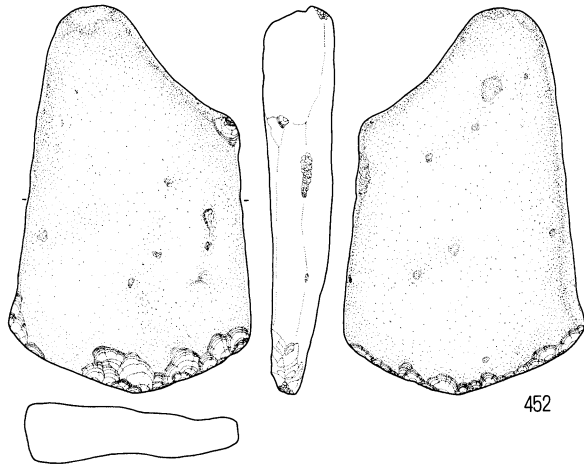
451



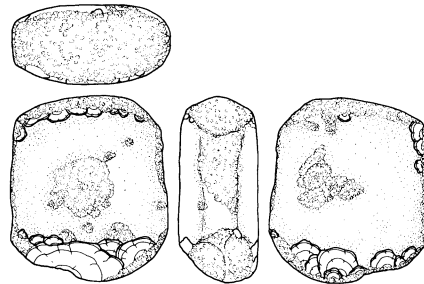
456



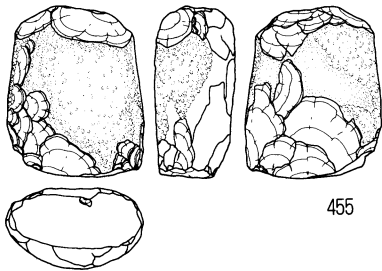
457



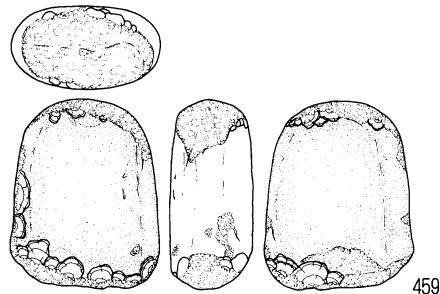
452



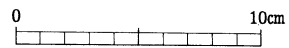
458



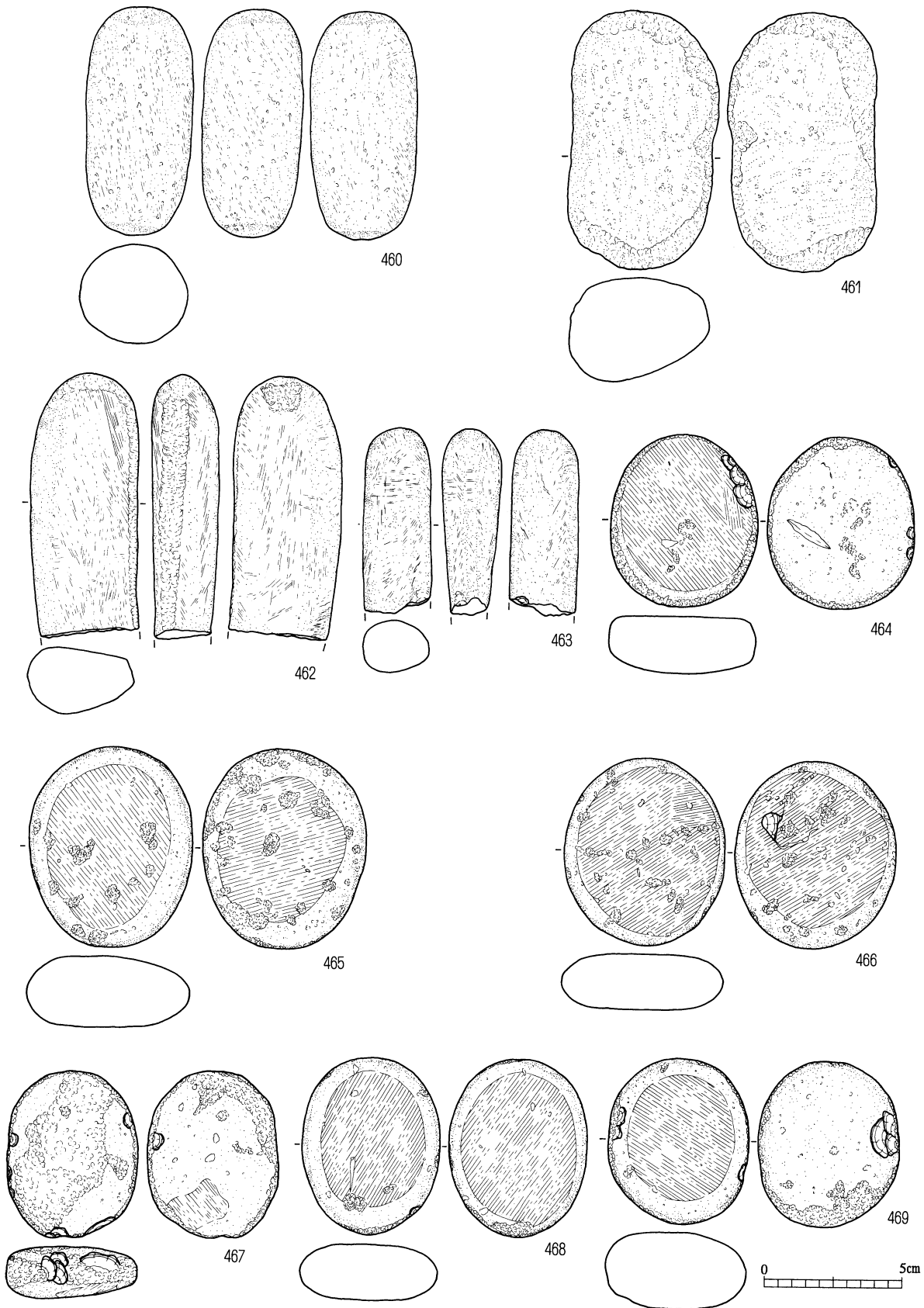
455



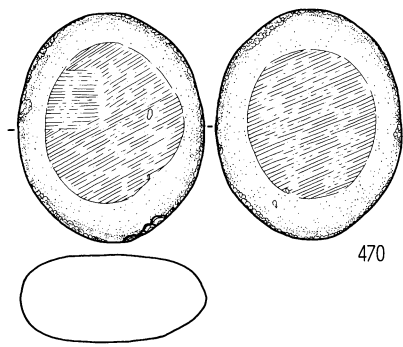
459



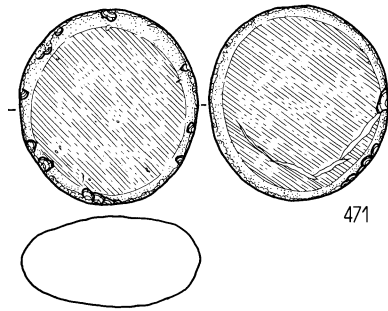
第46図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(39)



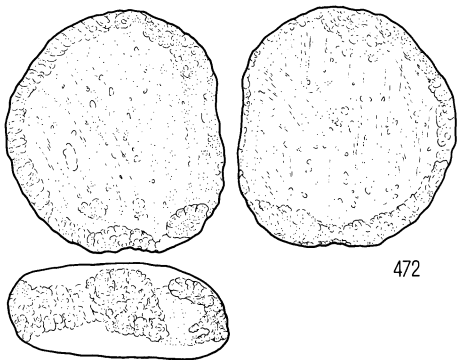
第47図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(40)



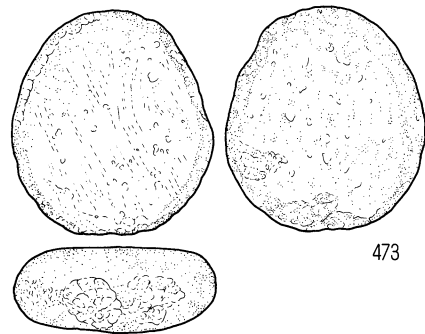
470



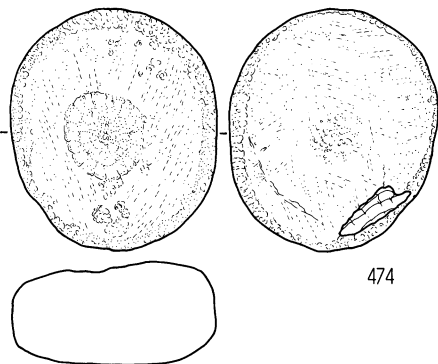
471



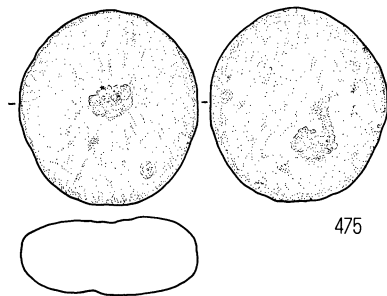
472



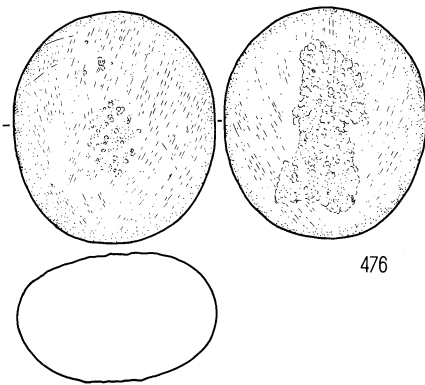
473



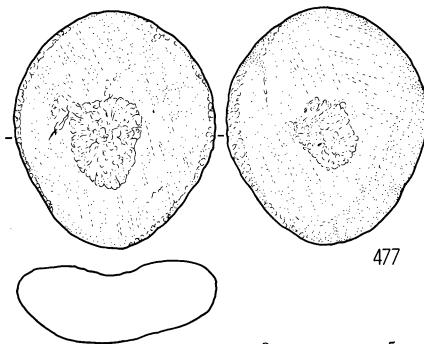
474



475



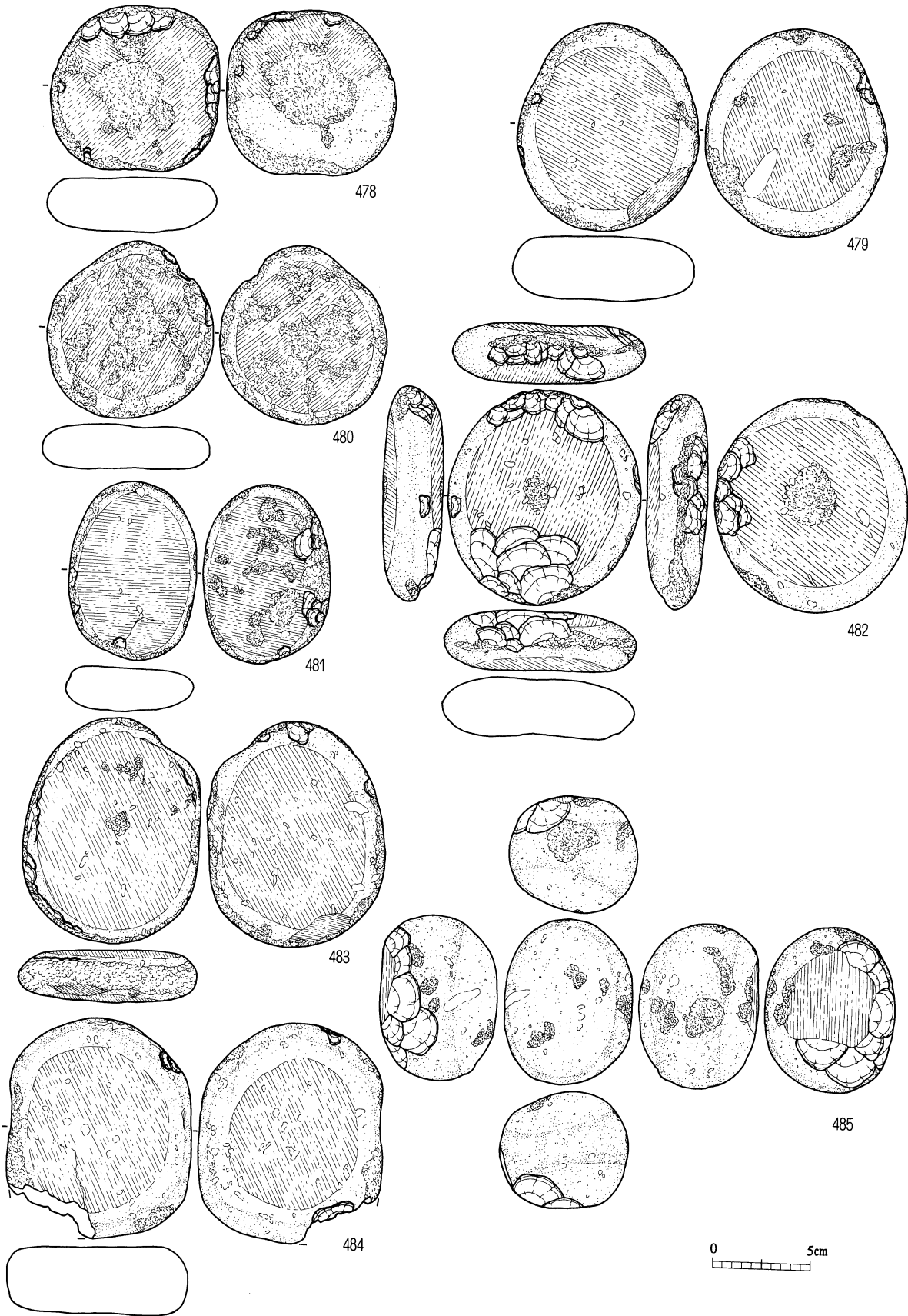
476



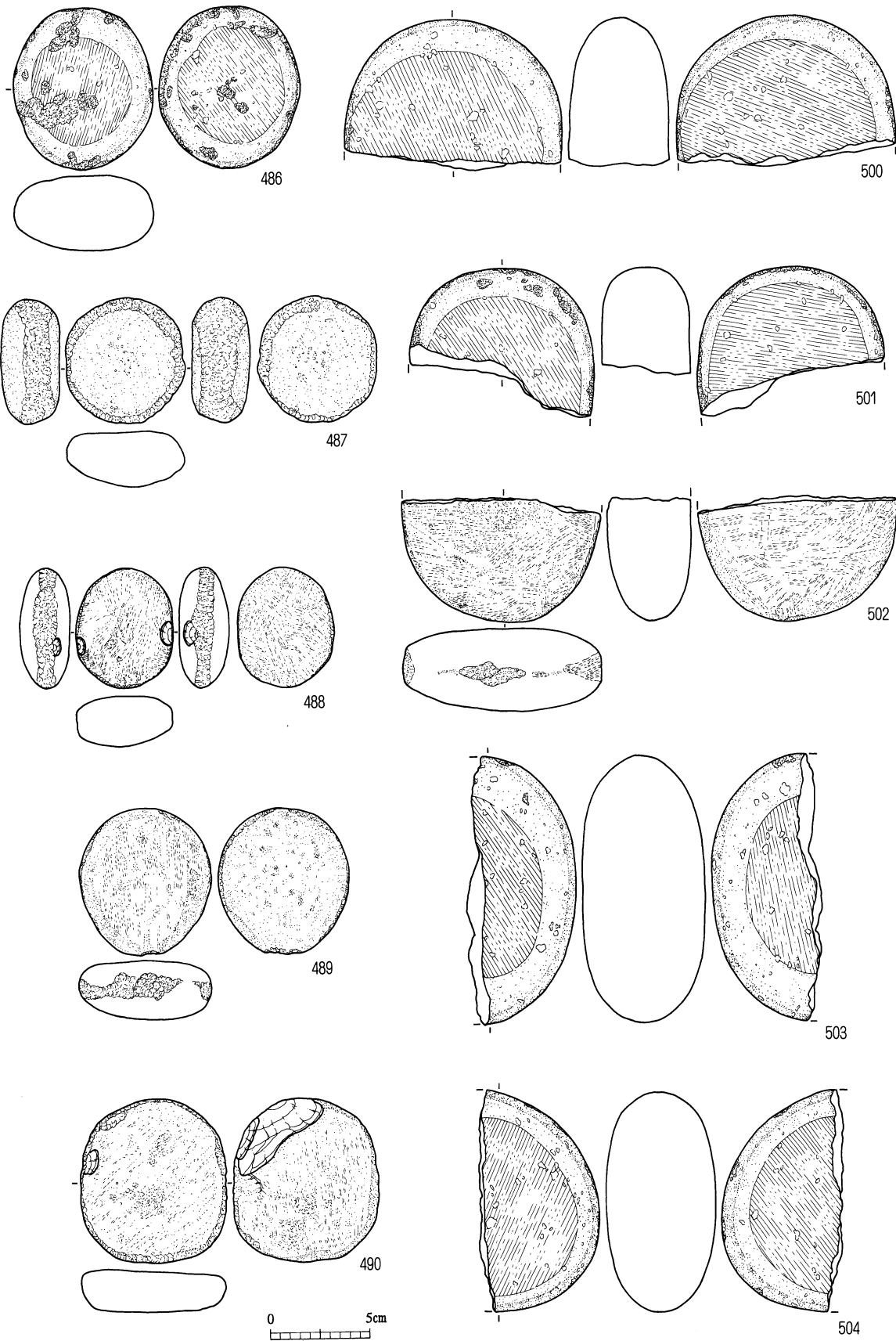
477



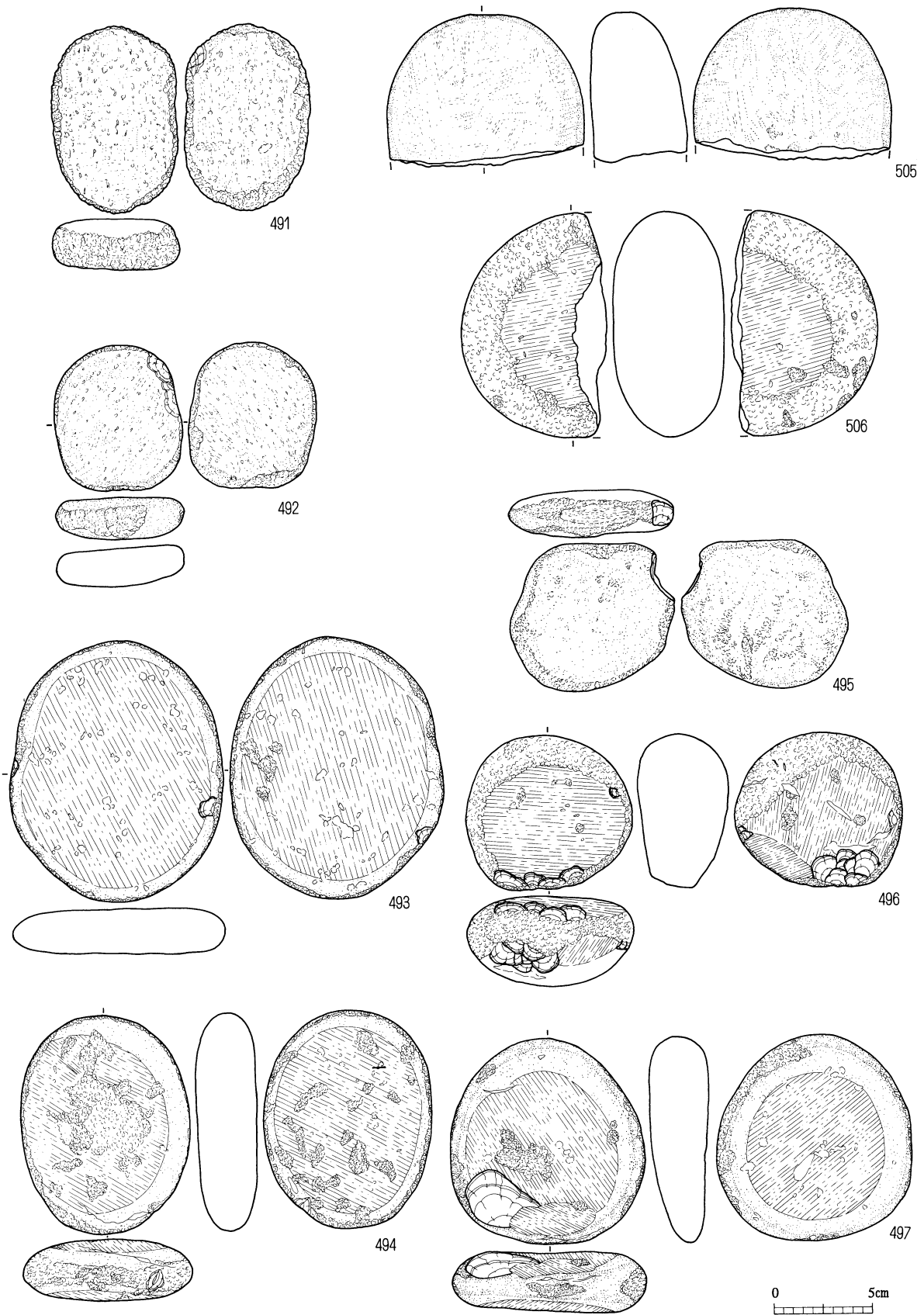
第48図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(41)



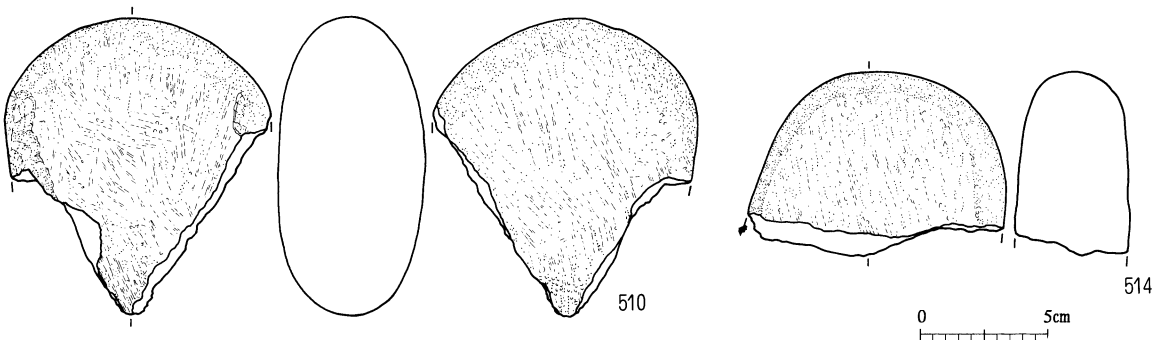
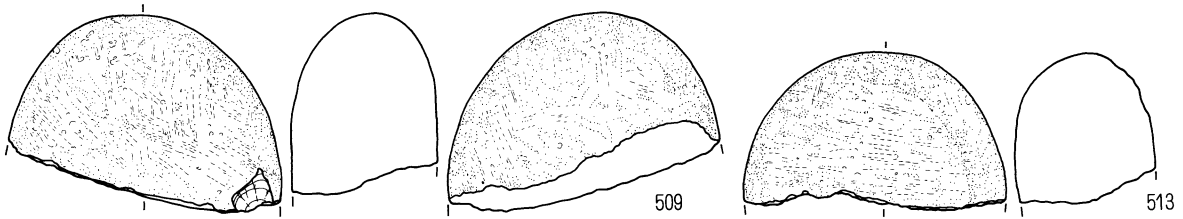
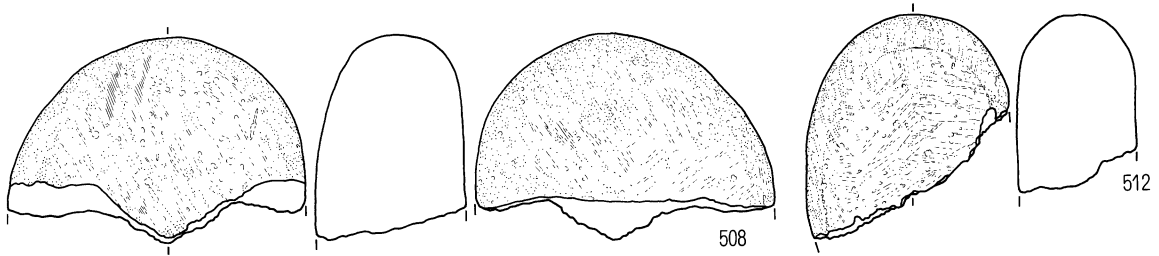
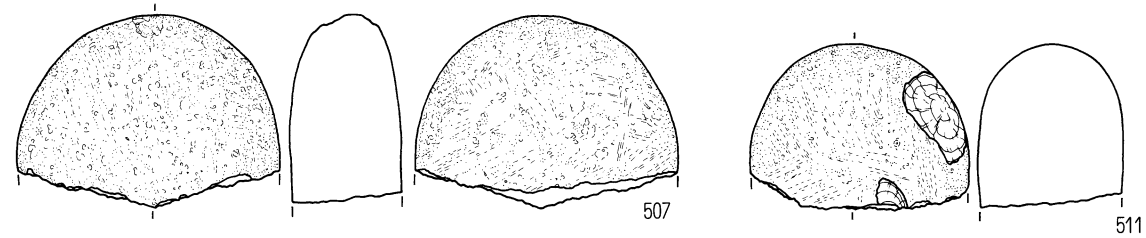
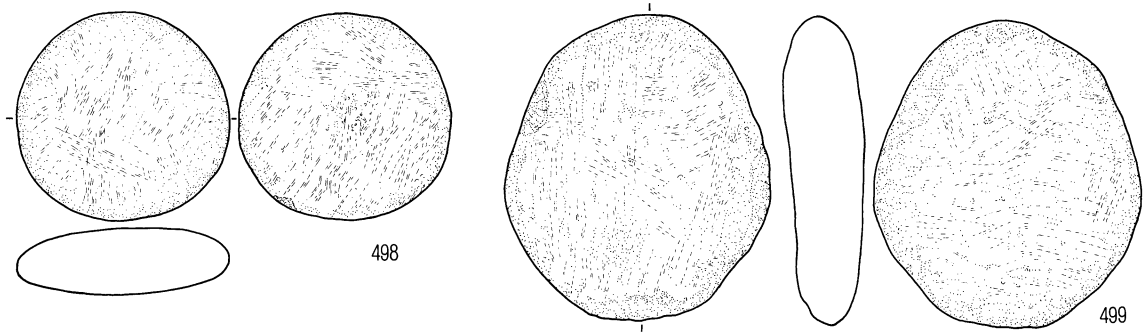
第49図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(42)



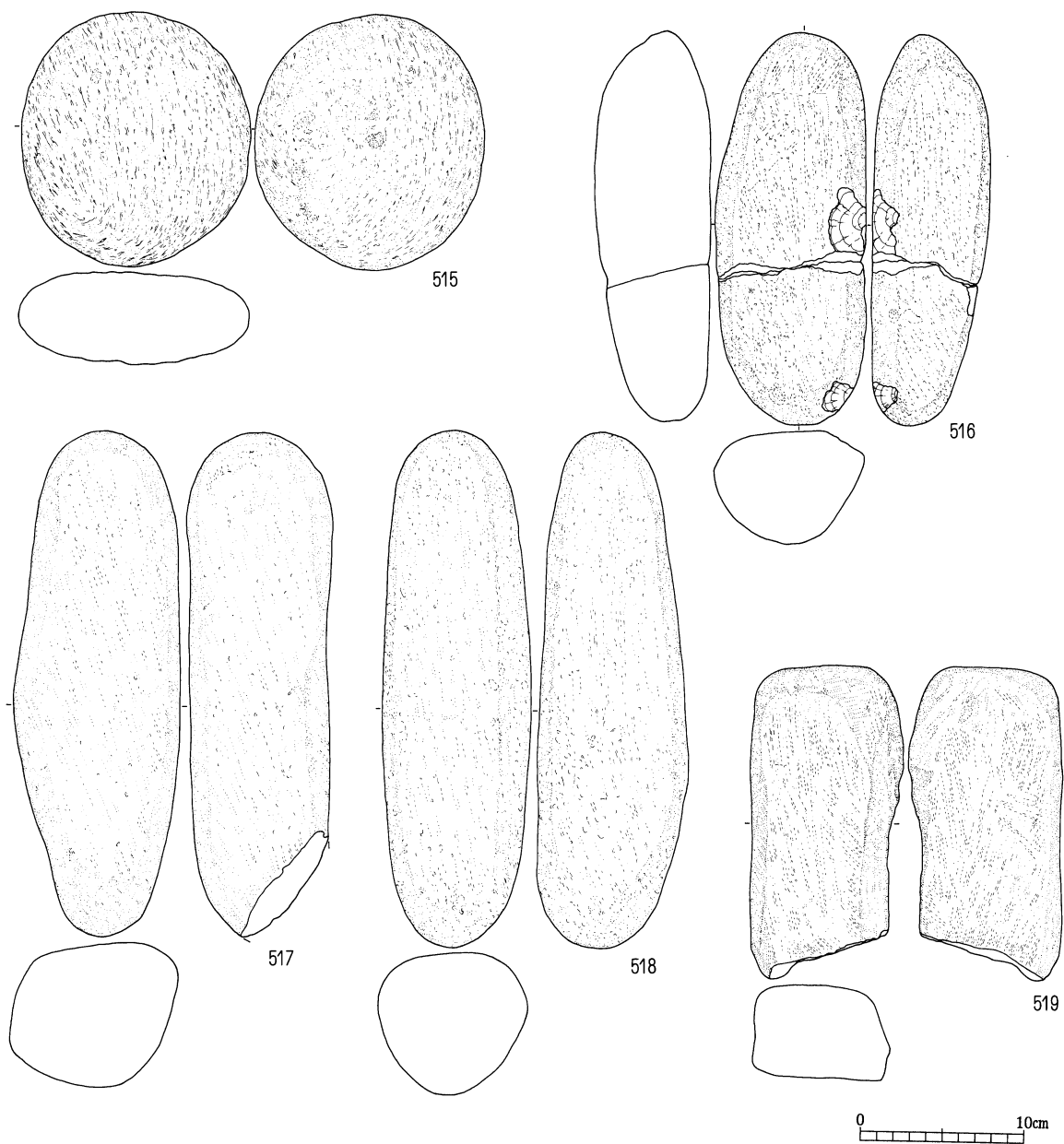
第50図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(43)



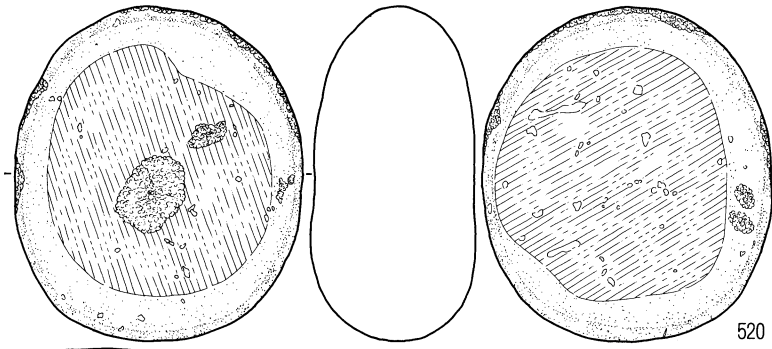
第51図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(44)



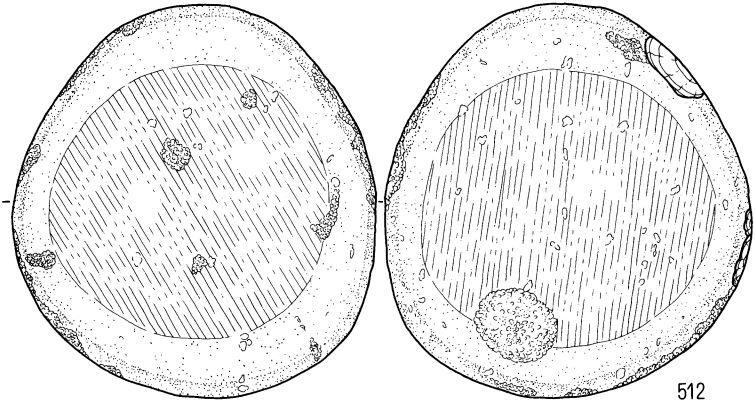
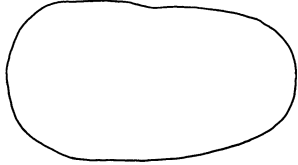
第52図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(45)



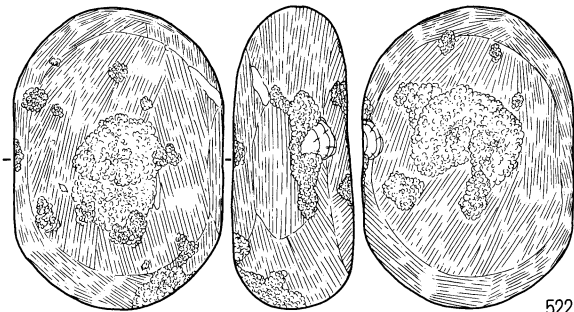
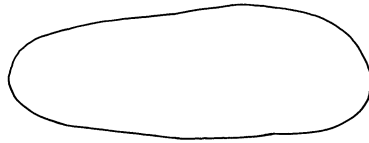
第53図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(46)



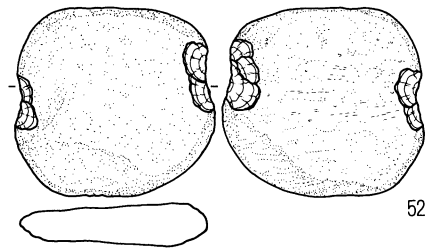
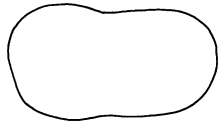
520



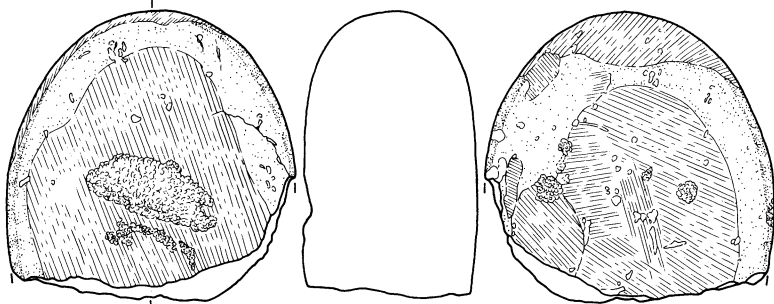
512



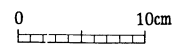
522



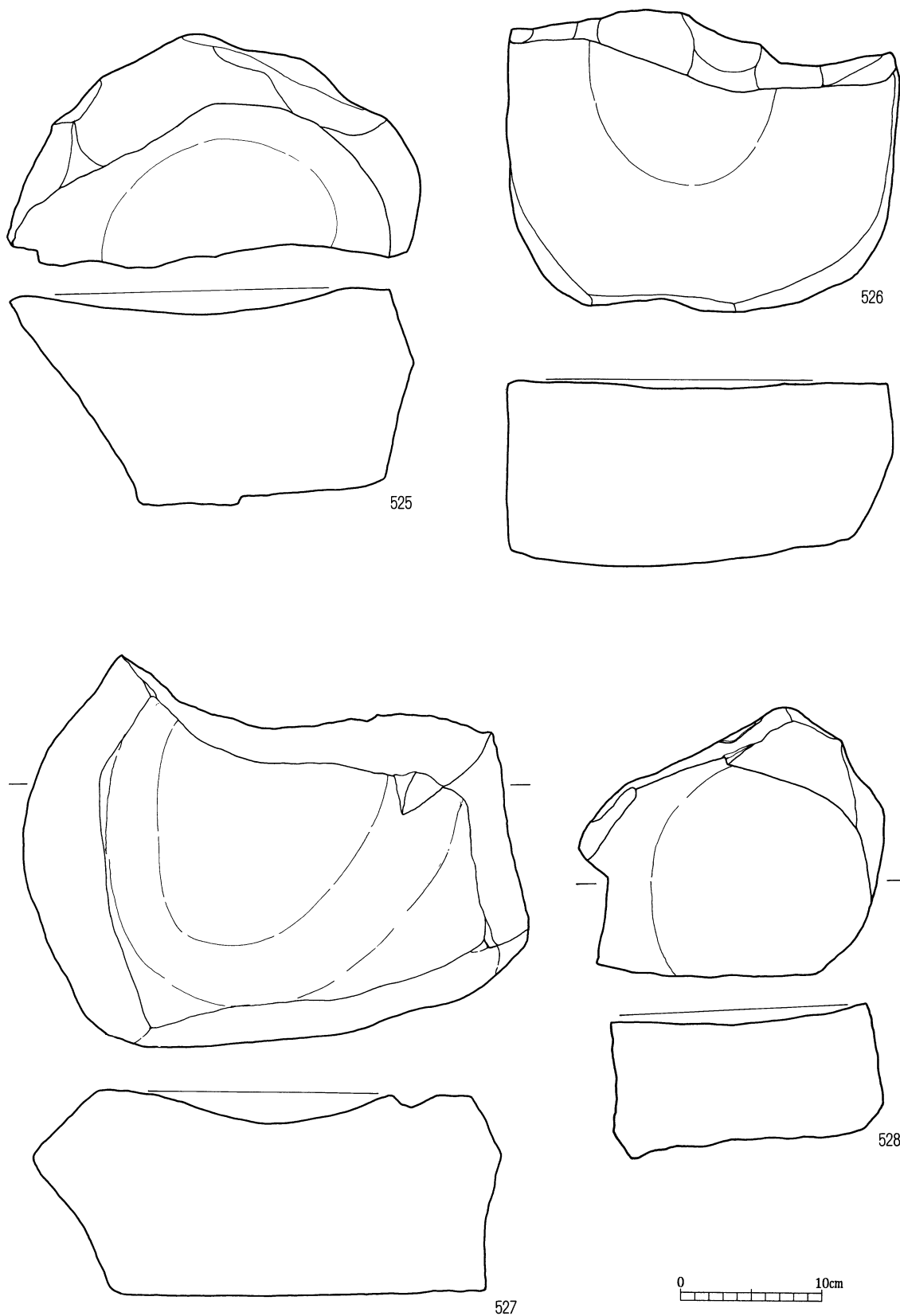
524



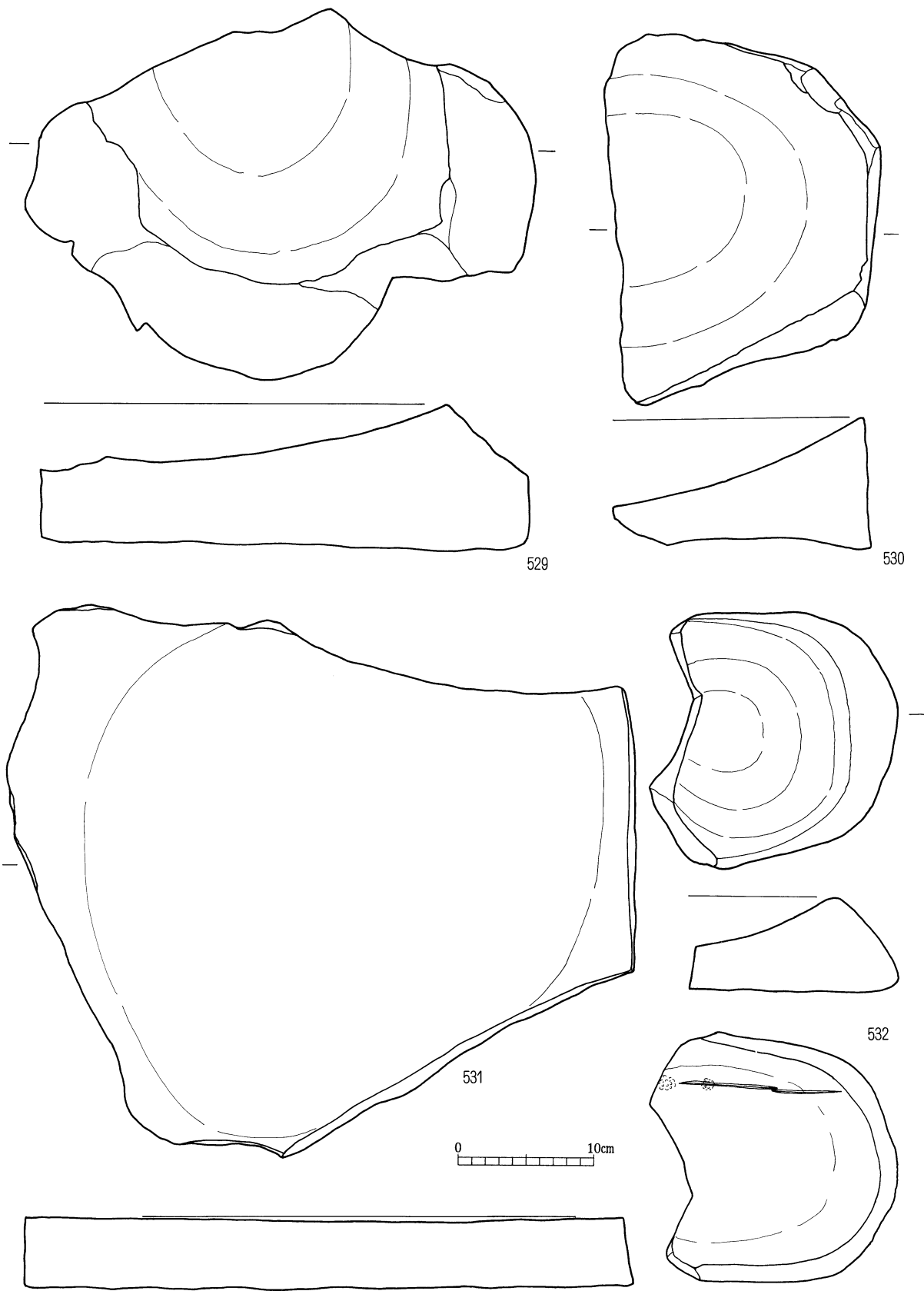
523



第54図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(47)



第55図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(48)



第56図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(49)

小型剥片石器

石鏃 (第57図～第59図 534～618)

打製石鏃及び石鏃未製品は85点を図示した。形態及び形状には多様な類型が求められるが、ここでは基部の形状および基部の抉りの形状をもとにⅠ～Ⅵ類に大別した。Ⅰ～Ⅲ類は凹基無茎鏃に属するものである。

Ⅰ類は基部にU字形の抉りを有するもので、48点を分類した。

(Ⅰa類) 534～563, 567は基部にU字状の抉りが入り、脚部端に主軸に対し斜位方向からの押圧剥離で調整を施し、両脚部端を斜行する短辺とする。先端部やや下に肩を持ち、先端が小さく尖る形状を持つものが多く、外形は七角形を呈する。558は両脚部とも欠損しているが残存部分の形状・調整加工から判断してここに含めた。形状にはやや細身で二等辺三角形に近いものと、正三角形に近いものがあるが、長幅比の上では明瞭に区分することは出来ない。長さは1.7cm・1.8cmと2.3cm・2.4cmの値で高い頻度を示す傾向にあり、重量は1.0g以下が多いが、脚部破片である560及び567など大型のものも存する。先端部を欠損する資料よりも脚部を欠損する資料がやや多く、分類した資料の3分の1以上に上る。石材は黒色で良質な黒曜石が19点、表面が白っぽく風化する黒色で比較的緻密な安山岩が7点、他にチャートが2点、蛋白石1点である。石鏃全体の3分の1以上がこの分類に属し、本遺跡出土石鏃の典型的な形態である。

(Ⅰb類) 564～566は何れも先端部を欠損する資料である。Ⅰa類の脚部形態に似るため石鏃に分類したが、Y字状を呈する異形石器の一種である可能性もある。564・565が黒曜石製、566はチャート製である。

(Ⅰc類) 568・569は脚部を一部欠損するが、残存部分から外形が五角形で基部にU字状の抉りを有するタイプとみられる。両側辺が主軸とほぼ平行する点でⅠa類とは異なる。石材はいずれも良質な黒色の黒曜石である。

(Ⅰd類) 570～579は基部にU字状の抉りを持つが、脚部端がやや丸みを帯びた不正形となるものである。571・572及び576・577については、片側の脚部がⅠa類の斜行する短辺に近く、先端部下に肩を持つことから、Ⅰa類に含めることも可能である。571は背面・腹面に、572・573・577は腹面に素材面を残している。石材は577のみチャート製で、他はいずれも比較的良質な黒曜石を用いている。

(Ⅰe類) 580～582は基部にU字状の抉りを持ち、左右の脚部の両端が基辺上に重なる形状のもので、鋏形鏃に類似する。石材はいずれも良質な黒曜石である。

Ⅱ類は脚部の両端から抉入する明瞭な抉りを有するもので、4点を分類した。

(Ⅱa類) 583～586は基部に三角形状に抉りが入り両脚端は鋭角に尖り、全体に丁寧な調整が施されている。583はチャート製、584～586は黒色安山岩を素材とする。

(Ⅱb類) 587は基部に半円状の抉りが施される。石材は黒色の黒曜石で、腹面側の調整が先端部に及んでいないことから未製品である可能性がある。

Ⅲ類は基部に僅かに浅い抉りをもつもので、Ⅱ類、Ⅳ類の中間的な基部形状をもつ。

(Ⅲa類) 588・589は基辺が僅かに内湾する小型の石鏃で主軸の左右の形状がやや非対称である。588はチャート、589は黒色安山岩剥片を素材とする。

(Ⅲb類) 590・591はいずれも長さ2.8cmを測るやや大型の製品で、比較的粗い調整で整形されており、基部が僅かに内湾する。590は黒色安山岩、591は黒曜石製である。

(Ⅲc類) 592~596はⅡA類に近似するが、挟りがやや浅い。左右の側辺はやや外湾気味で、595・596はやや長形を呈する。石材は594・595が黒色安山岩、他は良質な黒曜石である。

(Ⅲd類) 597・598は緩やかに内湾する基部を持つ長形の石鏃で、いずれも長幅比で2.0を超える。597は黒色で良質な黒曜石、598は黒色安山岩製である。

Ⅳ類は平基の石鏃で10点を分類した。

(Ⅳa類) 599・600は長幅の値がほぼ等しい平基の三角形鏃で整った形状に調整されている。601は基辺両端が角張らない。602は先端部の過半を欠損する。石材は599・600・602は良質な黒曜石、601が黒色安山岩である。

(Ⅳb類) 603・604は黒色安山岩製の平基の二等辺三角形鏃で、何れも左右の側辺に若干の欠損が生じている。

(Ⅳc類) 605~608は平基の五角形鏃である。606は片側の角部が欠損しており、やや不明瞭であるが、調整剥離の方向の変化から角部作り出しの意図が看取される。左右側辺上の角部は605が上位に、607が中間に、606・608が下位に位置する。Ⅳa類とした602もこの類に含まれる可能性がある。石材は605・607が黒曜石、606が蛋白石、607がチャート製である。

Ⅴ類は円基鏃である。609の一点のみ出土で基部が僅かに外湾している。石材は在地産とみられる不純物を含む黒曜石である。

Ⅵ類は基部の欠損により分類できなかったもの、及び未製品とみられるものである。610~614及び618はいずれも基部の欠損により分類できなかった資料で、612・613は大型の製品であるとみられる。石材は611・614が黒色安山岩、他は不純物の少ない良質な黒曜石である。

尖頭状石器 (第59図 619~624)

619~622は平面が木葉形もしくは三角形を呈し、一端に尖端部を有する資料で、石鏃と比べ器厚が厚く、重量も619~622が2.0~3.0g、623が6.54g、624が4.66gを測る。619~622は基部が明瞭に外湾する円基の形状で木葉形を呈する。背面はほぼ全周が押圧剥離によって調整されるのに対し、腹面は主剥離面及び荒い調整剥離痕を残置する。円基の石鏃あるいは石鏃未製品の可能性もある。623・624は三角形を呈し、腹面の調整は部分的に止まる。重量・厚みからも石鏃とは異なる用途が推定される。石材は619・620・624が良質な黒曜石、622はやや不純物が混在する黒曜石、621は黒色安山岩、923はチャート製である。

石匙 (第60図 625~629)

691・692は縦型の粗製石匙で、素材剥片の末端部に近い位置に左右から調整を加え挟りを入れる。身部左辺の剥離は使用か加工調整のいずれか不明である。627・628は黒色安山岩製の縦型の石匙で、身部は素材剥離面を大きく残すが、縁辺は表裏とも調整が加えられている。628は身部の過半を欠損するが、627と同様な形状にあったものとみられる。629は黒曜石製で、身部を欠損する石匙のつまみ部とみられる。残存部分から横型の石匙とみられる。

石錐 (第60図 630~640)

11点を図示している。他に石核から転用された資料が1点あり、石核の中で図示している。

630は比重が軽く軟質で風化が激しく石材は不明である。磨製石器の一部とみられ、上下を欠損する。下端に端部側からの剥離がみられること、旋回運動によるとみられる横方向の線状痕がみられることからここに分類したが特殊なものである。

(Ⅰ類) 631は異形石器の可能性もあるが、端部付近の稜上に磨耗や線状痕がみられることから石

錐として分類した。表裏から全面に二次調整が加えられており、棒状を呈するが、上部を欠損する。

(Ⅱ類) 632～634は錐部に対し明瞭なつまみ部の作り出しをもつものであるが、632・633が表裏からの丁寧な調整で仕上げられるのに対し、634は背面に自然面をもつ剥片の縁辺のみに粗雑な調整を加えた粗製の石錐である。

(Ⅲ類) 635から637は平面形状や厚み異なるが、腹面側の二次調整痕が先端部分に中心を置くこと、明瞭なつまみ部の作り出しを行わない点で共通する。灰色で不透明な県外産とみられる黒曜石を用いる。638は背面に稜をもつ縦長の剥片に荒い形状加工を施した後、主要剥離の打点側に小さく突出する錐部を作り出している。

(Ⅳ類) 不定形の剥片の一端に調整加工を施し短い錐部を作り出すものである。639・640は横長のやや厚みのある剥片を素材とし、一端に短く突出する錐部を作り出す。いずれも錐部稜上に使用の痕跡を認める。石核として図示した894はこの分類に類する。

スクレイパー (第61図 第62図 641～663)

素材剥片の側縁に一定の規則性のある剥離調整がみられる石器をスクレイパーとして分類した。刃部角度は主要な刃部とみなされる部分について計測し、観察表に示している。23点を図示した。他に石核から転用された急角度の刃部を持つスクレイパーが10点があり、石核の項で図示している。

641～645はいずれも黒曜石の不定形な小型の剥片を素材とするスクレイパーである。641は素材剥片の1辺に細かい調整剥離を加え鋭角な刃部を作り出す。腹面左下に刃部と平行する線状痕がみられる。642は左側縁部分に表裏からの調整を加え刃部とするもので、刃部・稜上に潰れが生じている。643は素材剥片の底辺部分にやや急角度の刃部調整を施すもので、刃部と平行および直行する線状痕がみられる。644・645は背面図右側縁と下辺の交わる部分を中心に、表裏に細かい調整剥離が施されている。石鏃未製品にもみえるが、調整部分には使用痕光沢が生じている。646はチャート製の横長剥片を素材とし、右側縁に角度のある刃部をもつ。647は黒曜石製で右辺及び下辺右半分に細かい調整を施し刃部とする。刃部と直行する線状痕がみられる。648は扁平な安山岩円礫の側面表裏に加工を加えたもので、上下とも欠損する破片である。649はやや厚みのある黒曜石剥片の主剥離底辺に表裏から調整を加え刃部とする。刃部には微細な使用痕剥離と潰れが生じている。650は灰色のチャート剥片に表裏から荒い加工を施したもので刃部には使用痕光沢が生じている。651は底面をもつやや厚みのある黒曜石剥片を素材とし右側縁及び底辺を刃部としている。刃部には斜行ないし平行する線状痕がみられ、使用痕光沢が生じている。652は背面に自然面を有する黒曜石剥片の左右側辺の上部にそれぞれ腹面側から調整を施し刃部とする。刃部と直行する線状痕のほかランダムな線状痕がみられる。653は上辺は表裏、右辺は背面、左辺は腹面側に細かい剥離を加え刃部としている。上辺及び左辺上部に顕著な刃部の潰れと細かい線状痕の重なり合いによる使用痕光沢が生じている。654・655いずれも灰色のチャート剥片で、左辺表裏に細かい調整剥離を加え刃部とする。656は黒色安山岩の横長剥片の弧状の底辺左半分に表裏から調整を加え刃部とするもので、右半分に欠損が生じている。657は黒色良質で青灰色の縞が流紋状に入る黒曜石製で、底辺表裏及び右辺腹面に荒い調整が施されている。底辺刃部には微細な使用痕剥離がみられ搔器としての使用が考えられる。658は不純物を含む黒色の黒曜石製で、横長の剥片の縁辺に荒い調整剥離が施される。全体に激しい磨耗がみられ、ローリングを受けた可能性がある。659は厚手のチャート剥片を素材とし、底辺腹面に調整剥離を施す。刃部には使用による磨耗が生じている。660は在地産とみられる黒曜石で、左右を欠損するため全体の形状は不明であるが、表裏に調整を施す急角度

の刃部を持つものである。661は背面に自然面をもつやや厚みのある黒曜石剥片に荒い調整が施されるもので、刃部は鋸歯状を呈する。662・663はいずれも内湾する刃部を持つもので、抉入石器に類するものである。662は黒色良質で青灰色の縞が流紋状に入る黒曜石である。

楔形石器 (第62図 第7図 664~678)

上下(左右)に平行する対辺をもち、上下辺に「刃部の潰れ」、「階段状を呈する剥離痕の重なり」、「対辺に向かって対向する剥離痕」がみられるほか、対辺同士を直線的に結ぶ「剪断剥離」をもつ石器、及びその破片とみられる資料を楔形石器として分類した。

664・665は上下・左右に対辺を持ち、刃部の潰れや対向する剥離がみられる。664は上辺左右が剥離により欠損する。いずれも在地産の不純物を含む黒曜石で、断面形は紡錘状を呈する。666は不純物を含む黒色の黒曜石製で、上下に対向する剥離があり、刃部の潰れが生じている。667は黒色良質な黒曜石、669は黒色の中に青灰色の流紋の入る黒曜石で、いずれも断面形は紡錘形を呈する。側面や裏面の剪断剥離により上下辺を欠損し使用の進行が伺われる。668は扁平な黒曜石剥片で左辺及び下辺を欠損する。上辺及び斜行する右辺に刃部の潰れが生じている。670は在地産と見られる黒曜石製で左辺を欠損する。上下・左右で対向する剥離がみられ、断面形は紡錘状となる。671・672はいずれも良質な黒色の黒曜石製で、671は背面下辺を、672は上辺を欠損すが、残存する辺には直線的な刃部の潰れがみられる。673は左辺に折れが生じているが、上下に対向する剥離がみられる。黒曜石製である。674・675は複数の裁断剥離面を有するもので、楔形石器の使用により生じた破片であるとみられる。いずれも黒色良質な黒曜石である。676・678はいずれも上下に対向する剥離がみられる剥片であるが、上下辺とも辺上の潰れなどがみられない。677は在地産と見られる黒曜石製で、上辺が尖端状となるものであり、対向する剥離がみられ、凸部を中心に顕著な線状痕がみられる。

異形石器 (第63図 679~686)

679・680は細身で棒状の黒曜石製の石器で、端部の欠損により全体の形状は不明であるが、やや振れ曲がり直線的ではない。679は表裏に、680は裏面に素材面を残置するが、左右側辺からの加工は精緻である。679は黒色透明の良質な黒曜石を用い、素材面にはランダムな線状痕が生じている。680の残存する一端は、打面とみられる自然面が残り、やや膨らみをもつように見える。器面はすりガラス状を呈し被熱した可能性があり、使用痕等は不明である。681はやや厚みのある不純物を含む黒曜石剥片を素材とする。上端の折れ面に接する部分で左右に突起した痕跡があり、胴部が縊れ腰を張る形状で、基部はU字状の挟りがあり、人がたのようにも見える。器面全体に無数の細かい線状痕がみられ、調整剥離の稜上を中心に磨耗が生じている。682・683はいずれも上部及び下端部を欠損する。残存部分は弓なりに湾曲し、折れ面の下に小三角形の突起がある。下端部は682では左右から小さな挟りが、683には左右の小突起の先で細める加工が施されるが、それぞれ端部をわずかに欠損する。682は稜部を中心に細かい線状痕や磨耗が全体に認められる。683は二次的な被熱を受けた可能性があり、使用痕の観察は困難であるが、全体に磨耗した感じを受ける。684は黒色良質な黒曜石製で、上・下部とも大きな欠損のため全体の形状は不明である。精緻な調整を施し断面形は丸みを帯びる。残存する器面には稜部を中心に細かい線状痕や磨耗が全体に認められることから、681以下に類する石器の破片とみられる。685は不純物を含む黒色の黒曜石製で、下半部を大きく欠損している。自然面を残す上端部はやや丸みを帯び縊れをもつ。686は黒色良質な黒曜石製で、背面には自然面があり表裏に素材面を大きく残す。器面全体に細かい線状痕がみられ

るが、両部の磨耗は顕著ではない。682と形状の類似点を持つことからここに含めたが、石錐の可能性もある。

研磨痕のある礫 (第63図 687)

くの字型に曲がったやや扁平な砂岩円礫で、内湾する側縁に研磨痕があり、摩滅により稜線が生じみられる。研磨痕は上下斜位方向に互いに切り合いアヤスギ状を呈する。

両面加工石器 (第64図 688～691)

素材剥片の表裏両面に二次的な加工が施された石器である。688は黒色安山岩、他は黒色の良質な黒曜石である。石鏃未製品、スクレイパー等とも考えられるが、明瞭に区分できなかつたため両面加工石器として取り上げた。

使用痕剥片 (第64図～第66図 695～748)

素材剥片に二次的な加工痕が加えられている剥片、使用によるとみられる一定の規則性と連続性のある線状痕や使用痕光沢が生じている剥片、微細な剥離痕などのみられる剥片を使用痕剥片として一括した。使用痕の観察は実体顕微鏡を使用し、主要な加工痕・使用痕のみられる部位によりⅠ～Ⅶ類に分類した。また、主剥離の剥離方向に対する背面の剥離面の剥離方向の構成によりa～gに、打面の形態をイ～トに分類し、観察表に示している。背面の剥離構成及び打面の形態の分類基準は次項の「剥片」の中で述べている。石材は黒色良質な西北九州腰岳産に類似する黒曜石が主体であり、他に在地の日東産、五女木産等に類似する黒曜石がみられるが、理科学分析等の詳細な産地同定は行っていない。線状痕は刃部の微小剥離・磨耗などと相関性があるとみられるものを中心に以下に記述したが、図示できていない。また、線状痕は使用によるものと偶発的に生じたものが混在しているとみられ、面上に広範かつ不規則にみられるものについては特に触れていない。

(Ⅰ類) 692～697・714は両側辺及び底辺に使用の痕跡が認められる剥片である。692～694は長幅比が2.0前後の縦長の剥片で、692の末端辺、694の両側辺及び末端辺には二次調整が施される。いずれも刃部に直行・斜行・平行する線状痕、微細な剥離痕がみられ、693の末端辺には使用痕光沢が生じている。695～697は長幅比が1.0前後の寸詰まりの剥片である。695の右側辺上部及び696の右側辺上部・左側辺・末端辺、697の末端辺には連続する小剥離がみられ、刃部に直行ないし斜行する線状痕があり、部分的に使用痕光沢を生じている。714は小石刃状の剥片で、両側辺に直行する横方向の細かく密集した線状痕がみられ、下辺には微細な剥離と折れが生じている。

(Ⅱ類) 698～711は両側辺に使用の痕跡が認められる剥片である。698・699は小型の縦長剥片で、両側辺に斜行および平行する線状痕が認められる。700・702・704・706・707では側辺と平行および直行する線状痕が、701・703では側辺に斜行する線状痕が、705・708・709では側辺に斜行及び平行する線状痕が顕著にみられ、いずれも刃部には微細な使用痕剥離が生じている。710は右側辺および左側辺下端部に調整剥離が施されるが、二次的な比熱により器面に細かい亀裂が走り、線状痕は観察できない。711は先細りの縦長剥片で過半部に斜めないし横方向の線状痕がみられる。

(Ⅲ類) 712・713は一側辺及び底辺に使用の痕跡が認められる剥片である。712・713はいずれも底面を有する剥片で、左側辺および末端辺に使用痕が認められる。712は刃部と直行ないし平行する線状痕が顕著である。713の末端辺には背面側から細かい二次調整が施され、右上部ではノッチ状を呈する。平行および斜行する線状痕がみられる。

(Ⅳ類) 715～734は主に片側の側辺に使用の痕跡が認められる剥片である。715は右側辺に刃部と斜行する線状痕・使用痕光沢がみられる。716は主に右側辺と平行する線状痕、微小剥離がみられ

る。717は二次的な比熱による火脹れ状の痘痕があるが、比熱の影響の少ない右側辺上部に平行する線状痕がみられる。718は主に右辺に斜行および直交する線状痕がみられる。719の右側辺は刃部の損傷は少ないものの平行する線状痕がみられる。720・721は左側辺に平行ないし直交する線状痕と微小な剥離痕がみられる。722・726は右側辺に平行ないし直交する線状痕と微小な剥離痕がみられる。723・725・729は右側辺に平行ないし斜行する線状痕があり、側縁部に使用に起因するとみられる小剥離が生じている。724は左側辺に小剥離が連続し、刃部と平行する細かい線状痕がみられる。727・728は左側辺に使用によるとみられる剥離が生じており、刃部と斜行ないし平行する線状痕がみられる。730は上部を欠損する剥片で、左辺に小剥離がみられるが風化により線状痕等は観察できない。731は欠損を免れた右辺上部に側縁と平行ないし斜行する線状痕がみられる。732は台形状を呈する底面をもつ横長の剥片で、左側辺に微小な剥離と斜行する線状痕があり、下端近くでは使用痕光沢を生じている。733は下部に折れ面のある在地産とみられる黒曜石の厚手の剥片で、左辺に小剥離があり直交ないし斜行する線状痕がみられる。734は打瘤部分に二次調整とみられる荒い剥離を加え、左辺の一部に調整剥離が施される。刃部と直交する線状痕がみられ、スクレイパーの可能性があるが、下部の欠損により判明しない。

(V類) 735～740は一側辺を部分的に使用する剥片である。735・736は左辺上部に、二次的な剥離があり、斜行する線状痕がみられる。737は上部を欠損する厚みのある剥片で、左辺下半付近を中心に微小な使用痕剥離と側縁に平行ないし斜行する線状痕がみられる。738は左辺を欠損するが、右辺下半に微細な剥離があり平行及び斜行する線状痕がみられる。739は左辺下半に微小剥離が生じ、平行する線状痕がみられる。740は左辺下半の背面側に小剥離があり、刃部に平行及び直交する線状痕がみられる。

(VI類) 741・742は剥片剥離軸に対し斜行する底辺に使用の痕跡が認められる剥片である。741は被熱により線状痕は不明であるが、底辺に使用痕とみられる剥離が生じている。742は縦方向の断面形状が楔形になる幅広の剥片で、底辺に微小剥離があり斜行する線状痕がみられる。

(VII類) 743～748は剥片の底辺全体に使用の痕跡の認められる剥片である。743は底辺に微細な剥離があり、これと平行ないし斜行する線状痕がみられる。744・745は寸詰まりの剥片で末端辺に直交ないし斜行する線状痕と微細な剥離痕がみられる。747・748は末端辺の一部分に連続する小剥離があり、斜行する線状痕がみられる。

以上使用痕剥離として分類した資料は、背面の剥離構成ではa類20点、b類20点、c類10点、d・e類各2点、f類1点、733が主剥離に対し90°及び180°異なる剥離方向、743では主剥離に対し90°異なる剥離方向の剥離痕が背面にみられる。打面形態では礫打面(イ)が17点、単一の剥離面を打面とする平坦打面(ロ)が10点、複数の剥離面或いは礫面が複合する切子打面(ハ)が11点、点打面(ニ)が7点、線状打面(ホ)が3点、打面の弾けや折れ等により打面形態が不明なもの(ト)が9点となっている。

剥片 (第67図～第73図 749～792)

明瞭な使用・加工の痕跡を認められない剥片類で、主剥離の剥離方向を基準とし、背面の剥離面の剥離方向の構成に基づきa～gに分類した。また打面形態について、礫打面(イ)、平坦打面(ロ)、切子打面(ハ)、点打面(ニ)、線打面(ホ)、無打面(ヘ)、打面を欠くもの(ト)に分類し、観察表に示している。これらの資料中には部分的或いは不規則な線状痕や微小剥離が観察されるものを含むが、使用によるものかその他の原因に起因するものか判別できなかったためここに含めた。石

材は黒色良質な西北九州産に類似する黒曜石が主体であり、他に在地の日東産、白浜産等に類似する資料がみられるが、理科学分析等の詳細な産地同定は行っていない。

(a類) 背面の剥離面が主剥離と同一の打面方向から剥離された剥片で、同一打面からの連続した剥片剥離作業を示す。749～768, 770～776, 778～785, 787～809, 811～818, 826の計67点があり、2～4面の剥離面をもつ資料が多い。打面形態は礫打面(イ)が24点、平坦打面(ロ)が17点、切子打面(ハ)が7点、点打面(ニ)が5点、線打面(ホ)が4点、無打面(ヘ)が1点、打面の弾けや折れ等により打面形態が不明なもの(ト)が10点となっている。

(b類) 背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離と礫面によって構成される剥片で、剥片剥離作業の初期の段階で、同一打面から連続した剥片剥離作業が行われたことを示す。786, 819～825, 827～844, 846～851, 853～860, 884の計41点を図示している。打面形態は礫打面(イ)が16点、平坦打面(ロ)が4点、切子打面(ハ)が6点、点打面(ニ)が2点、線打面(ホ)が5点、打面の弾けや折れ等により打面形態が不明なもの(ト)が8点となっている。

(c類) 背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離と90°左右に移動した打面方向からの剥離で構成されるもので、90°の打面転移を伴う剥片剥離作業が行われたことを示す。769, 861～875の計16点を図示している。打面形態は礫打面(イ)が4点、平坦打面(ロ)が3点、切子打面(ハ)が2点、線打面(ホ)が1点、無打面(ヘ)が2点、打面の弾けや折れ等により打面形態が不明なもの(ト)が4点となっている。

(d類) 背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離と180°上下に移動した打面方向からの剥離で構成されるもので、同一作業面に対し180°の打面転移を行う剥片剥離作業が行われたことを示す。777, 876～880の6点を図示した。打面形態は礫打面(イ)が3点、切子打面(ハ)が2点、線打面(ホ)が1点となっている。

(e類) 背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離、90°左右に移動した打面方向からの剥離、礫面によって構成されるもの。810, 881～886の計7点が該当する。打面形態は礫打面(イ)が2点、切子打面(ハ)が3点、点打面(ニ)が2点となっている。

(f類) 背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離、90°左右に移動した打面方向からの剥離、180°移動した打面方向からの剥離で構成されるもので、小刻みな打面転移がを伴う剥片剥離作業が行われたことを示す。887, 888の2例がこれに該当し、いずれも打面を欠く。

(g類) a～f以外の背面の剥離面構成をもつ剥片で、例数が少ないため一括した。

845・852は背面の剥離面が主剥離と同一打面方向からの剥離と180°上下に移動した打面方向からの剥離及び礫面で構成される。890は礫面を背面とする。891は背面に主剥離に対し90°左右に移動した打点方向からの剥離及び礫面がみられる。892は主剥離に対し180°移動する剥離のみをもつ。打面形態は平坦打面(ロ)が1点、切子打面(ハ)が1点、打面の弾けや折れ等により打面形態が不明なもの(ト)が3点となっている。

石核(第74図～第78図 893～927)

素材剥片を剥離した残核で35点を図示した。石核として剥片剥離作業を行った後、スクレイパー、石錐として転用されたものも、ここで提示している。

(I類) 893～907, 913, 915, 927は上下、左右、表裏に自在に打面を転移し、複数以上の作業面を有する石核である。

893・896・902・913は2～3面程度の限定された打面を使用する打面転移の頻度の少ない石核

で、自然面、分割面などネガティブな剥離面以外の面が比較的多く残置され、打面は自然面、先行する作業面の双方がある。893は小型で扁平な残核で、上辺に細かい調整剥離を加えスクレイパーに転用している。

894・895・897～907・915・927は頻繁な打面及び作業面の転移を繰り返すもので、ほぼ全面にネガティブな剥離面を残す。894は小型扁平な残核で、左右に打点を移動させ2枚の小型石刃状の剥片を剥出した後、下辺右角に両側から剥離を加え短い突出部を作りだし、石錐として転用したとみられるが、錐部は折れて欠損している。897～899は90°・180°を単位とする頻繁な打面転移の繰り返しでサイコロ状を呈するもので、899では上辺に細かい二次調整を加え急角度のスクレイパーエッジとしている。915は横長で扁平な剥片状の残核で、上辺を打面とし、表裏を作業面として剥片剥離を行った後、上辺に細かい調整剥離を施しスクレイパーに転用したとみられる。904～906は在地産とみられる不純物の多い黒曜石であるが、他はおおよそ西北九州産に類似する比較的良質な黒色の黒曜石である。894・901は黒色良質で青灰色の流紋状に入る黒曜石である。

(Ⅱ類) 908～912・914は表裏の両面もしくは片面に周縁を打面として求心的に剥離する石核で断面形は紡錘形を呈する。908は裏面で同一打面から一方向に連続した剥片剥離作業を行った後、表面で求心的剥離が行われている。909～912は表裏に求心的な剥離面をもつ石核で、910は剥片剥離作業後、表面上辺に二次調整を加え、急角度の刃部を持つスクレイパーに転用したとみられる。914は裏面に自然面を残置し、表面側のみ求心的な剥離痕を残す。石材は908・910・911・914が西北九州産に類似する黒色の黒曜石、909が在地産とみられる不純物を含む黒曜石、912がチャートである。

(Ⅲ類) 916～919は固定した打面から左右に打点を移動しながら同一方向に剥片剥離作業を行う石核で、作業面の剥離痕は求心的にならない石核である。916・917はいずれも自然面を打面とし同一方向に剥片剥離作業を繰り返すが、作業面長は短めである。918は分割面と見られる平坦な剥離面を打面とし、左右に打点を移動する。正面右側を欠損している。919は底面に先行する剥離面ももち、平坦な自然面を打面としてほぼ全周を剥離する。上面図下辺及び右辺には細かい二次調整が加えられ、急角度の刃部のスクレイパーに転用されている。石材は917が在地産とみられる不純物を含む黒曜石、他は黒色良質な西北九州産に類似する黒曜石である。

(Ⅳ類) 921・922は石核調整・打面調整を行ったとみられる石核である。921は打面の左右から打面調整とみられる剥離が行われ、また両側辺にも背面側からの剥離がみられ、左右に打点を移動した石刃状の剥片の剥離痕が残る。側縁にはその後、細かい二次調整が施され、スクレイパーとして転用されたとみられる。黒色で透明感のない良質な黒曜石を素材とする。922は作業面の側面に打面側から剥離が加えられる。下縁からの剥離もみられ、両極打法と関係する可能性もある。一見、細石刃文化期の細石刃核に酷似するが、パティナの発達他他の出土資料と比較し差異がないことから他の資料と同期の所産であると考えられる。

(Ⅴ類) 923～926は平坦な剥離面・自然面を打面とし、打面外周を打点が移動する石核で、作業面は求心的剥離痕が残り、断面形が船底状を呈する石核である。いずれも在地産の不純物を含む黒曜石を用いるもので、923は裏面上辺に、926は正面図上辺に二次調整を加えやや急角度の刃部を持つスクレイパーとして転用されている。925は左側部分を欠損している。

以上の剥片石器の石材については、ルーペを利用した表面観察により分類し計測表に表示し、理化学的な分析は行っていない。黒曜石については、礫皮面・剥離面の観察に基づき以下の分類を行い、観察表に示した。

（黒曜石A）礫面は平面的で、ざらつきがある。漆黒色の良質なガラス質の黒曜石で、白色の不純物を含むものもある。

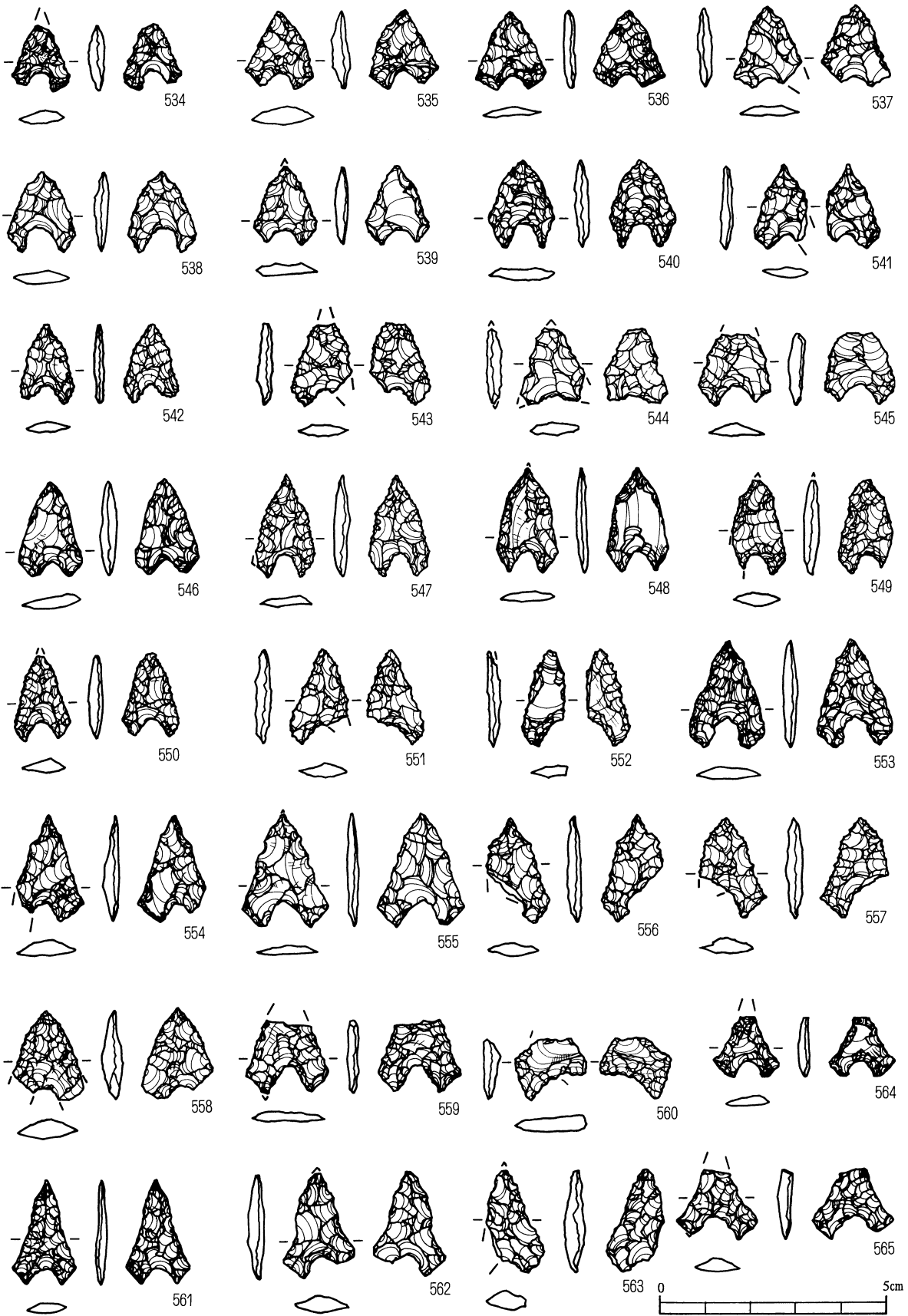
（黒曜石B）礫面は凹凸が少なく、肌はざらつく。淡墨黒色で半透明の良質なガラス質の黒曜石で、細かい白色の粒子などを含む。

（黒曜石C）黒色良質で青灰色の流紋状に入る黒曜石、灰色で不透明な黒曜石など県外産とみられる黒曜石で、少数例であるため一括した。

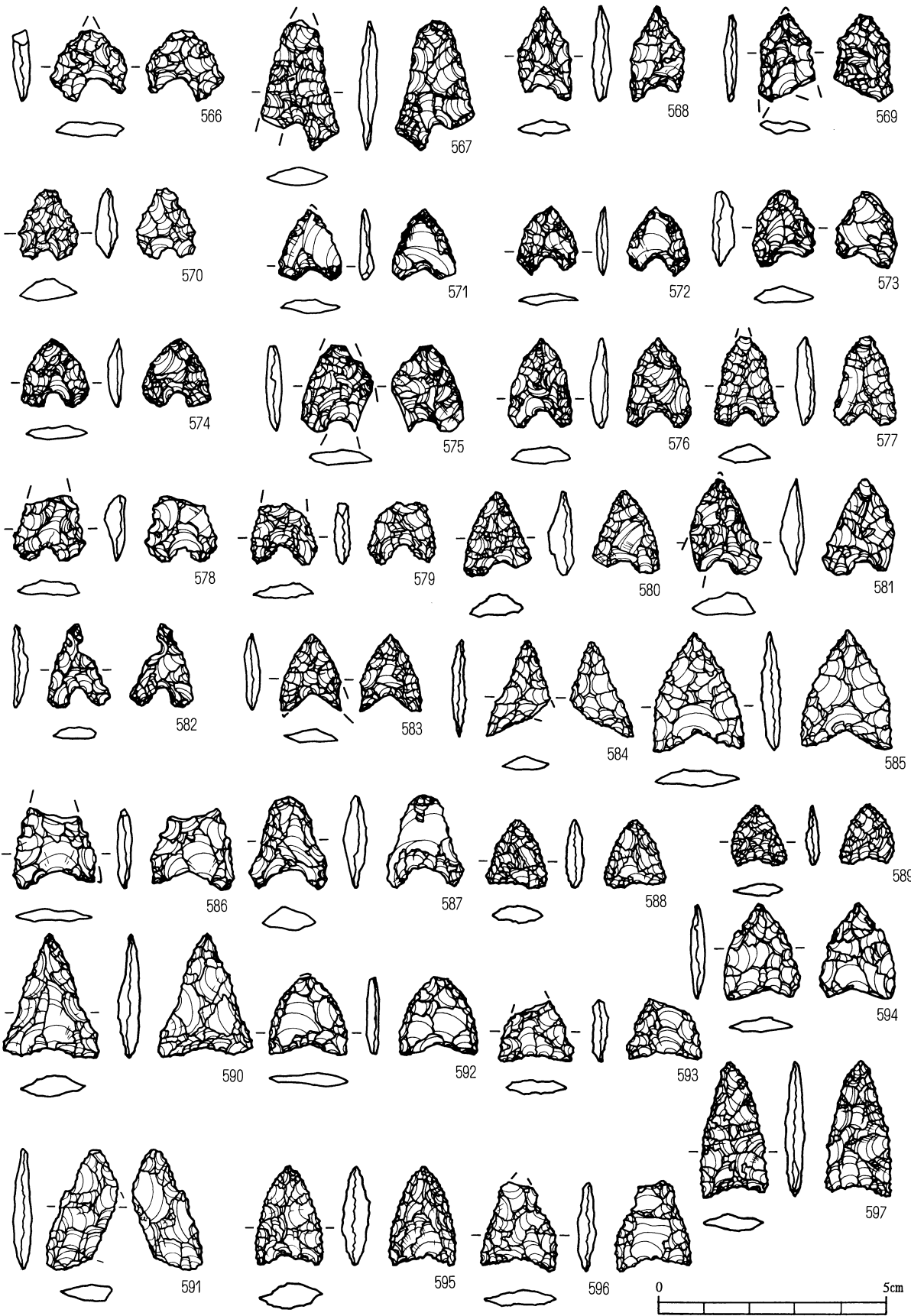
（黒曜石D）礫皮面に凹凸が多く、石英質の不純物などが多くかつ満遍なくみられる黒色の黒曜石。県北産の黒曜石に類似する。

（黒曜石E）上記以外の県内産とみられる黒曜石。

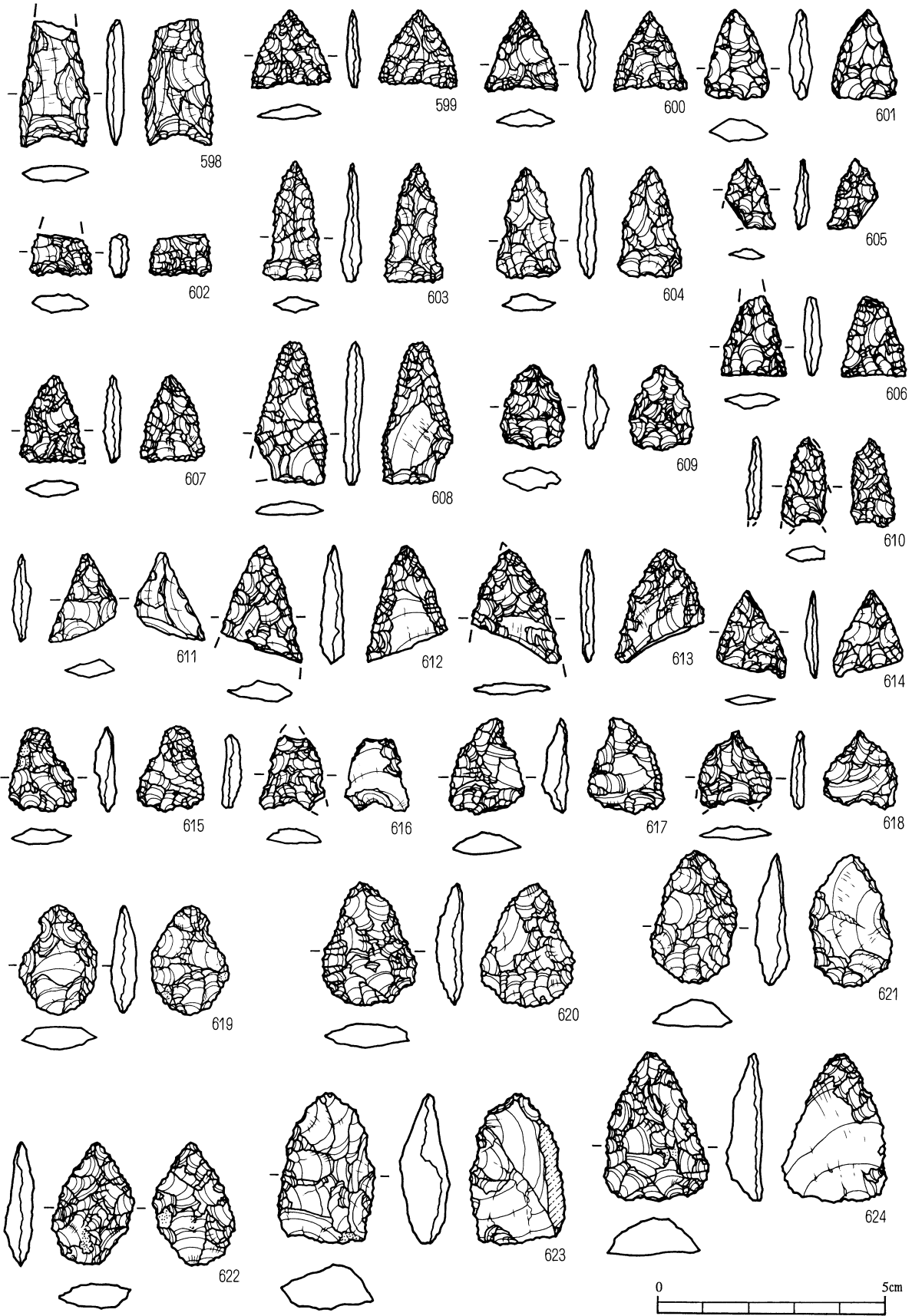
今回、提示できた資料は出土資料の一部であり、特に使用痕剥片、剥片として提示した資料には相当数の未提示の資料が存する。全出土資料に対する分類及び統計的処理による資料抽出を行っていないため、資料体として検討する場合注意を要する。ただし、任意の抽出資料ではあるが資料の全体傾向に配慮しており、使用石材、剥片剥離技術及びその用い方等について論及する上で一定の有効性をもつものとする。



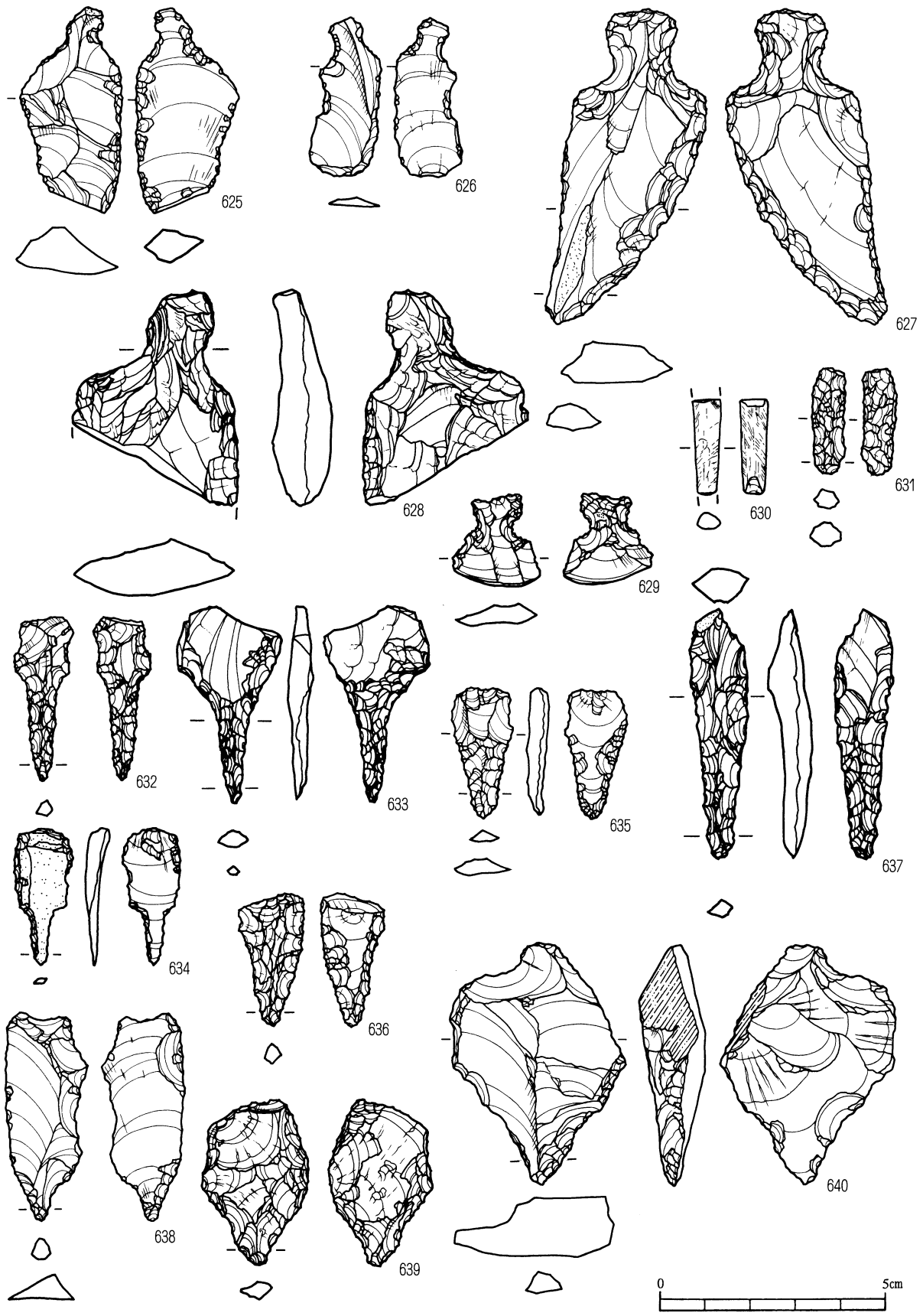
第57図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(50)



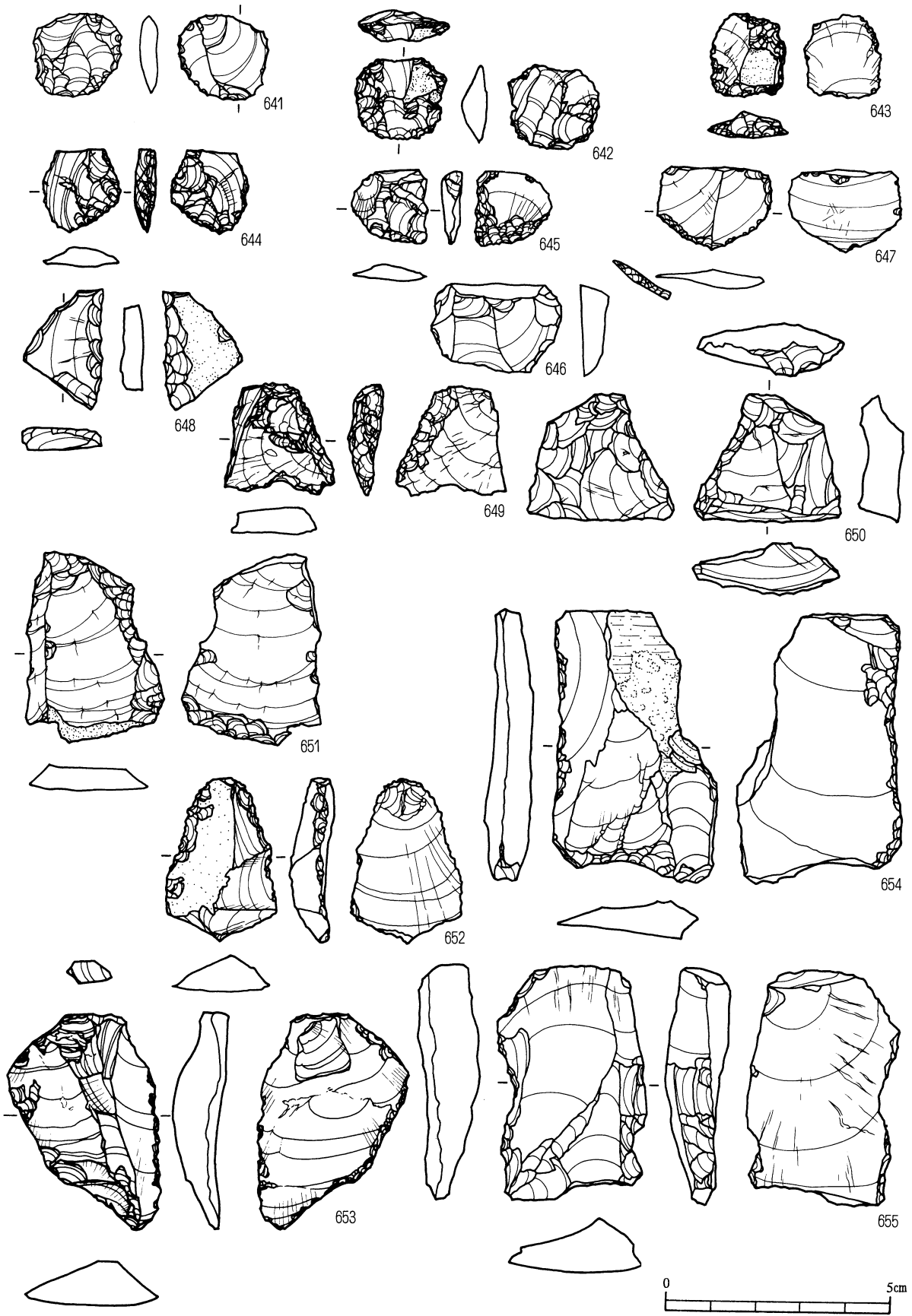
第58図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(51)



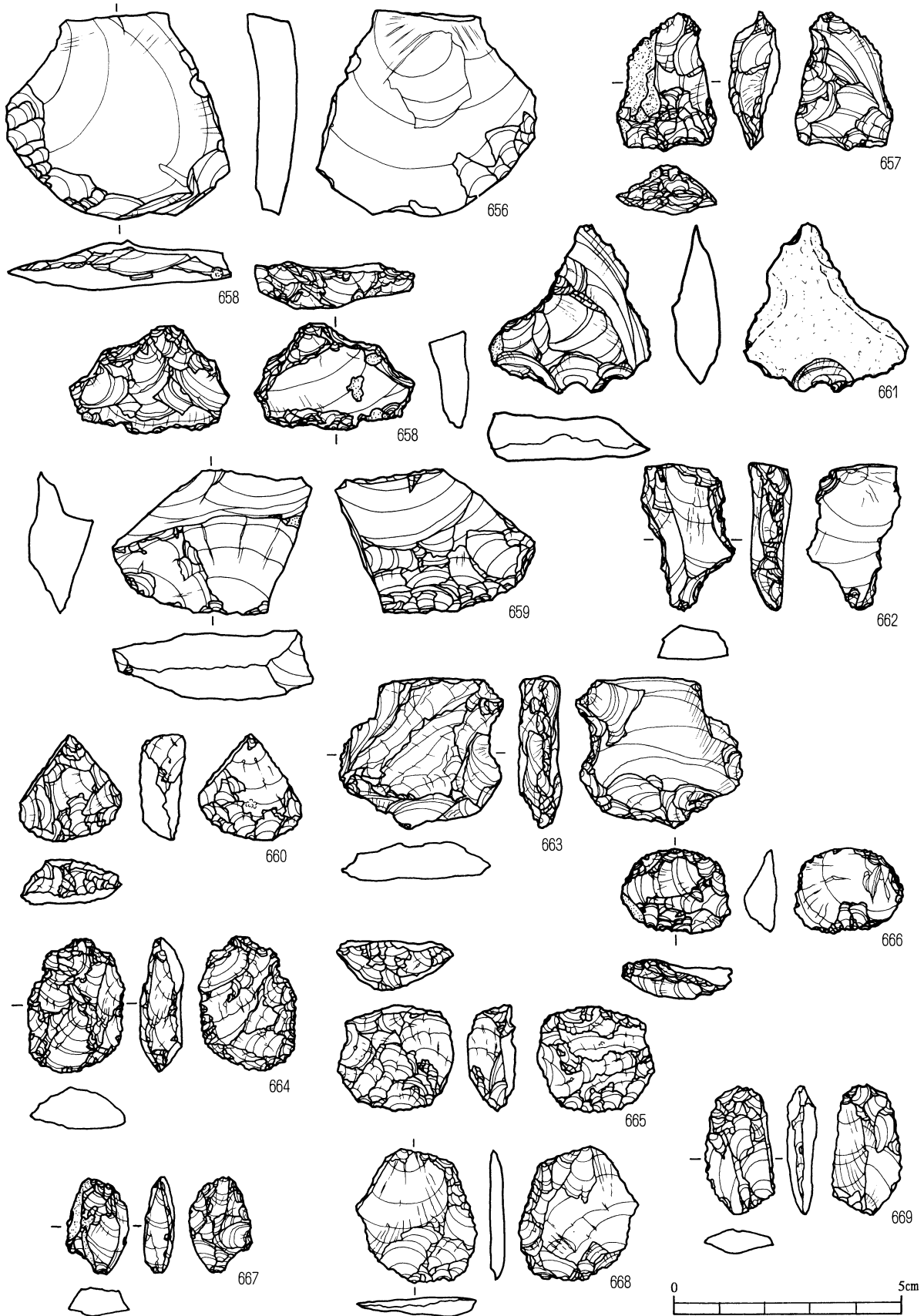
第59図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(52)



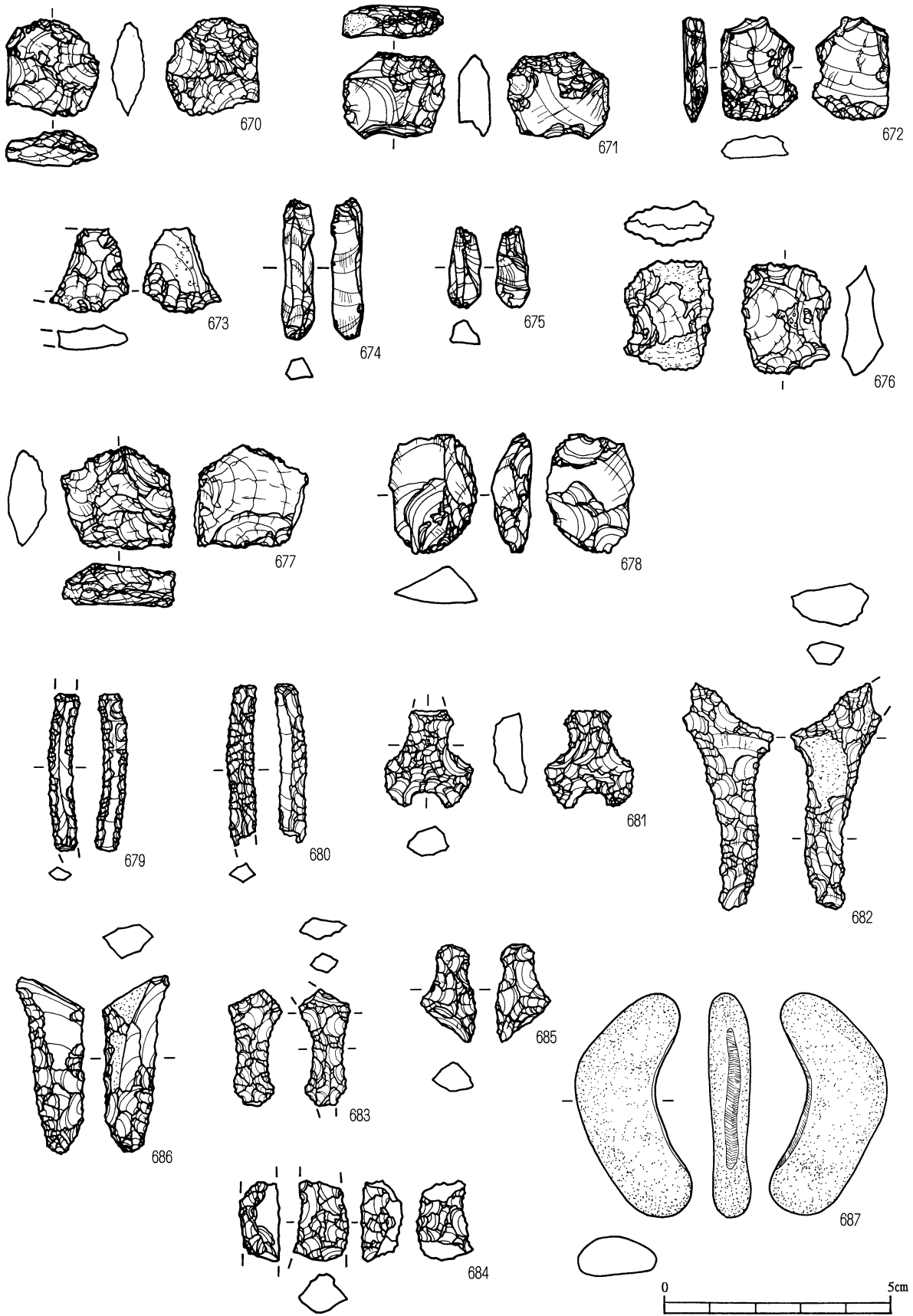
第60図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(53)



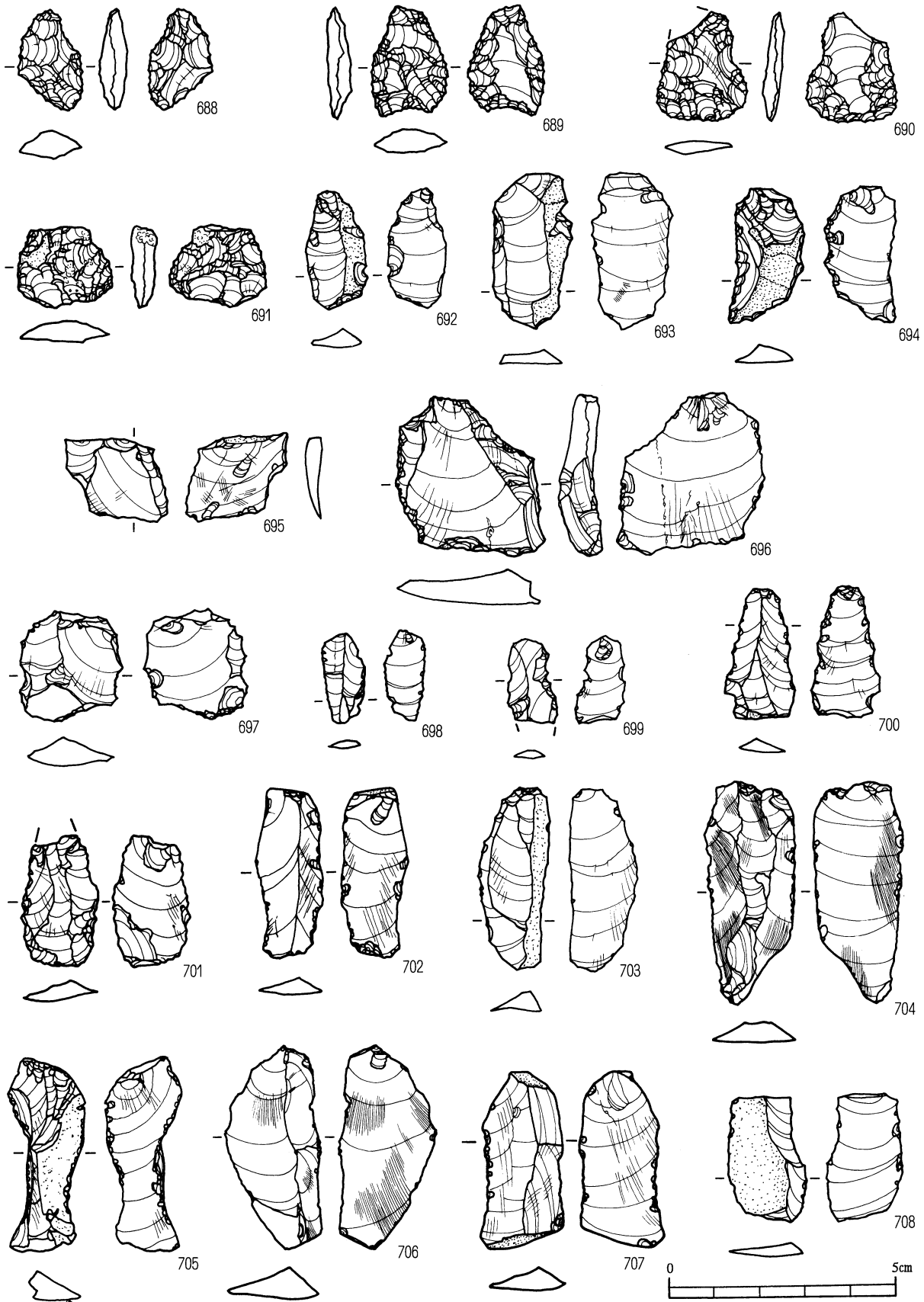
第61図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(54)



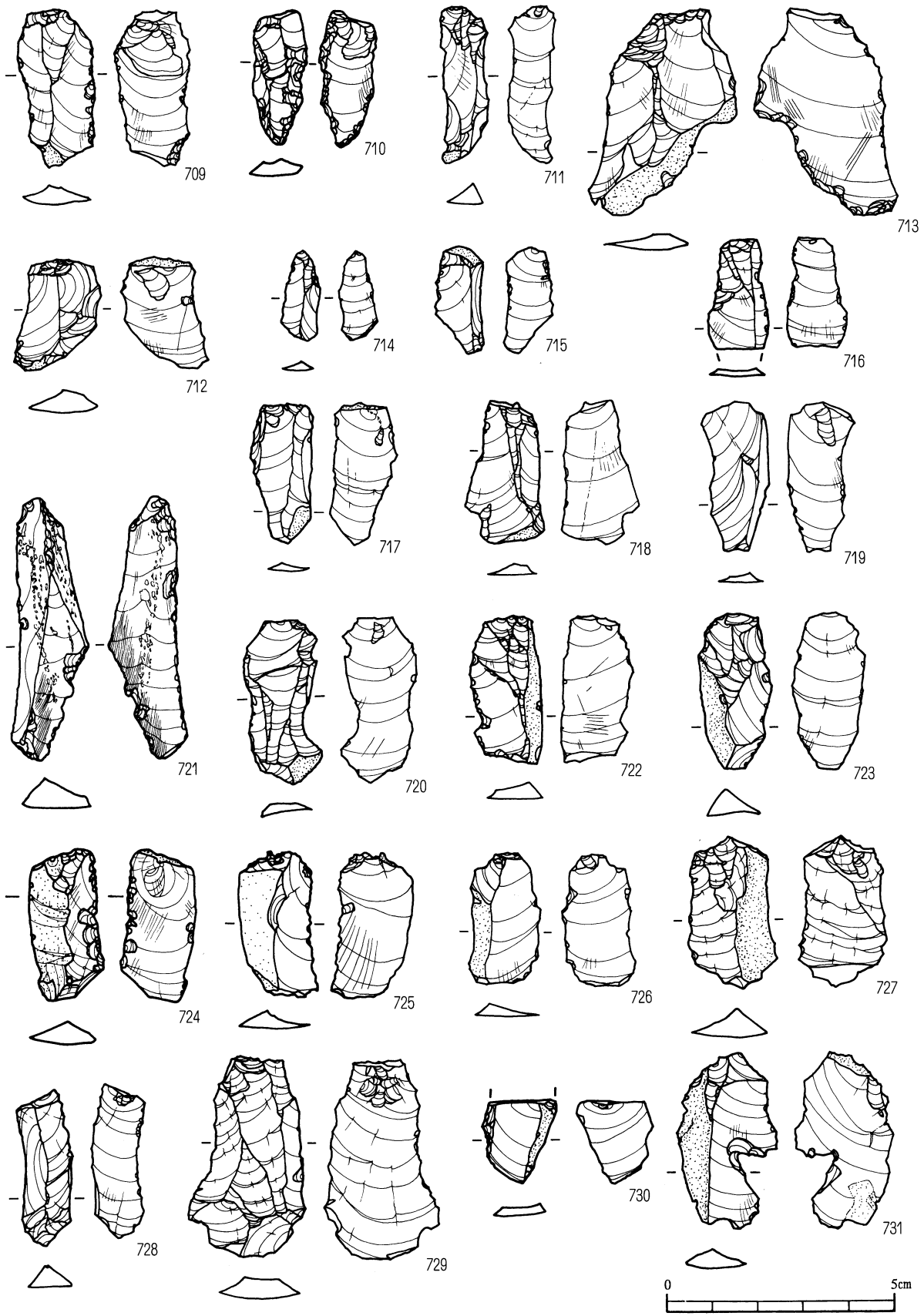
第62図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(55)



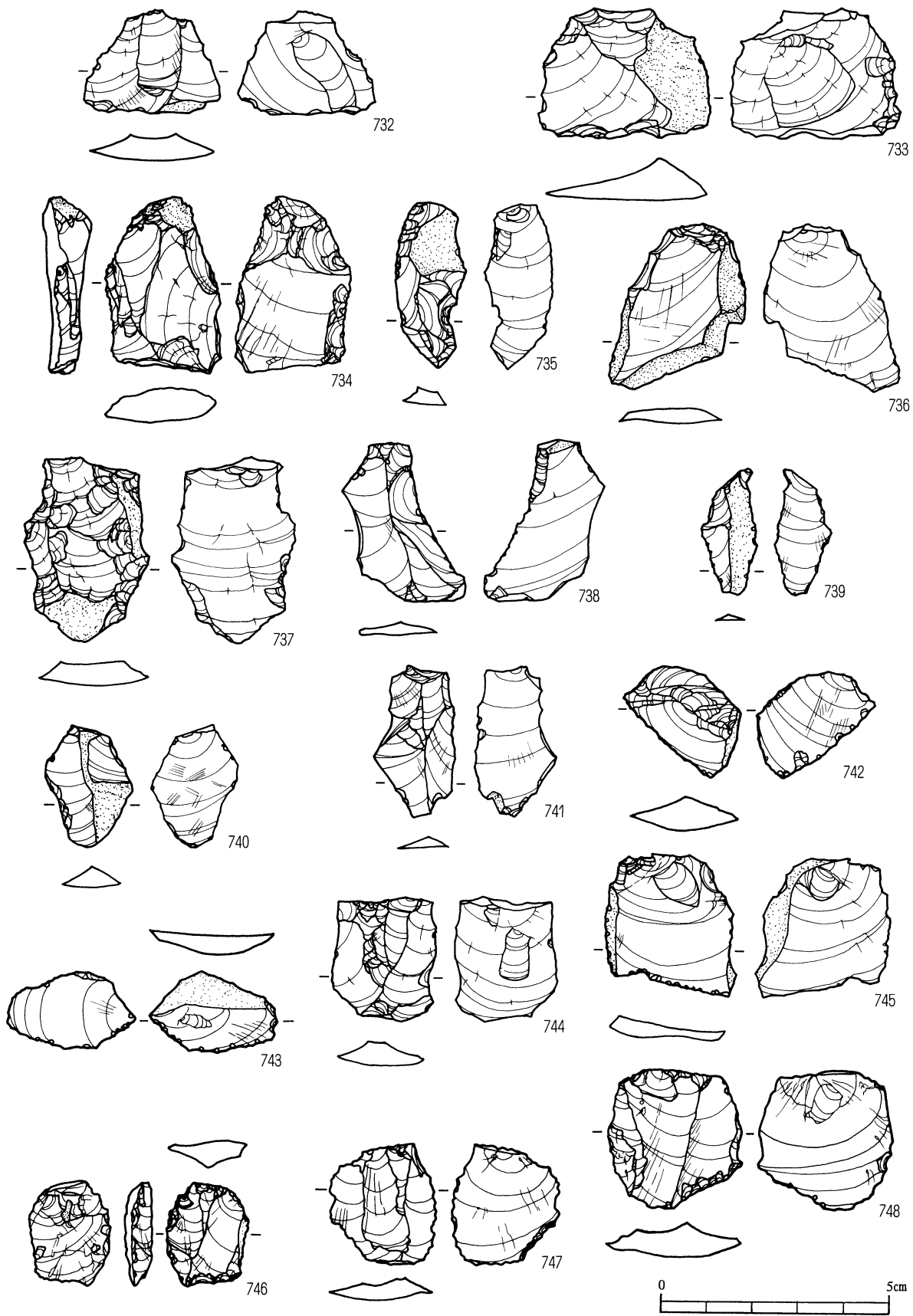
第63図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(56)



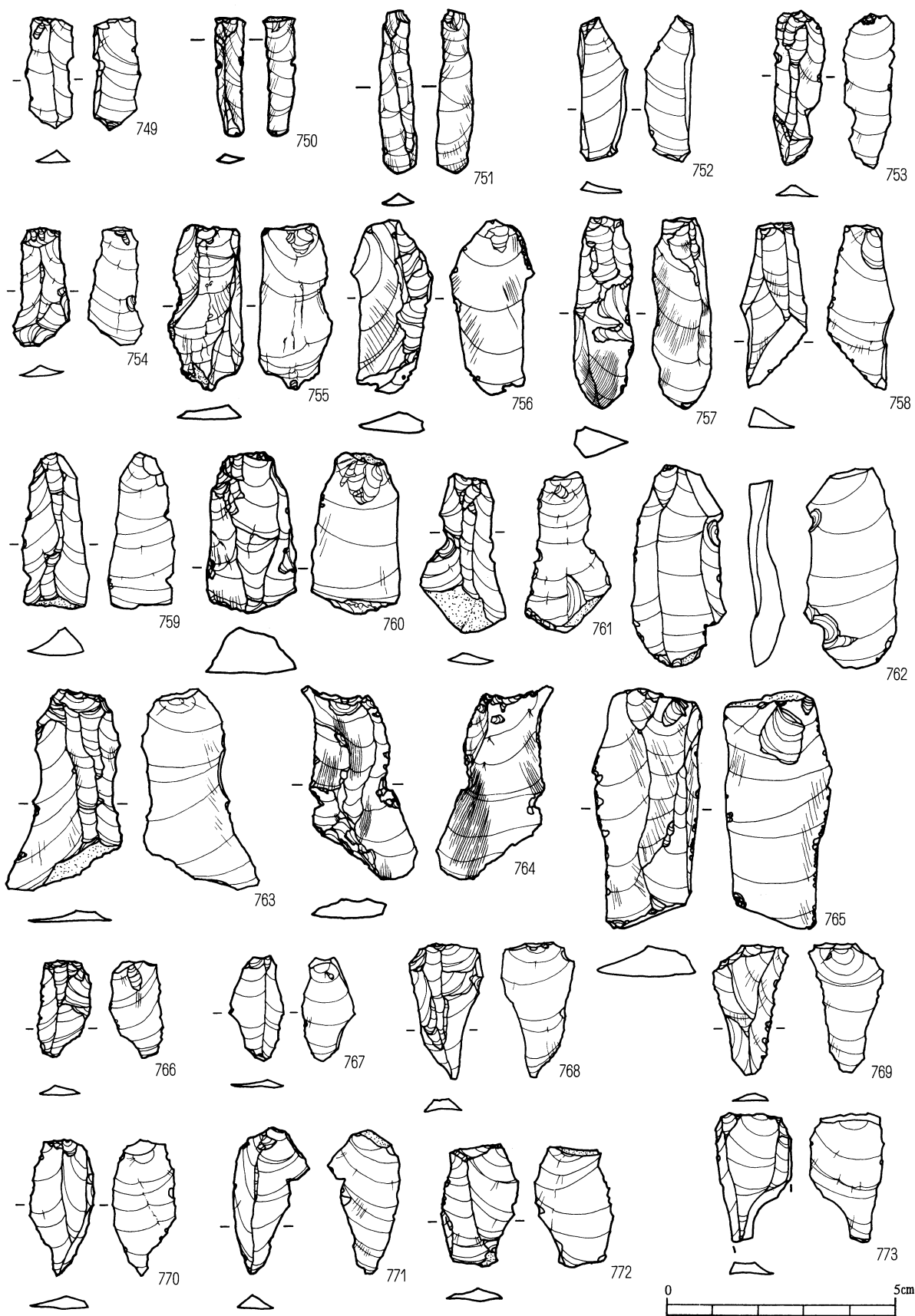
第64図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(57)



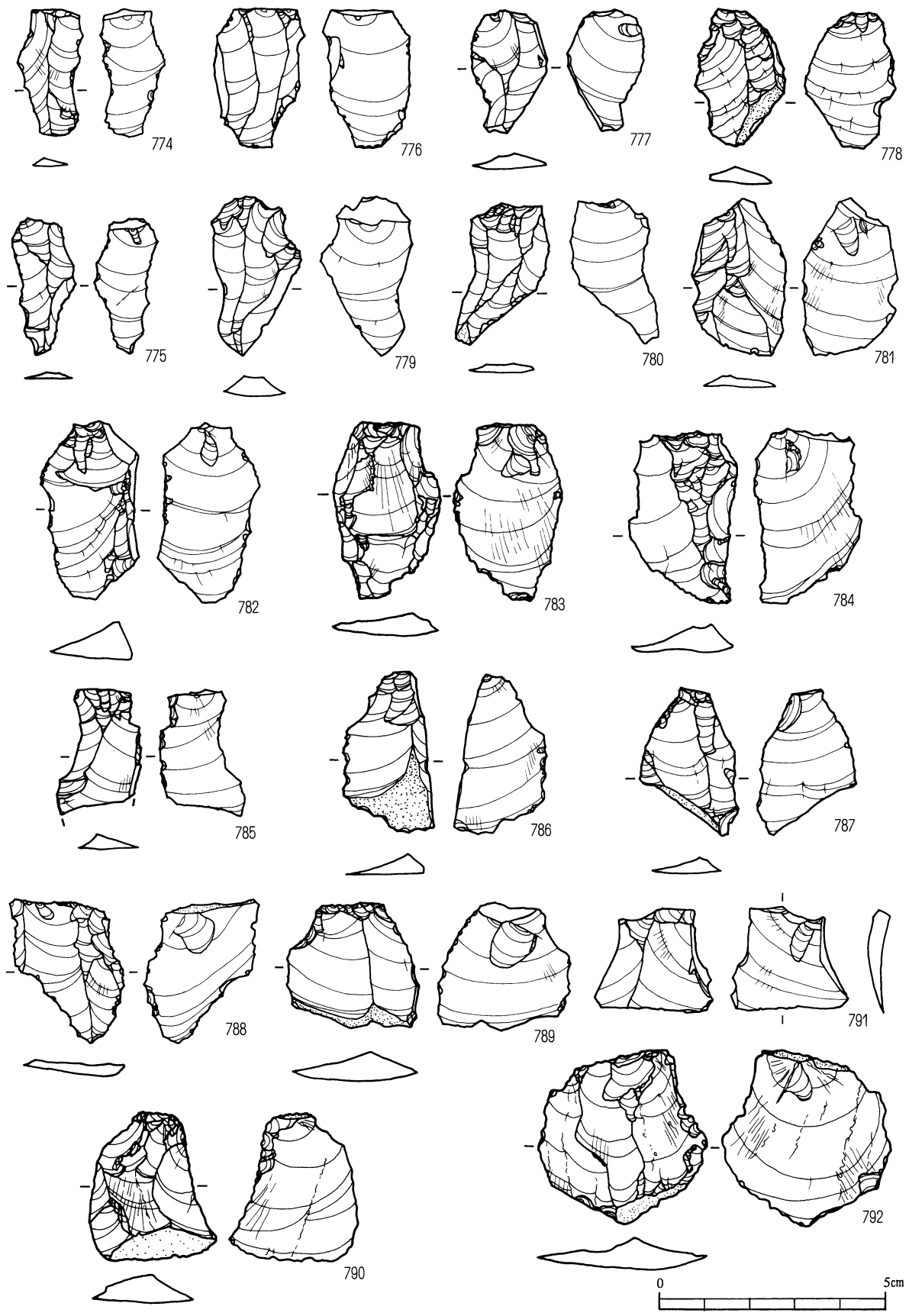
第65図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(58)



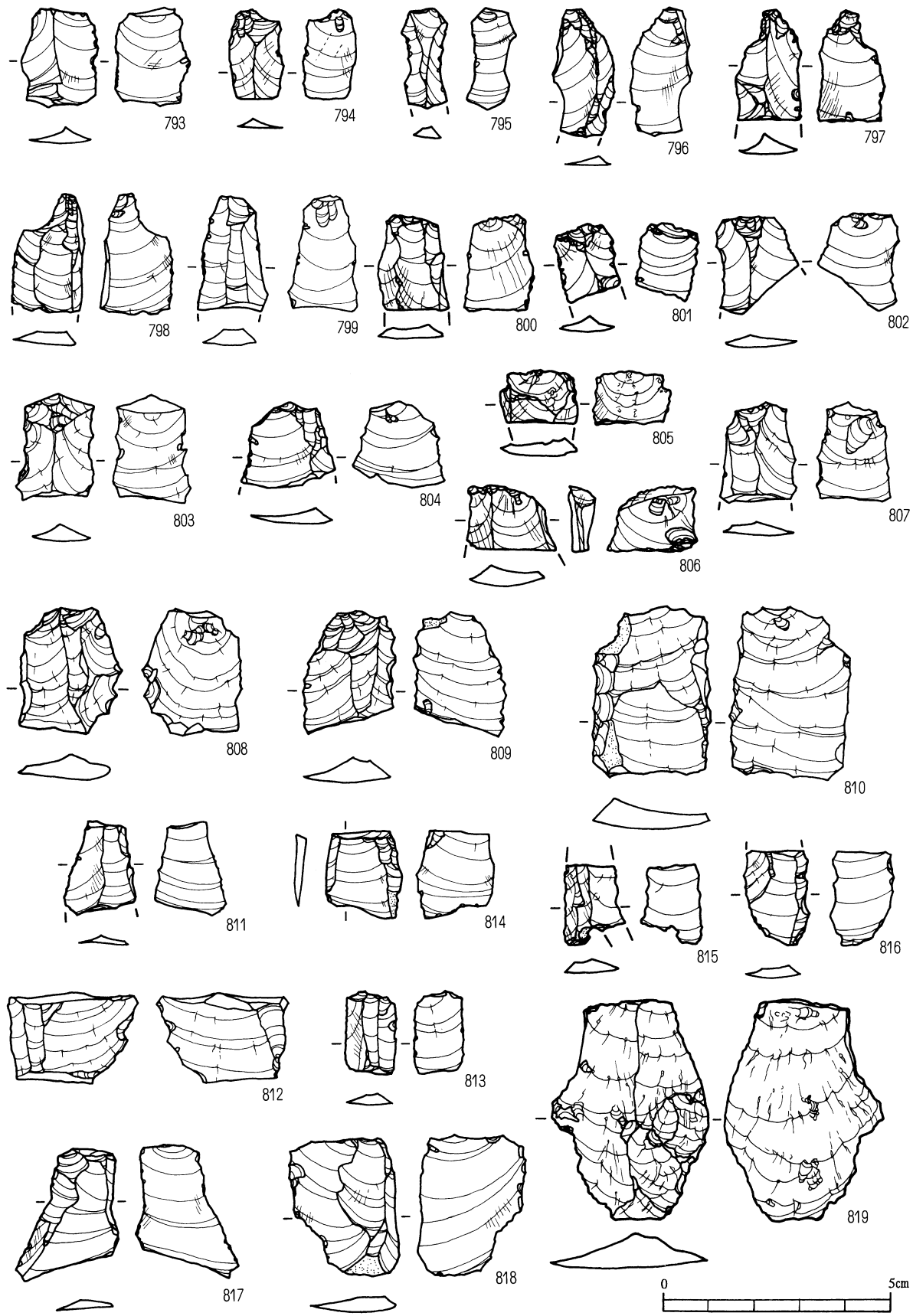
第66図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(59)



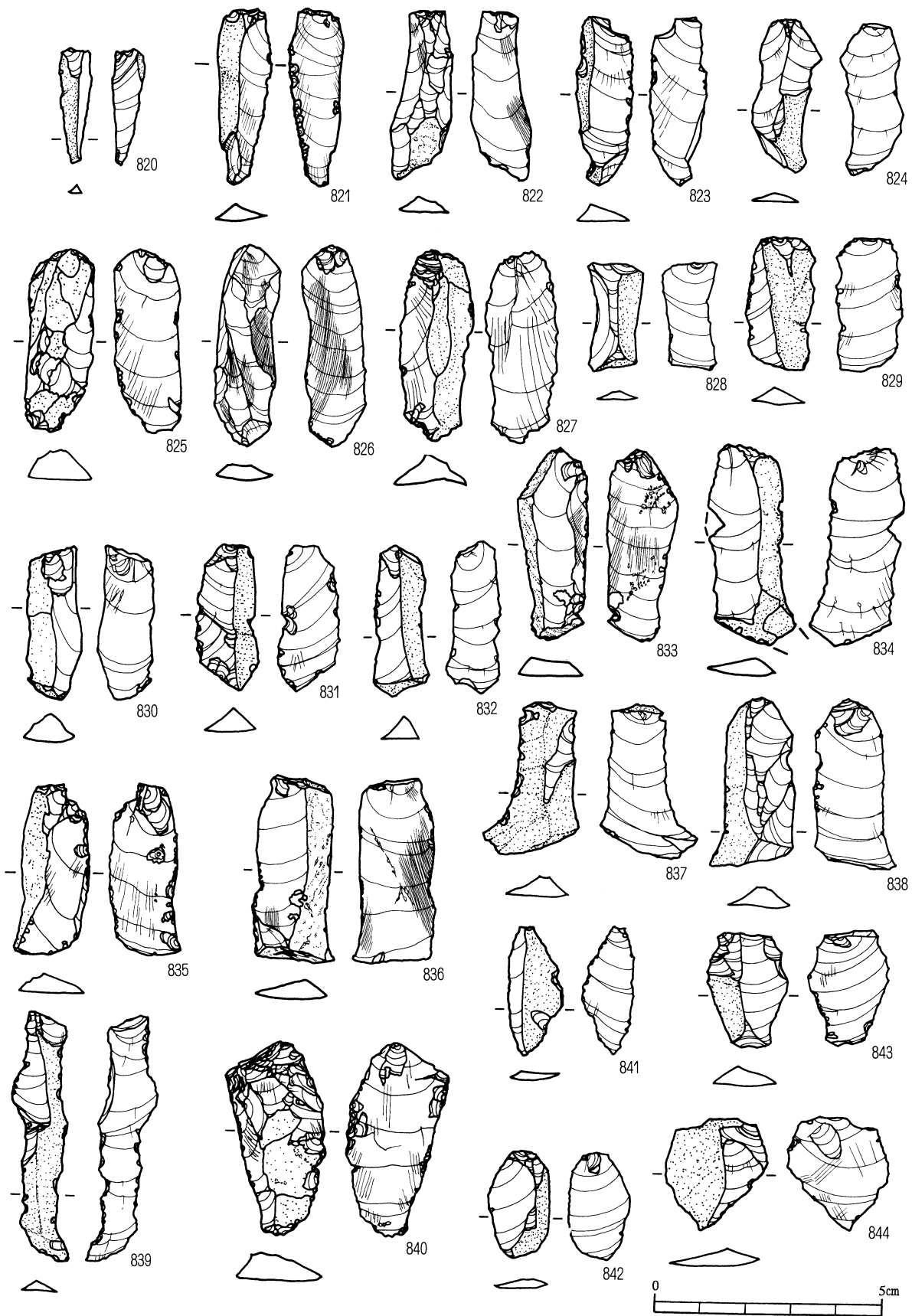
第67図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(60)



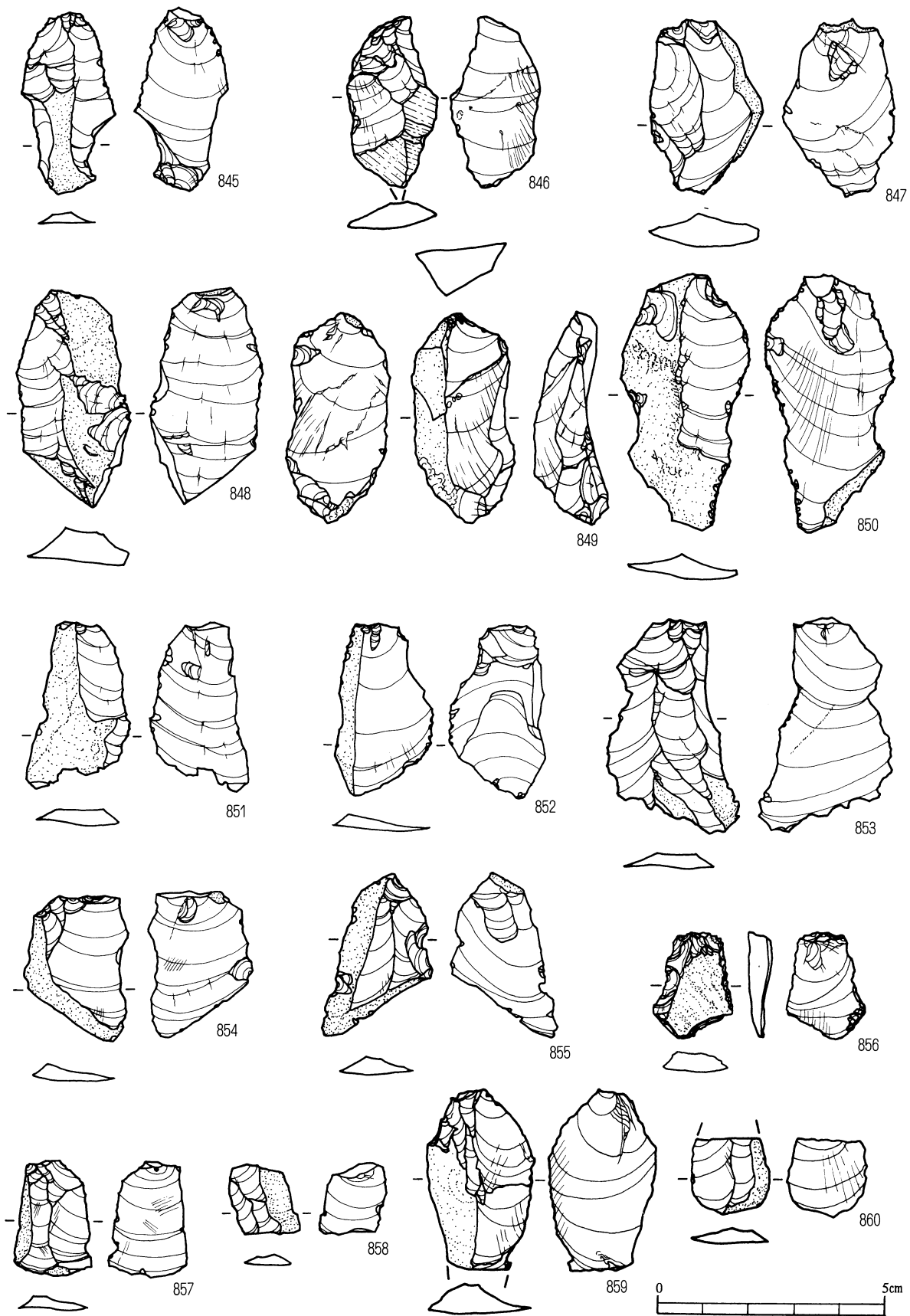
第68図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(61)



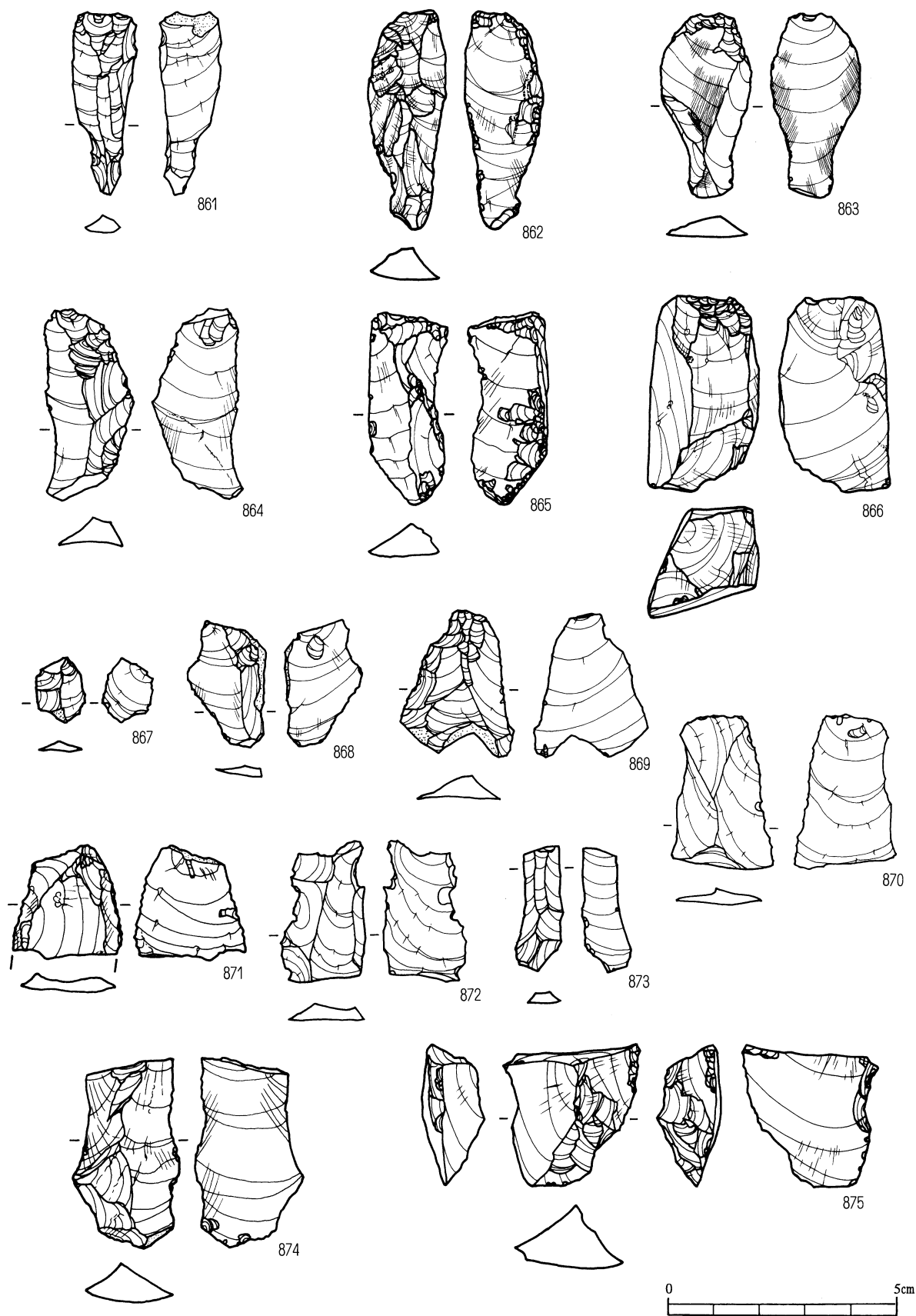
第69図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(62)



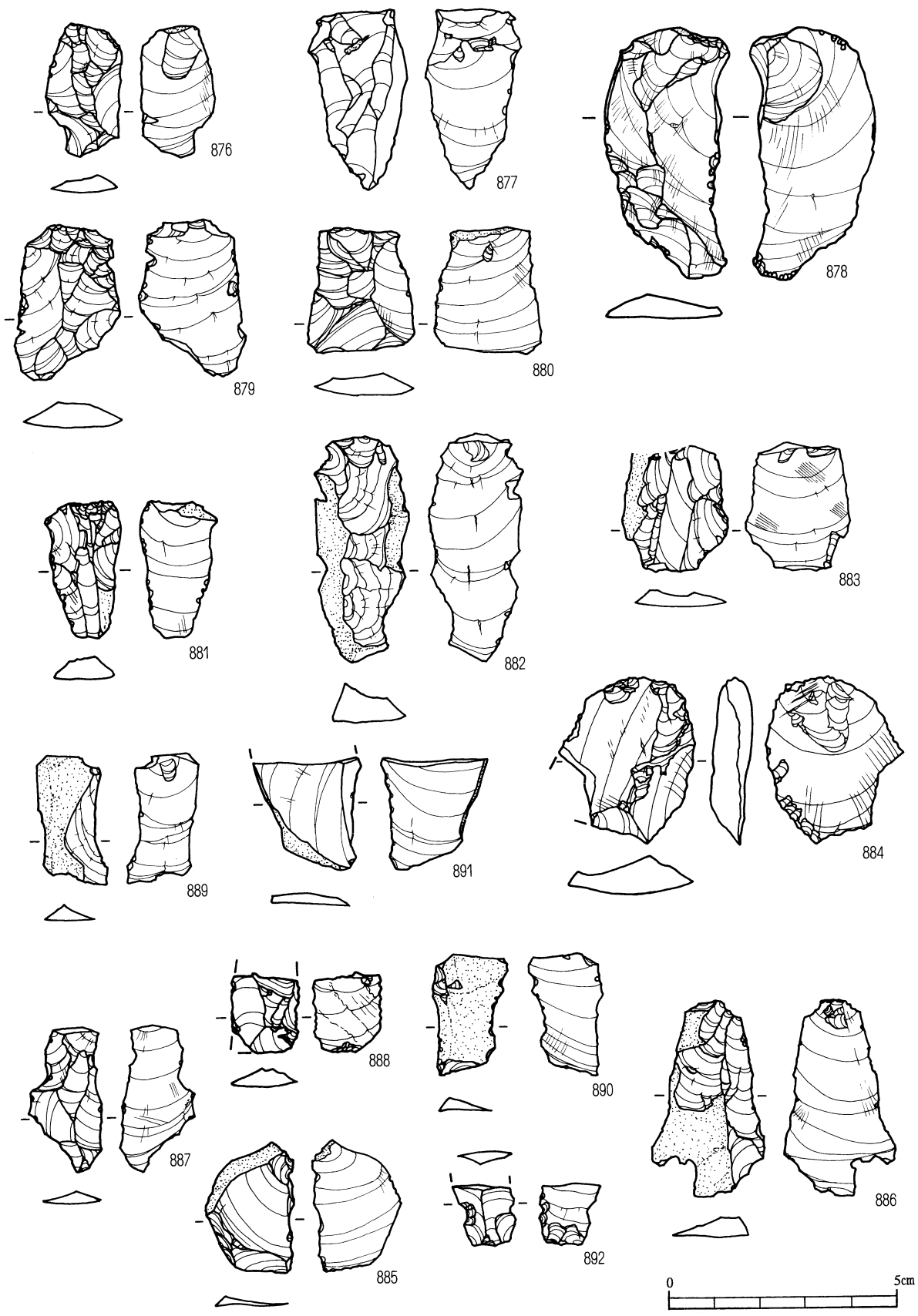
第70図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(63)



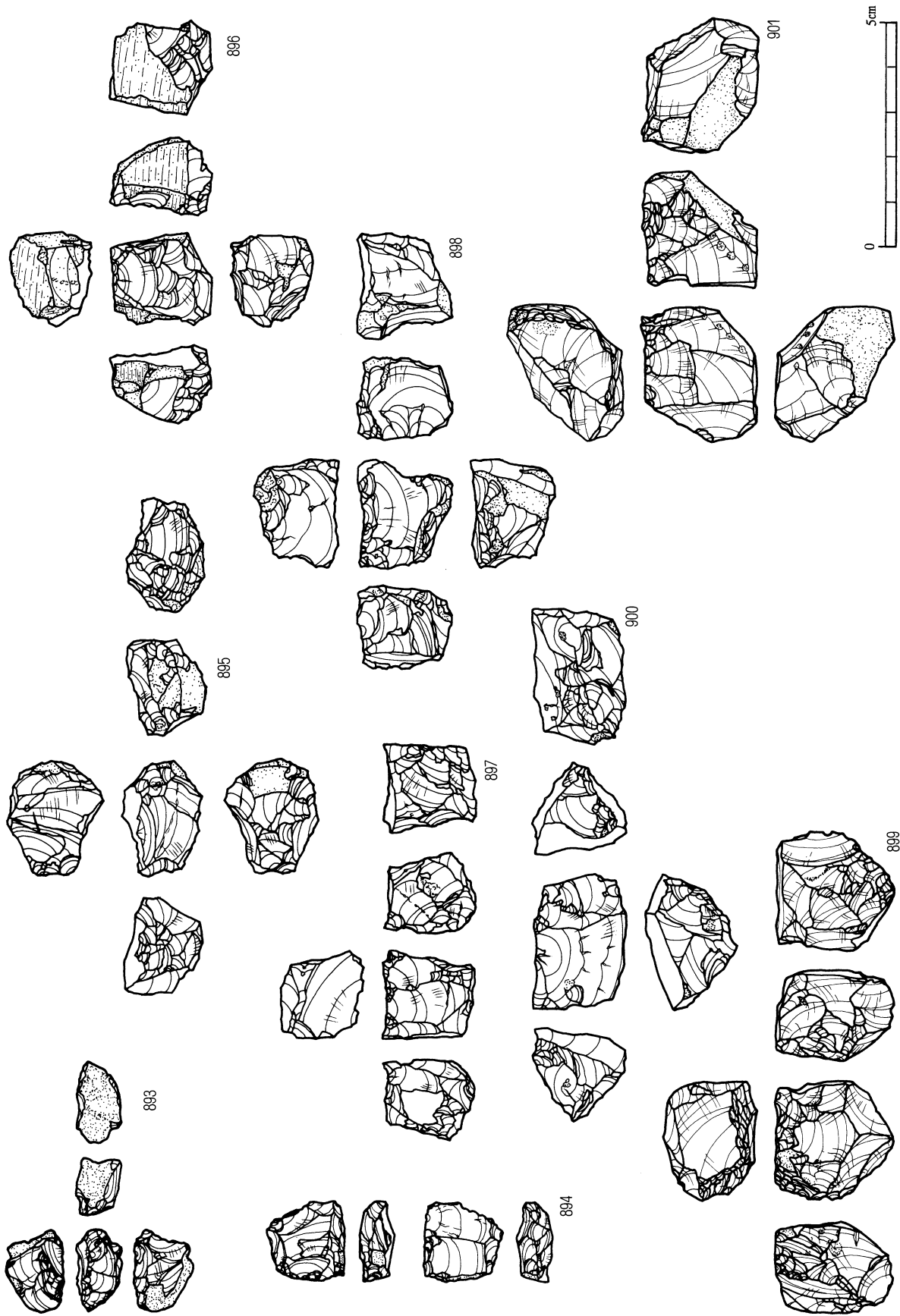
第71图 冲田岩戸遺跡遺物実測図(64)



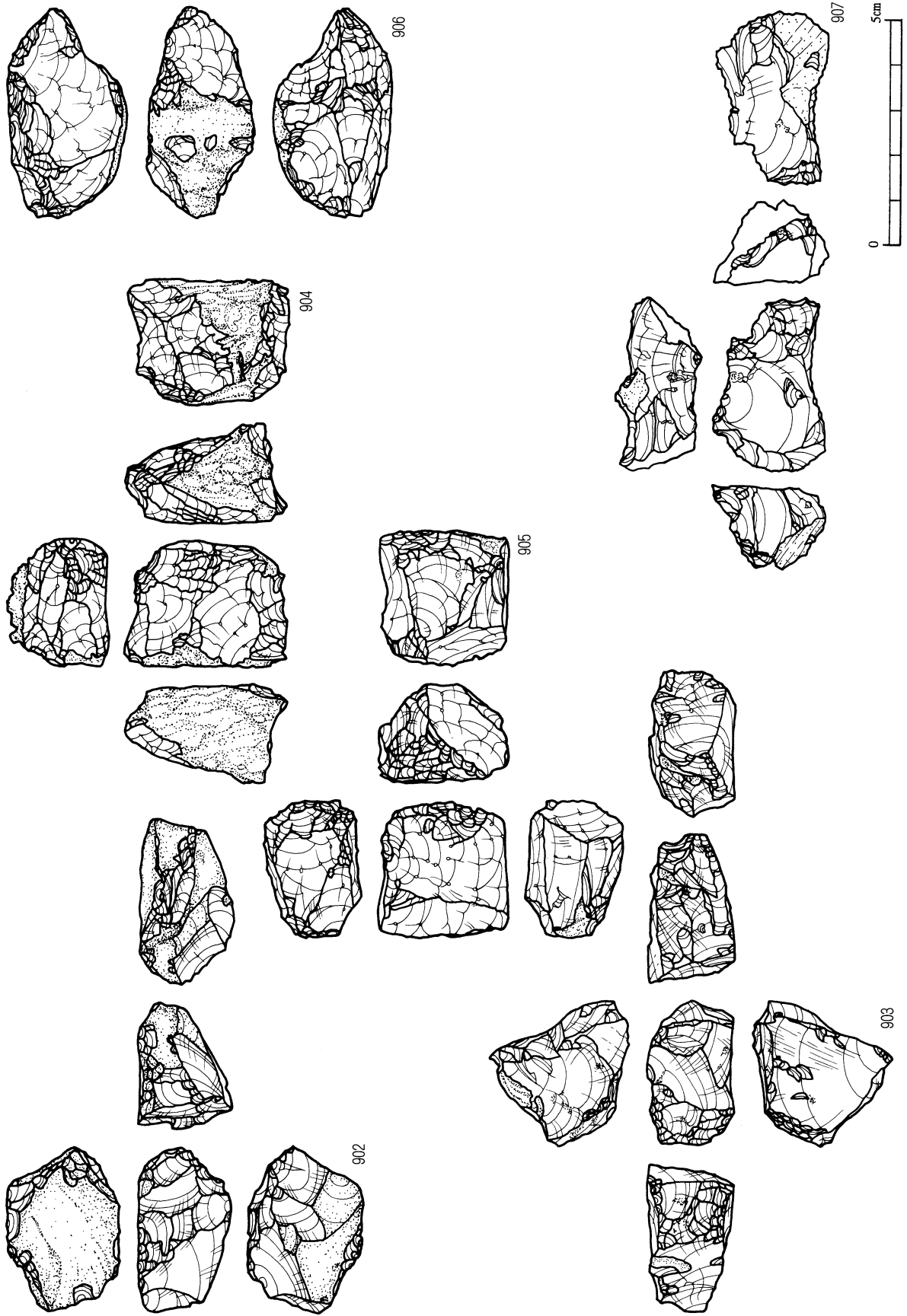
第72図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(65)



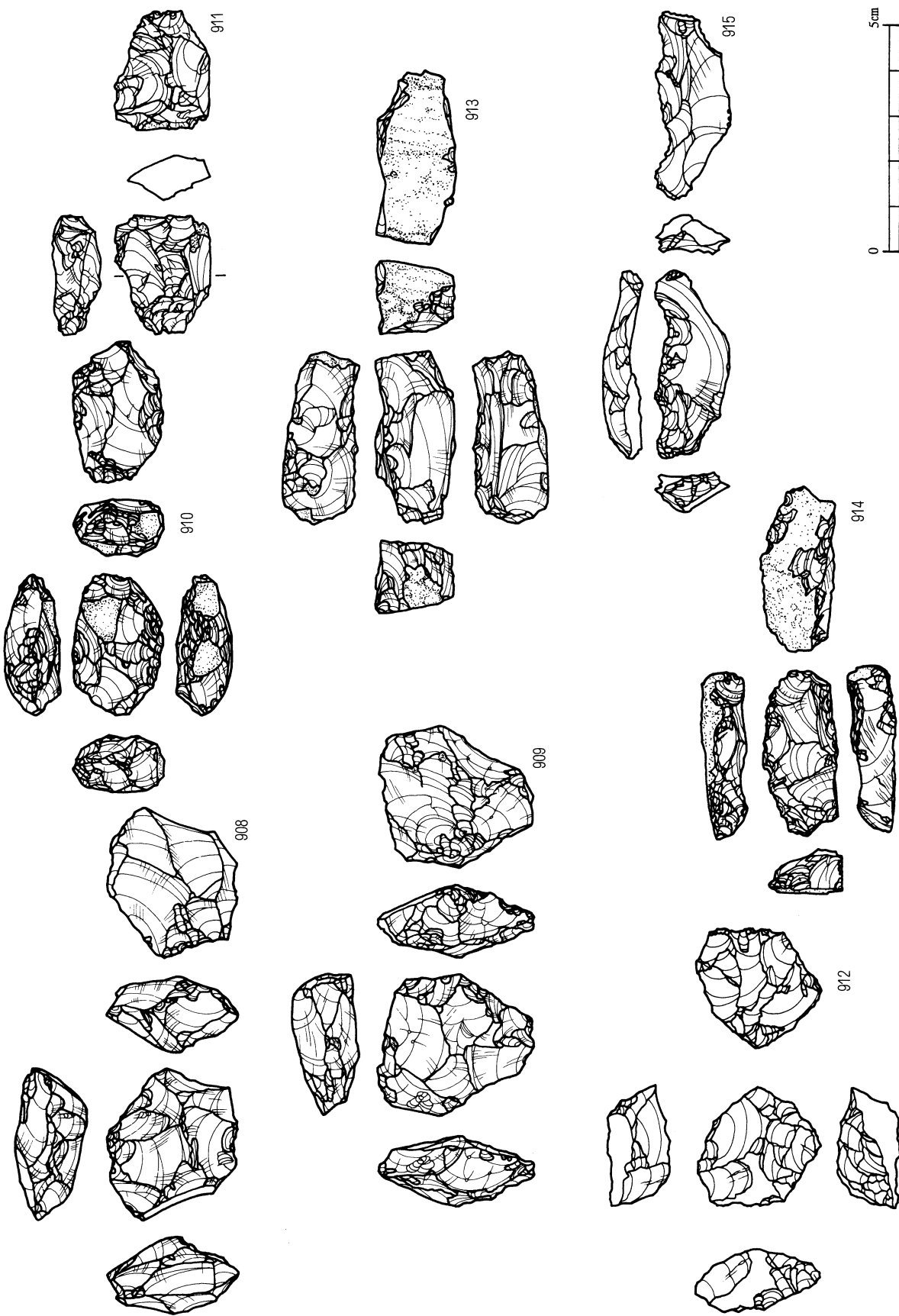
第73図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(66)



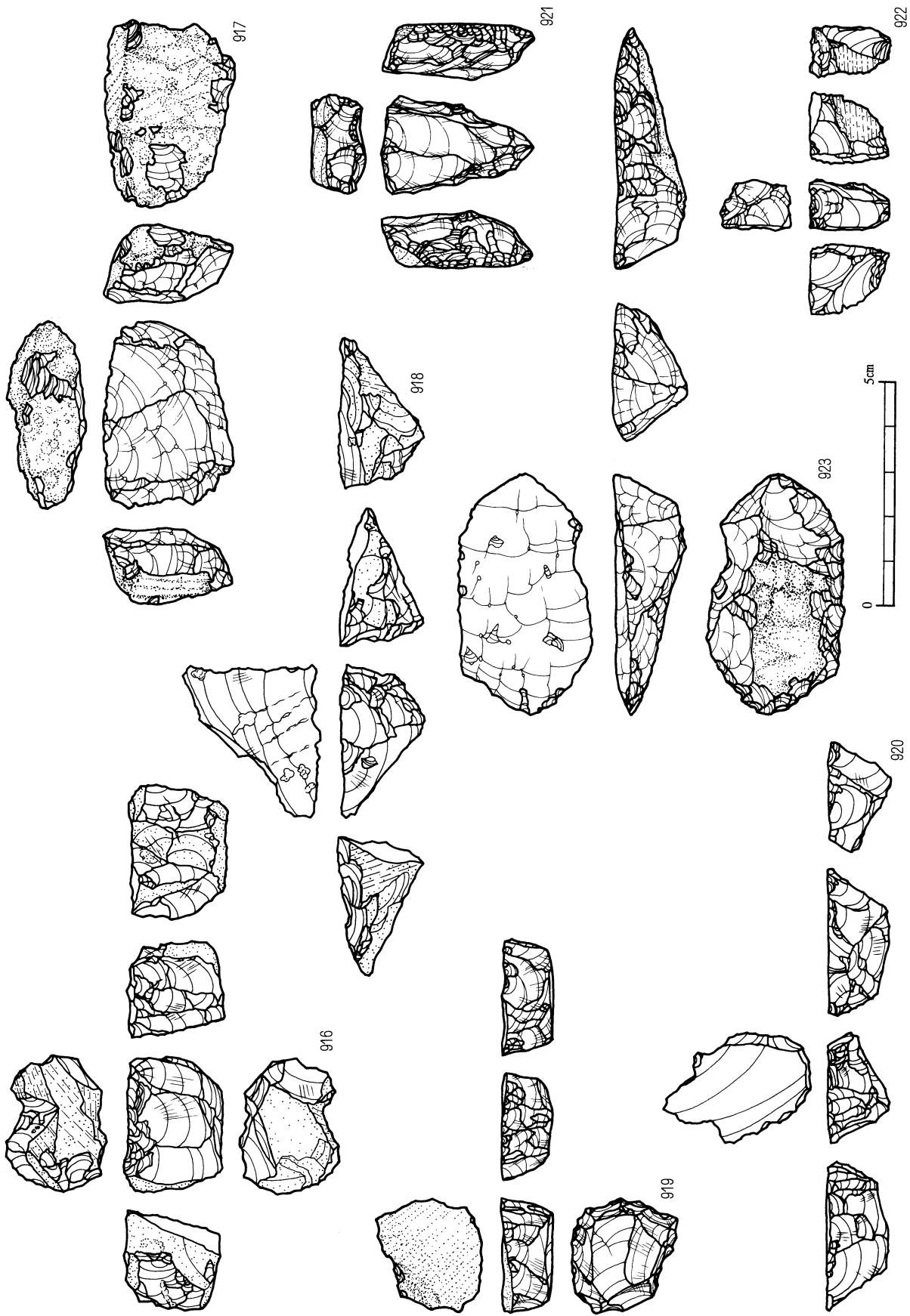
第74図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(67)



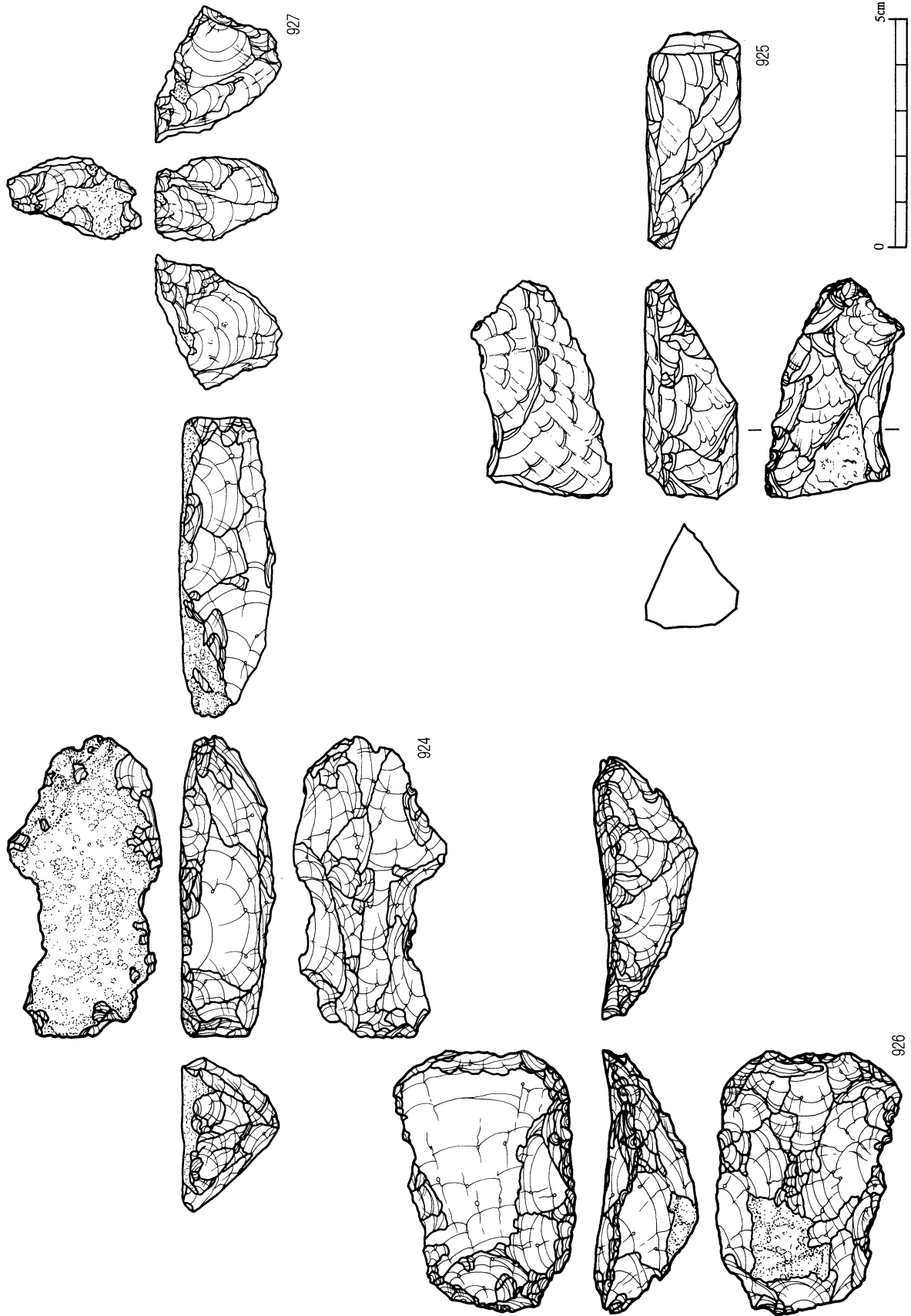
第75図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(68)



第76図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(69)



第77図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(70)



第78図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(71)

第11表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(9)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
第 36 図	373	磨製石斧	V	安山岩	13.6	5.0	2.9	285	乳棒状
	374	"		砂 岩	13.6	6.4	3.1	364	"
	375	"		安山岩	(10.1)	4.7	2.1	155	定角状
	376	"		蛇紋岩	9.6	3.8	1.6	100	短冊状
	377	"		安山岩	10.2	5.0	1.4	120	"
	378	"		蛇紋岩	(5.6)	(3.0)	(0.7)	14	定角状
	379	"		安山岩	9.7	3.3	1.5	65	"
第 37 図	380	"		安山岩	(9.7)	(4.3)	1.8	84	"
	381	"		安山岩	(7.1)	6.1	1.1	65	"
	382	"		蛇紋岩	(7.4)	(5.7)	0.9	64	"
	383	"		安山岩	(6.7)	5.4	1.2	66	"
	384	"		蛇紋岩	6.4	3.4	1.1	41	"
	385	"		安山岩	(5.8)	6.0	1.0	42	扁平
	386	"		粘板岩	(5.5)	5.1	0.9	35	定角状
387	"		安山岩	12.9	7.2	1.7	221	扁平	
第 38 図	388	"		蛇紋岩	(8.1)	3.9	1.4	80	短冊状
	389	"		蛇紋岩	(4.9)	(4.4)	1.6	40	定角状
	390	"		頁 岩	(9.2)	2.1	2.2	45	ノミ状
	391	打製石斧		安山岩	(12.2)	5.7	1.8	200	短冊状
	392	"		粘板岩	12.6	6.3	2.3	224	"
	393	"		安山岩	(15.3)	6.6	2.0	250	"
	394	"		安山岩	(12.6)	5.0	2.0	171	"
第 39 図	395	"		頁 岩	12.4	6.5	1.3	181	有 肩
	396	"		安山岩	11.0	5.3	2.0	121	"
	397	"		硅質頁岩	13.1	5.1	1.8	179	"
	398	"		頁 岩	(5.1)	(5.0)	1.8	49	"
	399	"		頁 岩	(5.1)	6.3	1.7	75	"
	400	"		安山岩	12.2	5.6	1.2	142	"
	401	"		硅質頁岩	11.5	5.1	1.8	156	"
第 40 図	402	"		安山岩	(7.0)	4.9	1.9	100	"
	403	"		頁 岩	(8.1)	5.6	1.9	120	"
	404	"		安山岩	(8.9)	6.6	1.8	165	"
	405	"		頁 岩	13.6	5.6	1.7	140	"
	406	"		安山岩	(10.7)	6.7	2.0	200	"
	407	"		安山岩	13.1	6.9	2.2	205	"
第 41 図	408	"		硅質頁岩	11.9	6.3	1.8	130	"
	409	"		頁 岩	(11.4)	(5.2)	2.0	130	"
	410	"		安山岩	(9.1)	(5.6)	1.9	160	"
	411	"		頁 岩	(11.3)	(7.8)	2.0	195	"
	412	"		頁 岩	(8.9)	4.8	1.6	70	"
	413	"		安山岩	(7.1)	(5.1)	1.9	95	"
	414	"		安山岩	(11.5)	(5.6)	2.1	120	"
	415	"		安山岩	(8.0)	(5.1)	1.9	50	"
	416	"		粘板岩	(5.9)	(4.6)	1.2	40	"
第 42 図	417	"		安山岩	8.8	(6.7)	2.3	126	"
	418	"		安山岩	(9.7)	4.7	2.3	129	"
	419	"		頁 岩	(8.6)	(6.0)	3.1	184	"

第12表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(10)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
第 42 図	420	打製石斧	V	頁 岩	(8.3)	(6.8)	1.2	100	有 肩
	421	"		安山岩	(8.0)	(7.7)	2.2	161	"
	422	"		砂 岩	7.4	4.5	0.8	44	
	423	打製石器		粘板岩	8.7	5.6	1.5	86	横刃型石器
	424	打製石斧		頁 岩	(8.9)	7.5	1.7	138	
第 43 図	425	打製石器		安山岩	(5.5)	(7.0)	1.8	90	楔 形
	426	打製石斧		頁 岩	(8.6)	7.4	2.0	139	
	427	"		安山岩	8.2	4.9	1.2	66	
	428	"		安山岩	(10.3)	6.5	1.9	134	横刃型石器
	429	打製石器		安山岩	(7.8)	(5.4)	1.7	90	
	430	打製石斧		頁 岩	(8.8)	5.2	2.1	98	
	431	"		安山岩	(9.3)	5.3	1.4	86	
	432	"		粘板岩	(11.5)	7.5	1.3	125	
第 44 図	433	"		安山岩	26.4	12.6	4.0	1625	
	434	"		安山岩	(10.9)	7.6	1.9	245	
	435	"		安山岩	15.8	9.9	2.7	520	
	436	打製石器		硅質頁岩	13.9	(8.2)	2.8	420	横刃型石器
	437	"		安山岩	9.0	7.9	1.8	165	楔 形
	438	"		安山岩	9.5	8.1	2.7	267	"
	439	"		粘板岩	(10.4)	(9.8)	1.1	112	円盤状
	440	"		安山岩	(5.4)	(8.5)	1.6	84	楔 形
第 45 図	441	削 器		ハリ質安山岩	(5.7)	5.8	1.6	90	
	442	礫 器		安山岩	15.4	12.0	3.0	905	
	443	"		安山岩	11.3	(9.9)	2.9	415	
	444	"		安山岩	7.4	7.7	1.6	130	
	445	"		安山岩	(8.2)	9.3	1.5	185	
	446	"		安山岩	(12.4)	8.8	2.3	350	
	447	"		安山岩	11.5	(5.4)	1.8	140	
	448	削 器		ハリ質安山岩	6.1	10.8	1.4	95	
第 46 図	449	剥 片		ハリ質安山岩	(5.9)	5.6	2.8	100	
	450	礫 器		砂 岩	17.7	11.4	4.0	1075	
	451	"		頁 岩	19.8	9.0	4.0	970	
	452	"		安山岩	15.8	9.3	2.9	485	
	453	石 核		頁 岩	8.4	5.7	2.7	173	
	454	"		頁 岩	6.8	5.1	3.2	150	
	455	石 槌		硅質頁岩	(9.7)	7.0	4.6	436	
	456	"		砂 岩	(9.3)	5.6	4.0	300	
第 46 図	457	"		花崗岩	7.6	6.4	3.3	296	
	458	"		ホルンフェルス	(6.9)	5.5	3.4	205	
	459	"		砂 岩	7.7	6.1	3.5	300	
第 47 図	460	敲 石		安山岩	8.0	3.8	3.5	180	棒 状
	461	"		花崗岩	9.2	5.3	3.6	275	"
	462	"		砂 岩	(9.1)	3.9	2.3	150	"
	463	"		砂 岩	(6.6)	2.5	1.8	50	"
	464	"		砂 岩	6.1	5.2	2.0	105	小型扁平
	465	"		安山岩	7.1	5.8	2.5	145	"
	466	"		安山岩	6.6	5.7	2.0	95	"

第13表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(1)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
第 47 図	467	敲 石	V	安山岩	6.0	4.6	1.9	80	小型扁平
	468	"		砂 岩	6.3	4.9	2.0	100	"
	469	"		砂 岩	5.9	5.0	2.8	110	"
第 48 図	470	"		砂 岩	6.3	5.1	2.4	115	"
	471	"		砂 岩	5.3	4.9	2.5	95	"
	472	"		安山岩	6.6	6.0	2.6	158	"
	473	"		安山岩	6.1	5.6	2.3	115	"
	474	凹 石		砂 岩	6.6	5.8	2.8	165	"
	475	"		安山岩	5.3	5.0	2.1	90	"
	476	"		砂 岩	6.3	5.6	3.5	190	円 礫
477	"		砂 岩	6.5	5.6	2.3	110	小型扁平	
第 49 図	478	敲 石		砂 岩	8.4	8.7	2.8	540	
	479	"		安山岩	10.7	9.3	3.2	505	
	480	"		安山岩	9.0	8.6	2.3	260	
	481	"		安山岩	11.0	9.9	3.1	465	
	482	"		凝灰岩	9.2	6.5	2.3	215	
	483	"		安山岩	11.6	9.1	2.7	440	
	484	"		安山岩	11.2	9.4	3.4	640	
485	"		安山岩	8.5	6.6	6.0	455		
第 50 図	486	"		安山岩	8.1	7.0	3.8	335	
	487	"		安山岩	6.3	6.0	2.8	165	
	488	"		砂 岩	6.0	4.9	2.6	120	
	489	"		砂 岩	7.4	6.7	3.0	210	
	490	"		凝灰岩	8.2	7.3	2.1	185	
第 51 図	491	"		安山岩	9.5	6.4	2.5	240	
	492	"		安山岩	7.4	6.5	2.1	160	
	493	"		安山岩	13.3	10.9	2.2	495	
	494	"		砂 岩	11.1	8.6	3.1	430	
	495	"		砂 岩	7.5	8.4	2.3	210	
	496	"		砂 岩	7.8	8.5	4.6	370	
	497	"		安山岩	10.4	9.9	3.1	455	
第 52 図	498	"		砂 岩	8.2	8.4	2.6	283	
	499	"		安山岩	12.1	10.5	3.3	478	
第 50 図	500	磨 石		安山岩	(7.6)	(11.0)	5.1	650	
	501	"		安山岩	(7.5)	(9.3)	4.5	460	
	502	"		砂 岩	(6.3)	(10.0)	4.2	375	
	503	"		安山岩	13.4	(5.5)	6.2	595	
	504	"		安山岩	(11.2)	(6.0)	5.5	495	
第 51 図	505	"		安山岩	(7.7)	9.9	4.8	635	
	506	"		安山岩	11.4	(7.4)	5.6	695	
第 52 図	507	"		安山岩	(7.6)	(10.4)	4.4	480	
	508	"		安山岩	(8.2)	(11.8)	6.0	720	
	509	"		安山岩	(7.8)	(10.8)	5.8	620	
	510	"		安山岩	(11.8)	(10.5)	5.7	840	
	511	"		花崗岩	(6.5)	(8.6)	5.7	495	
	512	"		安山岩	(8.8)	(7.9)	4.7	430	
	513	"		安山岩	(6.2)	(10.2)	5.5	440	

第14表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(12)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
第52図	514	磨 石	V	安山岩	(7.3)	10.2	4.5	550	
第 53 図	515	台 石		安山岩	16.3	14.6	5.9	1080	
	516	"		安山岩	24.7	7.4	7.0	2500	
	517	"		砂 岩	31.5	10.6	8.9	4550	
	518	"		安山岩	32.2	9.4	8.7	4200	
	519	磨 石		安山岩	(19.8)	9.8	5.8	2200	
第 54 図	520	凹 石		安山岩	13.2	11.4	6.3	170	
	521	台 石		安山岩	15.6	14.3	5.3	1500	
	522	凹 石		安山岩	11.9	8.4	4.5	695	
	523	磨 石		安山岩	(11.4)	11.4	6.8	1300	
	524	石 錘		安山岩	7.4	7.8	1.7	165	
第 55 図	525	石 皿		安山岩	(21.1)	(18.4)	8.5	3400	
	526	"		安山岩	35.2	(27.0)	14.0	15600	
	527	"		安山岩	27.0	(20.4)	12.9	20800	
	528	"		安山岩	(28.4)	16.2	14.6	9100	
第 56 図	529	"		安山岩	(26.6)	36.8	10.6	11800	
	530	"		砂 岩	(26.6)	(19.8)	9.5	4300	
	531	"		安山岩	(45.1)	38.4	4.9	14400	
	532	"		砂 岩	19.8	18.5	6.7	2600	

第15表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(13)

※533は欠番

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分類	備 考
第 57 図	534	打製石鏃	V	黒曜石A	(1.5)	1.3	0.3	(0.38)	I a	先端部欠損
	535	"	V	黒曜石A	1.8	1.5	0.4	0.54	I a	長幅比1.2
	536	"	V	黒曜石A	1.7	1.6	0.3	0.48	I a	長幅比1.1
	537	"	IV	黒曜石A	1.8	(1.5)	0.3	(0.61)	I a	脚部欠損
	538	"	V	黒色安山岩	1.8	1.5	0.3	0.53	I a	長幅比1.2
	539	"	V	黒色安山岩	1.7	1.4	0.3	0.48	I a	長幅比1.2
	540	"	V	黒曜石A	2.0	1.5	0.3	0.69	I a	長幅比1.3
	541	"	V	黒曜石A	1.9	(1.2)	0.3	(0.47)	I a	脚部欠損
	542	"	V	黒色安山岩	1.8	1.2	0.2	0.30	I a	長幅比1.5
	543	"	V	黒曜石A	(1.8)	(1.4)	0.3	(0.48)	I a	先端・脚部欠損
	544	"	V	黒色安山岩	(2.0)	(1.5)	0.3	(0.77)	I a	先端・脚部欠損
	545	"	V	黒色安山岩	(1.6)	1.6	0.3	(0.59)	I a	先端部欠損
	546	"	V	黒色安山岩	2.1	1.5	0.4	0.76	I a	長幅比1.4
	547	"	V	黒曜石B	2.3	1.4	0.4	0.65	I a	長幅比1.6
	548	"	V	黒曜石A	2.3	1.4	0.3	0.63	I a	長幅比1.6
	549	"	V	黒曜石A	(2.1)	(1.2)	0.3	(0.67)	I a	先端・脚部欠損
	550	"	V	チャート	(1.9)	1.3	0.3	0.57	I a	先端部欠損
	551	"	V	チャート	2.1	(1.3)	0.3	(0.62)	I a	脚部欠損
	552	"	V	黒曜石A	2.2	(1.0)	0.3	(0.42)	I a	右半部欠損
	553	"		黒曜石A	2.4	1.7	0.3	0.83	I a	長幅比1.4
	554	"	V	黒曜石A	2.4	(1.5)	0.4	(0.73)	I a	脚部欠損
	555	"	V	黒色安山岩	2.7	1.9	0.3	0.80	I a	長幅比1.4
	556	"	V	黒曜石B	2.4	(1.9)	0.3	(0.64)	I a	脚部欠損
	557	"	V	チャート	2.2	(1.5)	0.4	(0.70)	I a	脚部欠損
	558	"		黒曜石B	(1.9)	(1.6)	0.5	(0.99)	I a	脚部欠損

第16表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(14)

計測単位: cm 重量: g

挿図	番号	器種	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類	備考
第 57 図	559	打製石鏃		黒曜石A	(1.8)	1.8	0.3	(0.59)	I a	先端部欠損
	560	"		黒曜石A					I a	脚部のみ残
	561	"	V	黒曜石A	2.4	1.4	0.2	0.45	I a	長幅比1.7
	562	"	V	蛋白石	2.4	(1.6)	0.4	(0.79)	I a	脚部欠損
	563	"	V	黒曜石B	2.3	(1.3)	0.4	(0.89)	I a	脚部欠損
	564	"	V	黒曜石B	(1.4)	1.4	0.3	(0.30)	I b	先端部欠損
	565	"	V	黒曜石B	(1.6)	1.3	0.3	(0.48)	I b	先端部欠損
第 58 図	566	打製石鏃	V	チャート	(1.6)	(1.7)	0.3	(0.92)	I b	先端部欠損
	567	"		黒曜石B	(2.9)	(1.8)	0.4	(1.25)	I a	先端・脚部欠損
	568	"	V	黒曜石A	2.1	(1.2)	0.3	(0.74)	I c	脚部欠損
	569	"	V	黒曜石A	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.64)	I c	脚部欠損
	570	"		黒曜石A	1.5	1.3	0.5	0.76	I d	長幅比1.1
	571	"	V	黒曜石A	1.6	1.4	0.3	0.44	I d	長幅比1.1
	572	"		黒曜石A	1.6	1.4	0.3	0.38	I d	長幅比1.1
	573	"	V	黒曜石A	(1.8)	1.4	0.5	(0.95)	I d	脚部欠損
	574	"	V	黒曜石B	1.5	1.5	0.4	0.58	I d	長幅比1.0
	575	"		黒曜石A	(1.9)	(1.6)	0.4	(0.95)	I d	先端・脚部欠損
	576	"	V	黒曜石A	2.0	1.4	0.4	0.89	I d	長幅比1.4
	577	"	V	チャート	(2.0)	1.4	0.4	0.87	I d	先端部欠損
	578	"		黒曜石A	(1.5)	1.6	0.4	(0.70)	I d	上半部欠損
	579	"	V	黒曜石A	(1.4)	1.5	0.4	(0.50)	I d	上半部欠損
	580	"	V	黒曜石B	1.8	1.5	0.5	0.94	I e	長幅比1.2
	581	"	V	黒曜石B	2.1	(1.6)	0.5	(1.06)	I e	脚部欠損
	582	"	V	黒曜石A	1.9	(1.4)	0.2	(0.42)	I e	右辺欠損
	583	"	V	チャート	1.8	(1.4)	0.4	(0.63)	II a	脚部欠損
	584	"	V	黒色安山岩	2.1	(1.4)	0.3	(0.77)	II a	脚部欠損
	585	"	V	黒色安山岩	2.7	2.0	0.4	1.43	II a	長幅比1.4
	586	"		黒色安山岩	(1.8)	1.8	0.3	(1.10)	II b	上半部欠損
	587	"	V	黒曜石A	2.0	2.2	0.5	1.12	II c	長幅比0.9
	588	"	V	チャート	1.5	1.4	0.3	0.64	III a	長幅比1.1
	589	"	V	黒曜石A	1.4	1.2	0.3	0.34	III a	長幅比1.2
	590	"	V	黒色安山岩	2.8	2.1	0.5	1.62	III a	長幅比1.3
	591	"	IV	黒曜石B	2.8	(1.6)	0.5	(1.22)	III a	脚部欠損
	592	"	IV	黒色安山岩	(1.7)	1.8	0.3	0.74	III a	先端部欠損
	593	"	表	黒曜石A	(1.4)	1.7	0.3	(0.67)	III a	上半部欠損
	594	"	V	黒色安山岩	2.1	1.7	0.3	0.98	III a	長幅比1.2
	595	"	V	黒曜石A	2.2	1.5	0.6	1.46	III b	長幅比1.5
	596	"	V	黒曜石A	(2.0)	1.7	0.4	(1.03)	III b	先端部欠損
	597	"	V	黒曜石A	3.1	1.5	0.4	1.35	III b	長幅比2.1
第 59 図	598	打製石鏃	V	黒色安山岩	(2.8)	1.5	0.4	(1.82)	III b	先端部欠損
	599	"		黒曜石A	1.8	1.8	0.3	0.65	IV a	長幅比1.0
	600	"		黒曜石A	1.8	1.7	0.4	0.73	IV a	長幅比1.1
	601	"	V	黒色安山岩	2.0	1.5	0.5	1.23	IV a	長幅比1.3
	602	"	表	黒曜石A	(1.0)	1.4	0.4	(0.52)	IV a	上半部欠損
	603	"	V	黒色安山岩	2.8	1.3	0.5	0.92	IV b	長幅比2.2
	604	"	V	黒色安山岩	2.5	1.4	0.4	0.97	IV b	長幅比1.8
	605	"	IV	黒曜石A	1.6	(1.0)	0.3	(0.34)	IV c	基部欠損

第17表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(15)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分類	備 考	
第 59 図	606	打製石鏃	V	蛋白石	(1.8)	1.5	0.4	(0.74)	IVc	先端部欠損	
	607	"	V	黒曜石A	2.0	1.5	0.4	0.82	IVc	長幅比1.3	
	608	"	V	チャート	3.3	(1.6)	0.4	(1.61)	IVc	基部欠損	
	609	"	V	黒曜石D	1.9	1.5	0.6	1.03	V	長幅比1.3	
	610	"	V	黒曜石A	(2.0)	(1.0)	0.3	(0.63)	VI	脚部欠損	
	611	"		黒色安山岩	2.0	(1.5)	0.4	(0.55)	VI	下半部欠損	
	612	"		黒曜石A	(2.7)	(1.9)	0.6	(1.43)	VI	下半部欠損	
	613	"	V	黒曜石A	(2.6)	(2.0)	0.3	(1.01)	VI	下半部欠損	
	614	"	V	黒色安山岩	(2.0)	(1.5)	0.3	0.53	VI	脚部欠損	
	615	"	V	黒曜石A	2.0	(1.5)	0.6	(0.88)	VI	未製品	
	616	"	V	黒曜石B	(1.6)	(1.5)	0.4	(0.87)	VI	未製品	
	617	"	V	黒曜石A	2.1	1.7	0.6	1.16	VI	未製品	
	618	"	V	黒曜石A	(1.7)	1.6	0.3	(0.60)	VI	脚部欠損	
	619	尖頭状石器	表	黒曜石A	2.4	(1.7)	0.6	(2.08)	I	左辺上部欠損	
	620	尖頭状石器	V	黒曜石A	2.7	2.1	0.6	2.58	I	長幅比1.3	
	621	尖頭状石器	V	黒色安山岩	2.9	1.9	0.7	2.88	I	長幅比1.5	
	622	尖頭状石器	V	黒曜石B	2.7	(1.8)	0.5	(2.12)	I	基部欠損	
	623	尖頭状石器	V	チャート	3.3	2.1	1.0	6.54	II	長幅比1.6	
	624	尖頭状石器	V	黒曜石A	3.3	2.3	0.8	4.66	II	長幅比1.4	
	第 60 図	625	石 匙	V	黒曜石A	(4.5)	2.3	1.0	(5.82)	縦型	身部端欠損
		626	石 匙	V	黒曜石A	3.5	1.6	0.2	1.46	縦型	
		627	石 匙	V	黒色安山岩	7.0	3.7	0.9	20.96	縦型	
		628	石 匙	V	黒色安山岩	(4.8)	(3.7)	1.2	(15.88)	縦型	身部欠損
		629	石 匙	V	黒曜石A	(2.0)	(1.9)	0.4	(1.62)	横型	身部を欠く
630		石 錐	表		(2.1)	(0.6)	0.4	(0.36)			
631		石 錐	V	黒曜石A	(2.4)	0.8	0.5	(1.33)	I		
632		石 錐	V	シルト質頁岩	3.6	1.3	0.8	1.98	II	機能部長2.1	
633		石 錐	V	チャート	4.3	2.4	0.7	4.38	II	機能部長2.3	
634		石 錐	V	黒曜石A	3.0	1.3	0.5	1.66	II	機能部長1.2	
635		石 錐	V	黒曜石B	3.8	1.3	0.3	1.27	III	機能部長1.7	
636		石 錐	V	チャート	2.9	1.5	1.0	3.17	III	機能部長1.4	
637		石 錐	V	黒曜石B	5.5	1.3	0.8	4.17	III	機能部長2.5	
638		石 錐	IV	黒曜石C	4.6	1.8	0.8	5.41	IV	機能部長0.8	
639		石 錐	V	黒曜石D	3.7	2.4	1.3	8.7	IV	機能部長1.0	
640		石 錐	V	黒色安山岩	5.4	4.0	1.2	21.93	IV	機能部長1.1	
第 61 図	641	クスレイパー	V	黒曜石A	1.7	2.1	0.4	1.87		刃部主角40°	
	642	クスレイパー	V	黒曜石A	1.8	2.1	0.7	2.21		刃部主角62°	
	643	クスレイパー	V	黒曜石A	1.9	1.8	0.6	1.88		刃部主角68°	
	644	クスレイパー	V	黒曜石A	1.9	1.8	0.5	1.34		刃部主角45°	
	645	クスレイパー	表	黒曜石A	1.7	1.7	0.4	1.25		刃部主角45°	
	646	クスレイパー	V	チャート	2.1	3.0	0.6	5.07		刃部主角55°	
	647	クスレイパー	V	黒曜石A	1.9	2.4	0.4	2.41		刃部主角70°	
	648	クスレイパー	V	黒色安山岩	(2.7)	(1.8)	0.5	(2.74)		刃部主角65°	
	649	クスレイパー	V	黒曜石D	(2.5)	(2.5)	0.6	(3.72)		刃部主角70°	
	650	クスレイパー	V	チャート	(2.9)	(3.3)	(1.2)	(8.63)		刃部主角75°	
	651	クスレイパー		黒曜石D	4.3	3.2	0.6	11.85		刃部主角50°	
	652	クスレイパー		黒曜石A	3.7	2.5	0.8	6.46		刃部主角67°	

第18表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(16)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分類	備 考
第 61 図	653	クスレイパー		黒曜石A	4.8	3.5	1.0	13.02		刃部主角56°
	654	クスレイパー	V	チャート	6.1	3.6	1.0	19.52		刃部主角50°
	655	クスレイパー	V	チャート	(5.3)	3.2	1.4	(22.40)		刃部主角40° 挟入
第 62 図	656	クスレイパー		黒色安山岩	(4.5)	(4.8)	1.1	(21.53)		刃部主角60°
	657	クスレイパー	V	黒曜石C	3.0	2.2	1.1	4.90		刃部主角45°
	658	クスレイパー	V	黒曜石	2.2	3.6	0.9	6.52		刃部主角70° 鋸歯状
	659	クスレイパー	V	チャート	3.1	(4.4)	1.4	(17.94)		刃部主角58°
	660	クスレイパー	V	黒曜石D	2.3	2.3	1.0	4.62		刃部主角72°
	661	クスレイパー	V	黒曜石A	3.6	3.5	1.0	9.73		刃部主角65° 鋸歯状
	662	クスレイパー	V	黒曜石C	3.3	2.1	0.8	5.19		刃部主角76° 挟入
	663	クスレイパー	IV	黒曜石	3.4	3.4	1.0	11.39		刃部主角65° 挟入
	664	楔形石器	V	黒曜石D	2.7	2.1	0.9	5.45		上辺左右一部欠損
	665	楔形石器	V	黒曜石D	2.3	2.5	1.1	6.49		
第 63 図	666	楔形石器		黒曜石A	1.8	2.4	0.8	2.96		
	667	楔形石器	V	黒曜石A	2.1	1.4	0.6	1.84		上下辺一部欠損
	668	楔形石器	V	黒曜石A	3.0	(2.7)	0.5	(2.81)		上下辺一部欠損
	669	楔形石器		黒曜石C	2.8	1.5	0.5	2.43		
	670	楔形石器	V	黒曜石D	2.1	(2.0)	0.8	(3.12)		
	671	楔形石器	V	黒曜石A	1.9	2.2	0.7	3.60		上下辺一部欠損
	672	楔形石器		黒曜石A	(2.3)	1.6	0.5	(2.36)		上下辺一部欠損
	673	楔形石器	V	黒曜石A	1.8	(1.7)	0.5	(1.49)		上下辺一部欠損
	674	楔形石器		黒曜石A	3.1	0.8	0.5	1.08		破片
	675	楔形石器	V	黒曜石A	1.7	0.8	0.5	0.67		破片
第 64 図	676	楔形石器	表	黒曜石E	0.9	2.4	0.9	3.74		
	677	楔形石器		黒曜石C	2.6	2.3	0.8	5.38		
	678	楔形石器	V	黒曜石A	2.6	2.0	0.8	3.76		
	679	異形石器		黒曜石B	(3.5)	0.7	0.3	(0.74)		上下両端欠損
	680	異形石器	V	黒曜石B	(3.5)	0.7	0.4	(1.14)		下端欠損
	681	異形石器	V	黒曜石A	(2.2)	1.9	0.6	(2.24)		上端部欠損
	682	異形石器	V	黒曜石A	(5.1)	(2.0)	0.9	(4.04)		両端部欠損
	683	異形石器	V	黒曜石B	(2.5)	(1.2)	0.4	(1.13)		両端部欠損
	684	異形石器	V	黒曜石B	(1.8)	(1.2)	(0.8)	(1.85)		両端部欠損
	685	異形石器	V	黒曜石A	(2.2)	(1.2)	(0.6)	(1.54)		下部欠損
686	異形石器	V	黒曜石A	(4.0)	(1.5)	(0.7)	(3.61)		下端欠損	
第 64 図	687	研磨痕のある礫		砂 岩	5.0	1.8	0.9	11.71		
	688	両面加工石器	表	黒色安山岩	2.2	1.4	0.6	1.61		
	689	両面加工石器	V	黒曜石A	2.5	1.7	0.5	2.03		
	690	両面加工石器	V	黒曜石A	2.4	2.0	0.3	1.41		
	691	両面加工石器	V	黒曜石A	1.8	2.1	0.5	1.81		
	692	使用痕剥片		黒曜石A	2.8	1.4	0.7	2.09	I bニ	長幅比2.0
	693	使用痕剥片	表	黒曜石A	3.5	1.8	0.8	4.14	I bロ	長幅比1.9
	694	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.0	1.5	0.4	2.97	I bイ	長幅比2.0
	695	使用痕剥片	IV	黒曜石B	1.8	2.4	0.4	(2.11)	I aハ	長幅比0.8
	696	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.7	3.2	0.8	7.71	I fイ	長幅比1.2
697	使用痕剥片	V	黒曜石A	2.5	2.3	0.6	3.61	I cハ	長幅比1.1	
698	使用痕剥片	V	黒曜石A	2.0	0.9	0.2	0.37	II aニ	長幅比2.2	
699	使用痕剥片	V	黒曜石A	(2.0)	1.1	0.3	(0.52)	II dニ	尾部折れ	

第19表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(17)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分類	備 考
第 64 図	700	使用痕剥片	V	黒曜石B	2.9	1.6	0.3	1.66	II aイ	長幅比1.8
	701	使用痕剥片	V	黒曜石B	(2.9)	1.8	0.5	(2.70)	II aト	頭部欠損
	702	使用痕剥片	V	黒曜石B	3.8	1.5	0.4	2.11	II aイ	長幅比2.5
	703	使用痕剥片	V	黒曜石A	4.1	1.5	0.9	3.49	II bニ	長幅比2.7
	704	使用痕剥片	V	黒曜石B	4.9	2.0	0.4	5.02	II cト	長幅比2.5
	705	使用痕剥片	V	黒曜石A	4.3	1.8	0.7	4.00	II eイ	長幅比2.4
	706	使用痕剥片		黒曜石A	(4.6)	2.1	0.7	(4.33)	II cイ	尾部折れ
	707	使用痕剥片	V	黒曜石A	4.0	1.9	0.5	3.2	II cニ	長幅比2.1
708	使用痕剥片	V	黒曜石A	(2.8)	1.7	0.4	(1.90)	II bト	頭部折れ	
第 65 図	709	使用痕剥片	V	黒曜石A	(3.6)	1.7	0.6	(2.82)	II bロ	尾部折れ
	710	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.0	1.2	0.4	1.30	II aハ	長幅比2.5
	711	使用痕剥片	V	黒曜石B	3.5	1.1	0.5	1.74	II cイ	長幅比3.2
	712	使用痕剥片	表	黒曜石A	2.5	2.0	0.5	2.48	III cイ	長幅比1.3
	713	使用痕剥片	V	黒曜石A	4.5	2.9	0.4	7.42	III aロ	長幅比1.6
	714	使用痕剥片	表	黒曜石A	(2.1)	0.8	0.2	(0.32)	I aニ	尾部折れ
	715	使用痕剥片	表	黒曜石A	2.4	1.2	0.5	0.60	IV cホ	長幅比2.0
	716	使用痕剥片	V	黒曜石A	(2.5)	1.3	0.2	(0.75)	IV aイ	尾部折れ
	717	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.1	1.5	0.2	2.09	IV aイ	長幅比2.1
	718	使用痕剥片	V	黒曜石A	(3.2)	1.8	0.3	(2.43)	IV aト	頭部折れ
	719	使用痕剥片	V	黒曜石A	(3.3)	1.5	0.2	(1.29)	IV aハ	尾部欠損
	720	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.7	1.6	0.3	2.32	IV aロ	長幅比2.3
	721	使用痕剥片	V	黒曜石B	5.8	1.5	0.6	5.64	IV bロ	長幅比3.9
	722	使用痕剥片	V	黒曜石A	(3.3)	1.5	0.5	(2.78)	IV bイ	尾部折れ
	723	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.5	1.6	0.9	4.15	IV bホ	長幅比2.2
	724	使用痕剥片		黒曜石A	(3.4)	1.9	0.5	(2.59)	IV aイ	尾部折れ
	725	使用痕剥片	V	黒曜石A	(3.2)	1.6	0.6	(2.37)	IV bト	尾部欠損
	726	使用痕剥片	V	黒曜石B	3.0	1.6	0.4	1.82	IV bホ	長幅比1.9
	727	使用痕剥片	V	黒曜石D	(3.3)	2.0	0.7	(4.39)	IV bニ	尾部欠損
	728	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.5	1.2	0.5	1.97	IV cハ	長幅比2.9
729	使用痕剥片	表	黒曜石D	4.5	2.6	0.7	7.40	IV dハ	長幅比1.7	
730	使用痕剥片	表	黒曜石C	(1.9)	1.6	0.4	(1.02)	IV bト	頭部折れ	
731	使用痕剥片	V	黒曜石A	4.0	2.2	0.7	4.08	IV bイ	長幅比1.8	
第 66 図	732	使用痕剥片	V	黒曜石A	(2.3)	3.1	0.5	(4.37)	IV aハ	尾部欠損
	733	使用痕剥片	表	黒曜石D	(2.9)	3.9	1.3	(14.37)	IV bハ	尾部折れ
	734	使用痕剥片	IV	黒曜石B	(4.0)	2.6	0.8	(8.94)	IV cイ	尾部折れ
	735	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.7	1.6	0.5	2.21	Veロ	長幅比2.3
	736	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.7	3.1	0.6	5.46	Vbハ	長幅比1.2
	737	使用痕剥片		黒曜石D	(4.1)	2.8	0.9	(9.34)	Vbト	頭部折れ
	738	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.6	2.4	0.5	2.92	Vcハ	長幅比1.5
	739	使用痕剥片	V	黒曜石A	(2.7)	1.3	0.4	(0.78)	Vbト	頭部欠損
	740	使用痕剥片	表	黒曜石A	2.7	1.9	0.6	2.56	Vbロ	長幅比1.4
	741	使用痕剥片	V	黒曜石B	(3.4)	1.6	0.2	(3.03)	VI aト	頭部欠損
	742	使用痕剥片	IV	黒曜石A	2.5	2.6	0.6	3.58	VI gハ	長幅比1.0
	743	使用痕剥片	表	黒曜石B	1.8	2.9	0.7	2.31	VII gイ	長幅比0.6
	744	使用痕剥片	V	黒曜石B	2.8	2.3	0.5	4.96	VII aロ	長幅比1.2
	745	使用痕剥片	V	黒曜石B	3.1	3.1	0.4	5.85	VII bイ	長幅比1.0
	746	使用痕剥片	V	黒曜石A	2.4	1.8	0.6	2.41	VII aロ	長幅比1.3

第20表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(18)

計測単位: cm 重量: g

挿図	番号	器種	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類	備考
第66図	747	使用痕剥片		黒曜石A	2.7	2.4	0.5	2.74	VIIaイ	長幅比1.1
	748	使用痕剥片	V	黒曜石A	3.1	3.0	0.8	6.34	VIIaロ	長幅比1.0
第67図	749	剥片	II	黒曜石A	2.6	1.0	0.5	0.82	aハ	長幅比2.6
	750	剥片	V	黒曜石A	2.6	0.6	0.2	0.29	aイ	長幅比4.3
	751	剥片	V	黒曜石B	3.6	0.8	0.3	0.60	aイ	長幅比4.5
	752	剥片	V	黒曜石A	3.3	1.2	0.3	0.84	aハ	長幅比2.8
	753	剥片	V	黒曜石A	3.5	1.2	0.3	0.91	aニ	長幅比2.9
	754	剥片	V	黒曜石B	2.1	1.2	0.3	0.83	aイ	長幅比1.8
	755	剥片		黒曜石B	3.7	1.7	0.4	1.90	aロ	長幅比2.2
	756	剥片	V	黒曜石A	3.9	1.8	0.5	2.27	aハ	長幅比2.2
	757	剥片	V	黒曜石B	4.3	1.3	0.7	3.02	aイ	長幅比3.3
	758	剥片	V	黒曜石A	3.8	1.5	0.6	3.30	aロ	長幅比2.5
	759	剥片	V	黒曜石A	3.5	1.5	0.6	3.32	aハ	長幅比2.3
	760	剥片	V	黒曜石A	3.6	2.0	1.0	6.40	aイ	長幅比1.8
	761	剥片	V	黒曜石A	3.5	2.0	0.3	2.50	aイ	長幅比1.8
	762	剥片	V	黒曜石C	4.5	2.2	0.6	5.13	aイ	長幅比2.0
	763	剥片	V	黒曜石A	4.6	2.7	0.4	4.04	aロ	長幅比1.7
	764	剥片	V	黒曜石B	4.4	2.7	0.4	3.39	aト	長幅比1.6
	765	剥片	V	黒曜石A	5.3	2.3	0.7	9.55	aイ	長幅比2.3
	766	剥片	表	黒曜石A	2.1	1.2	0.2	0.91	aイ	長幅比1.8
	767	剥片	V	黒曜石B	2.4	1.2	0.2	0.52	aロ	長幅比2.0
	768	剥片	V	黒曜石B	3.0	1.7	0.3	1.79	aホ	長幅比1.8
769	剥片	V	黒曜石B	2.9	1.6	0.3	1.18	cハ	長幅比1.8	
770	剥片	V	黒曜石A	3.1	1.5	0.3	1.60	aロ	長幅比2.1	
771	剥片	V	黒曜石B	3.3	1.7	0.6	1.91	aイ	長幅比1.9	
772	剥片	V	黒曜石A	2.8	1.7	0.3	1.97	aイ	長幅比1.6	
773	剥片	V	黒曜石A	2.9	1.6	0.5	2.34	aロ	長幅比1.8	
第68図	774	剥片	V	黒曜石A	2.9	1.4	0.5	1.28	aハ	長幅比2.1
	775	剥片	V	黒曜石A	3.2	1.5	0.3	1.01	aハ	長幅比2.1
	776	剥片	V	黒曜石A	3.2	2.0	0.7	3.69	aイ	長幅比1.6
	777	剥片	V	黒曜石A	2.7	1.7	0.3	1.63	dホ	長幅比1.6
	278	剥片	表	黒曜石D	3.1	2.1	0.4	3.48	aニ	長幅比1.5
	779	剥片	V	黒曜石A	3.6	2.1	0.9	5.43	aロ	長幅比1.7
	780	剥片	V	黒曜石A	3.2	2.3	0.3	1.45	aホ	長幅比1.4
	781	剥片	V	黒曜石A	3.5	2.1	0.3	2.65	aロ	長幅比1.7
	782	剥片	V	黒曜石B	4.0	2.2	0.9	7.44	aニ	長幅比1.8
	783	剥片		黒曜石A	4.0	2.4	0.5	4.74	aロ	長幅比1.7
	784	剥片	V	黒曜石A	3.9	2.3	0.7	5.42	aロ	長幅比1.7
	785	剥片	V	黒曜石A	2.8	1.8	0.4	1.74	aイ	長幅比1.6
	786	剥片	V	黒曜石A	3.6	2.1	0.8	4.18	bニ	長幅比1.7
	787	剥片		黒曜石A	3.3	2.1	0.6	3.10	aイ	長幅比1.6
	788	剥片	V	黒曜石A	3.2	2.5	0.5	2.74	aイ	長幅比1.3
	789	剥片	IV	黒曜石A	3.7	2.9	0.7	5.59	aロ	長幅比1.3
790	剥片	V	黒曜石A	3.3	2.8	0.6	4.24	aイ	長幅比1.2	
791	剥片	V	黒曜石A	2.3	2.6	0.6	2.64	aハ	長幅比1.9	
792	剥片	V	黒曜石A	3.9	3.8	0.7	8.07	aイ	長幅比1.0	
第69図	793	剥片	V	黒曜石A	2.2	1.7	0.5	1.39	aイ	長幅比1.3

第21表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(19)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分類	備 考
第 69 図	794	剥 片	V	黒曜石B	(2.0)	1.2	0.2	(0.56)	a二	尾部折れ
	795	剥 片	V	黒曜石A	(2.3)	1.0	0.3	(0.61)	aイ	尾部折れ
	796	剥 片	V	黒曜石A	(2.8)	1.4	0.2	(1.10)	a口	尾部折れ
	797	剥 片	V	黒曜石A	(2.5)	1.4	0.5	(1.51)	a二	尾部折れ
	798	剥 片	V	黒曜石A	(2.8)	1.6	0.4	(1.68)	aイ	尾部折れ
	799	剥 片	V	黒曜石A	(2.5)	2.6	0.4	(1.86)	a口	尾部折れ
	800	剥 片		黒曜石A	(2.1)	1.6	0.3	(0.95)	aイ	尾部折れ
	801	剥 片	V	黒曜石A	(1.8)	1.2	0.4	(0.76)	aト	尾部折れ
	802	剥 片	表	黒曜石A	(2.3)	1.9	0.3	(1.30)	aイ	尾部折れ
	803	剥 片	V	黒曜石C	(2.5)	1.8	0.7	(2.27)	a口	尾部折れ
	804	剥 片	V	黒曜石B	(1.9)	2.2	0.4	(1.61)	aイ	尾部折れ
	805	剥 片	V	黒曜石B	(1.2)	1.8	0.4	(1.11)	aホ	尾部折れ
	806	剥 片	V	黒曜石A	(1.4)	2.0	0.5	(1.20)	a口	尾部折れ
	807	剥 片	V	黒曜石B	(2.3)	1.7	0.3	(1.88)	a口	尾部折れ
	808	剥 片	V	黒曜石D	(2.8)	2.2	0.6	(4.69)	a口	尾部折れ
	809	剥 片	V	黒曜石D	(2.8)	2.1	0.6	(4.38)	aイ	尾部折れ
	810	剥 片	表	黒曜石D	(3.8)	2.6	0.7	(9.04)	e二	尾部折れ
	811	剥 片	V	黒曜石A	(2.1)	1.7	0.2	(0.56)	aト	頭尾部折れ
	812	剥 片	V	黒曜石D	(2.0)	2.9	0.8	(4.51)	aト	頭尾部折れ
	813	剥 片	V	黒曜石A	(1.8)	1.1	0.3	(0.71)	aト	頭部折れ
814	剥 片	IV	黒曜石B	(1.9)	1.7	0.3	(1.25)	aト	頭部折れ	
815	剥 片	V	黒曜石B	(1.8)	1.4	0.3	(0.66)	aト	頭部折れ	
816	剥 片	V	黒曜石A	(2.1)	1.5	0.3	(1.00)	aト	頭部折れ	
817	剥 片	V	黒曜石A	(2.9)	2.3	0.2	(1.01)	aト	頭部折れ	
818	剥 片	V	黒曜石A	(3.0)	2.3	0.6	(3.80)	aト	頭部折れ	
819	剥 片		黒曜石D	(4.9)	3.5	0.8	(10.51)	bト	頭部折れ	
第 70 図	820	剥 片	V	黒曜石A	2.6	0.8	0.2	0.53	b二	長幅比3.3
	821	剥 片	V	黒曜石A	3.9	1.2	0.5	1.50	bイ	長幅比3.3
	822	剥 片		黒曜石A	3.8	1.4	0.4	1.76	bイ	長幅比2.7
	823	剥 片	V	黒曜石A	3.7	1.3	0.7	2.91	bト	長幅比2.8
	824	剥 片	V	黒曜石A	3.4	1.5	0.3	1.36	b口	長幅比2.3
	825	剥 片	V	黒曜石A	4.0	1.4	0.7	3.26	bホ	長幅比2.9
	826	剥 片	V	黒曜石A	4.5	1.4	0.4	2.38	aへ	長幅比3.2
	827	剥 片		黒曜石A	4.2	1.6	0.7	3.92	bト	長幅比2.6
	828	剥 片	V	黒曜石A	2.3	1.1	0.2	0.85	bホ	長幅比2.1
	829	剥 片	V	黒曜石B	3.0	1.6	0.4	2.38	bホ	長幅比1.9
	830	剥 片	V	黒曜石B	3.4	1.2	0.6	1.97	bイ	長幅比2.8
	831	剥 片		黒曜石A	3.2	1.4	0.7	2.50	bト	長幅比2.3
	832	剥 片	V	黒曜石A	3.4	1.3	0.8	2.10	bイ	長幅比2.6
	833	剥 片	表	黒曜石A	4.2	1.5	0.4	2.61	bハ	長幅比2.8
	834	剥 片		黒曜石B	(4.4)	(2.0)	0.5	(2.88)	bイ	尾部欠損
	835	剥 片	V	黒曜石B	3.8	1.6	0.6	2.67	bイ	長幅比2.4
	836	剥 片	V	黒曜石A	4.1	1.7	0.5	4.16	bイ	長幅比2.4
	837	剥 片	V	黒曜石B	3.4	2.2	0.7	3.56	bイ	長幅比1.5
	838	剥 片	V	黒曜石A	3.8	1.8	0.6	3.42	bハ	長幅比2.1
	839	剥 片	V	黒曜石A	5.6	1.3	0.2	2.78	bト	長幅比4.3
840	剥 片	V	黒曜石A	4.3	2.2	0.9	5.27	bホ	長幅比2.0	

第22表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(20)

計測単位: cm 重量: g

挿図	番号	器種	層	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類	備考
第70図	841	剥片	表	黒曜石A	2.9	1.3	0.2	0.97	bト	長幅比2.2
	842	剥片	表	黒曜石A	2.4	1.4	0.3	1.12	bホ	長幅比1.7
	843	剥片	表	黒曜石B	2.7	1.8	0.6	2.11	bハ	長幅比1.5
	844	剥片	表	黒曜石A	2.5	2.3	0.7	3.05	bイ	長幅比1.1
第71図	845	剥片	V	黒曜石A	4.1	2.0	0.7	3.92	g口	長幅比2.1
	846	剥片	V	黒曜石A	3.8	2.0	0.6	3.66	b口	長幅比1.9
	847	剥片	V	黒曜石A	4.0	2.5	0.8	6.84	bイ	長幅比1.6
	848	剥片	V	黒曜石A	4.9	2.5	1.2	10.01	bイ	長幅比2.0
	849	剥片	V	黒曜石A	4.7	2.2	1.4	11.48	bイ	長幅比2.1
	850	剥片	V	黒曜石A	5.8	2.9	0.7	8.25	bイ	長幅比2.0
	851	剥片	V	黒曜石A	3.8	2.3	0.6	3.51	bト	長幅比1.7
	852	剥片	V	黒曜石A	3.9	2.2	0.4	3.29	gハ	長幅比1.8
	853	剥片		黒曜石A	4.8	2.9	0.5	4.28	bイ	長幅比1.7
	854	剥片	V	黒曜石A	3.3	2.3	0.7	3.79	bハ	長幅比1.4
	855	剥片	表	黒曜石A	3.4	1.9	0.7	4.67	bイ	長幅比1.8
	856	剥片	V	黒曜石A	2.4	1.8	0.4	1.58	bハ	長幅比1.3
	857	剥片	V	黒曜石A	2.6	1.8	0.4	2.12	bハ	長幅比1.4
	858	剥片	V	黒曜石A	(1.6)	1.7	0.3	(0.99)	b口	尾部折れ
	859	剥片	V	黒曜石A	(4.0)	2.4	0.7	(6.22)	bハ	尾部折れ
860	剥片	表	黒曜石A	(1.7)	1.7	0.4	(1.11)	bト	頭部折れ	
第72図	861	剥片	表	黒曜石D	4.1	1.4	0.7	3.91	cイ	長幅比2.9
	862	剥片	V	黒曜石A	4.8	1.7	0.7	4.50	cヘ	長幅比2.8
	863	剥片	V	黒曜石A	4.0	2.0	0.5	2.63	cホ	長幅比2.0
	864	剥片	V	黒曜石A	4.2	2.0	0.7	4.15	cハ	長幅比2.1
	865	剥片	V	黒曜石D	4.2	1.7	1.0	6.47	c口	長幅比2.5
	866	剥片	V	黒曜石A	4.3	2.4	2.1	21.50	c口	長幅比1.8
	867	剥片	V	黒曜石B	1.4	1.1	0.3	0.39	cヘ	長幅比1.3
	868	剥片	V	黒曜石A	2.8	1.7	0.6	1.72	cイ	長幅比1.6
	869	剥片	IV	黒曜石A	3.2	2.5	0.7	4.11	c口	長幅比1.3
	870	剥片	V	黒曜石B	(3.4)	2.2	0.6	(3.37)	cイ	尾部折れ
	871	剥片		黒曜石B	(2.5)	2.4	0.6	(2.39)	cイ	頭尾部折れ
	872	剥片	V	黒曜石B	(3.2)	1.9	0.5	(3.04)	cト	頭部折れ
	873	剥片	V	黒曜石A	(2.7)	1.1	0.4	(0.98)	cト	頭部折れ
	874	剥片		黒曜石A	(4.2)	2.4	0.8	(5.01)	cト	頭部折れ
	375	剥片	V	黒曜石A	(3.2)	(3.1)	1.4	(8.10)	cト	頭部折れ
第73図	876	剥片	V	黒曜石A	3.0	1.6	0.6	2.84	dイ	長幅比1.9
	877	剥片		黒曜石A	4.0	2.2	1.0	5.70	dイ	長幅比1.8
	878	剥片		黒曜石A	5.5	2.6	0.5	6.23	dハ	長幅比2.1
	879	剥片	表	黒曜石D	3.4	2.3	1.10	7.79	dハ	長幅比1.5
	880	剥片	表	黒曜石A	2.7	2.3	0.8	4.06	dイ	長幅比1.2
	881	剥片	V	黒曜石A	3.0	1.7	0.8	2.70	eハ	長幅比1.8
	882	剥片	V	黒曜石A	5.0	2.1	1.2	8.78	eハ	長幅比2.4
	883	剥片	V	黒曜石A	(2.9)	2.3	0.7	(4.02)	eハ	頭尾部折れ
	884	剥片	V	黒曜石A	3.7	3.0	0.8	6.89	eニ	長幅比1.2
	885	剥片	IV	黒曜石A	2.9	2.0	0.5	2.10	eイ	長幅比1.5
	886	剥片	V	黒曜石A	4.4	2.5	0.7	4.40	eイ	長幅比1.8
	887	剥片	V	黒曜石A	(3.3)	1.6	0.4	(1.50)	fト	頭部折れ

第23表 沖田岩戸遺跡出土遺物観察表(2)

計測単位: cm 重量: g

挿 図	番号	器 種	層	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考	
第 73 図	888	剥 片	V	黒曜石A	(1.8)	1.5	0.5	(1.11)	fト	頭部折れ
	889	剥 片	V	黒曜石B	3.0	1.5	0.5	2.21	bロ	長幅比2.0
	890	剥 片	V	黒曜石A	(2.7)	1.7	0.5	(2.13)	gト	頭部折れ
	891	剥 片	V	黒曜石A	(2.5)	2.4	0.3	(1.99)	gト	頭部折れ
	392	剥 片	V	黒曜石A	(1.3)	1.4	0.3	0.54	gト	頭部折れ
第 74 図	893	石 核	V	黒曜石A	1.0	1.9	1.3	2.49	I	スクレイパー刃部主角80°
	894	石 核	V	黒曜石C	1.8	1.8	0.8	2.93	I	石錐に転用
	895	石 核	V	黒曜石A	1.8	2.6	2.2	8.31	I	
	896	石 核	表	黒曜石A	2.3	2.1	1.8	8.28	I	
	897	石 核	V	黒曜石A	2.1	2.0	1.9	7.32	I	
	898	石 核		黒曜石A	2.2	2.5	1.9	9.02	I	スクレイパー刃部主角83°
	899	石 核	V	黒曜石A	2.7	2.7	2.1	14.07	I	
	900	石 核	V	黒曜石A	2.2	2.9	2.0	9.96	I	
	901	石 核	V	黒曜石C	2.6	3.1	2.1	16.31	I	
第 75 図	902	石 核	V	黒曜石A	2.1	3.7	2.6	17.56	I	
	903	石 核	V	黒曜石A	2.0	3.3	3.2	17.16	I	
	904	石 核	V	黒曜石D	3.7	2.8	2.4	22.45	I	
	905	石 核	V	黒曜石D	2.9	3.1	2.2	20.20	I	
	906	石 核	V	黒曜石D	2.4	4.7	2.7	25.71	I	
	907	石 核		黒曜石A	2.5	3.9	1.9	12.38	I	
第 76 図	908	石 核	V	黒曜石A	2.9	3.4	1.7	11.28	II	
	909	石 核	V	黒曜石E	3.5	3.2	1.6	13.19	II	
	910	石 核	V	黒曜石A	2.1	3.1	1.2	6.97	II	スクレイパー刃部主角83°
	911	石 核	V	黒曜石A	2.1	2.7	1.1	5.53	II	
	912	石 核	IV	チャート	2.8	2.7	1.4	8.34	II	
	913	石 核	V	黒曜石A	1.8	3.9	1.7	11.32	I	
	914	石 核	IV	黒曜石A	1.7	3.8	1.0	6.22	II	
	915	石 核	V	黒曜石A	1.7	4.2	0.9	3.81	I	スクレイパー刃部主角62°
第 77 図	916	石 核	V	黒曜石A	2.3	3.1	2.3	15.99	III	
	917	石 核	V	黒曜石D	3.0	4.3	1.8	18.20	III	
	918	石 核		黒曜石A	1.9	3.4	3.1	9.69	III	
	919	石 核	V	黒曜石A	1.2	2.5	2.4	8.15	III	スクレイパー刃部主角75°
	920	石 核	V	黒曜石A	1.4	3.4	3.3	8.83	V	スクレイパー刃部主角80°
	921	石 核	IV	黒曜石C	3.5	2.2	1.2	8.75	IV	スクレイパー刃部主角90°
	922	石 核	V	黒曜石A	1.8	1.2	1.6	3.28	IV	
	923	石 核		黒曜石D	1.6	5.5	3.1	20.00	V	スクレイパー刃部主角65°
第 78 図	924	石 核	V	黒曜石D	2.1	6.7	3.4	39.05	V	
	925	石 核	V	黒曜石D	2.1	4.8	3.1	23.09	V	スクレイパー刃部主角73°
	926	石 核	V	黒曜石D	2.3	5.8	4.1	39.19	V	スクレイパー刃部主角78°
	927	石 核	V	黒曜石A	2.7	1.8	3.6	10.49	I	

第2節 弥生時代以降の遺物

沖田岩戸遺跡の出土土器は、中期として並木式土器の口縁部破片1点がみられ、後期では、縄文縄文中期と同様に南福寺式土器、出水式土器、西平式土器、松山式土器などの破片がみられた。本遺跡の主体を占める出土遺物は、縄文晩期の土器が中心で、入佐式土器、黒川式土器などがあり、上加世田式土器や御領式土器の出土は僅かな出土であった。

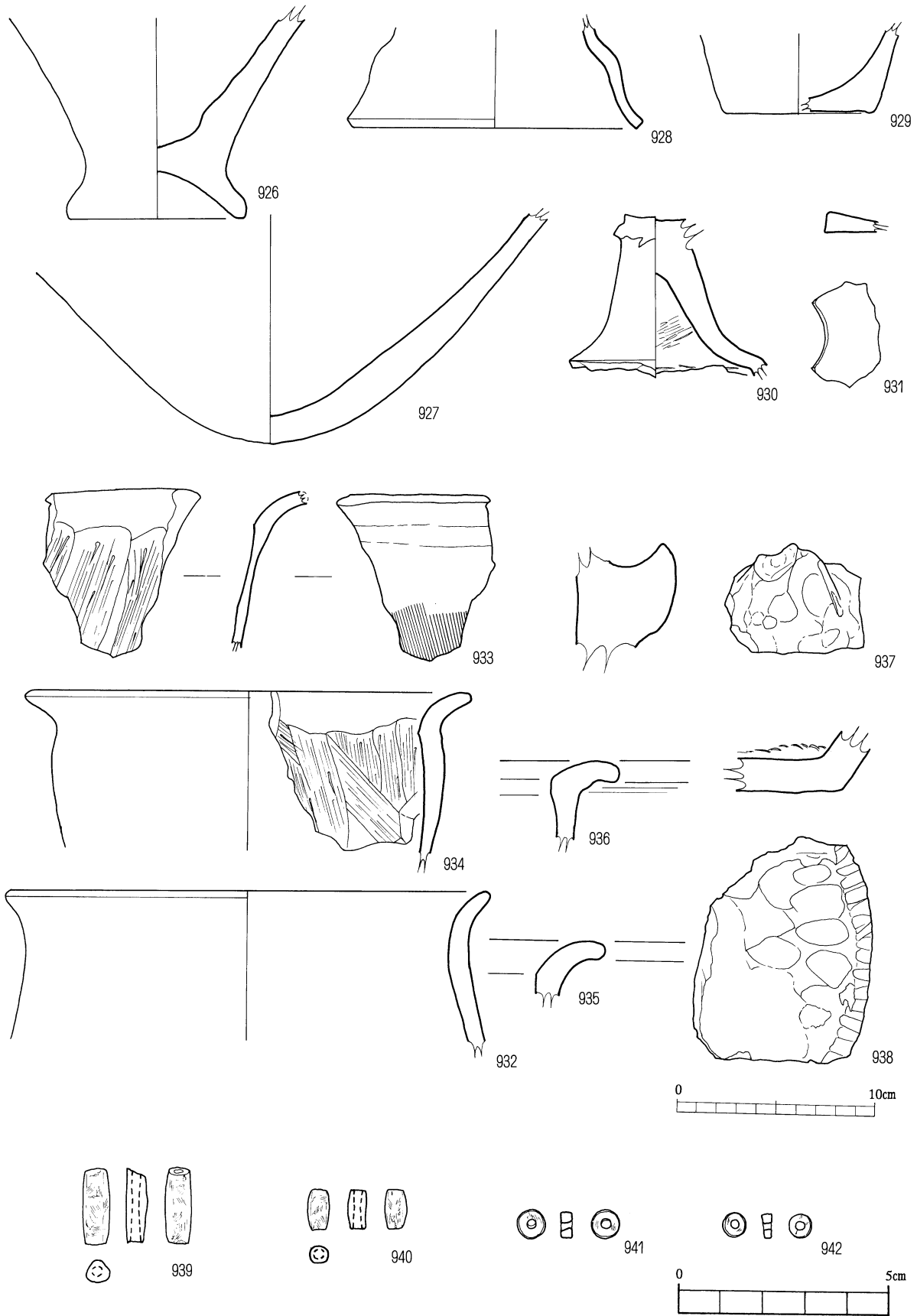
この遺跡は、河川工事中に発見されたために、弥生時代以降の遺物包含層が調査区の小範囲に残存していたのみであり、その状況より期待できる出土遺物は多くなかった。

弥生時代以降の出土遺物には、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器をはじめ、成川式土器の底部破片・高坏の脚部などをはじめ古代以降の遺物として、土師器の甕形土器口縁部、把手などや須恵器の甕形土器・壺形土器・蓋形土器・坏形土器・胴部の破片などがみられる。これらの土器破片などは図化できたものは少量の出土であった。

第VI類土器 (926~931)

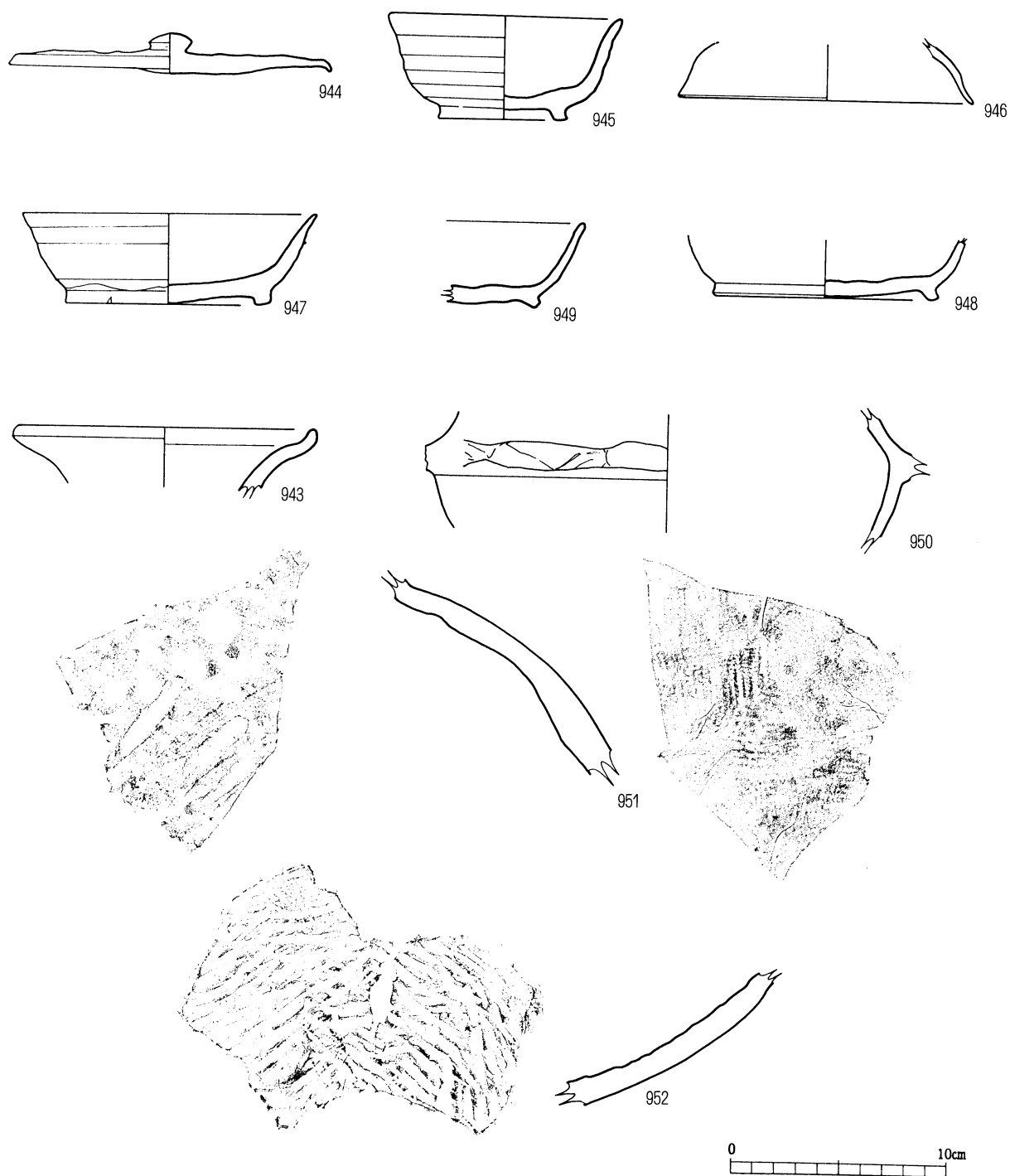
第VI類土器は、弥生時代終末から古墳時代の土器であり、926は底部が浅いラッパ状で直線的に立ちがる器形である。時期は弥生時代終末から古墳時代初頭ごろと考えられる甕形土器である。927は、やや尖底に近い丸底の壺形土器の底部破片である。928は、高坏の脚部破片で、脚は二段で開き、段をなしている部位で湾曲している。外面には、若干の磨滅を受けているものの丹塗りの部分を多く残している。内面は、荒い調整が施されている。929は、平底をもつ小型の底部破片である。930は、高坏の脚部と思われる小破片で、二段開きの先端部で丹塗りが外面全体と内面の先端部のみに施塗りされている。内面の調整については、928ほどではないが、やや荒い調整を施している。931は、高坏の坏部と思われる破片で、丹塗りの部分を若干であるが残している。

第VII類土器 (932~937, 944~952) は、奈良・平安時代に比定される遺物である。A (932~937)・B (951・952)・C (943)・D (944~949)・E (950) とに分類した。A (932~937) 類土器は、素焼の土器の一群である。932・933は、口縁部が長めに外反する土師器の甕形土器破片である。932は、内外面ともに磨滅をし土器片の内面は、磨滅を受けているものの篋で掻きあげたような調整の痕跡がみられる。933の内面の調整は、深く篋で掻きあげたような痕跡を認める。934~936は、口縁部が短く外反する土師器の甕形土器の破片である。936は、口縁部がL字状に曲がる破片である。934の内面については浅く篋で掻きあげたような調整が施こされている。937は、土師器の甕形土器の角状に整形した把手の破片で、器面は篋で調整した痕跡を残している。B (951・952) 類は、ともに須恵器の甕形土器の破片である。951は、肩部から頸部にかけての破片で、外器面には格子状の叩きによる調整が施された痕跡を認める。952は、外器壁の一部に若干であるが、平たい面をもつ部位があるために底部近くが想定される破片である。外器面には篋により研磨調整したと思われる痕跡がみられ、内面には叩きによる板目状の調整を施した痕跡がみられる。C (943) 類の土器は、須恵器の壺形土器の口縁部破片で、口縁部が立ち上がり気味の器形で、頸部で湾曲している。器面には、ロクロによる調整が施されている。D (944~949) 類は、須恵器の蓋形土器をはじめ坏形土器である。944は、坏形土器の蓋と思われる器形である。若干尖り気味のつまみ部をもち、水平気味の器形である。外器面は、丁寧なロクロによる調整された痕跡がみられる。945は、口縁部が若干外開き気味で、まっすぐ立ち上がった坏形土器の身である。内外器面は、丁寧なロクロによる調整が施されている痕跡がみられ、底部は高台が若干外開き気味で、下面は僅かであるが剥がれた部位も観察される。940は、坏形土器の蓋と思われる器形である。外器面は丁寧



第79図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(72)

なロクロによる調整が施されている痕跡が認められる。948は、坏形土器の身と考えられる破片で、内外器面が丁寧なロクロによる調整を施している。底部は高台が若干外開き気味でになっている。949は、947と同じ形状と思われる土器で、947は底部の高台が若干幅広くなり、口縁部が外開きになった形状を呈している。E（950）類は、胴部と考えられる部位で、鐙状に突帯をつけたと思われる特殊な須恵器の破片である。鐙の部分は剥がれたような形状になっている。内外器面は、丁寧な丁寧なロクロによる調整された痕跡が認められる。



第80図 沖田岩戸遺跡遺物実測図(73)

第Ⅳ章 ま と め

沖田岩戸遺跡が所在する出水市は、鹿児島県の北西部に位置し、北部には熊本県水俣市に接している。

本遺跡は、出水市下鯖洲字沖田小字岩戸に所在し、米ノ津川によって形成された出水平野のほぼ東部を南北に流れる高柳川中流付近の両岸一帯に位置している。これまでに中小河川高柳川は、蛇行による流路や幾多の洪水等の堆積等による繰り返しにより、調査地点での土壌や礫等の堆積状況についてはその状況に大小の変化がみられた。

本遺跡の出土土器の中心は、縄文晩期の土器が主体であり、縄文中期の並木式土器や縄文後期初頭の南福寺式土器をはじめ、出水式土器、西平式土器、松山式土器などは極僅かな出土であった。

遺跡で中心となる縄文晩期の土器は、縄文晩期の深鉢形土器・浅鉢形土器・ボール状土器・マリとに大別した。これらの土器は、深鉢形土器として、入佐式土器や黒川式土器を中心に、口縁部に平行沈線文を施すもの、山形沈線文、波状沈線文、貝殻状の痕跡を施す粗製土器なども出土した。一方、浅鉢土器も深鉢土器と同様に入佐式土器該当のほか、黒川式土器該当の土器、把手を付着したのものもある。これらの土器は、剥落や磨滅を受けているものが大半で、その痕跡を僅かに留めているものもある。そのほか、器面に波状沈線文を施したマリ等がみられ、調査当時としてはバエテューに富んだセット関係は注目されると調査当時の見解が提示された。その他の土器として、弥生時代後期終末から古墳時代初頭にかけての土器や成川式土器、須恵器、土師器、石鍋の破片など多くなかったが出土した。石器は数多く出土し、特に黒曜石を中心に夥しい薄片などが出土した。中には当時注目された管玉、小玉、小粒の原石などの発見もあった。そのほか磨製石斧・打製石斧・打製石鏃・異形石器、礫石器類・石錘・磨石類・敲石類・石皿・ドリル・石核・剥片石器類などがみられた。

本報告では、レイアウトの関係で遺物番号やレイアウトの配置を一部変則的に配した。出土土器は、大きく第Ⅰから第Ⅷ類に分類した。これらの中には、遺物の出土状況から剥落や磨滅などを大半の土器が受け、注記や復元作業にかなりの時間を費やしたものの所期の目的を果たし得なかった。土器では、口縁部をはじめ頸部や胴部そして底部へと、その特徴により分類を試みたが、成果は余りあがらなかった。

縄文時代の土器

第Ⅰ類(1)は、外器面の施文の形態や胎土中の滑石の粉末の混入し、器壁の内外面まで確認される状況より、縄文中期後葉の並木式土器に比定され、池水寛治氏による鹿児島県出水市の江内貝塚の調査により、阿高式土器との層位的な関係で編年的な位置が確実になっている。

第Ⅱ類(2~7)は、沈線文の太さと文様が上位に施文することから縄文後期初頭の阿高式系土器に比定される。3の土器は、外器面の細い沈線文を構成している。6は、口縁部が外反し、外器面の細い沈線文がみられる。3・6は、南九州の縄文後期前半を代表する阿高土器系統の土器群の一つである出水式土器に比定される。4は、口縁部小破片のため全体の器形の形状が不明であるが、口唇部に大きい刻みをもち、内外器面ともに無文で、型式は不明である。5は、内外器面ともに磨滅の状況が激しいが、口唇部の施文や磨消縄文の痕跡を認める。7は、口縁部が大きく外反し、口唇部に沈線文を施す口縁部破片である。5・7は、北九州・西九州・南九州を中心に分布する縄文後期後半の土器型式で、熊本県八代郡竜川町高塚西平貝塚出土の標準とする西平式土器に比定される。

第Ⅲ類 (8~10)

8~10は、縄文時代後期が考えられる土器で、8・9は、西平式土器の底部破片である。10は三万田式土器や御領式土器と共に出土例がみられる。

第Ⅳ類の(11)は、縄文後期終末に比定され、深鉢形土器・浅鉢形土器・マリなどの器種があり、九州地方の縄文後期に編年される土器の一群である。熊本県下益城郡城南町御領貝塚出土の土器を標式にしている御領式土器に比定され、三万田式土器を踏襲している。深鉢形土器は、11のように口縁部が内側へ傾き、頸部は緩やかに内湾し、肩部から胴部にかけては、くの字状に折れるような形状である。その胴部径が口縁部より大きい器形で、口縁部外側に沈線文を施している。浅鉢形土器(167~174)は、器形がやや深みのある浅い鉢で、肩部から口縁部に至るまで立ち上がっている器形を呈し、特に口縁部は幅をもっている。マリ(339・340)は、器形および施文より縄文後期の三万田式土器に類似している一群である。

第Ⅴ類(12~166, 167~253)土器は、縄文晩期の深鉢形土器、浅鉢形土器、ボール、マリ、広口壺状土器に分類し、底部はその形状により別に分類した。底部以外の深鉢は、上加世田式土器、入佐式土器、黒川式土器に比定される。これらの土器は細分したが一つのバリエーションとして捉える。A(12~21)の類は、口縁部の傾きや頸部の形態より上加世田式土器の新しい時期に比定される。B(22~25)の類は、上加世田式土器の新しい時期に比定されるが、Aとの相違は口縁部から頸部の括れが少ない一群である。C(26~38)の類は、口縁部が若干長くなるタイプで、型式では入佐式土器の新しいタイプに入る器形も含まれる。D(39~57)の土器は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定される。器形は、E~Gともにバリエーションとして捉えるができる。E(58~64)の類は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定され、Dとの相違は口縁部の器形である。F(65~75)の土器は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定される。D・Fと若干異なる部位は口縁部の器形である。G(76~84, 93~107)の類は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定され、D・E・Fとの若干の相違は、口縁部の器形である。H(85~93)の類は、上加世田式土器の新しい時期の一群に比定されるが、入佐式土器のバリエーションの一つとして捉えている。I(109~117)の類は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定され、バリエーションの一つとして捉えられる。D・E・Fとの若干の相違は、口縁部の器形である。J(118~121)の類は、口縁部が長くなるタイプで入佐式土器に比定され、バリエーションの一つとして捉えられ、口縁部・頸部・胴部への厚みの形状から黒川式土器への移行形態が考えられる。K(122・123)の類は、口縁部から肩部の器形およびりボン状突起の貼り付け(122)が特徴の一つで、黒川式土器のバリエーションとして捉えられ、L類も同じである。L(124・134)の類は、口縁部が短くなるタイプである。しかし、この一群は今後の資料の増加に委ねたいが、Oとの相違は、口唇部の部位である。M(133~140)の類は、器形からみればボールと思われる。時期としては、入佐式土器か黒川式土器かの範疇が不明であるが、この一群も今後の資料の増加に委ねたい。N(141~144)・O(145~146)の類は、口縁部および肩部の器形から黒川式土器のバリエーションとして捉えているが、Oは黒川式土器と確定できず、今後の資料の増加に委ねたいが、器形はLにも類似している。P(148~166)の類は、口縁部から肩部、胴部および底部の器形から黒川式土器のバリエーションとして捉えている。

浅鉢形土器(167~232)は、第Ⅴ類-1~第Ⅴ類-7までの7分類した。第Ⅴ類-1土器(175~181)では、口唇部断面形状は玉縁がはっきりとしている器形で、第Ⅴ類-2(182~188)土器

は、口唇部断面の玉縁が小さくなり、さらに尖る形状で、ともに肩部から口縁部が傾く器形である。第Ⅴ類-4 (203~213) 土器は、頸部が狭く口縁部と肩部に近い形状で、小型のものはマリの器形に近似している。第Ⅴ類-5 (214~223) 土器は、肩部が球状になる形状で、黒川式土器に比定される。第Ⅴ類-6 (224~230) 類は、口唇部の断面玉縁がなくなる形状で、肩部から口縁部が傾く器形である。第Ⅴ類-7 (231~232) 類は、肩部から口縁部が立ちあがる形状で、やや深めで大型である。

その他の土器として、ボール・マリ・広口壺状土器などがある。ボール (223~244) は、厚味があり丸味をもつ器形で、マリ (245, 246) は、薄手の器形で球形を呈し、口縁部は断面が玉縁となる。

広口壺状土器 (252, 253) は、器形的に壺の形状を呈し、胴部が不明のために浅鉢形土器にも類堆される土器である。

底部は、大きく厚みのあるものを底部Ⅰとし、薄手のものを底部Ⅱに分類した。底部Ⅱは5類に底部Ⅱは3類に、それぞれ細分した。底部Ⅰは深鉢形土器に比定できたが、底部Ⅱは、深鉢形土器・中鉢形土器・浅鉢形土器の判断が底部のみの単体では不明である。底部Ⅰ-1 (254~328) は、縄文後期から晩期にかけての御領式土器か上加世田式土器に比定できると考えられる。底部Ⅰ-2 (329~351) は、縄文晩期の上加世田式土器か入佐式土器に比定できる広部破片である。

縄文時代の石器について

石器は、定形石器と小型剥片石器に大別した。定形石器には磨製石斧・打製石斧・打製石器・礫器・石槌・敲石・磨石・凹石・台石・大型棒状石器・石皿・石錘があり、安山岩・砂岩・蛇紋岩・頁岩・粘板岩など多くの石材を素材として利用している。磨製石斧には、乳棒状・定角状・局部磨製・ノミ状の石斧がみられ木材加工などが想定されるものである。蛇紋岩を石材に用いていることも特徴である。打製石斧には、短冊状石斧や土掘り具と言われている有肩石斧が多くみられる。いずれも刃部に使用による磨滅がみられる。打製石器には横刃型石器や円盤状石器がある。円盤状石器には、刃部に敲打痕がみられることや形態から楔形石器の可能性が考えられる。この遺跡の特徴として、石皿・磨石などの植物質食料の粉碎・製粉などに使用した石器が多くみられたことである。石皿は、窪みの深いもの、浅いものがあり、また、形状も板状・自然礫と豊富である。1点ではあるが有溝砥石も出土している。磨石には敲石・凹石を兼用しているものが多い。民俗例でトチタタキ石と呼ばれる形態を持つ石槌も出土している。その他、2kgを越える大型の長方形を呈する大型棒状石器が4点出土している。磨石状・凹石状・石皿状を呈する石器である。これらの遺物は、縄文時代晩期の農耕栽培などの問題を考える上で貴重な資料になると思われる。

石製品 (939~942) として、管玉 (939・940)・小玉 (941・942) が、それぞれ2点づつが出土している。素材は、蛇紋岩と思われる石材を用い、穿孔の方法は不明であるが、よく観察すれば穿孔は両方からの可能性が強いと考えられる。同時期の遺跡としては、鹿児島県上加世田市上加世田遺跡で多くの資料が出土し、縄文晩期前半に位置づけられている。本遺跡の資料も晩期の前半期に位置づけられる。

沖田岩戸遺跡の小型剥片石器では、石鏃・尖頭状石器・石匙・石錐・スクレイパーにおいて黒色安山岩・チャートを併用するが、全般的には黒曜石が主要な石材として用いられている。なかでも黒曜石A及び黒曜石Bとした腰岳産黒曜石原産地資料に類似する黒曜石が主体を占め、黒曜石Dとした県北部の日東産・白浜産等に類似する資料がこれに次いで一定量みられるものの、在地産であることを考慮するとその使用頻度は低く、遠隔地石材への依存度の高さが窺われる。

石鏃は形態・形状に多様性がみられ、概して縄文時代晩期を主体とする遺跡の一般的傾向と一致する。基部にU字状の抉りをもつ五角形鏃、平基五角形鏃など該期の特徴的な形態がみられるほか、本遺跡では量比的にもI a類とした基部にU字状の抉りをもち、両脚部端を斜行する短辺に造る形態が主体となっている。これら石鏃は表裏両面のほぼ全面に調整剥離を施す打製石鏃が殆どであり、僅かに素材面を多く残置する資料は存するものの、いわゆる剥片鏃とは異なるものである。

異形石器はいずれも欠損部分のある資料で、全体形については明確にし得ないが、少なくとも4種類のタイプが認められる。146・147の細身棒状の異形石器は、上加世田遺跡第5次発掘資料の端部が矢印状に膨むタイプ、もしくは榎木原遺跡出土の三叉状にわかれる資料などとの関連が考えられる。148は上加世田第5次発掘資料、松尾城及び宗功寺跡出土の頭部が三角形状となる鏃形のタイプに類するものとみられる。149・150は上加世田遺跡第6次出土資料に類似するものがある。152は欠損部が大きく不明確ではあるが、中膨らみで両端に縊れがある上加世田遺跡第5次調査の出土資料に類似点をもつ。この他縄文時代晩期の所産とみられる異形石器としては、上加世田遺跡・飯盛ヶ岡遺跡などにみられる半弧状のタイプ、上加世田遺跡第5次調査及び川原遺跡出土の端部が細まる変形棒状のタイプなどがある。各遺跡内での資料数は少ないものの、遺跡間をこえて形態的に類似する資料があり、何らかの共通する範形に基づき製作・使用されたものとみられる。その機能・用途については不明であるが、呪具・装身具・模造品・利器など幅広い観点から検討する必要がある。

今回、剥片剥離技術について論及する上で不可欠な接合資料を提示することが出来なかったが、上記の黒曜石A・Bを石核母岩とする剥片では、長幅比（最大長÷最大幅）が2.0を超えるものが多く、縦長剥片への指向性が認められる。これら剥片の主要剥離を基準に背面の礫面及び剥離面の構成についてみると、主剥離と同一打面からの剥離面のみであるa類と並び、主剥離と同一打面からの剥離面及び礫面を持つb類において縦長剥片の占める割合が高く、残存する石核では打面転移を繰り返すI類、表裏に求心的な剥離を行うII類に分類される不定形剥片剥離の痕跡をもつ石核が多い。また、剥片背面に打面転移の痕跡を伴うc・d・e類では長幅比の値が下がる傾向にあり、剥片剥離の初期の段階で縦長剥片を剥離した後、暫時不定形剥片の剥離へ移行する剥片剥離技術が存するものとみられる。

これら黒曜石A・Bを母岩とする縦長剥片の用途は、主に剥片の側辺を使用する刃器とみられ、剥片鏃の素材生産との結びつきは認められない。また、不定形・横長の剥片では末端辺（底辺）を使用するものがあり、黒曜石製石鏃の素材剥片も主として黒曜石A・Bの不定形剥片により供給されているものとみられる。出土資料中には小石刃状の剥片の剥離に関係するとみられる石核資料等が認められ、かつこれに対応する剥片及び使用痕剥片もみられるが、全般的には礫打面が優越し調整打面とみられる資料は少ない。縦長剥片の剥片剥離軸の傾き、末端部形状には変異があることなどからも、石刃技法に類する剥片剥離技法の関与は弱いものとする。なお、打面調整を伴う石刃技法に基づくとみられる388については、所属時期も含め検討すべき資料である。

黒曜石D類は、石核ではI類・V類など不定形剥片と結びつくものが多く、剥片類でも縦長剥片はごく僅かみられるのみである。厚手の不定形剥片がスクレイパー等の素材となるほか、小型の不定形剥片で末端辺を刃部として利用する使用痕剥片がみられる。また残存する石核の重量は20gを超えるものが多く、黒曜石A・Bが10g以下まで使用されている場合があることと対象をなす。

以上沖田岩戸遺跡の出土資料からみた小型剥片石器の製作技術は、用途・用法に従い各種の石材

を用いる一方、黒曜石においては遠隔地石材を主体とし、在地産石材を補完的に用いている。また、その剥片剥離技術は、縦長剥片、不定形剥片の双方を目的剥片とする多様性・可変性を内包するものであるとみられるが、今後比較資料をもとに、地域内における技術的系譜や歴史的変遷と合わせ検討する必要がある。

弥生時代以降の遺物

第Ⅶ類(926~931)土器は、弥生時代終末から古墳時代にかけての土器で、926は、底部の形状より脚部が浅く弥生的要素がみられ、927は、古墳時代初期にみられる尖り底部であり、成川土器に類似している。930・931は、古墳時代の高坏形土器である。

第Ⅷ類(932~945)は、奈良・平安時代の土器で、土師器(932~936)の932・933は、若干古手の土器の一群が考えられる。934~936は、新しいタイプの土器が考えられる一群である。これらの土器の時期としては、8~9世紀に比定されるものと考えられる。また、須恵器(938~945)は、時期が決められるものとして、941・942・944などがみられる。これらの遺物は、9世紀ごろの時期が比定される土器である。

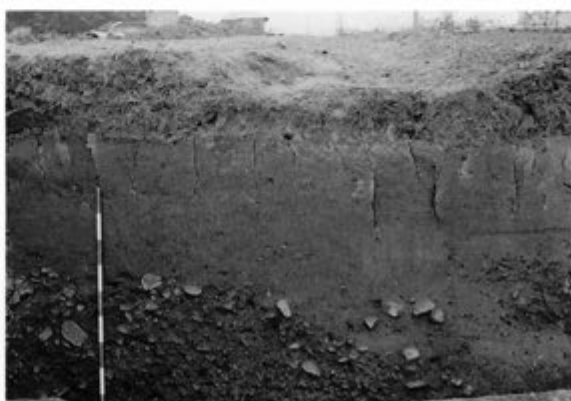
石製品(938)

石鍋の底部付近の破片で煤の付着が著しく、かなりの使用頻度が高かったと思われ、器形は上部の形状が不明であり、表土付近での出土で、中世の時期が考えられる資料である。

《引用参考文献》

- 長野・湯之前ほか1992『江内貝塚』高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)高尾野町教育委員会
青崎・繁昌・宮田1985『上加世田遺跡-1』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)加世田市教育委員会
池水・長野・旭1979『荘貝塚』出水市文化財発掘調査報告書(1)出水市教育委員会
河口貞徳1972『上加世田遺跡発掘調査概要(第5次)』加世田市教育委員会刊
河口貞徳1973『上加世田遺跡(第6次)』『鹿児島考古7号』鹿児島県考古学会
川添・今村1995『松尾城及び宗功寺跡』宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)宮之城教育委員会
倉元・中原1997『神野牧遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(20)鹿児島県立埋蔵文化財センター
坂田邦洋1982『九州の黒曜石-黒曜石の産地推定に関する考古学的研究-』『史学論叢13号』別府大学史学研究会
杉原・芹沢・横田1965『九州における特殊な石刃技法-佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群-』『考古学雑誌 第51巻 第3号』日本考古学協会
鈴木道之助1991『図録 石器入門事典-縄文』柏書房
竹岡俊樹1989『石器研究法』言叢社
橘昌信1979『石鋸-西北九州における縄文時代の石器研究(二)』『史学論叢 第10号』別府大学史学研究会
橘昌信1987『縄文時代晩期および弥生時代の剥片石器-宇木汲田貝塚を中心に-』『東アジアの考古と歴史(中)岡崎敬先生退官記念論集』同朋社出版
富田・児玉1990『川原遺跡 屋根添遺跡他』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)東郷町教育委員会
中村・鶴田・湯之前・八木澤1993『飯盛ヶ岡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(3)鹿児島県教育委員会
松藤和人1990『伊木力遺跡における石器組成と剥片剥離技法の変遷』『伊木力遺跡』多良見町教育委員会 同志社大学考古学研究室
彌榮・前迫1887『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)鹿児島県教育委員会
宮田栄二1991『九州縄文前期のピエス・エスキュー』『交流の考古学 三島格会長古希記念号』肥後考古学会
吉留秀敏1993『縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価』『古文化談叢 第30集(上)』

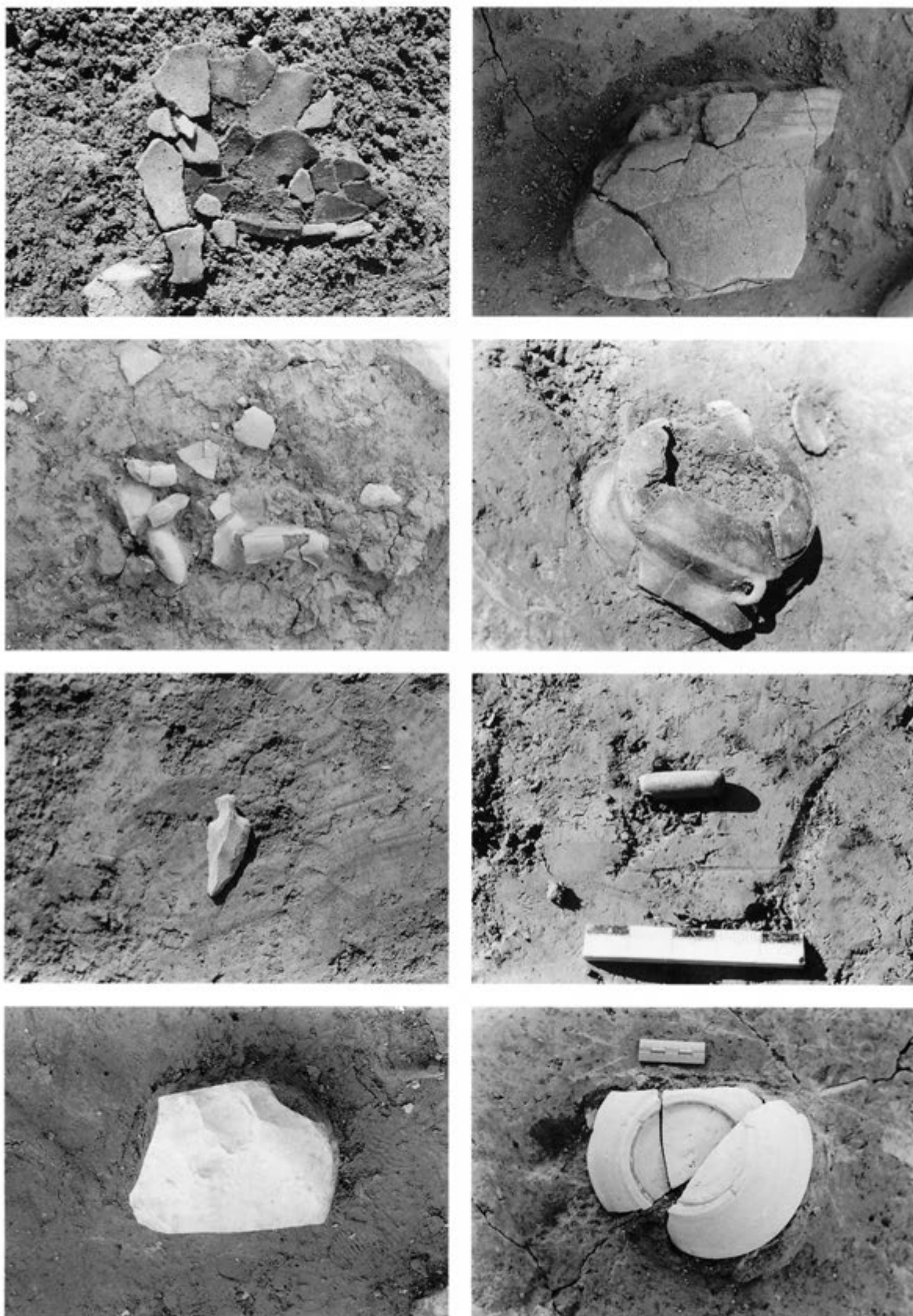
図
版



沖田岩戸遺跡の遠景・調査区・調査風景



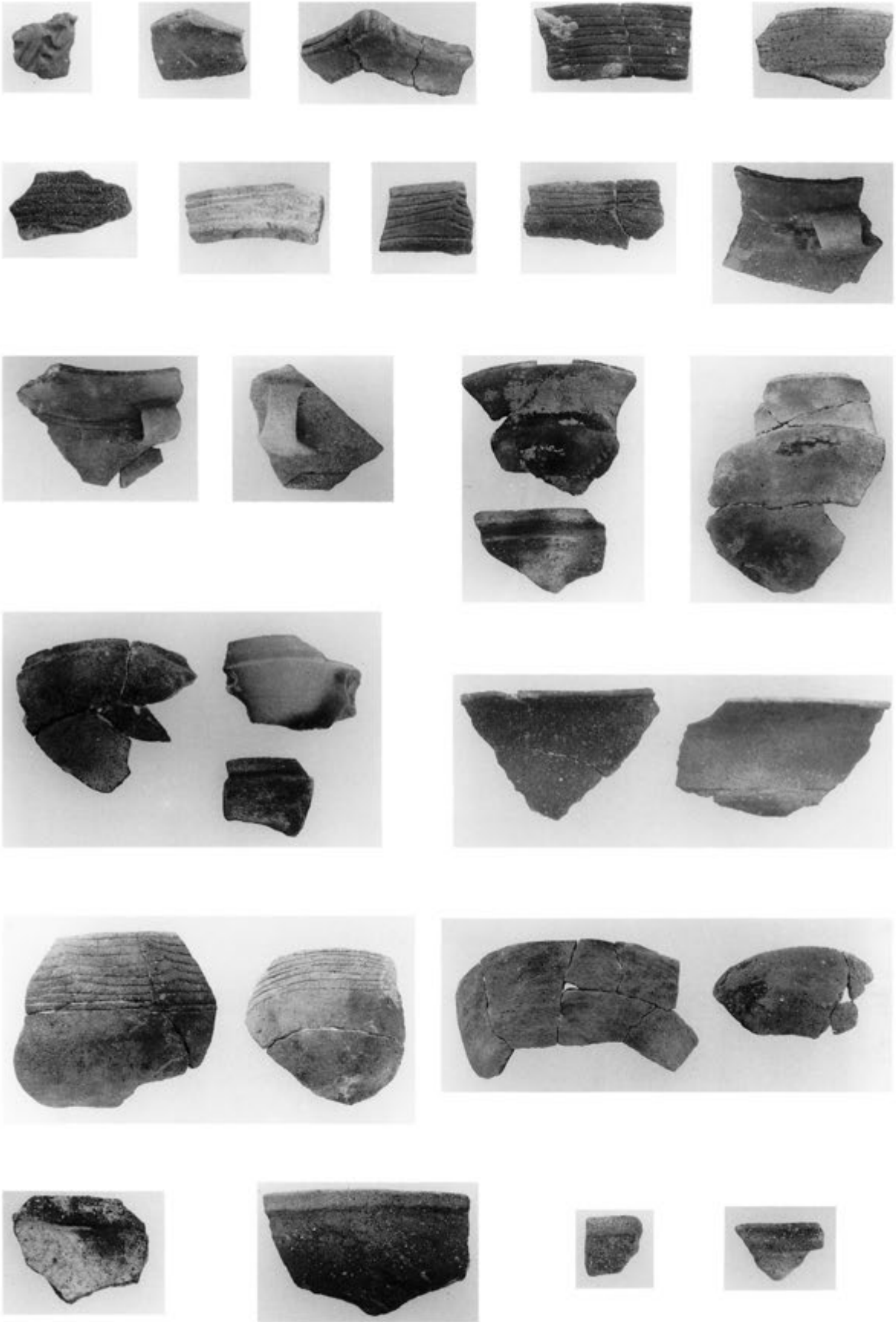
沖田岩戸遺跡の遺物出土状況



沖田岩戸遺跡の遺物出土状況



沖田岩戸遺跡の遺物出土状況および調査関係者(池水主任ほか)



沖田岩戸遺跡出土遺物(1)



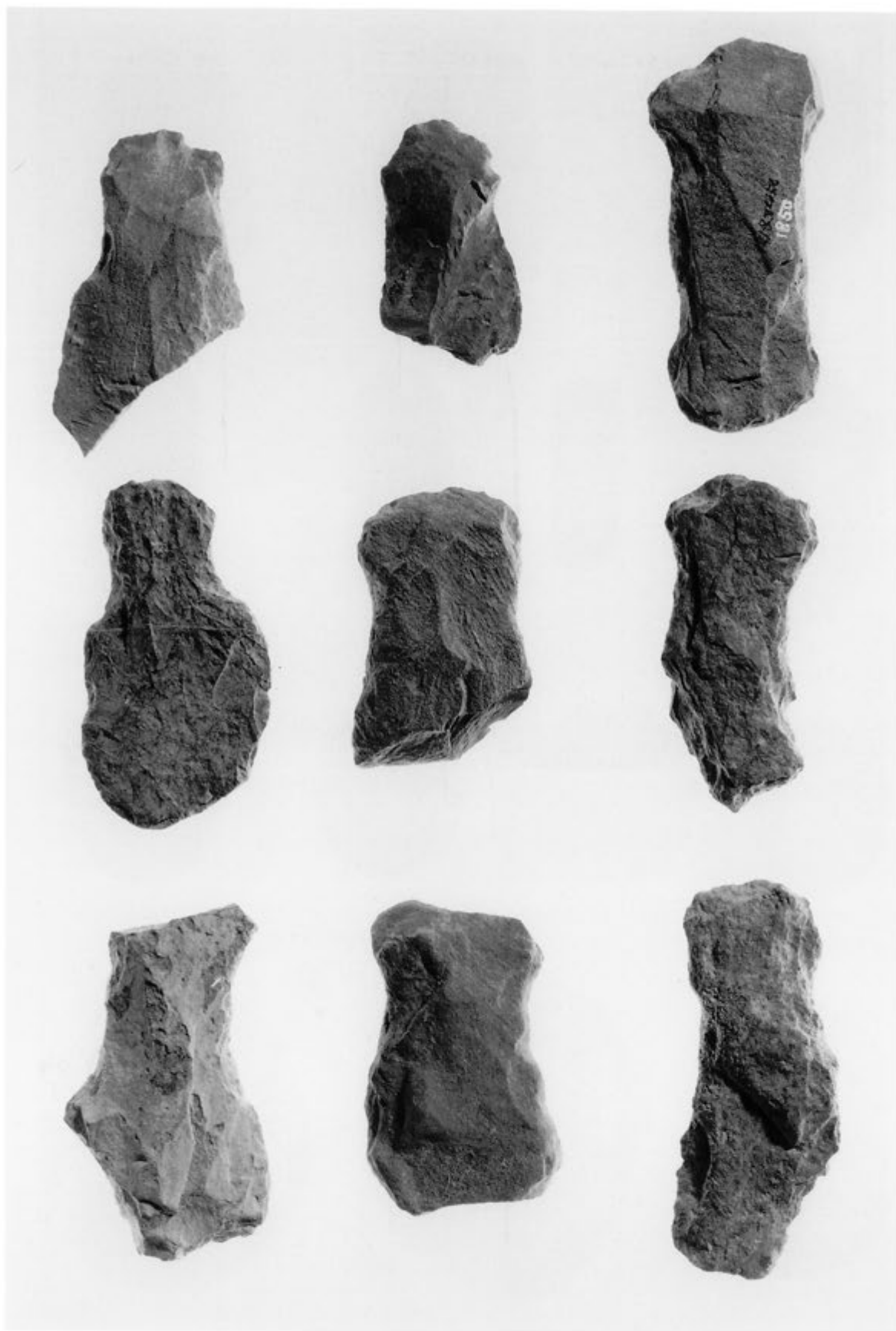
沖田岩戸遺跡出土遺物(2)



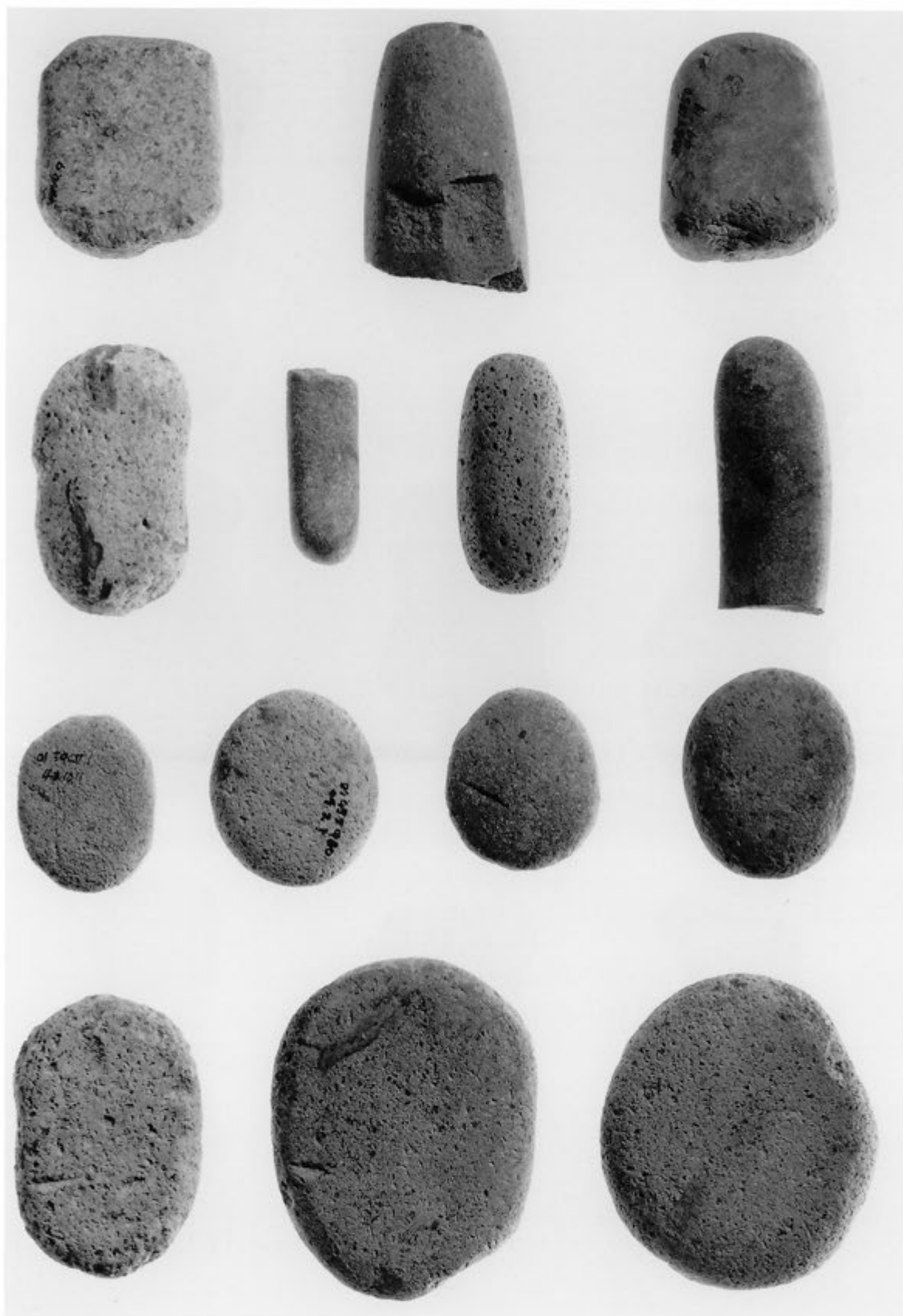
沖田岩戸遺跡出土遺物(3)



沖田岩戸遺跡出土遺物(4)



沖田岩戸遺跡出土遺物(5)



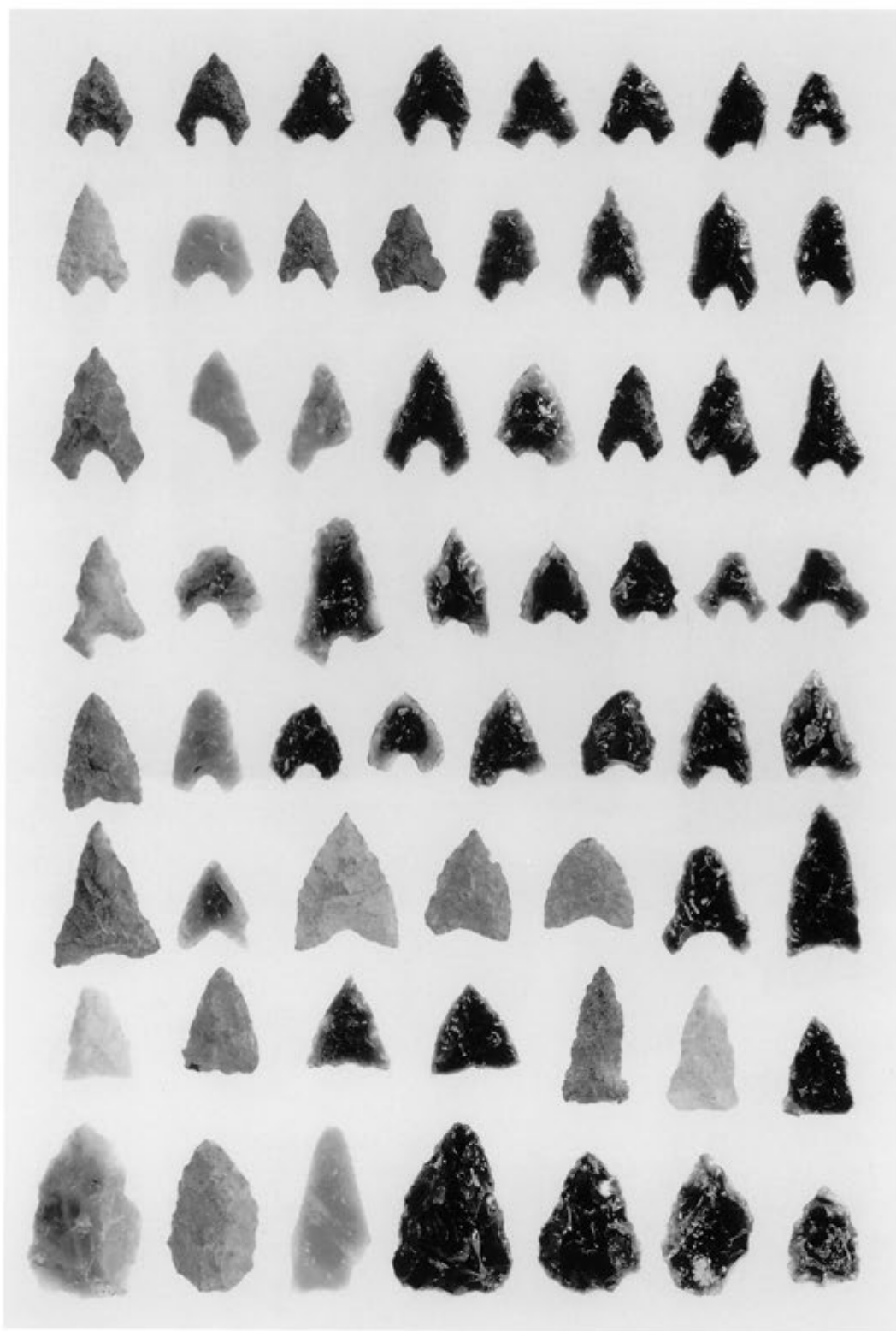
沖田岩戸遺跡出土遺物(6)



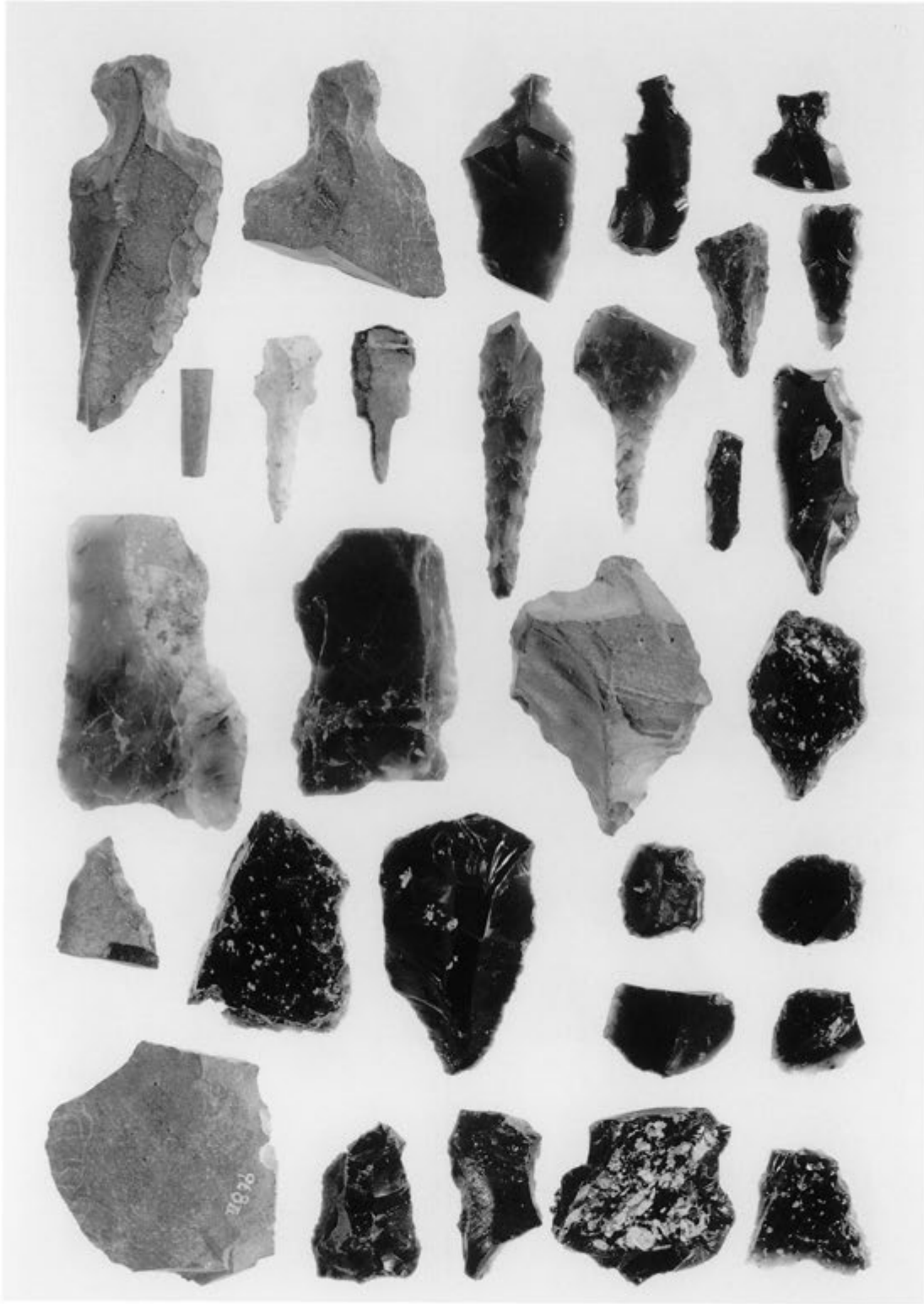
沖田岩戸遺跡出土遺物(7)



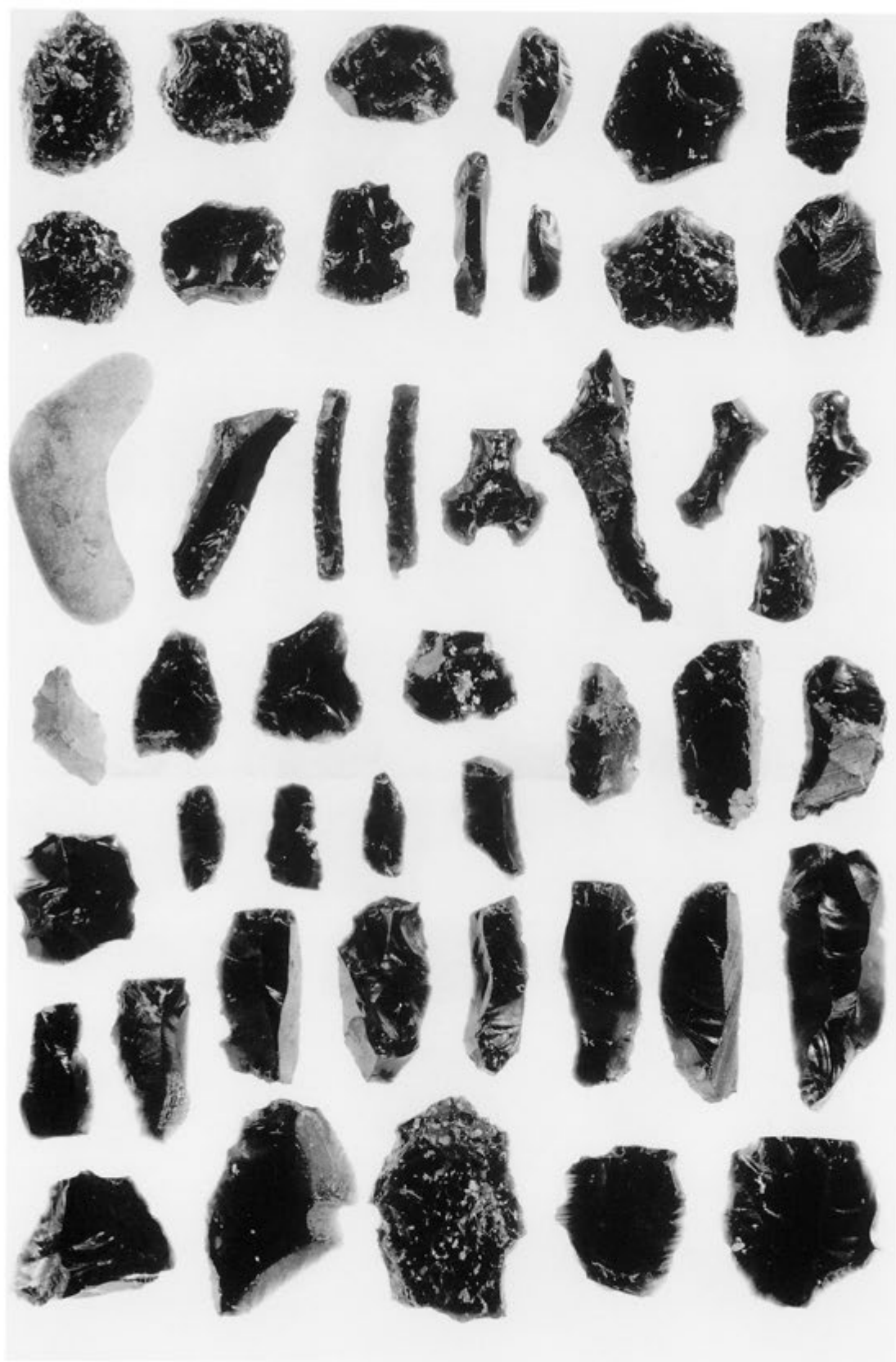
沖田岩戸遺跡出土遺物(8)



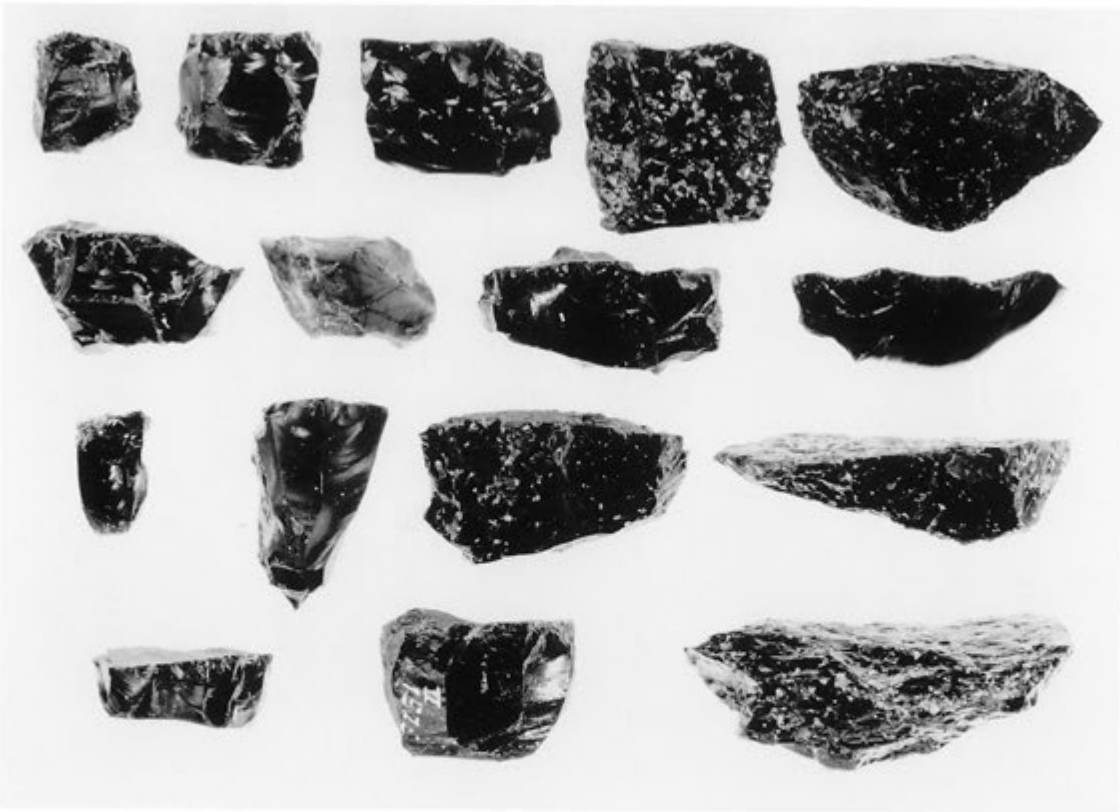
沖田岩戸遺跡出土遺物(9)



沖田岩戸遺跡出土遺物(10)



沖田岩戸遺跡出土遺物(11)



沖田岩戸遺跡出土遺物(12)

あ と が き

沖田岩戸遺跡は、考古学少年であった高校生2名の発見から始まった。

沖田岩戸遺跡の発掘調査は、昭和48年10月1日から昭和49年3月31日まで実施した。発掘調査は、遺物包含層が厚いこと、また、沖積地の立地であることも重なり、予算・調査期間共に当初の計画を大きくずれ込む結果となった。そのため、調査主体も出水市教育委員会を皮切りに、石器文化研究会、鹿児島県教育委員会と変動することとなった。加えて、報告書作成については、調査に費用を投入した経緯もあり中断せざるを得なかった。

当時、鹿児島県の埋蔵文化財保護行政は創世期であり、報告書作成に着手する余力や体力は持ち合わせていなかった。その間、事業主体であった沖田岩戸河川改修事業自体が終了し、報告書作成のための整理事業費や出版のための印刷製本費も捻出できない状況に追い込まれていた。

本年、未報告の報告書を公開するための「報告書作成事業」の一環として本遺跡も報告書刊行の機会を得ることができた。

発掘調査から二十数年の時を経て、調査主任であった池水寛治先生は48歳の志半ばで他界された。また、調査に従事された作業員さんからも同じような悲しい話が伝わってくる。

遅延した作業を進めるため、池水先生の勤務されていた出水高校の生徒を動員し賑やかに調査したこともあった。

冬の出水平野はシベリヤから鶴が渡り華やかさを増すが、八代海から吹きつける寒風は身を切る冷たさであった。

当時は組み立て式のプレハブ事務所が誕生したころで、高価なこともあり池水先生と製材所に行き、材木に切り込みを入れ、即席の調査事務所を設置したことも懐かしく思い出す。

記録写真をめくると、青春の記憶が、スマートな同僚の姿が、懐かしい作業員さんの働く姿が、池水先生が時空を越えて今蘇る。

何とか刊行までこぎつけられたのは、所長の激励を始め、多くの同僚の支援と時間を惜しまぬ協力の結果である。感謝。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(26)

高柳川中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書

沖田岩戸遺跡

発行日 平成12年3月30日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地

TEL0995(65)8787(代)

印刷 渕上印刷株式会社

鹿児島市樋之口町6番6号 TEL099(225)2727